
ワールドアウトサイダー

シロタカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ワールドアウトサイダー

【Nコード】

N7132U

【作者名】

シロタカ

【あらすじ】

現実と異世界を、幼なじみの少年と少女が行き来する。神にも等しい力の持ち主である少女は、一年前のあやまちによって長い監禁生活をしいられていた。やがて彼女は枷を外されたように、異世界にて猛威をふるい始める。ふたつの世界で少女を中心として陰謀が渦巻く中、少年は一步を踏みだす。力を求めて、強くなることを望み、無様にあがきながら——幼なじみの少女のため、神すら殺す力を得ようとする少年の物語。

第0話「世界の果て」

二人は手をつないでいた。

そして、洞窟を見つめていた。

年の頃は十歳にも届かないほどの、男の子と女の子だった。深い闇を食い入るようにつめる様こそ同じだったが、その瞳にやどる輝きは正反対のものだ。弱気にうるんだ瞳、期待に輝く瞳。男の子は早くも腰の引けた様子で、女の子は堂々と胸をはっている。

紅葉の山。

木々におおわれた山奥には、人の喧騒も届かない。住宅街の中で、ぼつりと残された無人島のような場所だった。静寂が耳に痛い。みだれた心臓のリズムが、唯一の生きた音に聞こえて、男の子は少しだけ身を震わせていた。

「さあ、冒険だ」

女の子は威勢よく吠える。

二人は幼なじみだった。

男の子は、物心ついた頃からずっといつしよだった彼女の手をにぎる。そうして、弱気を勇気に変えた。彼女の存在を確かめる——そんなささいな《儀式》をおこえば、どんな時でも顔をあげられた。

たとえば、世界が一編の大きな物語だとすれば、その主人公はま

ちがいなく彼女である。彼女は常識外れのトラブルメーカーだ。《平凡》や《普通》という言葉はどこかへ置き忘れてきたようで、《最強》や《無敵》という言葉ばかり安っぽいアクセサリ感覚で身につけている。

彼女はヒーローだった。

「面白い場所、見つけた」

小学校の廊下で、彼女が笑顔でそう云った時、男の子はため息をついた。

いつものとおり、脇役のように右往左往する役割を呪う。

通学路の途中にある寂れた山の奥、ぽっかりと開けた場所にあられた洞窟。秋風が木々をゆらし、手招きするようにざわめいた。深い闇の奥底に、何が待っているだろうか。

洞窟へ。

闇の中へ。

洞窟の最奥。

行き着いた場所には、本当の闇が広がっていた。

どれくらい歩いてきただろう。
どれくらい深く潜っただろう。

途方もなく広い場所に出たようだった。

「世界の果て、みたい」

何も見えない闇の中でも臆することなく、女の子は足を進める。空気も音も消えてしまったような深淵の世界で、男の子が信じられるものは彼女だけだった。だから、決して離れないように身をよせた。

やがて気がつく。

明るい——何も見えなかったはずの暗闇が、ぼんやりと薄れていた。相手の表情を見てとれる程には光があった。思わず互いに顔を見合わせる。

「冒険には、やっぱり宝物だね」

光源が、遂にその姿をはっきりとあらわした。

鉛のように重い闇の中、蛍のように儚い光がこぼれていた。それが何なのか、男の子にはわからなかった。いや、正確に云うならば、何であるかは一目瞭然だったが、光を帯びていることが、とても不思議だったのだ。

蝶が蜜に吸い寄せられるように、二人はそれに近づいた。

「これって……」

それは一本の剣だった。

両刃の剣が、抜き身のままで地面に突き刺さっている。このような洞窟の奥底で、はたしてどれほどの間そこにあったのだろうか。年月を感じさせるような錆もなく、曇りのない刃は月の光のような冷たさで、静かに、淡く、輝いている。

ただし、洞窟を染める光源は刃ではなく、剣の中心部にあった。柄から鐔にかけて、剣は実用性を失わない程度に細やかな装飾がほどこされていた。よく眺めれば、そのデザインは竜をかたどったものだとわかる。

その竜の瞳である。宝石だろうか。だが、自然と光を放つような天然石を、男の子は知らなかった。反射する光もない洞窟の中で、竜の瞳はみずから輝きを放っている。

「待って」

彼女の鋭い言葉で、男の子は我に返る。

いつしか気づかない内に、剣に向けて手を伸ばしていた。

「大丈夫。見ていて」

有無を云わせぬ強い言葉に、男の子は自然と一步後ろにさがった。

彼女は、剣と正面に向き合う。

「大丈夫」

繰り返される同じ言葉。

最初、男の子はそれが自分に向けられた言葉だと思っていたが、
どうやら違ったようだ。女の子の視線も意識も、今は一心に剣に向
かっている。彼女が口にする言葉も剣に向けられていた。

「伊吹カナ」

彼女は名乗る。

「君は、誰？」

ゆっくりと伸ばされた手が、剣をつかむ。

静止していた時間が、その瞬間、堰を切ったように流れ出した。
彼女は眼を見開き、小さなうめき声をもらした。その体躯が不自然
に折れ曲がる。まるで痛みに耐えるかのように腕が震えている。

だが、震える腕には力が込められていた。剣を離さない。やがて
うめき声は、とても大きな叫び声に変わり、男の子が尻込みしてい
る内、悲鳴に似た絶叫になった。

心の奥からの叫び。

それが最高潮に高まった時、剣は地面から抜けた。

「カナ」

呪縛が解けたように、男の子は飛び出そうとした。

「待つて」

彼女に触れようとした手を、寸前で止めた。

「まだ終わっていない」

彼女の表情には、先ほどの叫び声が嘘のように、いつもの余裕が戻っていた。

「さあ」

彼女は再び、剣に話しかけていた。

「君の、名は……」

彼女は云う。

「名は……」

これが、物語の《始まり》だった。

遙か昔に始まっていた、とある物語。

はたして、何が間違っていたのか。

——あるいは、何も間違っていなかったのか。

どうすれば、ハッピーエンドに辿りつけたのか。

——あるいは、そんなものは最初から存在しなかったのか。

結局、このプロローグは、何もできなかった男の子の悔恨であり、意味のない懺悔である。だから、この記述は誰に見られることもなく、書かれた瞬間に焼かれて消される運命にあるだろう。

しかし。

これを誰かが目にする機会があるとするならば、それは——。

——あるいは、そういう奇跡が起きたということかもしれない。

「カラドボルグ」

彼女が叫ぶ。

それが、剣の名だった。

カラドボルグは、その名を告げられた瞬間、光となってはじけた。

剣の装飾部——竜の瞳からこぼれていた光とは比較にもならない。刀身も含めて、破裂したように光の粒となった。突然の出来事に、男の子は手で顔を覆う。閉ざした瞼の向こう側で光が踊っている。闇に慣れた瞳に、それはあまりにも刺激的だった。

いくばくかの後、恐る恐る開いた眼で、男の子は宇宙を見た。

「きれいな」

女の子は、宇宙の中心で、笑っていた。

洞窟の奥底、ここには果てがなかった。果てのない空間を、無数に散らばった剣の光が、億千の星の輝きのように埋め尽くしている。錯覚だとわかって、男の子は体が浮いているような感覚に包まれた。

彼女はどこか遠くを見ていた。

宇宙の遙か彼方を、自分の居場所でも探すように――。

「さあ」

凜、と。

「おいで、カラドボルグ」

彼女の一声が、全てを終わらせる合図となった。

星々のきらめき――剣の断片は、彼女が高々と伸ばした右手に渦を巻いて集った。宇宙が、彼女という中心へ吸いこまれていく。そのたった一本の右手に、全ての光が吞まれていく。魂まで焼かれてしまいそうな光の渦の中、彼女は涼しい顔で手を見つめている。

最後の一片まで吸い込まれてしまうと、広場には闇が戻った。

尻餅について、男の子は放心していた。何も見えない、何もわからない。突然の暗闇に、まるで世界から見捨てられたかのように感じた。立ち上がれない。どうすればいいのだろうか。

「カナ」

だから、男の子は世界で一番信じられる名を呼ぶ。

「ユウ」

闇を切り裂いて、女の子があらわれる。

「行こう」

伸ばされた手。

世界の何物よりも大切な手を、しっかりと握りしめた。

相馬ユウは回想を終える。

物語の《始まり》だけを記し、《終わり》は記さない。それがなぜかと問われても、ユウには答えるすべがない。ユウが語ることで、思いのほかに少なかった。

——では、日常を始めよう。

物語の果ての日常。

望まれない日常の物語。

二人は手をつないでいる。

その手は、もちろん、真っ赤な血で汚れている。

第1話「日常らしさ」

相馬ユウは、追われていた。

時間に追われていた。

運命に追われていた。

そんな風に云えれば格好もついただろうが――残念ながら、今の時、相馬ユウは同級生に追われていた。廊下を駆ける。期末試験を終えたばかりの学校は、さながら花火の爆ぜるようなにぎやかさに包まれており、廊下にたむろする生徒も数多い。

見知った生徒も見知らぬ生徒も「なにこと？」という視線を向けてくる。

「代理、どうした？」「また、トラブルか」「おい、委員長代理。ホームルームどうするんだよ」「試験どうだった。また一位か？」「この前は助かった、さすが代理」「ああ、部長代理。後でお時間ください」「先生が呼んでたぞ。選管委員長代理の件だって」「代理、また何かやったの？」

全てに応えている余裕など、当然ない。

ユウは手を振り、苦笑しながら、スピードを落とさず走り続けた。

「こら、生徒会長代理。廊下を走るな」

厳しい先生から、注意の声が飛ぶ。

「先生。だったら……」

ユウは後方を指さしながら、叫んだ。

「あいつら、どうにかしてください」

体格のいい柔道部員が三名、悪鬼のごとき形相で追いかけてくる。

柔道部の厳しい後輩指導——端的に云ってしまえば、いじめが問題になったのは先日のことだ。悪質と判断されたため、柔道部はしばらくの活動停止となり、夏の大会にも出られなくなった。もちろん、それらの処分を決定したのは学校側である。

ユウは実態の把握のために、責務を果たし、多少の仕事をしたにすぎない。

それなのに、逆恨みのような反感を買ってしまったらしい。

わざわざ教室までやって来て怒鳴り声をあげた三人に対し、ユウも最初は穏便にことを済ませるつもりだった。しかし、なにを云っても加勢するばかりの相手を見て、最後には大きいため息をついてしまった。

それがどうやら、火に油をそそいだらしい。

これ以上なく立場を悪くしている柔道部が、さらに暴力沙汰を起こしたとなれば、廃部はもちろん、停学などの重い処分も考えられる。ユウは逃げ回りながら、時折、説得するように叫んでみるものの、彼らは聞く耳を持たない様子だ。

ため息。

しかたないと、あきらめる。

ポケットからハンカチを取り出した。これでは足りないと思い、偶然近くに立っていた女生徒に「ハンカチ貸して」と声かける。当然ながら、驚いた顔をされる。周囲にいた関係のない女子達が、黄色い歓声をあげた。

「はやく」

「は、はい」

「ありがとう。この恩はなにかしら……」

云い切る前に、背後から叫び声。

ため息をついて、再び走り始める。

人気のない場所を目指して、階段をのぼった。誰もいない廊下に行き着いた所で、ユウはようやく足をとめた。振り返れば、息を荒くして汗まみれの三人が、道をふさぐように立っていた。

「いい運動になったけれど、先生にも怒られたし、そろそろやめよう」

三対一である。

穩便に済ませるため——奇襲。

まだ恨み言を吐き出すつもりだったのか、口を開きかけていた一人に対して、ユウはすばやく間合いに踏み込んだ。さすがは柔道部である。即座に襟を取ってくる。だが、逆に、その動きは型通りで

読みやすかった。

簡単に足払いをかけて、相手を床に転がす。

そのまま押さえ込むと、後ろ手にハンカチで縛りあげた。

手なれたものだった——こんな荒事にばかり慣れる自分が、馬鹿らしくもある。

立ち上がれば、残る二人は啞然としたまま立ちどまっている。ユウは片手でハンカチをゆらしながら、「次は？」と視線を向けた。顔を見合わせる二人を眺めて、あまりに隙だらけであることに苦笑する。

間合いをつめた。

二人が、ぎよっとする。

一人の胸を強く押した。突き飛ばすほどの力ではない。間の抜けた相手に全力を出してやれば、呼吸を奪い、昏倒させてやることもたやすいが——それではユウが停学になってしまう。だから、ただ押した。相手はよろめいて、数秒間の余裕が生まれる。

その数秒で、もう一人を拘束した。

ただ単純に腕を取り、後ろへ回り込んで、ハンカチで縛りあげた。暴れようとしたため、反射的に「殺すぞ」と低い声で脅し文句をつぶやく。

中学二年生、平凡な十四歳の台詞である。どう考えても冗談にしかない。それなのに、相手は身を震わせて黙り込んだ。ユウは

思わず、普段の振る舞いを反省した。場慣れしていると云うよりも、悪い交友関係に毒されていると云う方が正しい。

さて、残るは一人。

彼だけは、拘束するつもりはなかった。

別の方法で無力化する——そうして、二度と面倒事を起こさないようにする。

ユウは無遠慮に近づいた。身構えることもなく、ゆっくりとした動作だ。相手からすれば、隙だらけに見えただろう。馬鹿にされたと感じたかもしれない。激昂したように挑みかかってくる手を、ユウは片手で払いのけた。

「怪我なんてさせないから、ほら」

挑発するように、ユウは云った。

二撃、三撃と、相手は拳をくりだしてきた。手を使うまでもないと思い、ユウはステップだけで避ける。これでは無理と悟ったのか、柔道部らしく襟首をつかもうとしてくる。どうにでも対処できたが——ユウはあえて、つかませてやった。

こちらが素人と思ってか、力まかせに投げようとしてくる。

ユウは動かなかった。

文字通り、ぴくりとも動いてやらなかった。

相手の顔がいよいよ青ざめる。

「だから、大丈夫。怪我はさせない」

ユウは、眼球を狙って指を突き出した。相手は小さな悲鳴をあげて、襟首から手をはなす。当然ながら、指は眼球の寸前で止めている。恐怖にかられて、後ろへ身を引こうとした相手へ、反射的に足をかける。

しまった——と、思ったのはユウの方だ。

頭から倒れれば、怪我をしてしまうかもしれない。

手を伸ばして、相手が転ばないように引っぱった。ついでのように、ハイキック。相手の側頭部、髪の毛がふれる程度のぎりぎりの距離で止めた。何をされたのか、理解できていない顔だ。

ため息をつきながら——水月に向けて拳を寸止めし、手刀を首筋で止め、痛みが走る一歩手前まで腕をひねった。「怪我はさせない」と、三度目の台詞を口にする頃には、相手の戦意は完全に喪失しており——それどころか、化け物でも見るように体を震わせていた。

「だから」

この一年間、何度も口にした台詞を繰り返す。

「《代理》でも、これぐらいは俺もできる」

これ以上やる必要もなければ、説教の必要もないだろう。

ユウが云うべきことは、彼らが教室に怒鳴り込んできた時に全て説明している。頭が冷えた後ならば、物事の道理も理解できるだろう。

う。このような手段でしか相手の熱を冷ませない未熟さに齒噛みしつつ、ユウはやるせなく手を振った。

「それじゃあ」

しばらく歩いた後で、名も知らない女生徒から借りたハンカチの回収を忘れたことに気がつく。引き返せば、また火に油をそそぐ結果になりかねない。彼女にはお礼とお詫びをかねて、なにかしら贈らなければいけないだろう。もちろん、その前に連絡先を調べる必要もある。

「仕事が増えた」

携帯電話を取り出して、今後のスケジュールを確認した。

期末試験の最終日。

これから夏休みに彩られるはずの日々は、どこもかしこも、代理の文字に埋め尽くされている。のんびりと休みを享受できるようにするまでは、もうしばらく働く必要があった。ただし、忙しい日々をやり過ごした果てに、楽しい夏休みが待っているかと云えば別である。

スケジュールを確認しながら、とある日付で手が止まった。

——八月一日。

動揺するなど愚かだ。頭では理解しているが、感情は追いつかない。夏の校舎は蒸しているが、それと関係なく冷や汗が流れた。その日付は、さながらタイムリミットだ。どれだけ願ったところで、

時間は平等である。進み続ける。

相馬ユウはため息をつく。

残りわずか。

ある少女の誕生日が、またやって来る。

生徒会室には先客がいた。

作業机に大量の書類を広げて、小柄な彼女は一人、黙々とチエツク作業を続けていた。それに感謝を示す意味で、ユウは売店で買ってきたジュースとアイスを献上する。「さすが、ユウ兄さん」と平坦な声が返ってくる。

ユウはしみじみと考え込んだ。

「どうしました？」

「いや、学校内で《代理》以外の呼び名を聞くと新鮮な気分になる」

「代理兄さん」

「やめて」

冗談を交わしながらも、後輩の少女は表情のひとつ変えない。付

き合いの浅い者ならば、怒っているか、気分を害しているか、彼女の態度を疑うだろう。常に眠そうな、とろんと半眼の瞳。「邪魔苦しい」という理由だけで、短く切られた髪。気だるい雰囲気と裏腹に、彼女の口はよく回る。

同級生には、遠慮のない物云いで大変恐れられているらしい。

「それで、ナツちゃん。どんな感じ？」

「どこかの誰かが一時間も遅刻してくれたおかげで、本来は生徒会長代理がチェックするべき書類は、なんと残り半分というところですよ。売店に寄っている暇があるならば、一刻も早く来ていただきたいところですが、私の好みのものを買ってくるあたり、すばらしいですね。ユウ兄さんのそののなさに免じて、小言はひかえておきましよう」

「え、今の小言じゃないの？」

式町ナツカ、今年の春に中等部に進学してきたばかりの一年生である。

とはいえ、ユウからすれば後輩と云うよりも、妹と云った方が感覚は近い。

七守学園は、町の中心部に位置する巨大な教育機関だった。広大な敷地に幼稚園から大学までをかねそなえて、一貫教育を推奨している。この町——青鳥町に生まれ育ったユウも、その教育理念に従ってエスカレーター式に中等部まで進学してきた。

当然、幼稚園と初等部からの顔なじみは多くなる。

ナツカもそんな一人であるが、家族ぐるみの付き合いがあるという点で、新密度はずいぶんと高い。実際、こうして今も、生徒会役員でもないナツカにボランティアで仕事を手伝ってもらっている。

「小言と云えば、ユウ兄さん」

ナツカはアイスの袋をあけながら、淡々と続ける。

「生徒会が、生徒会長代理しかないという状況は、やはり無理があると思いますよ。ユウ兄さんが代理を務められるのはしかたないとして、せめて副会長や庶務、書記などの人員を配すべきです。抱え込んだ仕事の多さで、手が回っていないのは純然たる事実ですから——などと、小言を云ってみます」

「あー、タブーとして誰も云わなかったことを……」

「誰も云わない現状が、そもそも狂っています」

はつきりと云われてしまう。

「私が瞬間的に思いつく限りでも、六つの部長に四つの委員長の代理ですよね？」

正確には、他にも非公式な団体やプロジェクトの代表代理をふくめれば、足の指を加えてもたりなかった。点数かせぎのため、学級委員長やクラブの部長をかけもちする優等生は何人もいるが、ユウの現状はその範疇にない。

誰にでもわかる異常事態。

一人がかけもちするには無理のある肩書きの数だが、この世には『無理』や『不可能』という言葉が泣いて逃げ出すような少女が、一人だけ存在した。

入学式の翌日、当時の生徒会長を引きずり降ろした。

誘われる部活動を拒まず、手当たり次第に入部した。

立候補がない仕事には、「僕がやるよ」とへらへら笑って手を上げた。

彼女は、中等部に進学すると同時に、多種多様な団体、組織、活動に参加して、その全てでトップの位置に座ることになった。彼女が身を置く環境としては遊びのようなものだった。彼女は涼しい顔をして、役目をこなすだろう。彼女は呼吸をするように、皆を幸せにするだろう。

だから、ユウは何も心配していなかった。

だから、このような事態になるとは、まるで予想していなかった。

「そういえば、ユウ兄さん」

山と積まれた書類と格闘すること数十分。

ナツカは気晴らしのように口を開く。

「ニュース、ご覧になりましたか？」

「テロの件？」

「ええ、そうです。大変ですね」

ナツカが言及したのは、ヨーロッパで起こった列車の崩落テロだ。

センサーシヨナルなトピックスであったため、日本でも数日前から盛んに報道されている。今朝もまた、溶けた陸橋と切断された電車の車体の映像をもとに、コメンテーターが《禁止技術》の是非について声高く自論を述べていた。

「ユウ兄さんの家は、大変そうですね」

「その言葉、そっくりそのまま返すよ」

ここ数年で浸透してきた《禁止技術》という呼称が、そもそも差別的だろう。社会は流動的であり、価値観など時代によって変わると親などは云うが、ユウにはまだ違和感の方が大きい。幼少時から慣れ親しんできた《魔法》という呼び方を捨て去ることは、まだしばらくできそうになかった。

ポケットの中で、携帯電話が震えた。

メールの着信。

「一番大変なのは、伊吹のお屋敷でしょうね」

ナツカがぼつりとつぶやいた。

——伊吹。

その名は青鳥町では特別な意味を持ち、七守学園の中でも特別な意味を持つ。

さらに云えば、世界に対しても意味を持つ。

「誰からですか？」

ユウがメールを確認した所で、ナツカが問いかける。

着信主の欄に踊る名前は、唯一無二の幼なじみのもの。

——伊吹力ナ。

全ての元凶である。

ユウは、彼女の《代理》だった。

伊吹力ナ。

巨大な教育機関である七守学園内にあっても、その名を知らぬ者はいないだろう有名人だ。冠する通り名は、さながら星の数。引きずる伝説の数は、砂漠の砂粒にも匹敵する。実際の所、その勇名は学園内にとどまらず、町内のほとんどの人間に通用するほどだった。

七守学園のヒーロー。

ただし、不登校。

今年の夏休みが終わってから、彼女が学校に登校したことはない。

熊と喧嘩しても無傷だったと噂される彼女に、はたして何があったのか。彼女が姿を消した一年前から、噂が絶えたことはない。噂が噂を呼ぶ混沌とした状況の果てに、今や伊吹力ナの名前は、七不思議のひとつにも数えられる程になった。

『ねえ、相馬君』

数えるのも馬鹿らしくなるほどの回数、ユウは訊かれたものだ。

『幼なじみのあなたなら、何か知ってるんじゃない？』

こんな風にも、誰かは云う。

『付き合ってたお前なら、わかるんじゃないの？』

伊吹力ナと最も親しかった人間が、相馬ユウであることは有名な話だ。

興味本位の質問を向けられることは多々あったが、ユウはいつも首を横に振ってきた。そして、ユウが口を閉ざしてしまえば、誰にも彼女の情報を得る手段はなかった。問題は、世界の中心にいるような少女が突如として消えてしまつて、その穴がまるでブラックホールのように、何もかも崩壊させる危険があったことだ。

結局。

いつしか、相馬ユウは《代理》となっていた。

誰にも代わりが務まるはずのない彼女の穴埋めをするため、一年間、ずいぶんと無茶をしてきた。思い返せば、苦笑と失笑しか浮かばない日々である。自分がうまくやれていると思ったことはない。彼女の代わりを務めるほどに、《差》を実感させられた。

穴は、少しずつ、確実に、広がっている。

崩壊の時を、ゆるりと視界の端に見ておきながら、何もできない。

ユウは目前に迫る彼女の誕生日に、ただ一人、誰にも理解されない恐怖を感じている。

友達と待ち合わせていると云うナツカを送り出して、ユウは平たい丘ぐらゐまで減った書類を片付けるため、生徒会室に残っていた。ぼんやりと上の空になってしまうのは、先程のメールが原因だ。

『次は、いつ来る?』

前回、彼女に会いに行ってから、一週間が経過している。

ユウはため息をついて、観念する。

『今日、行く』

返信をした後で、椅子に深くもたれかかった。

伊吹カナの誕生日は、八月一日。

残りわずかな時間でやらなければいけないことは何か、ユウは考える。

導き出される答えは、とてもシンプルだった。

——とりあえず、誕生日プレゼントが必要だ。

それが世界一の難問であることを、相馬ユウはよく知っている。

第2話「獄中少女」

中学生女子の誕生日プレゼントが、どうして世界一の難問たりうるか。

伊吹家について語ろう。

青鳥町には、そこで暮らす者にとっての有名スポットが存在する。七守学園などはその筆頭である。特筆すべき産業もない青鳥町に多くの学生を呼び込む七守学園は、まさに町の心臓と云えた。

伊吹家もまた、そんな七守学園と同等の知名度を持っている。少なくとも、青鳥町の住人ならば知らない者のない場所だ。ただの一人の邸宅が、どうしてそれほどまでに有名なのか——もっとも端的な理由は、その広さである。

ユウは門扉の前に立っていた。

伊吹家の正門。

右を見れば、塀は果てがなく、左を見ても、やはり果てがない。

鉄門扉は見上げるだけで首が痛くなる大きさだ。監視カメラや各種センサーが門の前に立つ者の詳細を調べあげる。ちょっとした要塞のような門を抜ければ、そこには平原が広がる。

平原——邸宅は見あたらない。

目を凝らせば、小路の果てにそれらしい影ならば見つけることができる。

伊吹家。

豪奢を極めた屋敷を見て、ほとんどの者が同じ疑問を抱くだろう。

——何を生業にしているのか。

——何を成せばここまでの財を築けるのか。

だが、ユウは知っている。感嘆の声をあげるかわりに、落胆の声をあげる者——彼らは世界の実情を知る人々だ。伊吹家の正体を知る彼らは、こんな風につぶやく。

——世界を掌で転がす伊吹家がこんなものか。

そんな『世界を掌で転がす伊吹家』という表現が、さすがに誇張されたものであることぐらい、ユウもわかっている。それを鵜呑みにして驚くほど子供でもなければ、馬鹿でもない。

世界を支配するなんて、夢物語だ。

伊吹家が掌握しているのは、せいぜい世界の半分程度である。

「ユウ様、お疲れ様でした」

屋敷の前には、一人の女性。

「お疲れ様？」

「失礼いたしました。期末試験、本日が最終日だったとおうかがいしております。とはいえ、ユウ様にとって、試験など杞憂のもので

はございませんでしたね」

女性の名は、三千字サヨコ。

漆器のように艶やかで、滝のように豊かな黒髪を腰まで長く伸ばした女性だ。立ち居振る舞いに無駄な所作はない。炎天下の中でも涼しい顔をして、ゆったりと温和な空気を身にまといっている。

付き合いも長く、さながら姉弟のように信頼する仲だったが、彼女が態度を崩すことは少ない。

屋敷という職場にいるかぎり、サヨコは常に漆黒の衣装。

伊吹家専属にして直属。
その職業、メイド。

「ところで、サヨコさん」

ユウが云いかけた言葉に、彼女はうなづく。

「わかっております」

サヨコは玄関の扉を開く。

「前回の訪問日より七日と二十二時間六分が経過しております。制限はクリア、問題もございません。どうぞお入りください」

深い一礼と共に招き入れられる。

「お嬢様がお待ちです」

お嬢様——その言葉が誰をあらわすものか、考えるまでもない。

当初の問題に還ろう。

ここに世界一の難問がある。

世界一のお嬢様に贈るべきプレゼントとは、はたして何であるべきか。

答えがわからないならば、訊くしかない。

「何かほしいもの、あるか？」

「そうだね」

答えは素っ気ない。

「本はいらない、かな？」

ユウは頭上を仰いだ。

彼女の声は遙かな高みから降ってくる。

巨大な部屋だった。まるで小人にでもなったかのように錯覚する。

見えるものは、本。

視界のほぼ全て、本。

壁一面に天井まで続く書架は、見上げていると頭がくらくらしてくる。部屋の色彩は、ほとんどが本の背表紙だ。重厚なハードカバーから薄いペーパーバックまで、雑多に詰め込まれている。そんな絶壁の最上段の本を取るため、彼女は長い梯子を登っていた。

「おい」

地平線の彼方にあるような、小さな影となっている彼女へ向けて、呼びかける。

だが、今度は返事もない。

時折、本が降ってくる。

梯子から降りることもなく、手に取ったその場で読み捨てられた本は、さながら死体のように周囲に散らばっていた。ため息と共に振り返れば、真っ赤な絨毯の上に、無数に転がる知識の亡骸。まるで嵐が過ぎ去った後のような惨状だ。

結局、ユウは待つしかなかった。

部屋の中央には、机とベッドが置かれている。

本と机とベッド——この部屋にあるものは、それだけだ。

この空間に最もふさわしい名前は、おそらく図書館だろう。ここを牢獄と呼んで、誰が信じるだろうか。

ユウはベッドに倒れ込んだ。

天井の先、どれだけ地層を抜ければ外に出られるのか、想像し

てみた。この場に通じる唯一のエレベーターが、下降を開始してから扉を開くまでの長い時間を思い出す。爪が剥がれ、肉が削げる程に土をかいたとしても、地上まで掘り進むことは不可能だろう。

「完璧な牢獄」

寝返りと共に、ユウはつぶやく。

彼女がここに囚われて、もう一年近くが経っていた。

目の前に、白い指。

指は、本を支えている。

太陽の光を浴びることもない指は、ずいぶんと白い。爪は短く切られているだけで化粧気はない。片手で本を支えながら、もう片方の手が規則正しくページをめくっていた。まるでゼンマイ仕掛けの人形のような。

彼女の指に血が通っていることが、不思議に見えた。

ほんの一時、眠っていたようだ。

「夢でも見ていた？」

本の向こう側から、声が降る。

誰の声だろう——と、ユウは疑問に思う。

気の迷いは、眠気の霧が晴れるのに併せて消えていく。

「いや、夢は見えてない」

「その割には、うなされていたよ」

「覚えてない」

嘘ではない。

夢を見ていた覚えもなければ、うなされていた記憶もない。

そもそも、ユウはあまり夢を見ない体質だった。

「夢は見ない」

「そうか。僕は、よく見るよ」

「ずっと前から、同じ夢ばかり見るとか云ってたな」

「そうそう、悪夢ってやつさ」

陽気な声で云うものだから、深刻さは微塵もない。

「僕は断罪されている」

どこか歌うような口調で、滑らかに、独り言のような言葉が続く。

「僕はギロチンにかけられる罪人で、どうしてか裁かれることだけ

を理解していて、なぜか理由もなく観念していて、不思議なことに悲しみも何もなく——そこにいる」

「どこに？」

「さて、どこだろう。たぶんこの世ではなくて、あの世でもない。中途半端などこかだよ。試しに表現するならば、何も描いていないカンパスだ。白いペンキをぶちまけたコンクリートだ。すべて選択した後にデリートしたワードファイルだ」

「つまり、真っ白というわけだ」

「その通り。僕は真っ白な世界に立っている。どこにも何も無い。僕だけがいる。およそ状況というものが何も与えられていないその世界で、僕はこれから首を斬られるという確信だけを抱いている」

そして——と、彼女は続ける。

「何かがやって来る。何かと表現したけれど、僕はそれが何か知っている。それは僕を裁くものだ。首を斬るものだ。殺すものだ。この殺しても死なないような僕を殺せるものだ」

それはつまり——と、彼女は続ける。

「僕のことだ」

僕を殺せるものは、僕だけだ。

そう云って、彼女は本を脇に置いた。

「僕が、僕を殺す。それが、僕の夢だ」

伊吹力ナ。

まず、誰もがその特徴としてあげるのが、真紅の髪だ。癖のないまっすぐな髪は燃えたぎるような赤色に染まっている。鮮烈な赤色は、火のようで、血のようだ。見る者を威嚇して、畏怖させる。

真紅の髪は、それだけでも十分にめだつ。

異様とも云えた。

だが、その髪色が似合っていないかと云えば、決してそうではない。真紅の髪に負けず劣らず、彼女はきわだった容姿を持っていた。結果として、真紅の髪は彼女の代名詞となる程なじんでいた。

美しいと云えば、そうである。

可愛いと云えば、そうである。

化け物と云えば、そうである。

瞳が大きい。黒い瞳は、虚無である。さながら底なし沼のように、目を合わせた者を引きずり込む。赤い唇、痩せた頬。表情は豊かだが、雰囲気は常に野生の獣のように――否、狩り立てる肉食獣のような、ぞっとする殺気を潜ませていた。

人形のような少女。

それは、美の比喩だ。本来であれば褒め言葉であり、実際、それ

は彼女にもあてはまる。だが、彼女の場合はそれ以外の意味もふくむ。まるで人形のように、生き物が当然持っている生と死を感じさせない。無機物のような静けさが、彼女には漂っていた。

伊吹力ナ。

人であるかも疑わしい、可憐な少女だ。

「それで、僕に膝枕されている感想は？」

頭は、彼女の膝の上。

目の前には、彼女の見下ろす顔。

「時は金なり」

彼女は笑う。

「残り時間もあとわずか。一週間に一回、一時間だけという限られた面会時間をほとんど昼寝で過ごした君が、僕に云うべき台詞は何だろうか？」

ユウは腕時計に目をやり、この部屋にいられる時間が、もう残り数分しかないことを確認した。

「もしかして、怒ってる？」

「君がそう思うならば、そうだろうさ」

むしろ上機嫌のように、にこにこ笑う彼女が怖い。

「じゃあ……」

云うべき台詞は、謝罪の言葉だろう。

しかし、そんな常識的な対応が通じる相手でない事は明らかだ。ほんの一瞬の間に、ユウは考えを巡らせた。打算と妥協——歯車がかチリと噛み合う音がした。子供に向けるような笑顔を作って、こんな風に尋ねた。

「お詫びも込めて——誕生日プレゼントは、何がいい？」

長い——とても長いエレベーターの中で、ユウは頭を悩ませていた。

「さて、困った」

非現実な場所で、年齢相応の中学生らしい悩み。

誕生日プレゼントは決まった。さて、どうやって準備しようか——と、ため息。

「お帰きなさいませ」

エレベーターが停止した所で、メイドのサヨコが待っていた。

「サヨコさん、迎えなんていいですよ」

ユウは心底そう云ったが、サヨコは首を横に振る。

「いいえ、これも大切なお勤めです」

肩書きはメイドだが、彼女はただの使用人ではない。

能力や実績において、本来ならば然るべき機関の重要な役職に就いていて不思議ではない人材だった。伊吹家でも実際の所、主が不在の間は屋敷の全権を任されている程だ。

それでも、彼女はメイドとしての物腰を崩さない。

「私の存在は、伊吹家に仕えること——すなわち、お嬢様のために尽くすことで初めて意味を持ちます。だから、ユウ様にお力添えすることが、現在の最も重要な仕事と云っても過言ではないのです」

ユウは幼い頃からサヨコを知っている。

彼女は真面目で、ひとつの物事を正しいと定めたならば、それを愚直に貫く性格だ。折れず、曲がらず、強い——それが、三千字サヨコという人である。だから、今さら何を云った所で無駄だろう。

「ユウ様は唯一、お嬢様が認めた方です」

サヨコは云う。

「事実、お嬢様の部屋に入れるのはユウ様だけなのですよ」

その言葉に偽りはない。

屋敷の主——すなわち伊吹家の当主は、ほぼ一年間、伊吹カナを監禁したまま諸外国を飛び回り、屋敷に帰っていない。屋敷の管理を任されているサヨコと他のメイド達も、カナと接触することは許されていなかった。

「サヨコさん」

言葉を遮り、ユウはサヨコに頼み事をする。

「電話を貸してもらえませんか？」

——嫌なことは、早めに済ませてしまった方がいい。

電話をかけたい相手を告げれば、サヨコは驚いた。

だが、一瞬の後に平静さを取り戻して「わかりました」と応じてくれる。理由を訊かない所が彼女らしい。そして早速、携帯電話を取り出して関係者へ連絡を始めた。取り次ぎが済むまで多少の時間が必要だろう。

牢獄で、伊吹カナは——。

『じゃあ、ね』

いたずらを思いついた子供のように云った。

『誕生日プレゼントは、デート一日でお願いするよ』

サヨコから電話を渡された。

通話口の向こうから、葬儀場のような静寂が聞こえた。

「もしもし」

会話は、一年ぶりだ。

電話の向こうには、伊吹家の主がいる。

それは、世界の半分を掌握する正義の体現者だ。ヨーロッパ連合と第三共同体を相手にして、世界に対する支配の根を腐らせない化物だ。第三次世界大戦を経て、混乱する世界情勢の中で禁止技術の独占をはかる支配者だ。

伊吹カナを牢獄に閉じ込める張本人だった。

彼女の母である。

「お願いがあります」

要求はシンプル。

一日だけの自由。

当然ながら、その見返りとして支払える対価などない。ユウにできることは頼み込むことだけだ。伊吹家当主という大物に忙しい時間を割かせて、ただの中学生が無茶なお願いをするのだから——世界の実情を知るような人達が見れば、息も止まる程に青ざめるはずだ。

言葉を尽くした後、ユウは黙り込む。

電話の向こうで、彼女はきっと、悪魔のように笑っているだろう。

「お願いします」

「いいよ」

あっさり、と。

「どうでもいい。君のしたいようにすればいい。一日ぐらい問題ではない。かまわない。好きにすればいい。それで何が変わるわけでもないはずだ。それで何が変わるならば、それもまた一興だろう」

なでるように甘い声だ。

「君は、どう思う？」

胸が焼けた。

「大丈夫と思う？」

電話を切らなければいけない。

このまま黙って聞いていれば、必ず後悔する羽目になる。

確信にも似た予感だった。だが、思いと裏腹に体が動かない。

「今年は、誰も死なないといいね」

電話が切れた。

ユウはしばらく動けないまま、立ち尽くしていた。

ただの遊びだ。道端の野良猫をからかうようなものだ。腹を立てたり、動じたりする分だけ、相手の思惑に乗せられた事になる。頭では理解していたが、感情が追いつかない。冷や汗。動悸。思い出したものは悲しみでもなく、怒りでもなく、ただの恐怖だ。

八月一日——彼女の誕生日が、また巡ってくる。

タイムリミット。

第3話「真紅の獅子」

彼女は真紅の獅子だった。

黄金のたてがみのかわりに真っ赤なロングヘアーをたなびかせ、肉を切り裂く爪のかわりにしやなかに細い指を突きつけ、強靱な前足で草原を駆け抜けるかわり、人ごみあふれる街中を風のように歩んだ。

あらゆる獣を怯えさせる吠え声は持たないが、秋空のように澄んだ声色で歌った。獅子が持つのは冷酷さと獰猛さをかね備えた、ネコ科の中でも特にぎらぎらとした瞳。彼女が持つのは、へらへらとした無邪気さの中に、世界の芯まで見抜くような洞察力に満ちた瞳。獅子は狩りをするが、彼女は狩りをせず、獅子は群れるが、彼女は一人だった。

獅子は殺す。

彼女は殺さない。

「やあ」

幸運にも晴天。

雲ひとつない、夏の青空。

彼女は爪と牙を隠していた。ご自慢のたてがみすら、鴉のような真っ黒へ染め変えていた。服装も特徴のない白のシャツに短いスカート。どこにでもいるような女子中学生が、だらしなく笑いながら、ユウの片腕に体を絡めてくる。

「その髪は？」

「サヨコが染めてくれた。お忍びで出かけるには、僕の髪は目立ちすぎるからね。なかなか見事だろう。僕はちゃんと自分のことをわかってるんだよ。わかっているからこそ、魅力を消すことだって造作もないのさ」

八月一日。

伊吹カナの誕生日。

「おめでとう」

「こちらこそ、デートに誘ってくれてありがとう」

スカートの端をつまみ上げ、カナは貴婦人のようにお辞儀する。

所作を押さえた見事な振る舞いだが、お辞儀を終えた途端、声も大きく笑った。

「お嬢様」

その振る舞いを、お目付け役でもあるサヨコが咎める。

しかし、カナは気にした様子もない。むしろ横柄な態度で、サヨコを横目で見やる。

「ここまででいい」

これ以上は――。

「付き纏うな」

屋敷の玄関である。

奇妙な緊張感の中で、ユウはサヨコの目配せに気づく。

どうか何事もないように――祈りにも似た視線だった。

「さあ」

カナは大きな瞳で、猫のように振り返る。

「どこへ行くのか？」

七守学園から一直線に伸びる大通り。

左右に大小様々な店舗が立ち並ぶ繁華街を、特に目的もさだめず歩いた。

カナが人目を引くのではないかというユウの心配は、どうやら杞憂に終わった。「今日の僕はごく普通の女の子だよ」と云って笑う。その言葉通り、アイスクリーム屋を見つければ、袖を引っばってねだり、ぬいぐるみ屋を見つければ、「かわいい」と声を高くした。

「不気味だ」

ユウは遂につばやいてしまった。

「たしかに、齡五十を越えたおっさん店長ともぐらを合体させたこのファンシーシヨップのマスコットキャラは、その造形はもとより、発想に至った経緯すらが不気味だよな」

ぬいぐるみを興味の失せたように放り出し、彼女は力ナらしい顔になる。

「僕みたいな美少女が見た目にふさわしい愛らしさを振りまいているのに、君はどうやらお気に召さないらしい」

「取り繕った《らしさ》なんて、気持ち悪いだけだ」

その言葉に、彼女はしばらく何かを考えるように難しい顔になった。

「自分ではなかなか上手に、一介の女子中学生をやっていたつもりだった。しかし、君には通じなかったようだ。残念至極」

「ずっとお前と付き合ってきた俺からすれば、ぬいぐるみ相手に『いやーん、かわいい』なんて云ってる姿からは、薄ら寒さと恐怖しか感じない」

「ひどいな」

本当にシヨックでも受けたように、彼女は目を丸くする。

「そんな風に思われるとは予想外だ。僕からすれば、サービスのつもりだった。でも、思えば、方向性を重ねても無駄に濃くなるだけかもしれない。ケーキにジュースでは甘すぎる。夏場に毛布は暑す

ぎる。ツッコミが二人では漫才は成り立たない。正反対のものを重ねてこそ、効果がきわ立つ場合もあるわけだ」

閃いた——というように、彼女は指を突きつける。

「すなわち、こんなにも愛くるしい美少女の僕に必要なものは、それと正反対の厳しい性格ということだ」

嫌な予感しかしなかった。

彼女はくるりとそっぽを向いた。うつむき加減に顔を赤らめ、後ろ手に両の指を絡める。

そうして、わずかに見返りながら声を尖らせて云った。

「か、勘違いしないでよね。べ、別に君のためじゃあ、ないんだから……」

思わず、ユウは彼女を背中から蹴っ飛ばした。

しかし、さすがの伊吹カナだ。けろりとした顔で振り返る。そして、照れたように頬染めて、満面の笑みを浮かべた。

「蹴りたくなるぐらい、可愛かった？」

「そんな愛情表現がある世界を、俺は知らない」

蹴られた部分を手で払いながら、カナは満足そうに笑っていた。蹴られたことに対して、服の汚れを気にするだけだ。まるで怒る様子もない。その常人とは違った感覚こそ、カナにふさわしい。

そんな《らしさ》に、ユウはため息をつく。

「でも、困ったね」

カナは真面目な顔でつぶやく。

「僕がさっきみたいなキャラを貫き通すと、これはもう世界が変わるよ。世の男子たちが放っておかない。君を楽しませようと思ったら、無数の男子に言い寄られることになる。いやはや、なんて罪づくり。困ったね」

けらけらと笑うカナに、ユウは再度、ため息をついてやる。

自分の容姿と魅力に照れも謙遜もなく、確信だけを持っている。傲慢なようでもあるが、それは少し違った。カナはみずからの存在を、そうしたものと受け入れているだけだ。

彼女は自身を誇らない。

彼女は自身を茶化すだけだ。

それでも、どうしようもなく、彼女は人を惹きつける。

中学校に入学した時だった。

彼女は十二歳だった。

男女の境目もなく、犬猫のように遊びまわった時期は遙かな昔に

過ぎ去り、小学校も半ばを過ぎれば、好きだ嫌いだの話もやや真剣みを帯びる。

その点においても、カナは常に話題の中心だった。「好きな人は？」と質問されたならば、男女も学年も問わず、まず彼女の名前を挙げるのが学校内での常識だった。事実、彼女に告白する者は後を絶たず、彼女に振られることが一歩大人に近づくための通過儀礼という風潮すらあった。

このため、小学校の卒業間近は、大変な状況になっていた。

ある男子生徒が彼女に告白しようと声をかけたところ、「昼休みならば二人待ち。放課後ならば四人待ち。三時限後の休み時間であれば、待ち時間なしでご利用いただけます」などと返されたという伝説がある。

ちなみに、この伝説には誤りがある。男子生徒が云われた内容には何ひとつ間違いがないが、それを云ったのは彼女ではなく、ユウだった。

「こちらが申込用紙です。ご希望の日付と時間帯を記入して、今週中にご提出ください」

暇つぶしと、さすがにやや辟易としている彼女を慮って、その頃ユウは告白の受付窓口を行っていた。

「予約料を取るようにすれば、いい小遣い稼ぎになる」

「想いを伝えるのにお金が必要なんて、それはちょっと世知辛いね」

ユウのアイデアに、カナは肩をすくめて返した。

その言い分が正しいように思えたので、ユウも予約料による小遣い稼ぎはあきらめた。しかし、想像していた以上に面倒で反感を買う仕事を、いつまでも無償で続けるのも馬鹿らしいと思っていた。

そのため、ユウは第二のアイデアを実行に移した。

「こちら、今までの告白パターンと彼女の返答をまとめた攻略本です。彼女の基本データから、趣味や思考に至るまでの写真入り解説付きで、今なら一冊300円でお買い求めいただけます」

飛ぶように売れたが、彼女に殴られてユウも空を飛んだ。

「疲れた」

小学校の卒業式の日、彼女の第一の感想はそれだった。

「卒業式は午前中に終わるのに、告白タイムで、夜まで拘束されるとは、さすがの僕も予想外だ。僕は、自分のことを可愛い女の子だと誤解していたよ。なんと僕は、超絶美少女だったんだ」

「疲れてるせいか、普段以上に阿呆なこと云ってるよ」

二人共に仲良く、ソファでぐったりと横に倒れていた。

「一人ずつ真面目に相手にしなくても、もっと適当に断っていけばいいのに……」

「云うは易し、行うは難し。拡声器でも使って、『君たち、みんな、

「ごめんなさい」とても云えばいいのかな。それはちょっと、悲しすぎるね。僕が少しでもだけ時間を割いてやれば、彼らにも良い思い出になるんだから、僕にはそうする義務があるのさ」

彼女は天を指さす。

「こんな風に生まれてしまった僕の意味とは何だろうか。僕が生きている意味とは何だろうか。神様がそれを教えてくれれば楽だけど、どうやら自分で考えるしか方法はないらしい。ならば、僕は、幸せを追求してやるだけさ」

格好をつけて嘯く彼女だったが、さすがに懲りたようで、今後は対応策を講じる予定だと云った。

ユウはそれで安心してしまった。彼女が手を打つというのだから、くだらない茶番も終わりだと勘違いしてしまったのだ。

まったくもって、それは甘い考えだった。

本当の地獄は、それからだった。

中学校の入学式。

当然のごとく、彼女は新入生の代表として、壇上で式辞を述べた。

堂々とした挨拶で、厳粛な式の空気をより一層引き締めていた。私語の一切も封殺し、彼女は会場中の視線を独り占めにした。皆が自然と吸い寄せられるその様は、さながら狂信者たち誕生の瞬間を見るようで、ユウは一人、やれやれとため息をついていた。

そんな折りに、名を呼ばれた。

挨拶も終わり、普通ならば壇上を辞する所、彼女はマイクに向けて「ユウ」とつぶやいた。そして、「来い」と一言。波紋のようにざわめきが広がり、小学校からの顔なじみ達が、にやにやと笑う。

突飛な彼女の行動はいつものことだ。だが、凡人たるユウはその破天荒さに馴染めない。その時もまた、憂鬱な気分で壇上へ登った。

向かい合った。

ざわめいていた会場が、徐々に静かになっていく。

息苦しいほどに人で満杯になった体育館の中、その全ての視線を一身に受ける。ユウがため息をつく一方で、カナは満面の笑顔を浮かべていた。

「なんの冗談……」

云いかけた言葉ごと、ユウは口を封じられた。

なにをされたのだろう、と思った。

キスをされていた。

「まだ、僕と君は付き合っていることになっているのかな？」

「入学式のエピソードは、お前が思っている以上に、大きな衝撃を与えたことを自覚するべきだ」

「いやいや、それならば、僕の狙い通りじゃないか」

喫茶店のテーブル。

ユウとカナは向かい合っていた。

繁華街のメインストリートからやや外れたその店は、お世辞にも繁盛しているとは云い難い。しかし、落ち着いて休憩するならば、むしろ人の目は少ない方がよかった。

運ばれてきたドリンクで、無言のまま乾杯。「ケーキは？」と尋ねたユウに対し、カナは「中学生の財布の事情ぐらい、僕にはお見通しさ」と得意げな顔をした。

「誰が奢ると云った？」

「なんと？」

デートの作法について、長々と議論を戦わせることになった。議論の果てに「そもそも彼女でもない相手に、なぜ奢らなければいけない」と叫んだユウである。

「僕は、君の彼女じゃないか」

「それは、建前だ」

互いに、他人からの愛情の貰いすぎを避けるためだ。そして、彼氏彼女の間柄と言い切ってしまった方が、何かと二人だけで行動す

る際に、周囲へ言い訳を考えずに済んだからだ。

ユウは、あらためて告げる。

「俺は、お前と、付き合っていない」

「嫌にはつきり云うね」

「はつきりさせておいた方が良さそうだからな。俺は、お前に恋愛感情なんて一片たりとも持っていないし、それは、お前もそうだったはずだ。俺達がラブコメよろしく好きだ嫌いだななんてやっている姿は、想像すらできない」

完璧に云い切ってみたものの、彼女は納得できないのか、首を傾げていた。

「まあ、ラブコメは僕達らしくないだろうけれど……」

そんな前置きをしつつ、カナは云う。

「確かに、中学生らしい拙い恋愛をやる間柄ではないさ。僕と君の間柄は、そんなものではなかったからね。だけど、結局の所、僕が選ぶ相手は君しかいないように思うのだ。恋愛をやる姿は想像し難いけれど、結婚した後の姿は簡単に思い浮かぶ。僕のパートナーは君しかいないだろうし、僕が君を選ぶ以上、君も僕を選ぶしかない。こんなにも明確にゴールが見えているのに、その過程を捻じ曲げようとするのは、馬鹿らしくも思える」

そこで、カナはくすりと笑った。

身を低くして、子供が大人の顔を伺うような上目づかい。

「それとも、僕が地下に引きこもっている間に、好きな女の子でもできたかな。それならば、そうと云ってくれればいいんだ。君は中学生らしく年相応の恋愛とやらを経験して、それを片付けた後、僕のもとへ帰ってくればいいだけなんだから」

カナは、まったく邪気の欠片もなく、心底そう思っていることがわかるような笑顔を浮かべていた。純真無垢とも錯覚してしまいそうに云い分だった。

「たとえば……」

試しに——と、思い立ち、ユウは告げてみる。

「俺に好きな子ができて、心底惚れ込んで、毎日その子のことばかり考えていて、お前のことなんて眼中になくなって、たまに会ってもその惚れた子のことばかり話すようになったとしたら、お前はどうする？」

「応援する、全力で」

ぐっと拳を握りしめて、即答された。

「そして、ユウ君の恋愛が成就して、誕生日やらクリスマスやらのイベントを一通りこなして、その相手の子が不治の病で亡くなった、親の仕事の都合で転校してしまった後で、悲しんでいる君を力いっぱい抱きしめてあげる」

「お前の立ち位置がわからない」

頭を抱えるユウである。

カナは、当たり前のように続けた。

「物語の終わりは、どこにあると思う。勇者のお話ならば魔王を倒すまで、推理小説ならば犯人を見つけるまで、青臭い恋愛話ならば二人が結びつくまで——そんな風に、思うかな。でも、魔王を倒した勇者の人生は老いて死ぬまで続くだろうし、トリックを見破られた犯人は刑務所の中で新しい日常が始まるし、大恋愛を経て結ばれた二人は一週間後に別れるかもしれない」

たと言話だよ——と、カナは念押しした。

「物語は終わらないのさ。結束らしい結末を迎えても、物語に終わらないなんてものは訪れない。それが残酷なこの世のルールだ。だから、僕は、君がどんな物語に身を堕としたとしても、その結末で待っていてあげる。忘れるなよ。伊吹カナという女の子は、もはや、君のためだけに存在すると云っても過言ではないのさ」

その言葉に、ユウは何も答えなかった。

口にするだけの言葉が、ユウには何もなかった。

伊吹カナのことを好きかと問われれば、好きだというのが本心だ。伊吹カナのことを愛しているかと問われれば、愛しているというのが本心だ。伊吹カナのことが何よりも大切かと問われれば、たぶんそうなのだろう。

だが、ユウは、それらの答えを口に出すべきなのか、それがわからない。本心を剥き出しにすることが正しいのか、それがわからない。

最低だ——と、自覚している。

「ケーキ」

「ん？」

ユウはため息をつく。

「やっぱり、奢ることにする」

第4話「茶番」

伊吹カナには妹がいた。

妹の名前は、レナと云った。

二人は、名前の響きだけでなく、見た目にもよく似た姉妹だった。

姉妹は、とても仲が良かった。

「カナちゃんは――」

自分の姉のことを、レナはそんな風に呼んだ。

レナは陽気な女の子であり、深く悩むことをしなかった。姉のことを好きと公言してはばからず、まるで従順な子犬のように後ろをついてまわる。伊吹家という巨大な組織の中で、跡目として比較されることもあったが、嫉妬の欠片も抱く様子がない。

まるで夜空に浮かぶ銀河を見るように、遥かに遠い存在として、彼女は姉を見ていた。

「カナちゃんは、絶対に来るだろうね」

その時、ユウは彼女と肩を寄せ合い、地べたに座っていた。

薄暗い部屋――廃墟である。カーテンのない窓から夕日が差し込んでいた。

扉が開く。

若い男が入ってくる。電灯もない部屋だが、斜陽の中、影のさした顔立ちは簡単に見て取ることができた。ユウはただの興味で視線を向けていた。呆けたような想いを抱く——誘拐犯にしては普通だと。

大学生ぐらいの風貌だった。短く刈り込んだ金髪、ジーンズにサングラスを履き、安っぽい黒のシャツ。アクセサリの類は見あたらないが、キャップを被っている。それを指で押し下げながら、男は口の端で笑った。だが、青い瞳は印象的で隠しようがない。

「怪我は大丈夫か」

問われて、ユウは迷った。

結局、返事に迷っている間に、沈黙が答えとなる。

「嫌われたもんだ。まあ、あたり前だけださ。でもね、その怪我は俺のせいじゃないから。そこところ、誤解しないでほしいわけだよ。変に恨まれたくないからね。俺は自分でやらかしたことの恨みは買っけど、関係のない恨みまで買っほど大人じゃない」

男は、部屋の真ん中で演説するように話す。

「まあ、たしかに、君らを連れ去るような真似をしなければ、坊やが怪我をすることもなかったさ。俺としても予想外だった。君みたいな坊やが、まさか反撃してくるとは思っていなかった。その点はすなおい頭をさげよう。見くびっていた、ごめんよ」

謝られても、嬉しいわけではない。

ユウは黙ったまま、次の言葉を待った。

「しかし……」

男は、表情を曇らせる。

「坊やお嬢ちゃん、薄気味悪いぐらいに落ち着いているね。場慣れしているわけでもないだろう。俺は心底、恐怖するよ。君らの態度が、俺がこれから相手にするものの異質さを教えてくれるわけだ。いや、傑作だな。まさか、こんな修羅場を迎えるとはね」

——相手にする？

無言で問いかけたユウの視線を無視して、男は腰をおろした。
あぐらをかき、正面から二人に相對する。

「軽く自己紹介しておこうか。俺は、この近くの七守大学の学生だ。いわゆる、苦学生でね。両親は俺がガキの頃に死んでしまって、まあ、よくある話だね。今の世ならば、そこらに転がっている話だよ。世間的には不幸な方かもしれないが、大学まで通えている以上、幸せな奴なんだと俺自身は思っている。だが、困ったことに金がない。とある事情で莫大な金が必要になったが、頼る者のない俺には金を得るすべがない」

「それで、誘拐？」

では、身代金目的なのか。

「いいや、お前らの想像は、たぶん少し外れている」

男は笑った。

だが、その笑みはすぐに消えた。

「教えろ」

言葉の意気が変わる。

愚痴めいた独り言が、高圧的な命令へ。

「伊吹力ナとは、なんだ」

真正面からストレートな言葉を突きつけられて、ユウは虚を突かれた。

言葉の意味を理解するまでに時間がかかり、理解した後には、じわじわと冷や汗が浮かんだ。

「お前らがどれだけ事情を理解しているか知らない。お前らがどれだけ世界の仕組みを理解しているか知らない。お前らがどれだけ伊吹家を知っているか知らない。だが、俺は知っている。伊吹と云えば、どんな化け物や魑魅魍魎よりも怖いものだ。悪党共の方が何倍もマシさ。悪党には融通がきくけれど、正義には道理しかない。伊吹を敵にすれば、おそらく俺みたいな半端者、骨も残らないだろう」

自虐的に笑む。

「そんな伊吹家の最終兵器——まだまだ表舞台の役者というわけではないけれど、評判だけは聞こえてくる。冗談にもならないような噂話の数々が、もし仮に、ただの真実だったならば、それこそ冗談じゃない。世界がぐるりと変わっちゃう」

ユウは、男の話を完全には理解できない。

だが、男がただの苦学生でないことは、容易に理解できた。

「坊やお嬢ちゃんを誘拐して、身代金っていう方がシンプルで良かったかもな。だが、クライアントの要求はそうじゃなかった。伊吹家を敵に回した時点で、俺が生き残る方法はないのさ。だから、重要なのは、クライアントの要求通りにきっちり仕事をして、俺が死んだとしても、必要な所に必要なだけ金が支払われることなのさ」

「クライアント？」

尋ねたのは、レナである。

少女の問いかける視線に対して、男はあっさり答える。

「悪い人のことだよ。君らぐらいだと、もう対象年齢から外れるのかな。ほら、あるだろう、戦隊ヒーローもの。世界征服をたくらむ悪の組織ってやつさ。あれ、実在するんだぜ」

冗談なのか、本気なのか、その頃はまだ理解できなかった。男も軽薄な笑みを浮かべるだけで、それ以上は言及しない。ただし、瞳は異常にぎらついた光を浮かべていて、その威圧感と共に、先と同じ質問を繰り返した。

「伊吹カナとは、なんだ」

ユウとレナは、互いを見合った。

「わからない——そんな顔だな」

よほど困惑した表情を浮かべていたのだろう。

男は肩を落として、刃物のような気配をおさめた。

「やつぱり、やるしかないのか。伊吹家なんて、絶対に敵に回しちゃいけないものに手を出すのが、ヤバいと思ってた。でも、その見返りに得られるものがデカすぎるから引き受けた。それで調べている内に、わかった。伊吹家も恐いが、あの女の子の恐さはそれ以上だ。伊吹家を直接どうこうするわけじゃない、ターゲットはあくまで十歳の女の子だと聞かされて、最初は希望を感じたけれど、なんてことはない。最悪の貧乏くじだ」

男は口の端で笑う。

「俺はたぶん捨て石だ」

一拍の間をあけて、思い直したように――。

「いや、試金石か」

しばらく沈黙が降りた。

男は目を閉ざしていた。瞑想でもしているように、ぴたりと動きを止めている。声をかけるつもりなど最初からなかったが、今この時、容易には触れられない空気が漂っていた。

その気配から察した。

――ああ、やつぱり。

——この人は《魔法》を使える。

男は時折、指を動かした。

両の手は開かれており、十本の指はまっすぐに伸ばされていた。それが一本、また一本と折られていく。時折、苦虫を噛み潰したように、表情がゆがんだ。舌打ち、歯ぎしり——やがて両手の指が全て折られた時、男は蒼白な顔で目を開いた。

「全滅」

荒い息で、男は泣きそうな声を出す。

「あれが、十歳の女の子かよ」

男は立ち上がる。その身体が小刻みに震えていた。ぶつぶつと何かを呟いていた。「化物」と。「化物化物化物化物化物……」と。恐怖を隠すこともできない男が、最後に、精一杯の強がりとおぼしき声で云った。

「よかったな。お迎えが来たぜ」

扉が吹き飛ぶ。

鍵はかかっていたいなかったはずだ。ならば、扉を蹴り飛ばすなど、パフォーマンス以外のなものでもない。ひしやげた扉が床を転がり、派手な音をたてる。反対に、部屋の中は息を殺したように静まり返った。

「やつほー」

と、気安く。

「お待たせー」

と、場違いに。

伊吹カナ。

ただし、殺気も敵意も微塵も隠さず、真紅の髪も存分に振り乱した格好である。

空虚な底なし沼のような瞳すら、瞬間、獲物を見つけた獣のように剣呑な光に満ちた。

十歳の女の子。

齢も性別も、白けた嘘のようだった。可憐な女の子のポスターの裏側に獅子が潜んでいる。薄い紙を一枚隔てた向こう側からうなり声がしている。それを見たまま可愛い女の子の子と思いこめる人間がいるだろうか。

伊吹カナが怒っていた。

へらへらと笑うばかりの彼女が、心底、怒っていた。

真紅の獅子。

誘拐されてからの数時間よりも、ユウはその瞬間こそ、ぞっとしていた。

隣にいるレナも、座ったままで居住まいを正している。

「お、おお……」

感嘆とも恐怖とも取れるような声をあげて、男が後ずさりする。

「お前が、伊吹カナか？」

「やあ、僕の世界で一番大切な君達よ、遅くなって悪かったね」

男の姿など眼中にないように、カナはまっすぐ前へ出る。男のそばを通り過ぎる時でも、視線すら向けなかった。気にもかけない。豊かな髪がなびき、男の身体を撫でる。だが、彼は動けない。

「君達は僕がいないとまるでダメだね。ユウ君の姿を見ると、そんな怪我をするまで頑張ったのは男らしいとも云える。だけど、無茶はよくない。僕はダメダメな君達が大好きだけど、いつか君達だつて……」

「カナちゃん、大好き。好き好き大好き超愛してる」

説教モードに入ったカナに対し、熱烈な抱擁でその言葉を遮ったのはレナである。誘拐された妹、助けに来た姉。そんな姉妹が感動の再会の果てに抱き合つと云えば聞こえはいいが、レナは欲望の蓋が外れたような有様で、カナと云えば、みつともなく絶叫していた。

「やめなさい。やめろ。やめて」

カナの声が、徐々に弱くなる。

「ごめん。ごめんなさい。そうだね。うん、怖かったね。悪かった

ね。僕、遅くなっちゃったね。ごめん。悪かった。わかってる。わかってるから、レナ、やめて。やめてー。やーめーてー。唇だけは、せめて、唇だけは。そこだけは、勘弁して……」

伊吹カナにとって世界で一番大切なものは妹であるが、世界で一番苦手なものも妹である。

「テンション高いな」

ため息まじり、ユウも立ち上がる。

「随分くたびれているけれど、大丈夫かい、ユウ君？」

片腕でレナを引き剥がそうと四苦八苦しながら、それでも表情だけ、いつもの余裕を取り戻すカナ。余裕綽々と格好をつけているが、妹に身体半分を蛸のように抱きつかれている。

「歩けないなら、お姫様抱っこしてあげるよ？」

「せめておんぶにしてほしいけれど、大丈夫、歩ける」

「私、歩けない。カナちゃん、だっこ」

にこにこ笑いながら、姉に甘えるレナである。

へらへら笑いながら、額に汗滲ませるカナである。

「実に麗しい姉妹愛」

と、ユウ。

「僕、時々、貞操の危機を感じるんだよね」

と、カナ。

緊張感の欠片もない。実際、ユウは全て終わったと思っていた。誘拐されたことも、誘拐犯の存在も、全ては過去のものだ。伊吹カナがあらわれた時点で、それらは事件として解決してしまっている。

ここから起こることは、エピソードに過ぎない。

「伊吹カナ」

震えた声だった。

いや、その身体も、ぶるぶると震えていた。

男の顔は蒼白を通り越して、死人のようだった。その姿を見て、ユウは単純にこう思った。なぜ逃げないのだろうか。皮肉でも何でもない。彼が敵に回した相手は伊吹カナなのである。

「ああ、そうだったね」

思い出したかのように、カナは手を打つ。

妹をあっさり引き剥がし、その身体をユウへ預けた。

「ユウ君、ちょっと妹を頼むよ」

そして、男の方へ。

一歩。

「仕置きの時間だ」

妹に抱きつかれ、馬鹿げた会話を繰り広げ、笑顔を浮かべた後でも、カナの周囲に漂う気配は何も変わっていなかった。レナが震えていることに、ユウは気づいた。不必要に甘えたことも、彼女は覚えてそうしたのだろう。

結局、カナの怒りはおさまらなかった。

「僕は怒っている」

普段へらへらと笑うばかりのカナが、怒りを見せることは稀だった。そして、彼女が本気を見せることも稀だった。だから、その剣が抜き放たれる所を見るのは、ユウにとっても、その時が初めてだった。

カナは、片手をかかげた。

「カラドボルグ」

斜陽が差していた。

カナに与えられた自由は一日限り。

定められた時間が過ぎる前に、彼女を家まで送り届けなければいけなかった。その時間も差し迫りつつあったが、最後にどうしても

訪れるべき場所があった。

「思い出の場所に行こう」

そんな風に提案しながら、ユウは白々しく笑った。

「剣を見つけた場所だ」

二人の家から七守学園に向かう通学路の途中に、鬱蒼と木々が生い茂る場所がある。道なき道を進み、徐々に険しくなる斜面を登っていく。自然は手つかずのまま、荒れ放題だ。生い茂った草花が、天然の檻となつて行く手を阻む。

やがて開けた場所に出る。

洞窟があった。

「一年ぶりだ」

夏の夕刻である。世界は赤かった。

ユウは目を閉ざす。

洞窟に足を踏み入れる前に、意を決して振り返った。

赤色に染まった世界。髪を黒く染めた伊吹カナが何を見るでもなく、ただ遠くを探すように、空へ目を向けていた。その視線を追えば、まだ夕刻であるのに、空にうつすらと月や星が見えた。

彼女の眼は、何を追っているのだろうか。

ユウにはわからない。

だから、何も云わなかった。云えなかった。
両手を握りしめ、口の内側を噛んだ。

呪いのように唱えてきた言葉を、頭の中で繰り返す。

——約束だ。

洞窟の中へ。

闇が、身体を覆っていく。

彼女が中学生として、初めての夏休みを迎えた頃だった。

姉妹が仲むつまじく揃うことは、二度と叶わないものになった。

洞窟の最奥。

いや、正確には、洞窟の果てが何処にあるのか、ユウは知らなかった。二人並んで通るのがやっとの道幅を進み、いつしかたどり着

く広場を最奥と考えていた。声も反響しない場所。光も音も途絶えてしまった場所。剣が突き刺さっていた場所から先へは進んだこともなかった。

「何も見えないね」

ユウが最後にここへ訪れたのは、きつちり一年前のことだ。

子供の頃に剣を見つけた後も、思い出したように時折、この洞窟へ二人で潜った。

闇の中にいる間だけ、ユウは普段聞けないようなことでも、カナへ尋ねることができた。

互いの顔も見えないような闇の中。
言葉も溶けてしまいそうな闇の中。

闇の中で語り合い、心をよせた。

振り返れば、この場所は本当に二人だけのものだった。一枚の紙の裏表のように、カナとレナは決して切り離せない姉妹だった。しかし、妹をここへ誘ったことはなく、レナはこの場所を知らなかった。

「二人こそどこ何処に行っているのか——なんて、よく問い詰められたものだね」

「除け者にして悪かったと、今になってから思うよ」

カナの言葉に、ユウは苦笑する。

それから、長い——とても長い沈黙が訪れた。

「レナのこと——」

ようやく口を開いた時、当然のように、声は枯れていた。

「全部、俺のせいだ」

この場所では、闇が全てを包んでくれる。

見たくないものを、隠してくれる。

「レナは……」

「違うね」

きっぱり、と。

「違う。まるで違う。全然、違うね」

彼女は云う。

一年前から変わらず、同じ言葉。

「レナの死は、僕のものだ」

「だけど、理由は、俺にあるはずだ」

ユウは叫んだ。

しかし――。

「ない」

断言される。

「ない。まるで、ない。まったく、ない。レナの死は、僕だけのものだ。ユウ君、僕は君が大好きだけど、これは僕のものだ。絶対に君にはあげない。これは、カナとレナの問題であって、君が入り込む余地なんてない。そこに君が入り込むなんて、僕が許さない」

違う。

ユウは叫んだ。

叫ぶが、届かない。

言葉にすることができない。

今さら何かを云うことも、何かをすることも、ユウには許されなかった。今を続ける――失った今を、それがあるかのように振る舞い続けることが、ユウに与えられた唯一の救いであり、最高の罰だ。

伊吹レナがない日常。

それでも、何も変わらない日常。

「どつして……」

言葉が途切れる。

顔をあげても、見えるものは闇ばかりだ。投げかけた言葉も、闇に吞まれて消えていく。気配もない。彼女はそこにいるのだろうか。そこにいる者は、はたして、ユウの知っている伊吹カナなのだろうか。

ユウにはわからない。

わからない。

「わからない」

だから、尋ねる。

「どうして、なにが、必要で、不要で、僕が、俺が、お前と、あいつと、そう、レナと、カナと、あの時に、こうしていれば、ああしていれば、何か、何かが、少し、少しだけ、少しだけでも——どうして、どうして、どうして——殺した？」

一年間。

言葉にできなかったことを、口にする。

「どうして、殺した？」

答えはなかった。

そして——。

そして――。

闇の中、彼女は消え去った。

第5話「人形使い」

八月四日。

三日が過ぎた。

誕生日に失踪した伊吹カナは、まだ発見されていない。

闇の中で消えてしまった後、ユウは洞窟内はもちろん、町内をしらみ潰しに探し回ったが、結局は全て徒労に終わった。日付も変わるうかという深夜、タイムオーバーとなり、ユウは伊吹家に確保されてしまった。

そうなれば、状況は流れるままだ。

一年間も囚われの身だったカナが、一日の自由を得たその日に失踪する。はたして、みずからの意志でそうしたのか、何かしらの不可抗力でそうなったのか——理由はわからない。

ただし、状況が非常に良くないことは明白だった。彼女が自分の意志で逃げ出したとすれば、それを許す程に寛大な伊吹家ではない。正確に云うならば、伊吹家の当主である彼女の母親は、その逃走を絶対に許さないだろう。

現状、伊吹家に慌ただしい気配は見えないが、それは所詮、ユウの見える範囲の事だ。水面下で、途方もない大搜索が行われている事は疑いなかった。

伊吹家の娘——今や、彼女は唯一の血統である。現在の当主は、既にこれ以上の子が望める体ではない。すなわち、伊吹カナを失う

ことは伊吹家が絶える事と同じ意味を持つ。

「ああ、母さん」

三日目の今日、自宅へ電話をかけた。

「まだ、しばらく帰れそうにない。父さんによろしく」

三日の間、ユウはほとんど何もしていない。

ただの平凡な中学生が一人あがいた所で、伊吹家の前では、巨象に対する蟻にも匹敵しない。カナを見つける最善の手段は、伊吹家に何もかも任せることだ。ユウはそれを理解しているため、大人しく軟禁されている。

直前まで行動を共にしていたユウが疑われることは仕方ない。

伊吹家のような組織ならば、その身柄を拘束することも当然の話だった。

「ユウ様」

正午の直前、手慰みに夏休みの宿題を片づけていた所、ユウはサヨコから声かけられた。

三日も進展がないことに、彼女も気に病む所があったらしい。

「この一年で、ユウ様は見違えるようになりましたね。油断をしていると、そろそろ一本取られてしまつかもしれません。私が本気を出す時も近いかもしれませんね」

気晴らしである。

ユウとサヨコは木刀を構えて、正面から向き合っていた。

広大な敷地と無尽蔵の財力を持つ伊吹家は、屋敷の中に様々な部屋や施設を備えている。武道場は、贅を尽くした部屋が多い中では、ずいぶんと簡素な場所だった。広々とした板の間には、装飾品の類は何もない。

昔から、遊び場のひとつだった。

この遊び相手は、いつも三千字サヨコだった。

サヨコは木刀の重さを確かめるように、何度か素振りをしていた。それは見惚れるぐらいに美しい動きだった。普段から姿勢のいい人で、黙って立っているだけでも百合のような気品があるが、刀という獲物を得た瞬間、その姿は活き活きとして輝きを増す。

名品の花瓶に、花が合わさるようなもの。

実際は、鬼に金棒であるけれど――。

「どうぞ、ユウ様から」

チャンバラごっこ。

所作も形式も、遊びゆえに存在しない。

サヨコは素足ではあるものの、服装は普段のメイド服のままだ。

両手をだらりと伸ばして、隙だらけと云っても過言ではない構えである。木刀の剣先は床すれすれの所でゆれている。

一見すると、素人だ。

事実、サヨコが剣道や居合をたしなんているという話を、ユウは聞いたことがない。学生時代から伊吹家に仕えてきた彼女は、そもそもクラブ活動に費やす時間もなかったはずだ。だから、素人という言い方は間違いではなかった。

スポーツとして見た時、サヨコは間違いなく失格する。

——強すぎて。

ユウは、踏み出す。

両手で握った木刀を上段に構える。サヨコは動かない。女性としては平均的な身長の子ヨコである。中学生になって背も伸びたユウは、いつしか体格で上回っていた。子供の頃にあつた間合いの差は、今や逆転している。

一足飛びに、距離を縮めた。

まずは何も考えず——駆け引きも何もなく、ただ全力で打ち降ろした。サヨコは動かない。眼前に木刀が迫っても、涼やかな顔で眺めるだけだった。ユウの背筋に冷たいものが走った。真剣勝負ならば、死が見えたはずだ。

刹那。

両腕に雷鳴が落ちた——と、錯覚した。

反射的、腕に力を込める。木刀をはじき飛ばされるような無様は避けた。しかし、衝撃の大きさにバランスを崩してしまふ。横向きに一転、二転。片手を木刀からはなして、どうにか床を突いて跳ね起きるも、腕に残る痺れに心臓のリズムが盛大に狂いはじめた。

凜、と。

サヨコは、木刀を薙ぎ払った格好のままだ。

下段の構えから弧を描くように、眼前の木刀を払った——らしい。

残念ながら、その動きの始点も終点も、ユウには雷鳴の走ったようにしか知覚できなかった。圧倒的な力の差。技術では埋められない差。背筋に走った冷たい感覚が、神経を昂ぶらせた。恐ろしいけれど、面白い。

「ユウ様」

サヨコは、構えを正す。

「雑ですよ」

ユウは今一度、息を整える。

痺れた手を握り——開いた。

問題ない。

問題ないならば、行くしかない。

「もう一度」

再度、間合いを詰めた。

力押しから変えて、今度はサヨコの身体の中心を狙って突きを放つ。彼女は正眼の構え。どう動くか——相手の出方に合わせようとしたが、そんな考え方が甘いことを思い知らされた。

サヨコは動かない。

突きは、サヨコの構える木刀の剣先に触れた途端、氷に滑るかのように流された。力ではない。たしなめられるような、やわらかさ。何をされたのか理解できない混乱が、ユウの動きを鈍くした。その刹那で、サヨコが一步、前へ出る。

トン——と。

密着した体勢から、片手で胸を押された。

突き飛ばされたわけではない。だが、ふわりと面白いように身体が体重を忘れる。尻餅ついた瞬間に、音もなく突きつけられる木刀。ため息をつきながら見上げれば、サヨコはいつも通りに温和な笑みを浮かべていた。

まずは、完敗である。

「まだ」

一声。

ユウは立ち上がる。

「いい心意気です」

今度は打ち合いになった。

基本的には、ユウが攻め手だ。サヨコは一步も動かず、木刀の動きだけで攻撃を打ち払った。踏み込む音、木刀の打ち合わさる硬質な音。一定のリズムで絶え間なく攻め続けるが、鉄壁の防御は、さながら岩に向けて木刀を振るっているような気分させた。

気を抜いた瞬間。

眼前に、剣先。

首をひねり、避けた。乱れた所に、上段から追撃が来る。構えて受ける。衝撃はほとんどない。サヨコが本気で打ち降ろしていれば、ユウの木刀など簡単に弾き飛ばされているだろう。手加減の一撃だ——手加減されても文句は云えない力の差がある。

ため息——を、つく暇もない。

試されるような攻撃が、二度、三度と連続した。

身体の動きで避けて、木刀で打ち払う。ユウは全てを凌ぎきる。四度。そこで逆に踏み込んだ。相手の木刀を押さえ込むようにして、ほぼ密着する位置まで詰めよった。先程のお返しである。突き飛ばすように、片手を伸ばした。

タイミングや位置取りから見ても、完璧だったはずだ。

誤算があるとすれば、彼女の實力だ。

ユウの手は空を切った。

そして、背後から木刀を突きつけられた。

「私の勝ちですが、最後の一瞬はお見事でした」

「いや、全然、褒められている気がします」

ため息どころではなかった。

ユウは両手を挙げながら、なかば愚痴のようにもらす。

「目の前から消えるなんて……もう少し、人間らしい動きをしてください」

「この程度、まだまだ序の口ですよ」

冗談でも見栄でもないのだろう。

サヨコが何をしたかと云えば、単純だ。ただ攻撃を避けて、後ろへ回り込んだ。それを、ユウが片手を突き出すよりも速く、やって見せただけだ。

振り返れば、サヨコは困ったように微笑んでいた。

「最後は、ほんの少しだけ、本気を出してしまいました」

「本当ですか？」

意外な結果に、ユウは目を丸くする。

彼女が云う所の本気とは——つまり、今の世で《禁止技術》と呼ばれる、常識外の力を使ったという事だ。世界中を見渡しても、その使い手はごく少数しか存在しない。その中でも《魔法使い》と呼ばれるような人間達は、普通の者がどれだけ束になっても勝てない程の力を有している。

「ユウ様が成長されたことは、大変喜ばしく思います。しかし、不本意と云えば、不本意かもしれません。いえ、この場合は私自身の未熟さが問題ですね。妹であれば、むしろ堂々と受け止めていたのでしょうか……」

珍しく齒切れの悪い物云いに、ユウは首を傾げる。

さらに珍しいことに、サヨコが意地悪な笑みを浮かべた。

「胸をさわられそうになったもので、思わず、本気で逃げてしまいました」

そんなつもりではなかった——と、ユウが主張すれば、「そうですね」と笑われて、おまけに頭まで撫でられてしまった。もはや何

も云えなかった。ユウが小学生の頃、サヨコは高校生だった。子ども扱いされるのはあたり前の話で、染みついた関係性は簡単には覆せない。

昼を過ぎていたので、食事をするようになった。

ユウは一度、与えられている自室に戻った。他人の家に部屋があるというのも変な話だが、そこは規格外の伊吹家である。幼少時から頻繁に世話になってきたユウには、ごく当然のように専用の部屋が与えられていた。

ゲストルーム自体が豊富に用意されているが、ユウの部屋は他と異なり、内装から備え付けの備品に至るまで全て特別に手配されたものだ。末恐ろしくなるような歓迎ぶりだが、これは屋敷を預るメイド達の悪癖が原因だった。

屋敷を預るメイド達と云っても、実は三人だけだ。
すなわち、三千字三姉妹。

長女のサヨコ。

次女のナナメ。

三女のタテカナ。

容姿も性格もちぐはぐの三姉妹は、そのありあまる能力を駆使して、たった三人で屋敷に関わる全てを管理している。掃除や料理、洗濯と云った日々の家事から庭木の手入れ、屋敷の修繕、来客の対応、当主の秘書——それらに加えて、かつては姉妹の教育係も務めていた。

彼女らは多才であるが、同時に多忙である。

ユウが聞いた所では、長期の休みなど一年に一回あれば良い方だと云う。

そんなメイド姉妹の悪癖——あらゆる場面で競争を行うこと。

ユウの部屋は、まさにそんな悪癖による産物だ。

たとえば、サヨコが部屋に花を飾れば、ナナメは絵を飾る。ナナメが家具を見繕えば、タテカナは壁紙を張り替える。タテカナがベランダを作り替えれば、サヨコはそこから見える庭を模様替えする。日々、それぞれが負けじと工夫を凝らすものだから、部屋の豪華さは成層圏を突き抜ける勢いで高まっていく。

この三日間、幸いにして、次女のナナメと三女のタテカナは不在だった。

先日、新聞やテレビで報道されていたヨーロッパの列車テロ事件。世界的に報道される規模の事件ならば、伊吹家の中でも当主直属の三姉妹が動かないわけにはいかないらしい。事件の背後に伊吹家と敵対する悪の秘密結社の存在が見え隠れするという事で、なおさらだった。

諸外国との調整に飛び回る当主にはタテカナが同行し、事件の起こった現場にはナナメが向かっている。現在、広大な屋敷には、留守を任されたサヨコが一人だけだ。三人でも仕事のキャパシティは超えているだろう所、どのように対処しているのか、まるで不明である。

「それで、サヨコさん」

昼食の後。

食堂の長大なテーブルに着きながら、ユウはそばへ控えていたサヨコへ声をかける。

「いい加減、そろそろ……」

「ええ、わかっております」

サヨコも三日という時間を、そろそろ潮時と考えていたようだ。

「いつまでもお引き留めしておくわけにもいきません。この三日間、行動を制限してしまい、大変申し訳ございませんでした。ただし、お嬢様が行方不明になられたことで、私がユウ様の身も案じていたことだけは信じてほしいと思います。もちろん、わがままな言い分ですけれど……」

ユウはうなずき、率直に尋ねた。

「カナは見つかっただんですか？」

「正直、申し上げにくい所です」

しかし、言葉の内容と裏腹に、サヨコは断言するような調子で続ける。

「お嬢様の動向を完全につかんでいるわけではありません。ただし、この町から出ていないことは確かです。お嬢様の姿は、この町に張り巡らされたネットワークの網に、常にはつきりと捉えられております。問題は神出鬼没ということですね。目的も何もなく、まるで迷っているようにも思えます。唐突に消えたかと思えば、唐突にあらわれる。透明の風船を追いかけるようなものです。見えない上に、その行き先は風の向くままに予想できません」

カナらしい——と云えば、カナらしいのだろうか。

ユウには、わからない。

洞窟の中から姿を消してしまった瞬間から、彼女は、ユウにとって理解できない者になってしまった。何を考えているのか、何をしたいのか。逃げられるわけもないこの町で、行き場もなく、さまようだけならば、牢獄にいる時と何も変わらない。

籠の中の鳥。

彼女は立場を理解しているからこそ、大人しく地下に籠っていたのだと思っていた。それならば、今の逃走劇は何なのか。一時の自由が、本当の自由でないことぐらい、聡明な彼女はわかつているはずだ。

「来客のようですね」

会話を打ち切るように、サヨコが告げる。

取り出した携帯端末を確認して、「あら」という短い驚きの言葉——サヨコは珍しく顔をしかめた。「招かれざる客ですね」とつぶ

やいた後、ユウに向けて、端末に映し出された映像を示した。

門扉に設置された監視カメラの映像だった。

一人の若い男が映っている。

ユウもよく知っている男だった。

「一緒に行ってもいいですか？」

「仕方ありません。どう考えても伊吹家に用があるのではなく、ユウ様にご用なのでしょう。しかし、不審な動きを見せた時には、容赦はいたしません」

ひやりとする言葉を聞き流し、ユウはサヨコと連れ出って屋敷の外に出る。

ちよつとした散歩に等しい距離を歩いて、門扉にたどり着く。

鉄柵越しに、男と向かい合った。

「やあ、坊や。半年ぶりくらいかな。ひさしぶり」

くだけた調子で挨拶する男は、軽薄な笑みを浮かべていた。

真夏の盛りということもあり、派手な柄の半袖のシャツに膝丈までのショートパンツ。足は安っぽいゴムサンダル。金髪にサングラスという出で立ちも加わって、コンビ二にたむろしている不良学生と大差ない雰囲気だ。

ユウはため息をつく。

「灰道さん、もういい歳ですから、まともな定職についてスーツでも着てください。だんだんと冗談にならない年齢になってませんか？」

「いやいや、坊や。それでも仕事は真面目にやっているさ。まっとうではないかもしれないが、身の丈はわきまえているから安心だ」

安心だ——と云われても、ユウも本気で相手の心配をしているわけではない。

「灰道ツカサさんとお見受けしますが……」

サヨコが来客用の笑顔で、一步、ユウの前へ出た。ちょうど間に割って入るような形で、まるで男からユウを庇うような位置取りである。

実際、サヨコは穏和な姿勢であるが、これが妹のナナメあたりならば「この屋敷に姿を見せるなんて、殺してくださいと云っているようなものだね。お望み通り、刻んであげよう」とでも云いかねない。そして、タテカナならば、無言で刃物を投げるだろう。

「ええ、はい、人形使いの灰道ツカサです」

男は笑みをたやさない。

「その節は、伊吹家には大変なご迷惑をおかけしました。御家の寛大なご処置に、本当に感謝しております。それで——それはともかくとして、相馬君と二人きりで話したいことがあります、彼を小

「一時間程お貸しいただければありがたいんですが……」

言葉は丁寧だが、どこか慇懃無礼な態度だ。

そこで、ユウは直感する。

思わず、ため息。

彼は、サヨコのことを本当にただのお手伝いさんと勘違いしている。伊吹の屋敷は、外から眺めても規格外に大きい。召し抱える人間も多いだろう——などと、その内実を知らない者は考えがちだ。

屋敷で働く者が、三千字三姉妹だけとは考えもしない。

その間抜けな思い込みに、ユウは天を仰いだ。さらば、灰道ツカサ——そんな哀愁が胸中に去来する。自他共に認める三流の役者という看板に偽りなしだ。小物感を振りまくことに関して、彼の横に並び立つ者はいない。

「灰道さん。紹介しましょう」

ユウは親切心から云った。

「この人が、三千字サヨコです」

灰道ツカサは土下座した。

夏の太陽で熱せられたアスファルトに、彼は額をこすりつけていた。可能であれば、そのまま地中に埋まりたいとでも云わんばかりの勢いである。肩が小刻みに震えている。「お、あ、おお……」と、

言葉にならない言葉を吐く。ユウが今まで見てきた灰道ツカサの土下座の中でも、格別に情けない土下座だった。

——これ程の土下座を見るのは、いつ以来だろうか。

ユウの頭に、真紅の獅子の姿が浮かんだ。

「お、俺……いえ、私、卑しくも人形使いの通り名で呼ばれております、三流以下のちっぽけなプレーヤーでございます。このようなところで、三散斬の三千字様にお会いできるとは夢にも思わず、大変になめた口を……いや、失礼な態度を取ってしまいまして、その、どうか、お許しを……」

ここで次女のナナメならば男の頭をヒールで踏みつけるだろうし、三女のタテカナならば携帯でも取り出して動画を撮り始めるだろう。

そうした点では、ツカサにとって、相手が長女のサヨコだったのは幸いだ。

「私は伊吹家のメイドです。ただのメイドに過ぎません。私達をどのようにに侮蔑しようと気にすることはありません。少なくとも、あなたの私に対する態度で、許す、許さないというような判断を下すことはありません」

サヨコは、ツカサに顔を上げるように云った。

そして、驚くべきことに、そのまま鉄門を開いて屋敷の敷地へ招き入れた。

「ユウ様へお話があると仰いましたね。このタイミングで、あなたのような者があらわれる。それ事態が実に興味深いことです。どう

ぞ、存分にユウ様とお話ください。ただし、私も同席させていただきます」

云いながら、サヨコは門を閉ざした。

鉄壁の門を背にして、彼女は云う。

「それと、もう一度、はっきりと云っておきましょう。私のことは好きなだけ侮辱し、蔑み、罵ってください。私は一向に構いません。気にしません。ただし、ユウ様に関わること、お嬢様に関わること……これは許しません」

だから――。

「あなたは、もしかして、過去にお二人を誘拐したことを、終わったものと思っていませんか。優しいユウ様とお嬢様に許されて、その償いを果たして、それで罪の清算は済んだと思っておりますか。もしそうならば、私は、あなたを侮辱し、蔑み、罵りましょう。覚えておきなさい。私はこう云っているのです」

春のような、穏やかな笑みだった。

桜舞い散るような優美さで、サヨコは云った。

「怯えなさい。私は、あなたを、許さない」

借りてきた猫の方が、まだ堂々としている。

応接間のソファ―に腰掛けながら、ツカサは身を縮ませていた。お茶を出すサヨコの動作ひとつにも、身体を震わせた。視線をきよるきよると動かしながら、それでもどうにか気を取り直した様子で、彼はようやく必要なことを語りはじめた。

「実は、先程、こちらのお嬢様にお会いしまして……」

第6話「そして少女誘う時に」(1)

正午を迎える少し前のこと。

野暮用で青鳥町にやって来た灰道ツカサは、ランチタイムに込み合う前に食事を済ませようと繁華街を歩いていて、いつも学生で賑わう大通りも、夏休みのため制服姿はほとんど見あたらない。

そのため、少女の姿はとても目立っていた。

彼女は中学の制服に身を包んでいた。

真紅の髪。

空きテナントのシャッターにもたれかかり、彼女は腕を組んでいた。ぱつかりと空虚な黒目が、まるで値踏みするように道行く人々を眺めている。

「やあ、お兄さん」

ツカサが思わず姿勢を正したのに対し、彼女は学校の友達にでも声かけるような気安さで手を振った。

「ひさしぶりだね。僕に会えなくて、寂しくなかったかな。そうであつたなら、ごめんと謝るしかないのだけど、僕とお兄さんの仲だから笑って許してくれると信じているよ。そんな仲の良さに頼ってひとつ、お願いされてくれないかな？」

どんな風に云われようと、ツカサが断れるはずがなかった。

この場で裸になって犬のように駆け回れと命令されたとしても、ツカサは黙って従っただろう。それぐらいの覚悟があったため、少女の願いを聞いて拍子抜けした。旧知の少年にメッセージを届ける程度、朝飯前だ。

誤算だったのは、彼が自宅におらず、伊吹家にいたことだ。

灰道ツカサと伊吹家の間で、過去にあった事件の折り合いはついている。

贖罪のために払った犠牲は相当のものが、ツカサ自身も、それだけのことをしてしまったという自責の念があった。善良な人間を気取るわけではなかったが、子供を誘拐するという行為は、確かに信念に反するものではあった。

だから、誘拐事件の後、伊吹家の命令によって死ぬことを前提としたような実験に何度つき合わされたとしても、それを恨む道理はなかった。

伊吹家としても、十分な見返りを手にしたと判断したのだろう――灰道ツカサは、奇跡的に生き延びた。伊吹家に許されるという奇跡を達した男として、実はその道では名が売れてしまった程だ。

結局、思案したものの、ツカサは伊吹家を訪れた。

打算もあった。所詮はいきなり訪れた珍客である。大物が出てくるわけがないと踏んだ。伊吹家の主要な関係者に目をつけられる前に、素早く用事を済ませてしまえばいいと軽く考えていた。

結果、土下座する羽目になった。

「まあ、そうした経緯で、俺は本当にただの使い走りだ。町中でお嬢ちゃん……伊吹家のお嬢様に出会ったのも偶然だしな。だから、俺にできることは、本題のメッセージを伝えることだけだ。彼女からのメッセージを一字一句違えることなく、そのまま伝えるぜ」

灰道ツカサは云う。

伊吹カナ、曰く――。

「今晚十二時、七守学園のグラウンドで待つ」

第6話「そして少女誘う時に」(2)

「灰道様、あなたの言葉に信憑性はありません。私は伊吹家の者として、ユウ様をお守りする義務があります。あなたの云う通り、所定の時間に所定の場所へおもむいた結果、そこで卑劣な罠が待ち受けている可能性は否定できません。あなたには前科すらございます。しかし、残念ながら、お嬢様と町中で偶然に出会い、伝言を頼まれたというお話は真実のようですね。お嬢様がそう仰ったのであれば、ユウ様は出かけられた方がいいでしょう。その際のリスクを最小限に抑えるためにも、灰道様をこのまま帰すわけにはいきません」

灰道ツカサは伊吹家に拘束された。

彼は、絞め殺される鶏のような顔をしていた。

深夜を間近にして、サヨコとツカサの二人を連れ立って屋敷を出發する。電灯にぼんやりと照らされる住宅街の道を歩きながら、あらためて二人を見た。そして、関係のない第三者から見られた場合、どのような集団に思われるのだろうと想像した。

ただの中学生男子。

誰もが振り返るような美人メイド。

今にも死にそうな顔色の派手な金髪男。

普段、外出する時は私服に着替えるサヨコだが、今日は深夜で人氣も少ないためか、メイド服のままだった。さらに云えば、その手に非常に物騒なものを持って来ていた。

「あの、サヨコさん、その日本刀は……」

「護身用です」

刀を抱きしめながら、彼女は有無を云わせない笑顔を浮かべた。

「俺もずいぶん危険な橋を渡ってきたけれど、これで本当にこりたね」

歩き始めてしばらく、ユウの横に並んだツカサがつぶやく。

「伊吹家には金輪際関わらないようにするさ。俺はもう、きな臭い世界からは手を引くことにするよ。この一件が済んだら、坊やの前にも二度と姿を見せないと誓おう」

「灰道さん、いつも同じことを云っているの自覚してください。俺達が一番始めに出会った誘拐事件の時も、カナに脅されて涙目になりながら『もう二度と君達の前には姿を見せません』と誓った一週間後に、俺と近所のスーパーで会ったじゃないですか」

「あれ、マジで焦ったよ。おまけに君のお母さんに『ユウちゃんのお友達ですか。この子をよろしく願いますね。ところで、どこでお知り合いに?』なんて云われて、『いや、実は先日、お宅の息子さんを誘拐させていただきまして……』とは云えないもんな」

「そもそも俺と灰道さんは友達ですらないでしょう。出会いは最悪だし、その後も数ヶ月に一度、仕事からみで会う程度の関係ですよ」

「俺は、坊やのこと、友達と思ってる。何度も死線を越えた戦友だと思ってるさ」

「ええ、そうした台詞を真顔で云うのは面白い冗談ですが、時と場合を考えないと……」

ユウは背後を気にする。

「ほら、鐸鳴りの音が……」

ツカサが小さく悲鳴をあげた。

沈黙が数秒。

刀をおさめる音。

「あのさ、坊や」

さらに小声になって、蚊の鳴くような声で、ツカサが云う。

「悪名高き三散斬の三千字とどういう関係なんだ。ずいぶんと過保護にされてるみたいだけど、ありえないぜ。伊吹家の番人であり、番犬の三千字姉妹は、視界にうつるもの、手が届くもの、その全てを殺し尽くす化け物という評判だ。どうやって懐柔した？」

「いや、それは評判の方が間違っているでしょう。サヨコさんは優しい人ですよ」

ユウはごく普通に云ったが、ツカサは絶句した。

「三散斬の三千字を優しいと云う人間なんて、初めて見たよ」

ツカサは感嘆するようにつぶやく。

「昔から、サヨコさんには姉弟のように可愛がってもらっているだけですよ。実際、面倒見がいい人ですから、勉強教えてもらったり、遊びに付き合ってもらったり、その程度の関係ですよ」

「いやはや、無知って怖いな。君はどれだけ恐ろしい事を云っているか、自覚がないらしい。たとえるならば、電気椅子やギロチンを指さして、『あれが姉です』と真顔で云うぐらい頭がおかしい」

「それは酷い」

「そうだよ。酷い」

どんな風に云われようと、ユウの見方が変わることはない。

サヨコがただ者でないことぐらい、昔から知っている。ユウの隣には、それ以上に途方もない存在がいた。それだけの話だ。そして、それを知らない灰道ツカサではない。結局、彼はあきらめたように笑った。

「坊やとは、なんだかんだ長い付き合いになるけれど、実は詳しいことは何も知らないことに気づかされるね。たまに会っても、ほとんど仕事がらみのドライな会話しかしてこなかったもんな」

「単に、興味がなかっただけでしょ」

「まあ、その通りだ。坊やも、俺のことは何も知らないはずだろ」

「単に、興味がなかっただけです」

八月四日、午後十一時四十五分。

会話しながら歩いてきたが、定められた時間よりも早く着いた。

ユウは一度、深呼吸した。

「サヨコさん」

グラウンドに踏み入る前に、ひとつだけ頼みごとをする。

「少しだけ、先に話をさせてくれませんか。あいつにも、云いたい事を云わせてやるぐらいの時間はあってもいいと思うんです」

ユウはわかっている。どのような話になったとしても、カナは伊吹家に連れ戻される。最初から長く逃げ回れるはずがなかった。遅かれ早かれ、カナは捕まるだろう。彼女がどれだけ優秀でも、伊吹家の戦力と情報網に対抗するには、一人では不可能だ。

だから、ユウはこの場にサヨコが来ることを拒まなかった。

長く逃げ回れば、それだけ立場を危うくする。

「結構です。ユウ様のお望みの通りに。……それと、灰道様」

サヨコが横目でツカサを見る。

「あなたも、お静かにお願いしますね」

余計な口出し無用——ツカサは従順にうなずいていた。

七守学園の校門を抜けて、グラウンドへ足を踏み入れる。

見れば、月。

雲ひとつない、一枚岩のような夜。

灯りの消えた校舎が影となり、山の連なりのように見える。広々としたグラウンドに、熱帯夜の蒸し暑さが澱のように溜まっている。息苦しい。立ち止まるサヨコとツカサを残して、ユウは前へ進み出た。闇夜から血が流れ落ちるように、浮き立った赤色が目についた。

真紅の髪。

真紅の獅子が、そこにいた。

第6話「そして少女誘う時に」(3)

違和感が、ざわりと背中を撫でた。

そういえば、伊吹カナは夜が嫌いであつた——と、ユウは思い出す。極端な所、彼女は睡眠を必要としない。まだ幼い頃、大晦日にユウと伊吹姉妹の三人で夜通し起きていようとしたことがある。ユウとレナの二人は早々に寝ついてしまったが、カナは起きていた。そして、けろりとしたまま、そのまま一週間眠らなかつた。

——そうか、どうやら僕は人間ではないらしい。

——こんなあたり前のことに気づくのに、時間がかつたよ。

周囲に奇怪な目で見られながら、カナはいつでもへらへらと笑っていた。冗談であつたのか、本気であつたのか、ユウにはわからない。わからなくとも、自分がカナを見る目が変わらなければそれでいいと思つてきた。

眠ることすら、カナにはポーズに過ぎなかつた。眠りたい時に眠る。食べたい時に食べる。彼女にとって、それらは本当に言葉の通りだつた。眠りたくなければ、眠らない。食べたくなければ、食べない。カナにとって、生きるための営みは全て、おままごとのようなものだつた。

カナは夜が嫌いだつた。

カナは人が好きだつた。

皆が寝静まり、静寂に包まれる夜が嫌いだった。世界が死んでしまったようだ——などと、まるで世界が死んだ風景を見たことがあるかのように語った。一人で夜を過ごす時こそ自分が何者であるのか、考えてしまうのだ——などとも、儚げに。

伊吹カナは、空を見ていた。

彼女の姿を、ユウは一年ぶりに見たように感じた。

違和感が、ざわり、と。

「やあ」

泣いているようにも見えたが、そんなことはなかった。

三日の間に、どこで見つくるってきたのか、カナは七守学園中部の制服に身を包んでいた。校章の入った白いシャツにプリーツスカート、胸元には青色のスカーフ。

「ダウト」

「ん？」

「それ、一年生の制服だぞ。二年生になると、スカーフの色が黄色になる」

「ああ、そういえば、そうだったね。僕は一年生の一学期までしか学校に来ていなかったから忘れていたよ。それこそ二年生になって

からは、一度も学校に来ていないからね」

ささいなことだ。

会話の糸口を掴む、軽口に過ぎない。

しかし、なぜか、ユウは心がざわつくのを感じた。
胸にこみ上げてくるものがあり、目頭が熱くなる。

慌てて、誤魔化すように早口になった。

「簡単に云うなよ、引きこもり。お前がいなくなって、俺がどれだけ苦労させられているか、わかってるのか。反省でも謝罪でも、なんでもいいからさっさと済ませて、あの地下から出てこいよ。お前が帰ってくれば、全部が解決だ。全てが丸くおさまる。みんなが幸せだ。だって、伊吹カナはそういうやつだ。ヒーローだろう。お前がいれば、どんなに最悪の状況からでもハッピーエンドにたどり着ける。そうすれば、あいつも、レナだって……」

三日前の続き。

洞窟の中での問いかけに、答えを求める。

「……どうして、殺した？」

伊吹レナが帰ってくることは、ありえない。

彼女はもう、いないのだ。

彼女が殺したから、いない。

ユウはわかっている。ユウは理解しなければいけない。どうして殺したのか。どうして殺さなければいけなかったのか。問いかける意味など実はない。問いかける相手が違う。ユウが本当に問いかける相手は、自分自身だ。

——なぜ、自分は、彼女に殺させた？

吐き気がした。

「君は、いつだって、そうだね」

笑う。

カナは、迷子の子供をあやすように、優しく笑った。その笑みに、一年前の後悔がまるで蜃気楼のようにゆれる。言葉をなくしている、彼女は手を差し出した。この世界で何よりも信じられるものが、目の前に、再び――。

「僕は信じているよ。この世界に生まれてから、ずっと君を見てきた。君が戦える子だって知っている。勇気のある男の子だって知っている。どんなに辛いことがあって、痛くて、泣いたとしても、立ち上がることを知っている」

だから――。

「僕といっしょに行こう」

その続く一言に、ユウは知らずに一步を踏み出していた。

すがりつくためではない。助けを求めるわけではない。

それ以上の強い衝動で、彼女の手をつかもうとした。

ただ一言。

「伊吹カナはこう云った。

「レナを、助けに行こう」

第6話「そして少女誘う時に」(4)

「お嬢様」

鋭い一声に、ユウは現実に取り戻される。サヨコの手がこれ以上進むことを許さないように、行く手をさえぎっていた。その無言の背中が、何よりも雄弁に語っているように思えた。

——なにかおかしい。

サヨコの云いたい事を、ユウも自然に感じ取る。

「興が殺されるよ。無粋とも云える」

カナは表情を陰しくする。

「サヨコ、下がれ」

「いいえ、お嬢様。お嬢様の命令と云えども、聞けない言葉もあります。お忘れですか。私は、お嬢様の教育係でもあります。私はお嬢様の言葉に命を賭して従うと同時に、その言葉が間違っている時は、それを全力で正す役目も負っています」

「僕が、何か間違っていると云うのかな？」

「お願いします」

サヨコは訴えるように云う。

「お嬢様が屋敷に帰らず、こうして町をさまよっているのは、ご自身だけの問題です。この数日間の償いは、後々、お嬢様が果たすべきことです。しかし、ここでユウ様まで巻き込めば、取り返しのつかない事になります。どうか、お願いです。このまま屋敷へお戻りください。これ以上は奥様に隠し立てもできません。このことが奥様に知られれば、お嬢様の立場は、さらに……」

「サヨコは僕のことまで心配してくれているんだね。ありがとう。嬉しいよ。でも、その好意を裏切るように申し訳ないけれど、僕は帰らないよ。そして、ユウ君も連れていく。サヨコは何も隠さずに報告すればいい。そして、伊吹家の力を尽くして、僕を追いかけて捕まえればいい」

決別した。

どちらも感情的になっていくわけではない。冷静だ。それぞれが自分の理屈を述べて、考えを示した。その上で、意見はまったく噛み合わず、真っ向から物別れした。

カナは顔色ひとつ変えない。

サヨコは深く傷ついたように、顔を伏せた。

「こうなるような気はしていました。お嬢様が一日だけという約束を違えて姿を消したと聞いた時から、力づくで連れ帰るようなことになるのではないかと、ずっと危惧しておりました。私は、お嬢様にご自分の意志で屋敷へ戻っていただきたいと思っていました」

「あの牢獄へ戻って、何年になるかもわからない時間を、また一人で過ごせと云うのは酷くないかい？」

ユウは、サヨコを始めとしたメイドの姉妹が、顔には出さず、言葉にしなくとも、その胸の内では深く傷ついていることを知っていた。幼い頃から家族以上に長い時間、共に過ごしてきた少女を、主の命令とは云え、孤独に閉じこめていることに、感じるものがないわけではないのだ。

だから、サヨコは何も言い返さなかった。

その様子に、カナ自身、悲しそうに目を細めた。

「悪いとは思っているよ。だから、僕はあえて云っておくことにする。言葉にするまでもないことだけど、僕は、サヨコに伝えておきたいと思う。ありがとう。サヨコ、君は誰よりも僕のことを心配してくれていたね。そんな君のことが、僕は大好きだ」

「もったいないお言葉です、お嬢様」

嬉しそうに微笑んで、悲しそうに目元をぬぐい——サヨコは、刀に手をかけた。

「私は、容赦しません。ご存じですね」

宣言するように告げれば、カナも顔色を変えた。

互いに、鬼のように笑い合う。

「君をねじ伏せて、僕は行くでしょう」

「いいえ、させません」

そんな風に、今まさに両者が動き出す瞬間だった。

予想外のものが、カナに襲いかかった。

人形。

「畜生。なせばなる」

灰道ツカサだった。

灰道ツカサは魔法使いである。

現在、国際魔法連合——IMUに承認されている魔法使いは、十九名。三度目の世界大戦に参戦した魔法使いは三十名を越えていたが、かの有名な9・11の悲劇の果てに、その全員が戦死したと云われている。たった一週間の大戦で、魔法使いの称号を持った人間は、その数を半数以下にまで減らしてしまった計算になる。

終戦後、十四年が経過している。

時代の流れ。

魔法使いは、緩やかに、滅びの道を歩んでいる。

二度目の世界大戦が魔法使いの有用性を示し、三度目の世界大戦

が魔法使いの危険性を明らかにした。ヨーロッパ連合では、それらは《禁止技術》として法の縛りを受けるまでになった。

軍事大国——すなわち、魔法大国の日本だけが、世界の流れに真つ向から対立している状態だ。IMUから称号を与えられた者の七割以上が日本人であるという事実——それが世界の情勢を端的にあらわしている。

魔法使いを有する先進国の内、唯一、日本だけが第三次世界大戦に参戦していない。各国の魔法使いが失われた一方で、日本だけは失うものがなかった。その結果、世界のパワーバランスは大きく狂うことになった。

科学兵器は製造すればいい。

魔法使いは製造できない。

魔法使いは才能である。

そして、異端であつた。

「人形使い」

サヨコが叫んだ。

人形——そんな風に形容される異形のもの。

ツカサの《魔法》で生み出された人形が多数、カナに襲いかかっていた。背後からの不意打ち、左右からの同時攻撃、包囲するようになぐるりと囲まれながら——カナはそれでも、苦にする様子なく、

涼しい顔で笑っていた。

だが、人形の数は多い。

光に集まる羽虫のように、押し潰すような動きで迫り来る。

【No.19】、灰道ツカサ。

人形の魔法使い——通称《人形使い》。

もつとも最近、IMUに魔法使いの称号とナンバーを授与された人間である。

「お兄さん、僕と遊ぶつもり？」

人形の攻撃を避けながら、カナは笑顔すら浮かべていた。

「三散斬よりは優しい魔法が使えるからね」

優しい魔法と自称した割には、異様な光景だった。

ツカサの魔法は、端的に表現するならば、物体に意志を与えるものだった。人でない無機物を、人に化かす力だ。より精巧で緻密な、人間に限りなく近い人形があれば、魔法の力はさらに高まるはずだ——《人形の魔法》について、ツカサ自身がそう語った事がある。

彼の言葉を信じるならば、今この時、その力は本来のものから程遠い所にあるだろう。あらかじめ用意した人形ではなく、ありあわせの物体で生み出した急造品——それは不出来なものであり、とても精巧で緻密とは云い難い。

人間の子供ほどの大きさの土と泥の塊。

鈍重な動きもふくめて、さながらゾンビのようだった。

ただし、その数は十体以上。

「俺の美的センスには反するけれど、こんな材料も何もない所ではこれが精一杯。ルーシーを連れて来ていれば、もっと素晴らしいものを見せてあげられたけれど、今日はこれで勘弁してくださいな、お嬢ちゃん」

口の端で笑みを浮かべて、おどけた調子で、ツカサは云う。

気取った風だが、云うだけのことはあった。ユウは心ひそかに感心していた。何もない所から人形を造り出し、使役する芸当は、かつてのツカサにはできなかったことだ。

「お嬢ちゃんには、みつともない所ばかり見られてきたからね。こらで少しぐらい、俺の力も味わってくればいいさ」

「うん、お兄さん、役者が上がったね」

カナは襲われている立場だと云うのに、嬉しそうに笑った。闇夜の中、異形の人形が群がり、その隙間を踊るように真紅の髪が流れる。人形は統率の取れた動きで、四方から同時に襲いかかる。

人形は勢いあまって、校舎のコンクリート壁をえぐり取っていた。

「灰道ツカサ、やめなさい」

サヨコが、ツカサへ向けて叫んだ。

その声に、彼は驚いたように身をすくませた。

「危険だから、やめなさいと云っています。お嬢様に怪我でもあったら……」

「いや、あの、お嬢ちゃんが怪我なんて……」

ツカサからすれば、善意のつもりか——戯れのようなものだったはずだ。

その心境を想像して、ユウはため息をついた。

出来ない人形。

鈍重で、コンクリートをえぐる程度の力しか持たない。

その程度ならば、伊吹カナには何でもない。彼女にとって、それでは脅威にもならないはずだ。しかし、はたして、そうだろうか。ユウは顔を伏せた。一年前ならば断言できた。一年前の彼女ならば、どれだけの化け物が相手でも――。

「心配いらない」

威勢の良い声。

ユウは思わず、顔をあげた。

「僕が、怪我なんてするわけがない」

瞬間、大気が震えた。

火薬の爆ぜたような音、波となって伝わる小さな衝撃。見やれば、人形がひとつ、その上半身を吹き飛ばされていた。壊れた人形はバランスを崩して、グラウンドに倒れる。その身体を形作っていた魔法が解けたのか、風化するように、ただの砂の塊へ変じた。

カナは得意げな顔だ。

鬱陶しい蠅でも払うように、人形を叩いた――彼女がした事はそれだけである。

「お兄さん、なかなか良かったよ」

カナは拍手する。その間も、仲間の一体を失った人形達は怯えることなく、たえまない攻撃を続けていたが、彼女は子供と鬼ごっこでもするような他愛なさで、鼻歌まじりに避けていく。

やがて足をとめて、飽いたように拍手もやめた。

「では、お礼をしようか」

カナは片手を突き出した。

「僕の本気を見せてあげよう」

ざわり、と。

彼女が、その名を呼んだ。

瞬間、光。

理解できないものが、目の前にあらわれた。思考も感情も、全てが真っ白になるまで吹き飛ばされてしまう。夜闇に雷鳴のような閃光。途方もない威圧感。ユウは何も云えなかった。心臓が、ただ早鐘を打っていた。

彼女の剣。

「カラドボルグ」

第6話「そして少女誘う時に」(5)

一撃だった。

その右手に一本の剣があらわれたと思った瞬間、周囲に殺到していた人形達へ向けて刃が走る。まるで子供がおもちゃで遊ぶように、彼女はぐるりと剣を薙いだ。

ユウは堪えようとした。だが、衝撃が全身を走り抜け、膝から崩れ落ちる。グラウンドの砂を掴み、歯を食いしばった。

灰道ツカサは悲鳴をあげた。一瞬の叫び——喉をしめあげられたようなうめき声と共に、彼の倒れる音が聞こえた。だが、ユウにも気を向けている余裕などない。

——なんだ、これは？

起き上がろうとするが、背中の上からプレス機でもかけられたように体が動かない。視線だけでも向けようとした。身体が震えている。どうにか首を動かして、前を向く。

「カナ、お前、なんで……」

ツカサの人形は、塵も残さず消失していた。

剣を振るった格好のまま、少女が一人、笑っている。

伊吹カナ。

真紅の獅子。

ユウは知らず知らず、泣いていた。

だから、その後に見えたものは幻だったかもしれない。視界は涙でかすみ、世界は全て、幻想に包まれていた。ユウは何も信じられない。自分の瞳も、自分の頭も——もはや、何も信じることができなかった。

カナの背後に、サヨコが出現する。

長い髪の流れる様、上着やスカートのはためき具合から、大きく回り込むように背後を取ったことがわかる。目にもとまらない速さ——その常識外の速さを証明するように、地に着いた足が、急ブレーキをかけた車輪のように凄まじい砂塵を巻き上げていた。

獣が二匹。

その体勢は、低く。肉食の獣が、飛びかかる寸前のように。腰元に、結わえた刀が一本。片手が、鞘に。片手が、刀に。今にも顎を開き、爪を剥き出すように。抜刀の構え。殺意。鬼気迫る、意思。殺す——という、そんな意思が。刃のように、向かう。殺す、殺す、殺す——と、少女へ。闇夜も裂くような、瞳。その瞳は。サヨコの瞳は。異様な光を、狂気のような光を浮かべて、それは——。

恐怖か。

後悔か。

虚無か。

それとも——。

悲鳴のような絶叫が、響いた。

皆殺しの魔法使い。

【No.5】、三千字サヨコ。

「サヨコ」

それでも、カナは笑う。

「ごめん」

幻覚だ。

涙に滲む景色が、偽りを見せた。

だから、涙を払うように目を閉ざした。瞳が正常な光景をうつし
てくれることを願った。それなのに、景色は何も変わらない。目を
開ければ、サヨコは倒れていた。カナは立っていた。

あっけなく、そんな結末。

「さすがに強い」

倒れたサヨコに向けて、カナは贅辞の言葉を送っていた。わずかな
微笑を浮かべていることを除けば、いつもと変わらない。ごく平
凡な一日がこれから始まる——そんな登校前の女子中学生のような
顔をしている。

「大丈夫だよ」

カナは云った。

そして、続ける。

「サヨコは、た少し気を失っているだけさ。怪我もないだろう。むしろ、怪我をしたのは僕の方だ。まいったね」

血が吹き出している。その片腕がなかった。

「ああ、ごめん」

カナは笑った。

「見苦しい姿だ。すぐに治すよ」

彼女はポケットから小銭でも落としたような調子で、周囲にきよるきよると視線を巡らせていた。やがて牽かれた犬の死体のように転がっている自身の左腕を見つけていた。

斬り落とされたその腕を、カナは特に興味もなさそうに眺めた後で、リフティングでもするように宙へ蹴り上げた。夜空を背景に、血飛沫が噴水のように舞う。くるくると回る腕が、まるで満月のように踊った。

ユウは耐えられず、目を閉ざした。

一秒。

二秒。

三秒。

目を開けば、カナがそこにいた。

何事もなかったかのように、怪我ひとつなく立っていた。

幻覚である。全ては、夢幻に過ぎない。

こんなにも馬鹿らしい事が現実にかかるわけがない。十四歳の少女に、魔法使いが二人、あっさりと倒されるような事はない。両断された腕が一瞬で元に戻るなど説明のつけようがない。

しかし。

ユウは、知っている。

この異常な風景を片づける台詞を知っている。

幼少字からずっと繰り返してきた魔法の言葉を、ユウは再び、繰り返す。

——伊吹カナだから。

——どんな異常も不思議も、当然に変わる。

「お待たせ」

まだ起き上がることもできないユウの目の前に、彼女はやって来る。どこからどう見ても、伊吹カナだった。真紅の髪、七守学園の制服、へらへらと笑う表情、空虚な瞳——正しく、一年前までの彼女だった。

「お前、どうして……?」

問いかけたユウに対して、彼女は笑うばかりだ。

何も云わない。

何も教えてくれない。

——ユウ君。

彼女は云った。

——君が、レナを助けて。

「カナ」

彼女の名を叫び、手を伸ばした。
しかし、届かなかった。

「ユウ君」

真紅の髪の少女は云う。

「君が、やるんだ」

その言葉と共に、闇が深くなった。

目の前が暗くなる。暗幕を頭から被ったように、突如、視界を失った。

目の前にいたはずの彼女の姿すら、まるで見えなくなった。

混乱した。

だが、恐怖はなかった。

ユウは知っていた。

懐かしさを感じる程に、この闇を知っていた。

「僕にできることはこの程度だ。この程度しか僕にはできない。ならば、この先は誰がやるのか——なんて、云うまでもないだろう」

——ここから先は、君の物語だ。

「さあ、いってらっしゃい」

ユウが完全に闇に吞まれる寸前。

最後の瞬間、伊吹カナはこう叫んだ。

「君が、世界の鍵だ」

第7話「幕間の時間」

少女は歩いていた。
街中だった。

彼女に目的はなく、目指すべき場所もなかった。
前に進むことで、何かが開けるだろうと思っていた。

——ここは何処だろう？

記憶がなかった。

見慣れない街並みを眺めながら、少女は考える。

——私は、誰だろう？

——私？

——僕？

少女は、ビルのショーウィンドウに映り込んだ自身を眺める。肩程まで伸びた黒髪。鼻筋が通っていて、目鼻立ちがはつきりしている。瞳が人形のように大きい。黒々した目玉が、色のついたガラス玉のように透んでいる。

——よかった。

——僕、かわいい。

自分の名前すらわからないのに、自分の容姿の美醜はわかる。そんな役立たずの頭を、少女は片手で叩いてみた。からっばのスイカのような音がした——気がした。そんな錯覚を覚えるということは、どうやら自分は頭が良くないらしい。

感情の流れ。

無意識の動作。

ささいなことが、少女にとってはヒントだ。

数万ピースのパズル——それも真っ白で絵柄のないジグソーパズルを与えられて、ただ途方に暮れていた所、よくよく目を凝らしてみれば、ピースにはうっすらと染みのような絵柄があった——そんな気分。

結局、砂漠に落とした米粒を拾い集めていくような作業だ。

「誰かいませんか？」

大きな街だ。

自分の住んでいた家や町並みすら思い出せない。だから、比較することなどできない。それでも、無意識の感覚は、目の前に広がる街を捉えて、大きいと訴えかけてくる。

立ち並ぶビル、無数の交差点。

いたる所に、蟻の行列のように並んだ車。

「誰もいないわけがない——と、僕は無意識にそう思っけれど、目の前に広がる光景は非情にも、ありのままの現実を突きつける」

これだけの規模の街に、一人の姿も見当たらないということがあり得るだろうか。古いビルや汚れた建物、閉鎖されたテナントも見受けられるが、多くは人が生活していた様子を残している。

放置されている車をのぞき込んだりしてみるも、やはり人はいない。いや、少女は薄々感じていたが、この街には人はおるか、生き物の姿が見あたらない。犬や猫どころか、害虫の一匹すらもいなかった。

異常事態。

そんな風に、少女は考える。

「うん。やっぱり、これは、ありえない」

だが、そう思った所で、現実是不変ならない。自分の目で見ているものを、信じていないわけにはいかない。疑うべきは自分ではないだろうか。記憶を失った不確かな頭、その感覚をどれだけ信じられたものか。

——間違っているのは自分ではないか。

忘れているだけで、実は、巨大な街から人が綺麗さっぱりいなくなるような現象、日常茶飯事に起きていることなのかもしれない。これで騒ぎ立てれば、むしろ何を当たり前のことで——などと、《彼》に冷めた目で見られるかもしれない。

少女はため息をついた。

瞬間、何かを思い出すような、不思議な感覚を覚えた。

——彼？

——誰のこと？

記憶を失った頭は、氷の張った真冬の湖のようなものだ。今、その湖に、小さな亀裂が入ったように思えた。何か。何か。何か。何か。引つ掛かる。形にならない、生ぬるい水のような想いが、記憶の奥底から染み出してくる。

だが、少女が自分の心と静かに向かい合っている時間はなかった。足を止めて、前を向く。濃密な気配を感じていた。何かがいる、と直感する。少女の意識は、急速に目の前のものに吸い寄せられていった。

——人間だ。

しかし、少女はすぐに考え直す。

——人間なのだろうか。

「こんばんは」

世界には薄闇が立ちこめていた。

だから、そんな風に時候の挨拶をした。

「はじめまして」

相手は、そんな風に返してきた。

女性だった。

女性にしては、随分と背が高い。少女からすれば、大きく見上げる程だ。しかし、その体格は、よくわからない。全身を真っ黒の一枚布で覆っている。ローブとも呼べばいいのだろうか。ゆったりとしたその布が、指先や足先までも隠している。頭にもフードのようになんてあり、薄闇の時間も相まって、はつきりとその顔立ちを見て取るのは難しい。だが、整った人だとは伺い知れた。彫刻のようで、気品があった。

「魔女みたいですね？」

「うん、魔女なんだ」

よくよく見れば、魔女と自称した女性は、歩いてすらいらない。ローブが足までも覆っているが、その布すら、地面には着いていない。浮いている。

背が高いと感じたのは、錯覚だった。

浮いているのだから、背の高さは推測できない。

「ここは散歩するには向かない場所だ。君みたいな女の子が来るような場所でもない。どうして迷い込んでしまったのかな。私にもわからないことを持ち込むなんて、君は何者なんだろうね」

「それは、僕も教えてほしい」

少女は、魔女へ事情を語って聞かせた。

とはいえ、語るべき内容は多くない。滔々と自分語りをしようと思っても、今、少女には語るべき《自分》がない。自分が何者かわからないこと、ここが何処なのかわからないこと、なぜ記憶を失っているのか、なぜこんな場所にいるのか——何もわからないということ、少女は端的に説明した。

「なるほど」

魔女はうなずいた。

その様が堂々としていたものだから、少女はわずかに期待を寄せた。

この状況に対して、ひとつの答えを示してくれるのではないだろうか。

しかし、予想は裏切られた。

「なるほど。さっぱり、わからない」

思わず、「えー」と非難する声を上げてしまった少女である。

「そんな風に云われても、私からすれば、鍵にかけてある家に、いきなり迷子が入って来たようなものなんだ。おまけに、その迷子は記憶も何もないと主張する。困ったね。放り出すには寝ざめが悪いし、積極的に助けてあげる義理もない」

「人間、損得勘定だけでなく、自分の心のために生きるべきですよ。情けは人のためならず。ここで僕に助力を与えることは、今後のあなたの人生を実り多きものとするでしょう」

「セールストークとしては面白いけれど、残念ながら、私、もうとつくの昔に人間はやめているからね。魔女としての生き様に、実りが必要かどうか、悩ましい所だ」

魔女はフードの中で首を傾げているようだった。

少女は手をぶらぶらと揺らしながら、彼女の次の言葉を待った。魔女が何を云おうと、少女は何も気にしない。さようなら——と、彼女がそう告げて去って行ったとしても、それは、そういう運命で、巡り合わせだったということに過ぎない。

「まあ、いいか」

特に期待もしていなかった少女だが、魔女は気まぐれを起こしたようで、手招きしながら先を進みだした。小走りにその後を追いなから、今度は少女が首を傾げた。

「そもそも、こんな場所に記憶喪失でやってきた君が、ただの女の子であるはずがないだろうさ。もしかしたら、世界の運命を変えるような子かもしれない。うん、馬鹿らしい話だ」

魔女は途中で本屋に寄った。ぐるりと店内を一周して、三冊程の本を選び出すと、少女に持つように云った。「読める？」と尋ねられて、少女は「はい」と答えた。「君が教養のある子で助かったよ」と、魔女は少し嬉しそうだった。

「とりあえず、私の家まで行こうか。君にちょっとしたプレゼントをあげよう。その代わり、私のお願い事をひとつ聞いてもらいたい。記憶がないのだから、どうせすることもないだろう。自分と世界を

知るためにも、とりあえず当面の目標ぐらいあっていいだろうさ」

少女は、魔女の言葉を受けて考える。

魔女に見返りを求められる。

それは、童話や物語の類を思い出してみても、あまり良いエンディングが迎えられる展開ではない。少々の警戒心を抱きつつも、少女はあっけらかんと訊いてみる。

「僕の魂でも奪うつつもり？」

「魂を定義づける研究が終わっていれば、それも良かったね」

少女は手に持っている本の分厚さを確かめる。背後から思いつきり頭に打ち付けてやれば、昏倒させられるだろうか――などと。

「冗談さ。命や魂をちょうだいなんて云わないよ。そんなに、大したお願いではない。君には英雄ごっこを頼みたい」

魔女は云った。

「君には、お姫様を守ってもらいたい」

第8話「常闇の世界の姫」(1)

名前について、想うこと。

ルーティア・フェイメオール・ディルム。

ミドルネームのフェイメオールは、母の姓である。産後に体を壊し、物心つく前に死別してしまった母について、ルーティアはその温もりを知らず、その優しさを知らず、その愛を知らなかった。ただひとつ知っていることと云えば、その強さぐらいである。

強い人。

セシリアを知る人々は、謀るように口を揃えて、彼女をそんな風に評した。確かに、彼女は悪政を敷いた大国を滅ぼした英雄であり、三大国のひとつ、バースタイム建国の礎を築いた偉人でもある。成し遂げた功績を考えれば、その強さの程は伺い知れる。

しかし、ルーティアがそんな歴史的事実から母のことを理解しようとする、誰もが皆、困ったように苦笑するのだ。わかっていない——という視線ならば、気にならない。わかるはずがない——という、そんな視線だけは、どうしても好きになれなかった。

——武勇も、確かにそうだ。

——しかし、そうした意味とは別に、彼女は強い人だった。

はつきりとそう述べたのは、ルーティアの父である。

——セシリアは、勝利の女神を体言するような存在だったとも云える。呆れるか、ルーティア。だが、彼女と共にあった者達は、誰も負けることを恐れなかった。死ぬことすら恐れなかった。もちろん、彼女とて万能の神ではない。窮地に立つことも、生死の境をさまよう大怪我を負うこともあっただろう。だが、それでも、彼女は恐れなかった。自分が負けるなど一片たりとも思わなかった。彼女は神すらも信じず、己だけを疑いなく信じた。彼女のそんな気質が、私には羨ましかった。

常に濁った、胡乱な目をしている父が、彼女を語るその一瞬だけ、

常にならない光を瞳にたたえるのを見た。父にそんな眼をさせる――そのたった一つの事実が、ルーティアに何よりも母の強さを印象づけた。

父、ウィルヘルト・デイルムは、三大国アーカスの国王である。母、セシリア・フェイメオールは、今は亡き大国ジンドの出身であり、生家は大陸全土に拠点を持つ大商家であった。

富裕の出自ではあるが、王族と商家の人間など、本来ならば身分違いも甚だしい。その婚姻について当時は大論争になったと聞き及ぶが、波乱の末、セシリアはアーカスの正王妃の座におさまった。

魔窟とも呼ばれる王宮で、後ろ盾のない母がどのように振る舞ったか、ルーティアは知らない。公的な書物に記載されることのない日常――母の生きた感触というものを、ルーティアは一生知ることなく終わるのだろう。

そんな思い出のひとつもない母を、ルーティアが常に意識してきたのは、自らの容姿のせいもあるだろう。城の大階段の踊り場には、今は亡き王妃の肖像画が飾られている。そこを通りかかる時は、いつでも足を止めてしまう。

まるで鏡を見ているようだった。

肖像画の中で、セシリア・フェイメオールは、剣を携えていた。服装こそ王妃にふさわしい豪奢なドレスだが、抜き身の剣を、これこそ我が一部と挑発的に構える姿は、戦場で常に先頭に立ち続けたという彼女の生き方を証明するようだった。

武勇の数々を思えば、彼女が女として生まれたのは悲劇と思うべきだろうか。それとも、大陸一と謳われた美しさを、やはり褒めたたえるべきなのだろうか。

淡いブロンドの髪。エメラルドのような深緑の瞳。手にした長剣と比較して、ごく平均的な身長と体格は、むしろ小柄にすら見える。微笑んだその顔だけ切り出せば、純真無垢な少女と偽れる。

ルーティアは、彼女の生き写しと云われる。

顔立ちも体格も、瞳や髪の色までも、父親から受け継いだものは

皆無と云つてもよかつた。セシリアが存命だったならば、双子と称しても信憑性を得られたかもしれない。

それほどによく似ていた。

だから、常に比較されてきた。

歴史を紐解いても、それ以上を見つけることが難しい程の傑物である彼女と比較され、まったく憂鬱にならないと云えば嘘になる。

ルーティアは自身の才覚も努力も認め、誇っていたが、それが母を越える程のものかと問われれば、首を傾げるしかない。

母を愛しているか、と問われても、よくわからない。

母を憎んでいるか、と問われても、よくわからない。

彼女は遠い人であつた。それでいて、決して切り離せない人だつた。セシリア・フェイメオールという人は母であり、英雄だつた。ルーティアは、実は、母であり英雄である彼女のことが、よくわからない。

それでも、ひとつだけわかつていることがある。

——どうやら自分は一生、母の影と戦う運命にあるようだ。

それを悟った時、はじめて、ルーティアはその名を口にする勇氣を持った。フェイメオールという母の姓を、自らに刻む決意を持った。

ルーティア・フェイメオール・ディルム。

フェイメオールは母の姓である。

名前について、想うこと。

その名が、自分である。自分の中に、母がある。彼女は確かに存在し、ルーティアはそこから逃れる術を持たない。今はまだ理解できないその存在を、いつか愛し、或いは、いつか憎む日が来るかもしれない。

その時の覚悟のために、ルーティアは名乗る。

「ルーティア・フェイメオール・ディルム、参りました」

曇天のような瞳が、ルーティアを見た。

灰色がかつた男——父であり、国王でもあるその男に対して、ル

ルーティアはそんな印象を持つ。灰白色の瞳に、輝きの薄い銀髪。王としてはまだ若く、四十にも届かない程だと云うのに、瘦けた頬や顔色の悪さが、健全さから遠ざける。枯れ木のような風貌であるが、しかし、大国を背負う為政者としての風格について、そこに並ぶ程の役者を、ルーティアは見たことがない。

世界のパワーバランスを担う三つの大国、そのひとつであるアーカスの国王と云えば、それはすなわち、この世界で最大の権力者の一人と云うことになる。王の執務室に足を踏み入れ、その常人とは異なる気配を前に、緊張感を覚えない者はいないだろう。

ただし、私を除いて——と、ルーティアは思う。

「国王陛下のご用命と聞き及び、第一王女ルーティア・フェイメオル・デイルム、急ぎ馳せ参じました」

「かまわん、人払いはしている」

国王は虫でも払うように、片手を振った。

ルーティアは視線だけで部屋の中を眺め回し、国王の云う通り、この場に自分達以外の何者もないことを確かめた。慎重に猫のように足を踏みだし、王の執務機のすぐ目の前まで近づく。

「どうした、何を警戒している？」

怪訝な顔をする王に対して、ルーティアは怒った表情を作ってみた。

「お父様、お忘れかしら？」

机に両手をつき、ルーティアは勢いよく父の顔をのぞき込む。国王は表情こそ変えなかったが、ゆっくりと、椅子を後ろへ退いた。

「ああ、もちろん、覚えているさ」

たっぷりと間を持たせながら、王は答える。

「この前は、悪かったと云うべきだろう。だが、私の本意でなかったことは理解しているはずだ。ドナルド侯の子息をお前と密会させようなどと、この私が考えるはずがないだろう。馬鹿げた茶番を企てた者達には、厳しく処罰を与えておいた。お前も、これ以上の不満を云うべきでないことは、わかっているはずだ」

「ええ、もちろん、わかっています」

ルーティアはにっこり微笑んだ後、さらに顔を近づけた。

大きな執務机に、ほとんど身を乗り出すような格好だ。

「しかし、頭で理解することと、感情の整理をつけることは別です。私は、お父様をまだ許しておりません。部下に処罰を与えることはお父様の仕事でしょうが、では、そんな国王自身に罰を与えるのは誰の役目でしょうか。実の娘にしかできない役目だと、思いませんか？」

「ルーティア。お前は、本当に、セシリアの娘だな」

国王が重い肩をさらに落とすのを見て、ルーティアも矛先をおさめた。実は、言葉と裏腹に、ルーティアはそれほど怒っているわけではない。誰にも叱られることのない父に、時にそんな言葉を投げかけるのが、自分の役目の一つと心得ているだけだ。

「それで、このお互いに忙しい時期に、わざわざ二人きりの時間を設けるなんて、よっぽどのことなんでしょうね、お父様。ギニアス伯爵夫人の誘いを断って来たんですから、その埋め合わせになる位の話でないと、私、しばらく口を聞いてあげませんからね」

「お前の調子が良いことはもうよくわかったから、そこに座りなさい。落ち着いて話をしよう。大切な話だ」

促されて、ルーティアは傍らの椅子に腰掛ける。こんな時でも、スカートを押さえ、背筋を伸ばし、自然と顎を引く。幼少時から叩き込まれた礼儀作法や美の様式が、ごく当然のように滲み出る。

もつとも、こんな時でも——と評したが、向かい合う相手は国王なのだから、これ以上に所作に気を使う相手はいないとも云える。「時間も惜しいので端的に云うが、お前には使者としてバースタイルに行ってもらう」

ルーティアは驚いた。

珍しいことに、目を丸くしたその表情は、演技ではなかった。常ならば何か言葉を返すところ、思いつく台詞もなく、王の次の言葉を待つしかなかった。その反応を伺うようにしてから、王はゆっく

りと説明をはじめた。

「今更、お前に国同士の情勢を説明するまでもないだろう。目的は、国境沿いにある鉱脈の権利問題の解決だ。書状を運ぶ使者など、本来ならば誰でも事足りることだが、そこに敢えてお前を配する意味、わかるな？」

ルーティアは、今度は間髪入れずに答えた。

「サント地方の鉱脈管理は、バースタイム国内でも見解が統一されていない部分です。加えて、あの辺りはバースタイム政府からすれば辺境で、周辺小国家の貧民層からの流入者も多く、中央政府への反発感情も強い。大きな財源となる一方で、独立の危険性も高い地域です。つまり、アーカスからすれば、バースタイムに対して切り崩しやすい部分になるということです。書状の内容は、サント地方へのアーカスからの出資という所かしら……。当然、バースタイムは慇懃無礼に断るでしょうけれど、アーカスからすれば、これは手探りの一手目に過ぎない。そして、その使者として赴くのが建国の英雄セシリアの娘であるならば、その申し出を断った政府に対して、サント地方の住人はよりいっそうの反発を……」

「お前が聡明であることを、神に感謝するよ」

付け足すことは何もないと云うように、王は深く椅子にもたれかけた。そこに、ルーティアの返答を待つ様子はない。すなわち、ウィルヘルト・デイルムは、国王として今の命令を発したということだ。

国王直々の命令となれば、王女であるルーティアには、一言の反論も許されるものではない。

「お父様」

しかし、違和感を覚えて、ルーティアは口を開いた。

「お父様にしては、迂遠なやり方ではないですか？」

椅子に深くもたれかかったまま、王は、為政者としての濁った目で、ルーティアの方を見やった。迂闊な意見など、それだけで封じ込めてしまう眼力であるが、ルーティアは怯まなかった。

「もちろん、効果の程は認めます。こちらが失うものはなく、上手くいけば、大きな利益が得られる——お父様が好むやり方だから、これは良く理解できます。わからないのは、この程度のこと、私を担ぎ出すことです」

ルーティアはこれまで幾度も、国策の場に出ることを王へ希望してきた。幼少時より王城という蜘蛛の巣のような場所で、駆け引きを身体で覚えてきた。自惚れではなく、知識量でも一端の文官には劣らなかった。まだ十四歳の少女とは云え、セシリア・フェイメオルの娘という肩書もある。

自己を冷静に分析した時、あらゆる面で利用価値があることを、ルーティアは認めていた。商品としては一流である——それを国王へ訴え、国の最前線で力を試させて欲しいと希望してきた。

だが、これまで、国王はその願いを一蹴してきた。

——お前の力は認めている。実際、お前はうまくやるだろう。

国王はいつも云った。

——だが、お前は力ある者が抱え込む危険を、まだ知らない。政治の現場に出た時、お前が無能であれば問題ないのだ。王女の戯れとして、周囲が上手くあしらって終わりだ。だが、お前は有能だ。だから、お前は必ず敵を作る。そうした闘争の場に出るには、お前はまだ少し、甘い。

そうした王の言葉を、ルーティアは齒がゆく聞いていたものだ。

「お父様は、私を表舞台に立たせることを嫌っていました」

視線を向けるばかりで、無言のままである国王へ、ルーティアは矢継ぎ早に言葉を続けた。

「どうして急に、政治の道具として使う決心をしたのでしょうか。お父様のような方が、気まぐれで、何の理由もなく心変わりをすることはありません。私の力を認めていただけたならば幸いです、おそらくそうではないでしょう。そもそも、政治の仕事を与えること自体が、隠れ蓑のように思えます。私を喜ばせる餌を与えて、本質から目をそらさせるような……。そう、実際の目的は別にあるよ

うに思われます。これは、まるで……」

ルーティアは、視線をそらさない。

「私を、この国の外に追い出す口実を作りたいように思えます」

言い切つて、ルーティアは王の返答を待った。

しばらく沈黙した後で、王は深くため息をついた。

「訂正しよう。お前が聡明なことを、神に愚痴ろう」

王の気配が、若干、やわらぐ。

「本来であれば、お前には聞かせるつもりはなかった話だ。正直、お前の機嫌を損ねたくなかったからな。聞いても益のない話だが、それでも……ああ、いや、返事はいい。お前ならば、聞くと云うに決まっているのだから」

そうして、国王が明かした真実は、実にくだらないものだった。

「私に求婚？」

ルーティアは呆れて、しばらく空いた口が塞がらなかった。

アーカスの有力貴族の一人であるDonald侯の息子が、ルーティアに求愛しようとした事件は、つい先日のことである。

それ自体は事件と呼ぶ程でもない些細な出来事だったが、噂は尾鰭を付いて広まるものである。アーカスの第一王女に、有力貴族の一人が言い寄ったという話は、予想外の過激な顛末が加味されて、王族に取り入ろうとする諸侯に多大な衝撃を与えたということらしい。

今や、抱えきれない程の贈り物を持った国中の有力者とその子息達が、アーカスの王城を目指している。ルーティア王女の寵愛を、他の者に抜け駆けされて奪われては堪らないという訳だ。

「名のある有力者ばかりゆえ、むげに断るわけにもいかん。一人一人に時間をかけて対応し、何かと理由を付けて断つていかなければならないだろう。当然、お前はそれぞれの子息と会うことになるし、鳥肌の立つような愛の言葉を一日中聞き続けなければいけない。さて、どうする？」

「わかった。お父様、私、バースタイムに行くわ」

「わかってくれて嬉しい。正直、書状は建前だ」

王の台詞とは思えなかった。

ルーティアも、さすがに苦笑して尋ねる。

「お父様、いくらなんでも、私に甘過ぎないかしら。結局、これ、娘をどんな男にもくれてやりたくないから、仕事を言い訳にして、話も聞いてやらないということよね？」

「王というのは、国を想えば、私利私欲で動くことなど滅多にできるものではない。しかし、国を想わず、私利私欲で動いても、文句を云う者は誰もいない。ごく稀には、こんな事をしたとしても、神も文句は云うまいさ」

本当に、王にあるまじき言葉だ——と、ルーティアは思う。

「それに、お前自身が云ったことを思い出せ。バースタイムにお前が使者として赴くことは、確かに上手いやり方ではあるのだ」

つまり、国のことも想い、娘のことも想っている——と主張したらしい。ルーティアは納得して、うなずいた。この打算的な所が、実にいつもの父らしい。父らしく、王らしい。

「では、国王陛下」

ルーティアは立ち上がり、云った。

「出立の準備をいたします。一刻を争う大事な書状ですから、今日にもすぐに城を発ちたいと思います。決して、どこぞの馬の骨が駆けつける前に逃げようという訳ではございませんので、悪しからず」

「ああ、わかつている。気をつけて行ってきなさい。秘書官や護衛官など、必要な人選は済ましてある。お前の騎士については、自分で話をしなさい」

「ええ、わかっています」

挨拶も抜きに、ルーティアは早足に国王の執務室を出た。

第8話「常闇の世界の姫」(2)

ルーティアは今年で十四歳になった。

彼女が自らの騎士と定めたアルス・ランドルは、十七歳であり、ルーティアより三つ年上だ。身分からすれば、用事がある時は小間使いに伝令を頼み、アルスを自分の元に呼びつけるべきだろう。しかし、それが効率の悪いやり方であることは明らかであつたし、そもそも自分の性分をさらけ出せる数少ない相手に対しては、ルーティアは自由に振る舞うことに決めている。

そのため、王の執務室を出た後、小走りに兵舎へ急いだ。

ちようど、小夜の時間だつた。

世界が暗闇に染まり始める。

大陸の空には、昼の時間だけ《太陽》と呼ばれる光の珠が浮かぶ。その巨大な光珠を統括しているのは、国家の枠を越えて召集される十人の魔法使いである。大陸の日々の営みを支える彼らは、当然、並の人間とは格の違う魔力と技量を持っていたが、それでも人である以上、働き詰めというわけにもいかない。二時間の小夜、十時間の夜と呼ばれる時間の間だけ、彼らは太陽の活動を停止させて休息に入る。

小夜を迎えてすぐの時間は、一般の人々はまだ休憩に入らない。

そもそも小夜が始まつた直後は、やるべき仕事が増えすぎてくるものだ。今もまさに、照明係の女中達が、慌ただしく城内の灯りを点けて回っていた。

そんな女中達とすれ違う時、ルーティアは何食わぬ顔で淑やかな足取りに戻り、彼女らが会釈して通り過ぎるのを待った。王女らしく振る舞うことを、内心では非常に億劫に感じているが、国家の看板たる役目ゆえ、不作法で泥を塗る訳にはいかないのだ。

しかし、息抜きも確かに必要である。

ルーティアは途中、ほんの出来心で、傍らのランプに手をかざし

た。ガラス管の中にある石英に、掌からこぼした魔力を飴のように絡みつかせる。いたずらなので、光の色はピンクとした。照明係が気付いたら、さぞ驚くだろう。

城外に踏み出すと、世界が本来の姿を取り戻していた。

常闇の世界、シースーア。

本物の太陽、月や星の輝きを、ルーティアは神話の物語の中でしか知らない。ルーティアに限らず、シースーアに生きる人間は皆、暗闇の雲を天に仰ぐ。暗闇の雲の下に生まれ、暗闇の雲の下に死んでいく。青い空や夕焼けというものを、想像することはできても、実感することは難しい。

神様の世界は、魔法に頼らなくとも、《太陽》が自然とそこにあつたと云う。大陸は、星という大きな器に浮かぶひとつでしかなく、世界は、未知なる宇宙も含めて無限に存在している——神の言葉にある星や宇宙という概念を、ルーティアは難しいとさえ感じる。シースーアに生きる者にとって、世界の大きさとは、そのまま大陸の大きさである。海の果ても、空の果ても、存在しない。暗闇の雲が全て隔ててしまっているからだ。

シースーアは、暗闇の雲に包まれた世界だ。

シースーアは、常闇の世界である。

「アルス」

王城を出て、ぐるりと外庭を周り込むように移動して、ルーティアは兵舎の方へ赴いた。王女の騎士として任命されたアルスは、既にただの一兵卒ではない。だが、自らの技量を未熟と云ってはばかり、小夜を終えるまでの時間は、他の一般兵に混じって修練を積むのが日課だった。

アルスはちょうど試合をしていた。

ルーティアの呼び声に対しても、彼は耳を傾けることなく、目の前の相手に集中していた。そのため、ルーティアは足を止めて、しばらく待とうと考えた。思えば、無粋な声のかけ方をしたと反省すらしていたのだが、王女の登場とあっては、アルス以外の者が黙っ

ていなかった。

周囲に控えていた者達はもちろん、アルスと対峙していた男すら、剣を脇に置いて平伏した。ずらりと皆が頭を垂れる中で、アルスだけが一拍遅れて振り返り、ルーティアに向けて小さなため息をついた。

「ごめんなさい——と、ルーティアは目配せする。

その視線にうなずいた後、アルスも皆に倣って、その場に膝をついた。

「アルス・ランドル、我が騎士よ」

ルーティアは仰々しく告げた。

「国王陛下よりご命令を授かった件で、ここに参った。急ぎゆえに、使者を立てる時間すら惜しかった。そなたも忙しい身であろうが、我が騎士なれば、主の命を第一と心得えよ。このままついてまいれ」
それだけ告げると、返答も待たず、ルーティアは背を向けて歩き出した。

兵舎を離れ、王城の通用門が見える辺りまで来たところで、ルーティアは道を変えた。生まれた時から慣れ親しんだ城であるため、ルーティアは細部まで詳しい。人通りのまったくない場所についても熟知していた。

密談にはうつてつけの木陰まで赴いた所で、ようやく振り返る。

「バースタイムまで行くわよ」

「結論から述べられるのはよろしいですが、経過を説明していただかなくては、私には話が見えません」

黙ったまま、ぴたりと背後に付き従っていたアルスが、開口一番に文句を云った。

アルス・ランドル。

一見すると女性にも見える、容姿端麗な剣士だ。光の加減で、薄い青色にも見える銀髪を、女性と変わらぬ長さまで伸ばしている。その背はルーティアよりも頭ひとつ分ほど高く、体つきは華奢である。ただし、鍛錬を怠らない身体は思った以上の力を隠している。

横幅が倍はありそうな巨漢と対峙して、力比べで勝ってしまう程だ。アルスの淡い青の瞳が、冷やかにルーティアを見下ろしていた。もう片方の左目には、いつも通り、眼帯が巻かれている。

「小夜を終えるまでには、必要な荷造りを済ませて戻っていらつしやい」

国王から聞いたばかりの話を、ルーティアは手早くまとめてアルスへ説明した。そうした後、今のような命令を下した。

何とも云えない表情をしていたアルスは、実際、何も云わずに黙ってうなずいた。ただし、問いかけのような視線が明らかであったので、ルーティアは最後に確認する。

「もしかして、私に結婚しろとでも云うつもり？」

「慣習的に、王族の婚姻は早いものですから、単純に疑問に思っただけです。陛下と姫様の意見が一致して、こんなにも完璧に足並みそろえて婚姻から逃れようとすることが、多少不思議ではありません。それだけの名士が集まるならば、むしろ将来を決めるいい機会になるのでは？」

「お父様は、娘を他の男に盗られたくないだけよ。私は、自分を物のように扱われたくないだけ。それに、私、結婚なんてしない人生もいいかもしれないと、少しだけ考えているのよ」

大国の王女が抱く考えとしては、無茶なものだ。それが実現不可能な夢であることは、ルーティア自身が理解している。

アルスもそれ以上は云わなかった。いつか失う自由ならば、貴重な時間を浪費する訳にはいかない——その気持ちが伝わったか、確認するのは無粋だろう。ルーティアはただ、にっこり微笑んで見せた。

アルスは一礼した後、何も云わず、その場を後にした。

アルスは地方領主の息子である。ルーティアの記憶が確かならば、六人兄弟の末子であり、唯一の腹違いの子である。彼は故郷を捨てるような形で王都へやって来て、かねてからの希望通り、騎士団へ身を寄せることになった。

幸いな事に、彼には才能があつた。天才と賞されるその剣の腕前で、若干十五歳にして騎士の称号を与えられた。そして、十七歳となった現在、王家直属——それも、第一王女の唯一の騎士という誉れを得たわけだが、本人はむしろ、その肩書きにわずらわしさすら感じているようだった。

「剣の腕を磨ければ、それで良かったのです」

それは、アルス本人がひそやかに漏らした本音である。ルーティア直属の騎士となったからには、剣技以外にも求められるものは多く、物憂げにため息をついている姿も目に付くようになった。

まだ故郷にいた子供の頃や、訓練生として騎士団に所属するようになった頃から、アルスのそうした子供っぽい所は変わらない。昔から達観しているように思われがちだが、実際は年齢相応の幼さを隠しているのだ。

「まったく、手のかかる騎士だわ」

ルーティアはそんな風につぶやいた後、もしかすると今頃、アルスも同じような台詞を吐いているかもしれないと思いついた。

第8話「常闇の世界の姫」(3)

ルーティアは今すぐにでも出立したい気分であつたが、長く王城を離れるとなれば、済ませておかなければならない仕事も沢山ある。高等文官の執務室へ赴けば、王女として名前が必要な書類には、手当たりしだいにペンを入れていく羽目になった。

傍らで、文官の一人が書類の内容を説明している。

「こちらが、ここ十年間のアーカス国内で発見および保護された天使の統計資料となります。残念ながら、天使が観測され始めた初期頃は、情報を集める体制ができていなかったため、全てが正確な数字という訳ではございません。ただし、徐々に増加の傾向があることは否定できないでしょう」

天使の墮界問題は、神無き世になつてから顕在化した問題のひとつである。天使が発見された場合、その最初の発見者が、神の世界へ還すまでの庇護者になるという決まりが定められている。だが、現実的には、未解決の問題が山積みとなつている状況だ。

資料に目を通しながら、こうした数字だけでは実状は何もわからない——と、ルーティアはやや不満に思う。いつか自分も天使に巡り会つてみたいものだと思えるが、それこそ興味本位の想いである。すぐに反省して、心の中から消し去つた。

結局、書類が全て片付いたのは、小夜も終わり、真昼も二時間以上が過ぎた頃だった。

「しまった」

思わず、一人つぶやいたルーティアである。

果たして、男性は立ち入ることを禁じられている離宮の入り口で、アルスが仏頂面で立ち尽くしていた。

「ごめんなさい。怒らないでくれると、嬉しいわ」

「私のような身分で、姫様を怒鳴りつけたとあれば、首を斬られても文句は云えません。ですから、例えば話になりますか、命令に従つ

た結果が数時間待たされることになったとしても、私は何も云いません。犬のように従って、飼い主があらわれれば、大喜びで尻尾を振るまでです」

頭でも撫でてやろうかしら——と、一瞬だけ考えたルーティアである。

逆鱗に触れそうだったため、寸前で思いとどまった。

その後、嫌がるアルスを無理矢理に引っ張りながら、ルーティアは離宮の中にある自室へ向かった。旅の荷づくりは、今頃、ルーティア直属の女中達が大急ぎで行っているだろう。だが、彼女らにも見せられない品物は存在する。秘密の隠し場所から母の形見である一本の剣を取りだすと、ルーティアはそれをアルスへ預けた。

「男の身で離宮へ足を踏み入れたことで一回、セシリア様の剣という国宝を持ち出すことで二回……姫様は、私の首を何回飛ばせば気が済むのですか？」

「私の命令に背いて三回は、嫌でしょう？」

そうして全ての準備が終わる頃には、真昼も終わり、夕刻となっていた。暗闇の雲を背景に浮かぶ《太陽》が、やや高度を落とす代わり、光の明度を下げている。バースタイムに向かう一団について、アルス以外は手配が済んでいるという話だったが、王の言葉に偽りはなかった。

旅程は既に組んであります——と、同行する中で一番年配の高等文官から聞かされて、ルーティアは黙ってうなずいた。

整列した一団を見やれば、ルーティアの知らない者も大勢いるようだった。総勢で三十名程だ。王女の外遊と考えれば、非常に小規模である。

「出発しましょう」

ほんのわずか、胸に湧いた疑問を、ルーティアは口にすることなく終えた。王女程の身分であれば、目下の者達の動向を、あれこれ気にすべきではない。

ルーティアは、自身にしか見えない仮面を、深く被りなおした。

王女の仮面。

生まれた時から身体の一部であり、ルーティアの生き方から、決して切り離せないものである。ルーティアが人前で仮面を外すことはない。無知蒙昧で、汚れなく、皆が望むような美しい王女様を演じる。それが、ルーティアに課せられた義務である。

だから、高等文官の説明も、わかりきった内容であるにも関わらず、黙って聞き続けた。

「石英結界による空間跳躍で、国境を超えることは三大国間の条約で禁止されております。そのため、一等級の石英結界を有する中では、最もバースタイムに近いレドナの街へ、まずは跳躍いたします。そこからは列車を使って移動いたしますが、専用便の手配となれば、どうしても明日の昼頃まで時間がかかってしまいます。また、これだけの人数の跳躍となりますと、順次行うことになりますので、本日はレドナの街へ宿泊することに……」

長い説明が終わり、内心でため息をついた後、ルーティアは石英結界の中へ足を踏み入れた。傍らには、アルスもいた。一度に跳躍できる人数にはまだ余裕があるが、そこは王族に対する礼節の問題である。王族に同行が許されるのは、直属の騎士ぐらいである。

アーカスの王城にある石英結界は、非常に大規模なものだった。街や村に設置される石英結界は、大人一人が入れる程度の箱状のものが多く、ルーティアは話に聞いている。棺桶とも揶揄されるこれらの結界と比較すれば、三十数名が足を踏み入れてもまだ余裕のある王城の結界は、確かに破格の規模である。

アーカス王城の石英結界は、地下に造られているため、窓のひとつも存在しない。正方形の部屋は、壁面の全てが石英で形作られている。扉すらも石英で作られているのは、魔力効率を極限まで引き上げるためだ。加えて、壁面には公式が組まれている。刻まれた複雑な文様は、ルーティアですら全てを理解することが難しい。王立大学で学ぶ高度な式であることがうかがい知れた。

ルーティアとアルスは、そんな石英結界の中心部に並んで立った。

同行する三十名程の一団は、部屋の入口で待機している。四方に陣取るのが、宮廷魔法官である。

空間跳躍の魔法は、一般的には使用が制限されている。然るべき機関で教育を受けた後、王立試験に合格して初めて使用許可が得られる。それでも難易度の高い魔法であることから、原則として石英結界内で使用するように法で定められている。

しかし、いくら高度な魔法とは云え、王城の誇る石英結界に加え、四人の宮廷魔法官となれば、これは失敗する方が難しくなる。ルーティアはその仰々しさに対して、皮肉な笑みを我慢しなければいけなかった。

「それでは、出発しましょう」

ルーティアが声をかければ、四方から詠唱が始まった。
一瞬の後、闇が広がった。

第8話「常闇の世界の姫」(4)

空間跳躍を終える時は、必ず落下するものだ。

詠唱者の技術が高い程、目標地点に対する精度が高まり、落下する距離は小さくなる。とはいえ、落下の距離を極端に短くすることは、不要な危険を背負うことになるため、あまり推奨されていない。跳躍先が普通の大地ならば、失敗したとしても、大きな問題にはならない。地面の中に足が埋まってしまったとしても、掘り返せば済む話だ。しかし、石英結界内への跳躍となれば、話は随分と違ってくる。巨大な石英の中に足が植わってしまえば、バースタイムへ向かうこと自体が難しくなるだろう。

子供の頃、ルーティアは跳躍の終わりが嫌いだった。いつ落ちるのかわからない、その頼りなさ。着地の際によるめいてしまう、幼い自分も好きではなかった。

ふわりと着地しながら、もう子供ではないのだ――などと、ルーティアは少しの哀愁を感じていた。

レドナの街の石英結界は、棺桶よりは遥かに大きいものの、アイカス王城のそれとは比べるまでもなかった。アルスが周囲を見渡し、出口を示した。

「他の者を待つ必要ありません。三十名以上の跳躍となれば、時間もかかります。私達は先に宿泊場所へ向かいましょう」

空間跳躍の試験のため、先にレドナへ到着していた文官数名が、既に車を手配していた。アルスと共に後部座席におさまれば、車体と台座との接合を解除する低い音が響き、独特の浮遊感に包まれた車体がふわりと浮き上がる。

宙を滑るように街中を進む最中、ルーティアはつぶやいてみる。

「車は、もう百年近くも形が変わらないでいるけれど、もっと改良が可能な気がしますわ。少なくとも、建物の二階程度まで浮かび上がれるようになれば、渋滞も減るでしょうし、乗り降りも楽になる

でしょうから……」

アルスに語りかけたつもりだったが、答えたのは助手席に座る文官だった。

「しかし、そのためには今以上の石英が必要になります。また、浮力を出すために、運転手にそれなりの技量が求められることになりましょう。貧富や格差のことを思えば、今がちょうど良い案配なのですよ」

諭されるように云われたが、その程度の知識ならば最初から持ち合わせている。ルーティアは、車中の暇つぶしにアルスと会話しようと思っただけである。

「姫様」

不意にアルスが云った。

「夜になります。《太陽》が沈みますよ」

車の窓から、空の一点を指さすアルス。

その指し示す方向を見るため、ルーティアは身を乗り出した。アルスの手に身体を支えられながら、窓の外、暗闇の雲を背景に《太陽》が光を失っていく様子を眺めた。巨大な光球は、やがて漆黒の塊となって、暗闇の雲の中にまぎれて見えなくなった。

そうして《太陽》が姿を消し、夜の時間が訪れると共に、レドナの街が一変する。

「これが、レドナの本来の姿ですね」

昼と夜で姿の異なる街——その評判は、ルーティアも確かに聞き及んでいた。しかし、芋虫が蝶に変わるように、思った以上の鮮やかで、レドナはその姿を変化させていた。

街中が、魔力の光で照らされている。黄色、赤色、橙や紫——毒々しいとも思えるランプの色が、時に点滅を繰り返しながら、人の目を引き付けようとしていた。バースタイムとの国境近くという土地柄、大商都市として栄えるレドナだからこそ、このような派手な文化が根付いたのだらう。

一時の機会も逃さず、客を捕まえようという商いの情熱が、街を

彩る輝きに漏れ出ているようだった。

王城の荘厳な色彩とは、まるで異なるものだ。

ルーティアは興味深く街の姿を眺めた後、アルスにそつと感想を漏らした。

「面白いとは思っけれど、それほど好きになれそうにないわ。私も、反省しないといけない。城の灯りを、いたずらでピンク色に点してみたけれど、あれは悪趣味だったと思うわ」

「ああ、やはり」

アルスも街の光に目を向けていた。

「あれは姫様の仕業でしたか。女中達の間で犯人探しが始まりそうでしたので、私が戯れにやっておいたことにしました。以後、お気をつけください」

そう云われて、ルーティアはまじまじと自らの騎士を眺めた。正確には、その心の動きを探るため、瞳の奥をのぞき込むように顔を近づけた。

「冗談を云うことはおろか、他人の話にあわせて笑顔を浮かべることも少ない、この仏頂面で有名な騎士が、いたずらでピンク色の灯りを点したとなれば、果たして話好きの女中達の間でどのような噂が流れるだろうか。

礼を云うべきか、謝るべきか、ルーティアが迷っている間に、宿泊場所へ到着した。車の扉を開けて、アルスが先に外へ出る。段差があるため、手を差し伸べてくる彼に対して、ルーティアはこんな風に告げた。

「ごめんなさい。ありがとう」

豪華なホテルだったが、必要以上のきらびやかさが、やはり好みではないと思った。ずらりと整列して迎える従業員のなかから、にこやかな笑顔で前に進み出てくるのは、おそらく支配人だろう。

ルーティアの手を取ろうと近づいてくる彼に対し、気づかれない程の微細な動きで、アルスが体を挟み、行く手を遮っていた。王族に対して媚びを売る人間の相手は、文官の仕事である。ルーティア

はその場を任せ、アルスと共にさつさとホテルの中へ進んだ。

「これだけ人の目が多いと、自由に振る舞えなくて、疲れるわね。食事だけ済ませたら、今日は早めに部屋で休ませてもらうことにするわ」

先程の支配人ではなくとも、機会があれば王族に取り入ろうとする者が多い。人目のある場所に長居するよりも、部屋に籠もってしまつた方が周囲も楽になる。

「そうしていただけると、私としても助かります」

「あなたの性格はわかつていているけれど、もう少し、建前を使いなさい」

世辞を云つたり、人を上手くあしらつたりすることが苦手なアルスである。社交の場にルーティアが長く留まれば留まる程、いつもアルスは目に見えて憔悴していく。

「どちらが面倒を見ているのか、わからなくなるわよ」

「姫様、お言葉ですが、面倒を見ているのは、圧倒的に私の方です」
「あら、先日の舞踏会で、パール嬢に言い寄られていた所を助けてあげたのは、誰だつたかしら？」

その後、食事だけ簡単に済ませた後、支配人がレドナで一番素晴らしい部屋だと主張する最上階へ赴いた。フロア全体を使用した豪華な部屋だが、それ以外、特に素晴らしい点は見当たらないと感じたルーティアである。

「では、何かあればお呼びください」

室内へ不審なものがないか確認だけして、アルスは部屋を辞した。一人きりになり、ルーティアはようやく肩の荷が降りた気分になった。

第8話「常闇の世界の姫」(5)

八月四日、夜を迎えて数時間が経った。

そろそろ日付も変わる頃だろうと思い、何気なく、ルーティアは暦を確認したのだった。一日が終わる。王女の仮面を外した後は、いつもゆるやかに時が流れる。

思った以上に時間が過ぎていたことを反省して、ルーティアは読んでいた書物を脇に置いた。いい加減にシャワーでも浴びるべきだと考える。

まだ十四歳である。

夜更かしで知識をため込むよりも、よく寝て、よく育つ方が大切かもしれない。それでなくとも、明日は長旅になるのだから、休んでおくことは大事だ。

椅子から立ち上がった。

ルーティアが違和感を覚えたのは、その時である。

薄手の衣で、肌の表面を撫でられたような感覚。続いて、風を感じた。窓は閉ざしてある。空気が流れ込むような要素は、何ひとつない。

いや、実際、考えるまでもなかった。

感じたものは、魔力の波である。

だから、ほぼ反射的に、ルーティアは自身の魔力を周囲一帯に張り巡らせていた。微弱な波がどこから発生したものか——それを突き止めるための行動である。成果はすぐにあがった。

いや、成果と云うべきものでもない。

微弱な波動は、すぐさま、強烈な圧迫感となった。

探るまでもなく、目の前で、違和感が現実となっていく。

「なに、これ……？」

言葉が自然と漏れ出た。

張り巡らせた魔力の網が、ルーティアの知る魔法体系のいずれと

も異なる波動を感じ取っていた。その力の一边に触れたただだと云うのに、魔力を媒体として流れ込んできた膨大な《式》の渦に、ルーティアは危うく吞まれてしまう所だった。

急いで、自らの魔力を切断した。

ルーティアは見守るしかなかった。

「空間跳躍……いえ、似ているけれど……」

天井の辺り、空中に、闇が滲みだした。ランプが消えた訳ではない。光は届いているが、そこだけ何も見えない。闇。紙に、一滴、また一滴と、雫を垂らすように、闇が少しずつ広がっていく。

——闇闇の雲？

やがて、闇が、大口を開いた。

そして。

一人の少年が、落ちてきた。

第9話「物語を始めよう」(1)

それは情けなく、恥ずべき思い出だった。

誰にも知られることのない、自身の胸の内だけに起こった出来事である。その事で、ユウが誰かにかかわれる事もなければ、馬鹿にされるような事もないだろう。その出来事については、自身がどのように考えるか——それだけのことである。

その時、ユウは混乱の極みにあった。

真夜中の十二時、青鳥町、七守学園のグラウンド、彼方には倒れて動かない三千字サヨコ、塵ひとつ残さず消失した人形達、その余波を受けて気を失っている灰道ツカサ、空に月、目の前に真紅の獅子。

——そして、どうなった？

闇。

見えたものは、夜よりも暗い、闇である。自分の指先すら見えず、一筋の光すら存在しない闇である。そんな闇に吞まれた。闇は、さながら巨大な獣が大口を開いたかのように、そのままユウの全身を呑み込んだ。身体は浮かび上がり、ぐるりと反転して、遂には空と地面の向きさえわからなくなった。何も見えず、何も感じられない。唐突に放り込まれた虚無の中で、ユウが思わず悲鳴を上げそうになった瞬間、はじまりと同じように突然、世界に光と色が戻った。

落下した。

一メートルにも満たない高さだっただろうが、予想外の出来事に、ユウは身体をしたたかに打ちつけた。痛みに呻きながら、どうなった——と、心の中で叫んだ。冷や汗を流し、心臓も破れんばかりに早鐘を打ち鳴らしていると云うのに、世界は静寂に満ちていた。

ユウは、床に倒れ伏していた。グラウンドではなく、板張りの床だった。わずかに顔を上げれば、そこは屋外ですらなかった。広い部屋である。ホテルの一室のように見えた。奥の間に大きなベッド

が見える。淡い照明が輝いているが、どこか違和感を覚えた。何かが違う。

——ここは何処だ？

その疑問に思い至った瞬間こそ、背筋が凍るようだった。

そして、混乱も極みに達した。

「エクスルウ——アルフィラ——」
声。

反射的に、ユウは飛び起きた。

身体が痛みを訴えて、盛大に顔をしかめる。その一方で、突然の動きに驚いてか、声の主が小さな悲鳴をあげた。女性の声だ。いや、少女の声だった。

ユウは、声の主を見た。

そして——。

後々冷静になつて鑑みると、それは本当に、自分らしくもない反応だった。頭を占めていた迷いや混乱、不安や恐怖が、その一瞬で真っ白になってしまった。危険に対して神経を張り詰めなければいけない状況で、ぼかんと呆けるなど、彼女の『代理』として失格だろう。目の前に穴があれば、埋まって一生をそこで暮らしたい程に、情けなく、恥ずかしい。

一人の少女が、そこにいた。

それだけである。

一人の少女が、そこにいた——それだけのことに、心を奪われた。少女の美しさに、見惚れただけだ。ほんの一時、息を呑むような一瞬の出来事に過ぎない。だが、それは何の言い訳にもならなかった。自分の意識が、状況に対する混乱よりも、少女の美しさに惹かれたという結論は、変えようがないのだ。

ただし。

それでも、ひとつだけ言い訳するならば——。

少女の美しさは、本物であった。神がいたずらで造ったような姿が、そこにあった。心を奪われた一時が過ぎると、ユウは逆に馬鹿

らしさすら覚えた。想像力の限界を超える現実というものは、こんなにも容易く、目の前にあらわれるものなのだ。

金色の髪。

深緑の瞳。

その肌と同じぐらいに白いワンピース姿だった。胸元にエメラルドのブローチ。左手には金色の腕輪。一目見て生粋の日本人でないことは明らかだったが、純粋な白人とも違うように思えた。

「アイカリイロウ——エト——リイシュ——」

少女が話しかけてくる。

どうやら敵意はないようで、ユウもやや警戒を緩めた。しかし、相手の言葉がわからず、途方に暮れることになった。英語ではないドイツ語やフランス語とも違う。北欧や旧ソ連の言語だろうか。

意思の疎通ができないのは厄介だ。

「ごめん。何を云っているか、わからない」

ユウが答えると、今度は相手が首を傾げた。

身ぶりもまじえて、言葉がわからない旨を伝えた。

「イヤ」

嫌——と云われたのかと思ったが、少女の様子を見るに「YES」というニュアンスのようだった。どうしたものか——と、ユウがため息をつこうとした所、少女が詰め寄って来る。美しさは、それだけで白刃のような鋭さを持つのだと知った。近づくことすら恐れ多いように思えて、ユウは知らず知らずの内、後ろへ退いていた。

だが、すぐに追いつかれた。

少女が手を伸ばす。

握手するように、ユウは手を取られた。

（はじめまして。私の名前は、ルーティア）

ユウは硬直した。

少女は口を動かしておらず、声もまた、耳に届いたものではなかった。

こだまのように残響する声に、ユウは思わず額をおさえる。痛み

があるわけではない。初めての感覚に、違和感を覚えたただけだ。すぐ目の前に、少女の顔がある。疑い深い視線を向けていただろうと思う。だが、彼女は眼をそらすことなく、じっと見つめ返してくる。「ルーティア？」

しばらく沈黙して、心を落ち着かせた後、ようやく声が出た。

少女はこれ以上の喜びはないと云うように、顔をほころばせた。「なにが、どうなって……」

（ごめんなさい。あなたの言葉、私にはわからないの。私の言葉が、あなたに伝わらないのと同じように。だから、あなたがよければ、言語を司る意思だけでも、私に見せてくれないかしら。大丈夫、こうして私の言葉が届くのと同じ状態にするだけだから。感情や記憶までは、見えないわ。問題なければ、一度だけうなずいてみせて）
悩まなかったと云えば、嘘になる。

だが、結局の所、ユウはうなずくしかなかった。

（あなたの名前を聞かせて）

「名前は、相馬……」

（いえ、言葉ではなく、この握った手を通して、意思を渡すように……）

無茶な注文である。

このような魔法みたいなこと、理解の及ばない世界だと思った。

——魔法？

——魔法使い？

閃くものがあつた。

（あら、よかった。聞こえたわ）

少女の言葉は唐突で、ユウは呆気にとられた。

（そうよ。これは、魔法の一種よ）

その言葉を受けて、心の中で思った事が、彼女に伝わったのだと知った。

（え、なに、どうやって？）

（凄いわね。ほぼ無意識でやってみせるなんて、あなた特別なのか

もしない。天使は魔法を使えないと聞いていたのだけれど、もしかして、その情報こそ間違いだったのかしら)

(……天使?)

(ええ、天使は、あなた達を指す言葉よ。つまり、神の世界から常闇の世界へ落ちてきた人間のことね)

(常闇の世界?)

(そう、常闇の世界、シースーア。ここが私達の世界よ。神の世界から落ちてきたあなたには、右も左もわからないでしょう。魔法も使えないとなれば、苦勞することになるわ。でも、大丈夫、安心して。あなたが元の世界に戻るまでは、ルーティア・フェイメオール・デイルムの名にかけて、あなたに不自由はさせないわ)

理解のできない単語が、次々と出てくる。

先程以上の混乱にユウが襲われる中、対照的に、彼女は嬉しそうだった。

(ところで、あなたの名前は?)

(……相馬ユウ)

(ソーマね。わかったわ)

ルーティアと名乗る少女に、尋ねるべき事柄は山のようにあった。しかし、何から訊くべきなのか、まずは頭を整理させる時間も必要だった。水が欲しいと思った。落ち着いて座れる椅子も欲しかった。その時、部屋の入り口から、大きな声が響いた。

振り向けば、一人の女性——いや、よく見れば長髪の男性が、そこに立っていた。非常に端正な顔立ちをしているため、ユウも思わず見間違えてしまった。だが、一度男と見て取れば、印象はがらりと変わり、凜々しさ、たくましさが際立つ。

長身痩躯、片目に眼帯をしている。

だが、それ以上に注目すべきは、彼が鋭い声で何事か叫び、腰元の剣を抜き放ったことだろう。

(ルーティア)

心の中で叫ぶという、人生初の試み。

ユウは彼女を庇うように一步前へ出た。混乱した状況下で、やや臆病になっていた所もあるのだろう。冷静でさえあったならば、剣を抜いた青年は、ルーティアの知己か何かである可能性が高いと、すぐに思い至ったはずだ。

（大丈夫よ）

落ち着いた静かな声で、ルーティアが云った。

（ありがとう。彼の名前は、アルス・ランドル。私の騎士よ）

ルーティアは、くすりと笑った。

（あなたが落ちてきて、大きな物音がしたから、様子を見に来たのでしょうね。そうしたら、王女と見知らぬ男が薄暗い部屋で手を取り合っているという、前代未聞の場面に出くわしてしまった——そんな所ね。アルスにあんな顔をさせるだけでも、あなたがこの世界に落ちてきた意味はあったと思うわ）

（王女？）

（……あら？）

ルーティアは小首を傾げる。

ユウの顔を奇妙な動物でも眺めるようにのぞき込んだ後、やはり楽しそうに笑った。

（ごめんなさい。あまりにも当たり前のことだったから、云い忘れていたわ。考えてもみれば、私のことをルーティアなんて呼び捨てにした男は、お父様を除けば、あなたが初めてかもしれない。でも、なんだかそれも楽しいから、あなたは是非そのままいてちょうだい。こんな風に気安く話せる相手が、私にはとても少ないの。あなたがよければ、短い期間かもしれないけれど、私と友達になつてくれれば嬉しいわ）

そうして、彼女はあらためて自己紹介した。

（私の名は、ルーティア・フェイメオール・ディルム。三大国のひとつ、アーカスの第一王女よ）

第9話「物語を始めよう」(2)

一悶着。

そんな一語では片づけられない程の大騒ぎが続いたが、当の本人であるはずのユウは、まるで蚊帳の外だった。

あの後、彼女の騎士であるという青年、アルスは剣をおさめたものの、ルーティアに対して叱責するように何かを滔々と述べていた。それに対して、ルーティアは苛烈に云い返していた。どのような言葉の応酬をしていたのか、ユウにはわからない。ルーティアが手を繋いでくれない限り、ユウは何かを云う権利も、何かを聞く権利も持たないのだ。

(細々とした調整や連絡は、アルスや他の者達に任せただから、あなたは何も気にしないでいいわ。アルスはあなたをどこかに預けるべきだと云うけれど、そんなの面白く……いえ、無責任な話よ。天使を最初に見つけた者は、その保護者となることは条約で定められているわ。王族だからと云って、例外にすべきではないと、私は考えるわ)

小一時間の議論を経て、ルーティアはようやくユウの手を取り、そんな風に述べた。

(実は、私達はこれからバースタイムという国に行く予定なの。公務ではあるけれど、旅行のようなものと思ってもらえばいいわ。天使のあなたは、このシースーアの何を何も知らないでしょう。ならば、ちょうどいいのではないかしら。私達と共に、色々な所を見て回って、この世界がどんな所か知るというのも)

そもそも状況がわからず、未だ混乱の中にあるユウは、具体的な意見を述べることなどできなかった。言葉はまるで綿菓子のように、聞いたそばから、溶けて消えていく。咀嚼する暇もない。

思考を放棄してしまえば楽になるだろうが、それはもちろん、許されない。

伊吹カナならば、この程度のことは遊びの範疇だ。

だから、彼女の『代理』たるユウは、考え続けなければいけない。

——冷静になろう。

ユウは自身に云い聞かせた。

ルーティアは、自らを王女と述べた。

加えて、その傍らにたたずみ、険しい視線を向けてくるアルスは、彼女の騎士であると云う。腰元に提げられた西洋剣が偽物でないことは、素人のユウにもわかった。そうした中世のヨーロッパを思わせる慣習を残している国と云えば、もちろん、鎖国中のイギリスである。

青鳥町からイギリスへ、刹那の時間で辿りつく方法があるだろうか。

伊吹カナ、或いは伊吹家の力があれば——そのような奇跡を起こせる可能性も、決して零ではないだろう。

しかし、ここがイギリスである可能性は限りなく低いと云えた。

第一に、ルーティアやアルスが使用している言語は英語ではない。

第二に、ここがイギリスならば、日本との時差の関係で、今が夜であるのはおかしい。第三に、ユウは襲われていない——首筋に触れてみても、血を吸われたような痕はなかった。

——考え方を、変えよう。

言葉の通じない中で、彼女と会話ができているこの現象は、魔法と呼ぶしかない。ならば、IMUに承認された魔法使いの中に、彼女と特徴が一致するような者がいただろうか。ユウは覚えている限りで、十九名の魔法使いを思い出してみるが、残念ながら該当するような者は皆無だ。

唯一、【No.6】断頭台の魔法使い、エレナが、旧ソ連出身であり、白人種の金髪であるという点で近いが、彼女は妙齢の女性であると聞き及んでいる。また、敵味方の区別なく首を撥ねたがる狂人という噂であるから、とてもルーティアの特徴とは一致しない。

そこでふと思いつく。

（ルーティア。外、見てもいいか？）

何でもない願いだっただ、ルーティアは一瞬、迷うような素振りを見せた。訝しんだユウだが、それを問う前に彼女はうなずいた。

（ええ、もちろん構わないわ。どうぞ）

一旦、手を離れた。それから窓辺に寄って、カーテンを開く。眼下に、光に彩られた街並みが広がるのを見て、随分と高い建物にいたことを知った。

相当な都会である。苔のように、光が闇夜に広がっている。郊外に離れるほど、光は薄く途絶えていく。その様子から、都市部と郊外では格差が大きいことがうかがえた。

空を見た。

最初、何が違和感を与えるのか、気づかなかった。星のない闇夜だった。水に溶かさないままの絵の具を、べったりと塗り付けたような黒い夜だった。

違和感は、徐々に大きくなった。

月はなかった。星のひとつ、見えなかった。もやのような雲すらも、まるで見当たらなかった。見えるものは、ただ一色の黒である。虚無である。ユウは甚だおかしいな表現であることを自覚しながらも、こう思った。

——空がない。

（ソーマ）

不意に声をかけられる——つまり、いつの間にか傍へやって来ていたルーティアに、手を握られていた。

（天使がこの世界に堕ちてきた時、皆、最初は誰も異世界なんて信じないと云うわ。馬鹿げた話だと笑ったり、理解を越えて泣き出したりする。実際、このシースーアでも、神様が世界の構造を明らかにするまで、もうひとつ世界があるなんて信じる人はいなかったわ。だから、あなたもすぐには信じられないと思う）

それでも——と、ルーティアは続ける。

（天使は皆、この世界が暗闇の雲に包まれているのを見て、徐々に理解すると云うわ。このシースーアが、自分達の生まれ暮らしてきた世界と異なる場所なのだと、嫌でも実感していく。私達は、青空や星の輝きというものを知らないけれど、それはきっと、この景色とはまるで別のものなのでしょうね）

世界がふたつあることを実感させるほどに——そんな言葉を、ルーティアは迷い無く言い切った。

（夜の間は、まだよくわからないかもしれない。でも、明日の朝になれば、ここがあなたのいた世界とは違う場所であることを、嫌でも実感できると思うわ）

いたわるように、優しい口調だった。

実際、彼女は心配しているのだろ。会話をするために握られた手に、彼女のもう片方の手が、包み込むように被せられた。

同じ年頃の少女に向けられる気遣いが、少し気恥ずかしい。

だが、そのお陰で、わずかな冷静さも取り戻せた。

——そうだ。

ユウは思い出す。

——動揺する程のことでもない。

そして、自身に言い聞かせる。

伊吹力ナの隣で歩んできた過去を思えば、この程度の異変で、我を失っている場合ではない。

彼女がこの境遇に陥ったならば、どうするだろうか。笑うだろう。それは容易に想像がついた。彼女は、最高のおもちゃを見つけてしまったように、意気揚々とこの世界の探検に乗り出すはずだ。

ユウは『代理』として、彼女の振る舞いを真似する。
顔をあげた。

前を向いた。

彼女のように笑うかわりに、小さなため息をついた。

——自分らしさを、忘れるな。

（俺は元の世界に帰れるのか？）

ルーティアに向けて、何よりも重要な事を尋ねた。

（ええ、もちろん）

行く末にどれだけの困難が待ち受けているか、身構えていたユウは、あっさりとしたルーティアの言葉に、やや拍子抜けした。

（あなたのように神の世界から堕ちてくる人は、これまでも沢山いたわ。その扱いについて、きっちり整備が進んでいるとは言い難いけれど、一定の規則は出来上がりつつある。必要な手続きさえ済ませれば、問題なく帰れるわよ）

問題があるとすれば——ルーティアは少しだけ言葉を濁し、続けた。

（シースーアと神様の世界を隔てる“扉”を開くには、幾つか条件があるわ。それを満たすためには、少なくとも一ヶ月近くは待たなければいけない）

具体的な日付を聞かされて、反射的に考えた事は、新学期の開始に間に合わない、という事だった。実際には、それよりも憂慮すべき事は沢山あった。

そもそも一ヶ月も行方不明になっていれば、向こうでは大騒ぎになっているだろう。警察沙汰になっていれば、さすがに厄介だ。

そんな風に考えて沈黙していると、ちなみに——と、ルーティアが付け足した。

（シースーアと神様の世界で、時間の感覚は同じみたいよ。これまでの天使との接触事例から、判明しているわ。一日は二十四時間、一ヶ月は三十日か三十一日。一年は十二ヶ月あるわ）

微笑を含んだ視線が、正否を問いかけてくる。

ユウは無言のまま、うなずいた。

（さらに云えば、今日は八月四日……いえ、ちょうど日付をまたいで、八月五日になった所ね）

右手はルーティアと繋いでいる。左手には腕時計を巻いていた。日付も表示されるそれを見やれば、まさにその通りの日時が刻まれていた。

（あなたが不思議に思うであろうことは、ある程度予想できるから、それはその都度、説明してあげる）

彼女はそこで一度、話を締めくくった。

（夜も遅いことだから、今日はひとまず休みましょう）

詳しい話は、また明日——そんな風に云われてしまえば、保護される立場のユウに反論する余地はなかった。

尋ねたい事は山のようにあったが、それらを口にしていくと、まるで迷子の子供が泣きわめくような、収まりのつかない状態にもなりそうだった。

頭を冷やす時間は、必要だ。

ユウはため息と共にうなずき、手を離した。

手を離す——言葉が交わせないことに、それだけで不安を覚える。ルーティアは迷子の子供に向けるような、優しい微笑みを浮かべていた。ユウも最後に、意識して笑顔を向けた。

そして、一晚。

あてがわれた部屋で、ほとんど眠る気も起きないまま、時間だけが経った。朝になるまで時間はたつぷりとあったが、情報も少なく、頭の整理は一向に進まなかった。

それでも、覚悟を決めるには足りた。

ルーティアの話を全て鵜呑みにすることは、考えることを放棄するも同然だった。あらゆる物事の真偽は、これから自分の目で確かめていくしかない。

異世界。

その一語を、考える。

ルーティアは当然のように口にしていたが、本来、一般的な言葉ではない。非常に曖昧とした表現だ。ここは異世界だ——などという説明では、結局、ここが何処であり、何であるのか、まるでわからないのだから。

結局、自分で考えるしかない。

自分で、やるしかない。

後ろ盾もなく、右も左もわからない。意味もなく走り出し、叫びまわりたい気分でもあったが、不思議な程に冷静な部分もあるのは、長く付き合ってきた幼なじみのお陰だろう。

魔法の言葉を唱えた。

——伊吹カナだから。

——どんな不思議も異常も、当然に変わる。

七守学園のグラウンドで、闇に吞まれた瞬間こそが、ターニングポイントだった。あの闇は、まさにカナと相対した瞬間に発生した彼女がこの状況の原因だと考えれば、何もかも納得してしまいそうになる。

——あいつは、あの後どうなった？

答えが出るはずもなく、そのまま朝を迎えた。

第9話「物語を始めよう」(3)

——レナを、助けに行こう。

浅い眠りから覚めると、掌から水がこぼれるように、夢の残滓もあつさり消え去った。一滴だけ残った夢の記憶は、昨夜、伊吹カナの発した一言だった。

ユウは身を起こしたまま、しばらく呆然としていた。

急転直下の出来事に混乱し、忘れていた言葉だ。

「いや……」

思わず、うめいた。

忘れていた訳ではないのだろう。考えないようにしていたというのが正しい。七守学園のグラウンドで起こった出来事やカナが告げた言葉の意味を冷静に考えられる程、余裕があつた訳ではない。

一年間、思えば同じだった。

目の前にあらわれる物事にだけ、ひたすら注意を向けてきた。カナの『代理』を勤めようと思えば、トラブルに暇はなかった。だから、常に我を忘れる程に全力で、目の前の出来事にだけ意識を向けていれば良かった。

そうして、少しずつ、カナに近づけると信じて。

——言い訳。

異世界に迷い込む。

それは、想定もしていなかった事態で、混乱を来すには充分だ。まさに目の前に差し迫ったトラブルであり、全力で取り組むに足る状況だ。

他の物事を考える余裕もなく、他のトラブルに気を取られる隙も見せず、その事だけを考えていればいい——はずだった。

——レナを、助けに行こう。

一年間。

逃げ続けてきた言葉が、頭の中、繰り返される。

繰り返し続けてきた言い訳が、溶けた氷のように、もはや意味を失っていることに、不意に気づいた。ユウは頭を抱えて、しばらく目を閉ざす。

一秒。

二秒。

三秒。

わずかな時間が、無限に延びる。

無限の時間で、ユウは考えた。

一年間、ずっと、恐かった。逃げ続けている間に、道は少しずつ狭くなった。最初からゴールなど見えていなかったが、もはや一寸先も見えない闇の中にいることに、いつしか気づいていた。

謝らなければいけなかった。

しかし、謝ることができなかった。

カナに怒られることが恐かった。カナに呆れられることが恐かった。カナに失望されることが恐かった。カナに見捨てられることが恐かった。

カナを失うことが恐かった。

しかし。

一年が経った今になって、当たり前前のことに気づかされた。

七守学園のグラウンド、一年ぶりに見せた制服姿で、懐かしい笑顔と飄々とした態度で、有無を云わせない圧倒的な実力で——不可能など感じさせず、最強や無敵という言葉こそ似つかわしく、この世の全てを掌で遊ばせる伊吹カナは、やはり、優しかった。

カナは怒ることもなかった。カナは呆れることもなかった。カナは希望を寄せてくれた。カナはいつでも見ていてくれた。

カナは——。

「ああ、畜生」

ユウは閉ざしていた瞼を開き、世界を見た。

そこはやはり異世界で、かつてない大きな異変に巻き込まれている事実を、否応無く叩きつけられる。空のない世界、王女や騎士、魔法——考えるべきこと、やるべきことは山のようにあるだろう。

しかし、今の一時だけは、それも忘れる。

繰り返される、同じ言葉。

——レナを、助けに行こう。

「畜生」

零れた言葉を拾ってくれる者は、もちろん、いない。

第10話「手を握る」(1)

朝、部屋に備えられた時計が七時を刻むと、窓の外から光が差し込み始めた。ベッドから身を起こし、あらためて外の世界を見やっただウは、大きくため息をつく結果となった。

異世界。まず、ここが自分のまるで知らない場所であることは、確認できた。ヨーロッパ連合や第三共同体の各国にも、このような場所は存在しないだろう。そもそも、地球上で、このような光景が実現するのだろうか。

朝の日差し。

太陽が輝いている。

だが、青空は存在せず、夜よりも濃い闇が、世界の天井を覆っていた。そこだけ見れば、まだ夜が明けていないのかと錯覚する。しかし、眼下の街並みへ目を向けて、視界から空を外せば、途端に普通の景色となる。街を行き交う人々は、真っ暗な空を気にかける様子もなく、当然のように日常を過ごしている。

若干の目眩を覚えて、ユウはベランダから身を退いた。

しかし、頭を休める暇はなかった。

いざ活動を始めれば、ここはあらゆる意味で“違う”場所だった。話し言葉が理解できなかった時点で予想はついていたが、やはり文字も見慣れないものだった。空調が効きすぎて肌寒い程だったが、操作盤の文字が読めず、調整はできなかった。

苦労したのは、洗面所である。顔を洗おうと蛇口へ向かい、水を出すためのコックが無いことに気がついた。色々と試みたが、結局、水は出せなかった。

嫌な予感を覚え、洗面所の横にあるバスルームのドアを開けた。ホテルにありがちな狭いシャワールームに足を踏み入れ、色々と調べるものの、やはり水を出す方法がわからない。慌てて、トイレへ向かった。

そして、困惑した。

見慣れた形の水洗トイレである。一流のホテルなのだろう。清掃も行き届いた様子で、清潔だ。唯一にして最大の問題があるとすれば、やはり水を流すためのコックが見当たらない所だ。

地味なピンチだった。異世界という途方もない異常事態の中で、随分と矮小な悩みに取り組む羽目になった。とはいえ、例えば海外へ旅行に出かければ、文化の違いに面食らうことも多い。それが異世界となれば、根本から生活の成り立ちが違う可能性もあるだろう。一人で悩んでも解決しない。

やはり誰かに尋ねるのが早い。

反射的に、室内を見渡して電話を探していた。だが、見つからなかった。そもそも、冷静になってみれば、言葉が通じないのだから電話があつたとしても役に立たない。

会話をするならば、魔法に頼らなければいけない。

あらゆる意味で、ルーティアの助力が必要だ。

彼女は、王女である。

この異世界シースーアにおいて、国家の勢力図がどんなものであるか、ユウはまだ知る由もない。また、王女という肩書き自体が、どれほどの権力を持つのか、それもわからない。

ただし、騎士という時代がかった存在を傍に仕えさせる様子や堂々とした振る舞いを見る限り、ただの一般人とは隔絶した力を持っている事は確かはずだ。

そんな彼女に気安く接して良いのか、悩まないと云えば嘘になる。だが、それ以上に、今は打算があつた。

この異世界でひとまずの衣食住を満たすことは、どうしても必要になる。生きることには右往左往しているようでは、この先、何かしらの“目的”ができた時が思いやられる。

利用できるものは、最大限に利用すべきだった。

もちろん、受けた恩義は、返せるものならば返したい。現状どのように返せるのか、おそらく恩義の借金は増える一方だろうが――

それでも、最後の良心は胸に秘めておくユウである。

ルーティアを探そう。

そんな風に考えをまとめ、ユウは部屋を出ようとした。彼女の部屋は最上階であるから、階段を上って行けば自然と行き着く。途中に警備の者がいるかもしれない。そうした場合、言葉も通じないため、どのように通してもらえばいいだろうか——と、先んじて頭を悩ませていたが、それは徒労に終わった。

部屋の扉を開けると、そこに、ルーティアがいた。

「ファ」

彼女の短い声は、どうやら驚きをあらわすもののようなのだ。

ユウ自身、予想外であったため、一瞬、言葉をなくしていた。

よくよく見れば、彼女は一人ではなかった。その傍らには、昨夜も顔を合わせた彼女の騎士、アルスが無表情のまま立っていた。その瞳には何の感情の色も見えなかったが、その片手は、わずかに剣の柄に触れていた。

もう一人、少女がいた。

ルーティアとアルスの後ろで、身を引くようにして控えている。

年頃は、ルーティアと同じぐらい——つまり、ユウ自身とも変わらないようだ。緊張した面もちで、少女は服の裾を握りしめている。その服装を見て、すぐさま察しがついた。白を基調とした制服は、おそらく女中のものだろう。

「ルーティア？」

問うように呼びかければ、彼女は応えるようにうなずき、そして手を伸ばしてきた。その美しさにまだ若干の戸惑いを覚えつつ、ユウも手を伸ばし、その手を取った。

（おはよう。よく眠れたかしら？）

まずは軽やかに挨拶される。

（ああ、お陰様で）

（それは良かったわ。昨夜より、顔色も良さそうね）

部屋に入ってもいいかしら——そう尋ねてくるルーティアに対し、

ユウは素直に応じた。ルーティアが先陣を切り、その後に、アルスと女中の少女も続いた。

皆が部屋に入ってしまった所で、ユウは先にルーティアへ声をかけた。彼女の来訪がどのような理由によるものか、その本題に入られる前に、先に細事を片付けておこうと考えたのである。

（悪いけれど……）

やや情けない内容でもあったので、歯切れ悪く、水の出し方すらわからない旨を告げた。呆れられるとも思ったが、むしろルーティアの方が申し訳なさそうな表情になった。

（ええ。説明が足りていなかったわ。私の方で考慮しておくべきだったのに、悪いことをしてしまったわね。実は、そうした生活に関わる事について、あなたが困らないように来たのだけれど……）

云いながら、ルーティアはそのまま手を引いて、洗面台へ向かった。先程見た時と変わらず、蛇口はあるが、コックもスイッチの類も見当たらない。果たして、どうするのか見守っていれば、ルーティアは蛇口そのものの手をかざした。

（ここに、感知用の石英があるの。わかるかしら？）

蛇口の一点に、米粒程の大きさの石がはめ込まれている。

ただの装飾と思い、ユウは気にも留めていなかった。

（この石英に、魔力を反応させれば……ほら、ね）

水が出た。

ユウはしばらく沈黙して、試みるように、蛇口の石英部分に触れてみた。予想通り、それは何の反応も示さず、水を止めることはできなかった。

（やっぱり、あなたには無理よね）

ルーティアは予想していたと云うように、うなずいた。

（天使は魔法を使えない……それは、つまり、自身の内に流れる魔力すら、感じ取れないという事になるわ。魔力を扱うこともできないならば、当然、感知石英を反応させることもできない）

つまり、日常生活に大変な不便が生じる——ルーティアは、そう

説明した。

（それは、困るな）

ユウも率直な感想を漏らした。

魔法や魔力について、まったくの無知という訳ではない。幸いなことに、それらに精通した人間を幾人も知っていた。だが、だからと云って、彼らに教えを請うような事はしてこなかった。

魔法使いになるという事は、平穩な日常を捨て去る事と同義だった。力を得る事は、相応の危険を背負う事であり、危険と隣り合わせの日常を歩むからには、捨てなければいけないもの、諦めなければいけないものが、無数に生まれてくる。

実際、師と仰ぐ人物は、こう云ったものだ。

——まだ早い。お前では、無理だ。

——長い人生なんだから、急いで道を決めることもない。

——魔法使いの道は、修羅の道。子供が歩める程に、甘くない。

魔法使いという肩書きが大きな意味を持つ現実と比べて、異世界はどうやら根本的な部分が違うようだ。魔法や魔力が、随分と生活に近い。

（一人で水も出せないとなると、不便どころか、ただ普通にするにも支障が出るな）

（ええ。魔力が必要になる場面は、それこそ日々のあちらこちらに、無数にあるもの。場当たりの対応では、解決は望めないわ。そこで、根本的な解決方法を持ってきたという訳よ）

部屋の方へ戻った。

アルスは変わらず、仏頂面のままだ。まだ警戒されているのだろう。ユウはそれも仕方のない事と考える。信頼は一朝一夕に得られるものではない。

「セシル」

ルーティアが呼びかけた。

アルスの背後から、表情を強張らせたまま、ぎくしゃくとした動きで少女が進み出る。ユウとルーティアが居並ぶ所までやって来る

と、やはりぎこちない動きでお辞儀した。

（この娘は、セシル・マクリール。まだ新米の女中よ。城へ奉公にあがって間もないから、仕事に不得手な所はあると思うわ。でも、術は達者で会話も問題ないし、何よりあなたと年も近そうだから、気安いでしよう）

どういうことだ——と、無意識に、訝しむ視線を送っていた。

ルーティアは端的に、こう述べた。

（セシルを、あなたにあげる）

思わず言葉を失ったユウへ、ルーティアは胸を張って云った。

（ソーマ、感謝しなさい。専属の付き人を持つなんて、相当に裕福でなければ難しいことよ。わからない事は訊いてみればいいし、そもそも身の回りの世話は全て、彼女へ任せるといいわ。基本的に、あなたの傍を離れないように命じてあるから、困ることはないはずよ）

あらためて、セシルという少女を見やった。

青ざめていた。

震えていた。

だが、視線が合うと、その瞳に剣呑な光が、ぎらりと宿ったように見えた。敵意である。殺気にも似ていた。思わず目を見開いたユウであるが、次の瞬間、セシルは何事もなかったように顔を伏せていた。

第10話「手を握る」(2)

王女は、やはり多忙であるらしい。

申し訳ないけれど——そんな風に前置きして、ルーティアは部屋を辞した。午前中は取りかかるべき仕事があり、時間に余裕がないという事だった。今後の行程はセシルが知っているということ、それに従って欲しいと云う。

(午後、この街を出発する予定よ)

ルーティアは、どこか楽しそうに述べた。

(それまでは、自由にしてもらって構わないわ。でも、できれば、ホテルの中に留まっていてちょうだい。街中へ出かけられると、セシルも慣れないだろうから、大変になると思うの)

ルーティアとアルスの二人が行ってしまい、ユウは嵐が過ぎ去った後のような静けさに、唐突に取り残された。

無言のまま、女中の少女が一人。

年の頃は、説明に合った通り、ユウと同じぐらいだ。

格好は制服で統一されている。白と黒を基調としたデザインは、伊吹家のメイド姉妹を連想させた。王女や騎士という言葉聞いて、どうにも中世ヨーロッパのような印象を抱いてしまうが、ルーティアやアルス、そしてセシルの服装は、古めかしさを感じさせるものではなかった。このまま青鳥町の繁華街にやって来ても、休日の学生として、特に違和感なく溶け込むだろう。

「フイーアラスィ——トツテ——ルア——」

セシルが、意を決したように、何事か語りかけてくる。

ユウは首を横に振った。

「ごめん。わからない」

セシルは最初から顔色の悪い様子だったが、それがさらに、青ざめた。警戒する野生動物のように、一定の距離を置いて、近づいて来ない。徐々にユウも、彼女の様子に不信感を覚えるようになった。

最初こそ、王女であるルーティア——すなわち、権力者が傍にすることに緊張しているのかと思っていた。だが、彼女の示す反応は、緊張というよりも、恐怖や怯えに近い。

沈黙が、随分と長く続いた。

軽口や冗談を云おうにも、言葉が通じない。

空気の重さに耐えきれず、痺れが切れそうになった頃、セシルがようやく動きを見せた。口元を強く結び、これから戦場にでも躍り出るような形相で、彼女は一步、前へ踏み出した。

そうして、ユウの手を握った。

（セシルといいます）

叫ぶような大きな声が、頭の中に響いた。

（王女様から、身の回りの世話をするように申しつけられました。よろしく願います）

そこまで言い切ると、セシルはまるで汚い虫でも振り払うように手を離れた。会話ができたことよりも、彼女のそんな振る舞いにこそ、興味を引かれたユウである。

見れば、セシルの顔は、これ以上なく血の気が引いていた。やはり怯えられているのだろうか。だが、彼女に出会ってからこれまで怖がらせるような振る舞いをした覚えはない。

ユウは遠慮して、一步身を引いた。

その距離から、あらためて彼女の姿を眺めた。

年の頃は同じぐらいだろうが、背丈はユウの方が高かった。七守学園の級友達と比較すれば、小柄な部類に入るだろう。金色の髪を後ろで一本の三つ編みに束ねている。褐色の瞳は、どこか猫を思わせるような釣り目で、青ざめた表情に対して、きつく結ばれた口元が、ひそかな意思の強さを感じさせた。

相手は既に名乗っている。

自分も自己紹介をすべきだろうと思い、ユウは握手しようと手を伸ばした。

だが、彼女の手を掴もうとした瞬間、セシルはそれこそ猫のよう

に悲鳴をあげて、俊敏に飛び退いた。そして、メイド服と思しきその清楚な格好とは裏腹に、身を低くし、両手の五指を広げ、これ以上近づけば引つ掻くぞ——とでも云うように、威嚇してきた。

ユウは静止して、しばらく沈黙する。

そして、思わずつぶやいた。

「え、なに、この面白い子？」

言葉が通じないからこそ、本心である。

そのまましばらくにらみ合った——実際の所、にらんでいるのはセシルの方だけで、ユウは呆然と眺めていたに過ぎない。自分は何をしているのだろうか——と、ユウが虚しさを覚え始めた所で、彼女の顔色が徐々に変わり始めた。

頭に上っていた血がいつぺんに引いたかのように、再び、青ざめた。恐怖とは違う。その顔色からうかがえるものは、後悔だった。

何を思ったか——或いは、何も考えていないのか、ぐしゃぐしゃと頭をかきむしっていた。思えば、ユウが知るメイドと云えば、三千字三姉妹だけである。三姉妹はそれぞれ個性的だったが、メイドという意味ではプロフェッショナルだったのだ。

今更、ユウはそんなことに気がつく。

「言葉が通じないことを前提で敢えて云っておくけれど、王女の使いとして、その仕事っぷりは、首になっても文句は云えないだろうな」

ユウは指さして云ってみる。

言葉が通じる訳もないセシルは、頭に手をやったまま、ぽかんとしていた。遊びに夢中になっていた子猫が、急に目の前を横切ったトンボに気を引かれ、ぴたりと動かなくなったような反応だ。

ユウは、驚かさないように、ゆっくりと忍び足で前へ出た。その動きを見て、セシルが警戒するように、身を堅くする。

「よしよし、落ち着け」

野良猫に餌でも差し出すように、ユウは片手を伸ばした。セシルはその手をじっと見つめ、たっぷり数秒間は迷いを見せた後、恐る

恐ると云った様子で手を伸ばしてきた。

今だ——と、ユウは素早く、その手を掴み取る。

（ぎゃあ）

悲鳴が、頭に流れ込んできた。

青ざめているセシルには気の毒だが、これで少なくとも話ができると安心したユウである。逃げられないように、

握る手に力を込めた。ほっと一息。だが、野生の獣は、追い詰められてから、決死の反撃に出るものである。

目の前に、足があった。

それが何か理解する前に、反射的に身を捻っていた。危なげにひるがえるスカートと共に、セシルの蹴り足が、ユウの前髪をかすめて空を切る。

驚きに言葉も失ったユウだが、なぜか、セシルも目を丸くしていた。

——避けられた？

そんな心の声が、聞こえるようだった。

当然ながら、手を捕まえている余裕はなかった。蹴り足を避ける際に、追撃を予期して、間合いは大きく離れていた。無言のまま、沈黙が続いた。

「なんだ、いったい……」

言葉が通じない不便を、実感する。

セシルと云えば、空を切ったその足を、何度も床に打ちつけていた。まるで感覚を確かめるようだった。爪先でリズムを計るように、とんとんと。そして、「ル——ソダ」と、短く何かをつぶやいた。

——おもしろい。

直感で、ユウは言葉の意味を推測した。

セシルの表情が変わっていた。蒼白だった顔が、血色を取り戻している。おもちゃを見つけた子供のように、瞳を輝かせていた。

「よし、わかった」

ユウはため息をつく。

「何が何なのかわからないけれど、お前は、俺の知り合い連中と比較しても、なかなか上位の変わり者に入る」

通じない言葉で、ユウはそんな風に云ってやる。

同時に、セシルが素早く床を蹴った。

一足飛びに、間合いを詰められる。セシルは両手を左右に大きく広げ、先程と同じく、引つ掻くように指を広げていた。左右に視線を巡らし、さて、どちらが伸びて来るか——と、慎重に構えていたユウは、相手が目の前から消えたことに驚かされる。すぐさま、下と気付く。

飛び込んで、しゃがみ込む——大胆な動きだが、看破されると脆い。足を払おうとする相手の動きに併せて、膝を蹴りだそうとしたユウであるが、その寸前で、思いとどまる。

相手は、伊吹カナではない。

全力で膝蹴りを浴びせていい訳がなかった。

迷いがそのまま結果となる。ユウは足を払われ、押し倒された。そのままセシルは馬乗りの形となり、ユウの両手を抑えつける。

（俺の勝ちだ）

満面の笑みのセシルが、高らかに心の声で勝ち誇った。

ユウは、黙ってその顔を見上げていた。

沈黙も十分と感じた所で問いかけた。

（……俺？）

セシルは、明らかに、狼狽した表情になった。またも蒼白な顔に逆戻りである。必死に言い訳を考えているのが見て取れる顔で、その唸り声が、手を通してユウの頭にも伝播してきた。

何を云うのか、逆に楽しみになったユウである。

（えー、つまり、だ）

セシルは云った。

（俺……じゃなくて、私は、男が苦手なんだよ……えっと、つまり、男性恐怖症なんです）

今更、丁寧な物言いをして、一度剥げたメツキはどうしようもなく、さらに付け加えれば、言い訳をする以前に、馬乗りの体勢をやめるべきであつただろう。押さえつけられた格好で云われても、何の説得力もなかった。

第10話「手を握る」(3)

最終的なセシルの決断は、以下の台詞に集約されている。

(あー、もういいか、面倒くさい)

セシルは床の上で、乱暴にあぐらをかいていた。長めのスカートを鬱陶しそうに払う姿は、淑やかさとは無縁だった。とはいえ、既に取り繕えない所まで来ていたから、猫かぶりを止める事は、むしろ潔いとも云えた。

(それで、結局、おまえは何なんだ?)

(何なんだって訊かれてもな……)

セシルは歯切れ悪く、顔をしかめた。

結局、ユウも彼女の対面に座る形で、身の上話にも似た世間話に興じることになった。手を繋ぐことには、相変わらず抵抗があるようだったが、どこか腹をくくった様子でもあり、その表情はさながら、苦手な野菜を無理矢理飲み下す子供のようでもあった。

握手の瞬間。

(うえ)

まずいものを飲み込むような声だった。

男が苦手——男性恐怖症という話は、その場しのぎの嘘という訳ではなく、真実、彼女が抱える病であるらしかった。

(そこまで徹底的に嫌がるなんて、原因でも?)

(あるにはあるけど、個人的な事だから、あんまり話したくない) そんな風に、要所では返答を拒みつつも、セシルは自らの事を語って聞かせた。

曰く、男性に触れられることが苦手である。自分から触れる分には、覚悟を決める時間があるので、どうにか耐えられるということだ。

先程は、いきなりユウの方から手を伸ばされた為、思わず逃げしまった。そしてまた、いきなり手を掴まれた為、足が出てしまっ

ただ——などと、彼女は云った。

（この世界の女子は、反射的に足が出るのか？）

驚いて尋ねてみれば、セシルはひきつった笑いを浮かべた。

（いや、実は、育ちが悪くて……）

セシルは自らの出自を、上流階級とは縁遠い、片田舎の貧困層であると述べた。

礼儀作法を身につけるような機会もなく、野山を駆け巡る時間の方が長かった。男も女も分け隔てないような場所で育ったため、言葉遣いも荒い。数奇な巡り合わせで、王女の小間使いなどという仕事に就いているが、慣れない振る舞いに日々、悪戦苦闘の最中という事だ。

（よくわからないが、それで、王女の身の回りの仕事が務まるのか？）

（いや、どう考えても、無理だ。無理して無理して、ようやく人並みだ。どうしてこんな役目を負っているのか、俺の方が神様に聞きたいぐらいだ）

セシルはあっさり云う。

その言葉遣いに言及すれば――。

（普段は、地金の部分が見えないように、がんばっているんだけど。まあ、もともとのおしゃべり方は、こんなもんだよ）

セシルは、あっけらかんと云い放つ。

（考えてもみれば、俺がこんな風にしゃべっても、お前以外には聞こえないわけだよ。お前が黙ってくれば、先輩方に怒られることもないわけだ。うん、これは気楽でいい。どうせばれてしまった以上、よろしく頼むよ）

少女らしい振る舞いは、最初の挨拶の一瞬だけで、幻と消えたことになる。

ユウの知る男友達、その誰よりも快活な笑みを浮かべて、セシルは自らに関する説明を終えた。頭に血がのぼり、思わず襲いかかってしまった件については、照れたように頭を掻くばかりだ。

（まあ、いいや）

結局、ユウはそんな風に告げた。

（うやうやしく扱われるよりも、友達感覚で接してくれた方が、気安いかもしれない。俺だって別に、偉い人間というわけでもない。たまたま王女様に保護してもらった一般人だ。年齢も同じという事だし、気楽に、仲良くやろう）

（いいね。お前が話のわかる奴で助かったよ。こんな失敗、ばれてしまったら首だ。王女様の客人に蹴りかかって、襲いかかるなんて思い返すと相当にまずいな。うん、この恩はいつか返すよ。あらためて、俺の名前はセシル・マクリール。セシルと呼び捨てにしてくれてかまわない。お前の名前は？）

（相馬。相馬ユウだ）

（そうか。よろしく、ソーマ）

晴天のように晴れやかな笑顔だが、男と手を握っているせいか、青空のように顔色は悪いという複雑な表情をしてみせた。

性根は明るく、単純なのだろう。

最後に付け足して、セシルはこう云った。

（主従の関係なんて気持ち悪い。俺達は友達だ）

異世界の友人である。

異世界でも、知り合いは変わり者ばかりになるのだろうか——などと、ユウは胸の内で、こっそりとため息をついた。

第10話「手を握る」(4)

ユウは街並みを眺めていた。

レドナ——と呼ばれる都市である。

大通りに立ち並ぶ建物は、どれもが四階以上はある大きなものばかりだ。至るところに広告が見えるが、ユウにはそこに書かれた文字を読むことができない。ただし、紙に描かれた絵が、まるでテレビ画面のように動く様は興味を引き付けられた。注目すべきは、電線が一本も見当たらないことだろう。この街は、電力によって成り立っているわけではないらしい。

目の前には、四車線になる大きな道路が見える。

やや渋滞気味の道を、車が行きかっている。見た目、確かにそれは車である。ただし、ひとつ大きな違いがあった。どの車にもタイヤがないのだ。車はどれも、宙を滑るようにして進んでいる。

科学や文明が発達している——というわけでもない。

むしろ、科学や文明の発達した道筋が、まるで異なった場所という方が正しいように思えた。

ユウは傍らを振り返る。

セシルは、あくびをしていた。

「おい」

呼びかけると、彼女は目を白黒させた。

「アカ——リパ——マ」

「わからないから、ほら、手を……」

場所は、ホテルの玄関である。

時間は、昼になる間際という所だ。

セシルと打ち解けた後、彼女の助力を得て、朝の身繕いを済ませた。シャワーを浴びる際には、ちよつとした騒ぎもあった。馬鹿らしいハプニングだった。その記憶は、心の奥深くに捨て去ることにしたユウである。

ともあれ、ほとんどは順調に、思った以上に平穏な時間が流れていた。言葉もわからない。部屋の器具も使えない。そんな散々な状況ではあるが、遙かに文化の異なる異国へ旅行にでも来たと思えば、やや心も救われる。

友達——そんな間柄になったセシルは、本当に遠慮を捨てたように、一応はべつたりと付き従っているものの、仕事はさぼりがちだ。「ほら、早く」

彼女に差し伸べた手を、さらに近づけた。

彼女は害虫でも目の前に迫ってきたような顔で、一步、後ろへ退いた。嫌々と首を横に振っていたが、ユウは容赦せず、無言のまま、彼女を見つめた。

「アバン、デルモア」

何事か、罵られる。

そうする内に、セシルは意を決したようで、肩を震わせながら手を握ってきた。

（やればできる）

（お前、ひどい奴だ。本当に、嫌なんだぞ。笑うなよ。鳥肌が……。うわ、鳥肌がやばい。気持ち悪い）

最初の接触こそが困難なようで、いったん手を握ってしまえば、セシルは徐々に落ち着きを取り戻す。一息ついた所で、ユウは本題を切り出した。

（あれは？）

指し示したものは、道を行き交う物体だ。

（車だよ。そんなことも、天使はわからないのか？）

ずばり予期した通りの答えが返ってきたが、聞きたいのは、むしろここからだ。

（あれは、どうした原理で飛んでいる？）

（原理って云われても……）

数秒の沈黙に、俺は馬鹿だから——という言い訳が、垣間見えた。

（まあ、魔法だよ。魔法）

セシルは投げやりに云った後で、唸りながら続けた。

（石英はわかるか？）

（石英？）

ガラスの原料だったか——と、ユウは首を捻る。

（石英は、魔法を使う際に一番便利な道具なんだ。この角度だと見えないけれど、車の底にも、石英が張り付けられていて、それで、そこに赤術だか、固形魔力のあれやこれやが……）

言葉の後の方は、うんにやらかんにやら——と、ほとんど意味を為していなかった。

（まあ、とりあえず、飛ぶんだよ）

結局、何もわからない。

ユウがため息をつくとき、馬鹿にされたと感じたのか、セシルが目をつり上げる。彼女の荒つぽさは、既に身に染みて理解しているユウである。これ以上、同じ話題を続ければ、手が出てくる危険性すらあった。

（もうそろそろ、いい時間だろう。昼になったら、ここを出発するんだったよな。いったん、部屋に戻ろうか）

気を逸らす意味で、そう告げれば、セシルはあっさりと怒りを忘れたようである。（うん、それがいいな）と、うなづく彼女を連れて、ユウはホテルの中へ戻ろうとした。

（おい、ちょっと待て）

ホテルの玄関を抜けようと、きびすを返した瞬間である。セシルの慌てた声に、ユウは振り返る。

（手、離さないのか？）

問われて、ユウは当たり前の顔をして応じる。

（俺はわからない事だらけだ。あれやこれや尋ねたいから、会話はいつでもできる状態がいい。手を繋ぐのに、いちいちお前が決心するのを待ってたら、時間がかかる。このまま繋ぎっぱなしだ）

セシルは蒼白な顔になった。

（嫌だ嫌だ嫌だ。気色悪い。手、離せ）

（こっちこそ嫌だよ。面倒だ）

振りほどこうと必死になるセシルを、ユウは捕まえて逃がさなかった。高級ホテルの入り口で、さながらダンスを踊るような滑稽な動きを披露する羽目になったが、幸い、先に息切れしたのはセシルの方だった。

（俺の粘り勝ちだ）

（畜生。覚えてろ）

肩で息をしながら、互いの健闘を罵りあった。

呼吸が落ち着き、冷静になってみれば、随分と間抜けに思えた。異世界であるから、知り合いに目撃される心配がないのが唯一の救いだ。とはいえ、注目を集めてしまったようで、道行く人々から、くすくすと笑われていた。

（芸人と思われたかもな）

セシルが愚痴をこぼす。

ユウもやるせなため息をついた所で、車の行き交う車線を隔てた向こうの通りからも、こちらを伺う視線があることに気づいた。

意識を引かれたのは、その風貌が異様だったからだ。

正確には、その服装だ。

全身を、すっぽりと真っ黒なマントで覆っている。目深にフードを被っているものだから、顔つきも影になって覆われている。そのため、年頃はおろか、性別すらも見て取れない。

その傍を歩き過ぎる人々も、異様な雰囲気を感じ取っているのか、避けるようにしている。黒マントの人物は、人の波を割るようにして立ちすくんだまま、じっとこちらを伺っているのだ。

（セシル）

不吉なものを感じて、手を繋ぐ彼女にも促してみたが、やや遅かった。瞬間、黒マントの人物は後ろを向き、人混みの中へまぎれていった。セシルが振り返る時には、既にその姿を見つけることは難しくなっていた。

（ソーマ、どうした？）

セシルの案じるような声にも、答えられなかった。

黒マントの人物——否、彼女は、人混みの中に消え去る途中で、フードを取り払った。ユウからすれば、後ろ姿しか見えない格好だったが、それで十分だった。

見間違えるはずもなかった。

真紅の獅子。

それは、赤い髪をした少女だった。

第11話「魔道列車の旅」(1)

八月五日、朝の七時。

シースーア最高峰の魔法使い十名が管理するものは、“太陽”だけではない。世界が光に満たされる瞬間、シースーアに住まう者達は、それで時間を知る。刹那の狂いもなく浮き沈みする“太陽”は、朝の七時、小夜の十二時、真昼の十四時、夜の二十一時を、世界の人々に知らせる役目を持つ。すなわち、“太陽”を管理する魔法使いは、世界の時間も管理していると云えた。

テラスから、ルーティアは空を見ていた。

朝の訪れを待っていたルーティアは、“太陽”が輝き始めたのを見て、すぐさま部屋の中へ戻った。机の上に置かれたガラス瓶を手に取り、隣の部屋の扉を開く。最高級のホテルであれば、室内に石英結界ぐらゐは備えてあるものだ。大がかりな結界とは言い難いが、ルーティアが使用しようとする魔法の階位を思えば十分だった。

抱えていたビンの蓋を開き、ルーティアは茶褐色の粉末を手に取り、つまみ出したものは、トネリコの枝を粉末状にしたものである。魔力媒体には石英が一番望ましいとされているが、一度きりの使い捨て魔法ならば、こうした代替品を用いるのが常だ。

トネリコの粉末で、まずは床に円を描いた。ルーティアは記述式に一瞬だけ頭を悩ませる。朝から長々と口論するのも馬鹿らしいと考え、口述式で一部を代替することに決めて、円の中に簡易的な公式を組み立てていく。

そもそも王の識別式を、みだりに痕跡として残すのも良くないだろう。

魔法の対象は、父であり、国王であるウィルヘルト・ディルムその人だ。遠隔地にいる相手を対象として捉えるためには、各人がそれぞれに備える固有の魔力を、正確に識別する必要がある。その情報のかたまりとも云うべきものが、識別式である。

術式の陣に魔力を走らせ、同時に口頭で式を紡ぐ。最後に、国王の識別式を唱えた。

そうして、魔法は完成する。

「おはようございます、国王陛下」

先手必勝とばかり、ルーティアは慇懃無礼に挨拶した。目の前には、国王ウィルヘルトの姿が映し出されていた。蜃気楼のように揺らぎ、不鮮明な影も多いが、全身像を投影できるだけでも、大人顔負けの技量である。

挨拶をされた国王は、ちょうど執務机に座ったばかりだったのだろう。ペンに手を伸ばした格好だった。顔色ひとつ変えないまま、国王はルーティアの方をじっと見つめていた。重いその口が開かれたのは、たつぷり十秒は経ってからだった。

「王に対して、許可も取らずに魔法を使用するなど、お前ぐらいのものだろうな」

「ええ。そんな娘に識別式を教えてしまったお父様の負けです」

ルーティアが微笑んで見せても、ウィルヘルトの顔色は一切変わらない。

「既に、一報は聞いた」

小言を漏らすよりも、本題に入ってしまった方が早いと踏んだのだろう。国王はそんな風に切り出した。ルーティアはわずかに身を引き締める。

「天使を拾ったそうだな」

「ええ、その通りです」

国王の声に、感情の色は見えない。平坦な話し方は、彼の特徴でもあった。果たして、今、その頭の中でどのような計算がされているのか、娘であるルーティアにも計り知れない部分がある。

「歳も近そうな少年ということだが、お前の見立てでは、問題はなののか？」

天使。

神の世界の墮人。

その出現は、神がこの世界から消え去る直前に、予言した事でもあった。ここ十年以上に渡って、天使は保護の対象であり、同時に研究の対象でもあった。彼らには幾つかの特徴があった。魔法がほぼ使えない、言葉が通じない、本物の太陽や星を知っている——しかし、天使という名称を与えられているものの、本質的な所では、どうやら彼らはシースーアに住まう人間と大差ないようだった。

すなわち、天使の中にも、善人と悪人がいるのだ。

「彼は、問題ありません」

ルーティアは迷いなく、そう述べた。

「これまでの天使の例に比較しても、非常に冷静で、落ち着いています。錯乱したような気配はまったく見られません。あくまでも私見ですが、私のことも信用してくれています。その人柄も、勇敢で思慮深いと見受けられます。人間性という点において、問題があるどころか、これがシースーアの人間であつたならば、早速城に召抱えるべきだと進言する所です」

褒めすぎだろうか——と、ルーティアは自分の言葉を省みる。

だが、言い過ぎなぐらいが、ちょうどいいだろう。天使と云えども、素姓のわからない人間であることは間違いない。そんな者を、これから公務で国外へ向かう一行に加えようとするならば、まず一点の曇りもあつてはならないのだ。

「もしかすれば、青の天使……大賢人の再来となるかもしれません」
駄目押しとばかりに告げた一言に、国王が一瞬、眉をひそめるのが見えた。

青の天使とは、観測史上で、最初に記録された天使の事である。そして、天使の中でも、とりわけ強くシースーアに影響を与えた人物でもある。大賢人とは、その功績を讃えて付された称号である。英雄の一人にも数えられる人物だが、功罪の折り混ざった経歴には、決して賞賛ばかりが与えられているわけではない。

そこに思い至り、ルーティアは迂闊だったことを悔やんだ。
十年以上も前の話になるが、青の天使はアーカスの国宝のひとつ

を持ち去っている。神の造りし七剣の内の一本。本来は人の手に余る存在だが、その七兄弟の中でも友好的だった彼女を、アーカスは天使に奪われてしまったことになる。

当然、国をあげて大追跡が行われた。

大賢人が神の世界へ還った以上、もはや意味を失った話だが、当時にかけられた懸賞金は未だ有効という話も聞く。それだけ、青の天使とアーカスには確執があるのだ。

ルーティアは、心して王の言葉を待つ羽目になった。

「わかった」

議論はここからであり、国王が述べるだろう正論に対して、反論する武器の少ないルーティアは、その気構えだけで押し切るつもりだった。

だが、予想に反して、国王はあっさりうなずいた。

「好きにすればいい。天使の面倒は、お前に付けてある女中にでも任せればいいだろう。お前でなくとも、意志の疎通が取れる程に術が達者な者もいるはずだ」

虚を突かれたルーティアだが、表面上は、平静を装った。

「ええ、その点は既に、仰られる通りに手配しています。小間使いの中から一人を見繕って、この外遊中は天使に専属で付くように命じるつもりです」

魔法にも、用途によって様々な種類がある。

魔力を介して、直接的に意志の疎通をはかろうとするならば、そうした系統に精通している者でなければ難しい。

例えば、アルスは騎士であるため、魔法の鍛錬にも日々勤しんでおり、技量も相当なものである。だが、彼が得意とするものは、主に自身の身体に係る魔法である。

もちろん、アルスでも短い時間の会話ならば問題ないだろうが、常に何時でも対応しようとするならば、やはり元から適した人材を見繕う必要があった。

「問題はないということだな。要件はそれだけか？」

多忙な国王であるから、時間がないのは理解できる。それにしても、性急に過ぎないだろうか。ルーティアが疑問を覚えなかったと云えば、嘘になる。ただし、自分にとって一番望ましい結果が得られたと云うのに、必要のない勘ぐりをして、答えが覆るのも馬鹿らしかった。

「お父様、ありがとうございます」

晴れやかな笑顔を最後に見せて、ルーティアは魔力を遮断した。魔法が途切れる瞬間、父親の顔が一瞬曇ったのは、はたして気のせいだろうか。

第11話「魔道列車の旅」(2)

シースーアには大陸がひとつしか存在しない。

暗闇の雲は、大陸を覆うように、球形に世界を包み込んでいる。

そのため、大陸から離れるように船を進めたとしても、すぐさま暗闇の雲に行く手を阻まれることになる。かつては新天地を求め、暗闇の雲を抜けようと試みた者も大勢いたと云うが、誰一人として帰らなかったため、いつしかそのような無謀を犯す者もいなくなつた。

シースーアは、現在、三大国と呼ばれる三つの国家が主権を握っている。

北部にソレイア、南西部にバースタイム、東部にアーカス。それら大国の隙間を埋めるように、小国家が乱立している。十数年前、当時の大国であつたジンドが内乱により滅び、新たにバースタイムという新国家が誕生した際には、その混乱の影響もあつて、大陸中に争乱の気配が忍び寄つた。一種即発の状態であつたが、様々な要因により事なきを得て、それ以降は三大国のパワーバランスが拮抗するようになった。

現在は安定期を迎えており、少なくとも、表面上の国家間の関係は良好である。

三大国それぞれの領土にまたがって建造された魔道列車は、稼働を始めてからの数年、特に大きなトラブルに見舞われることもなく、大国の主要都市を日々順調に結んでいる。

レドナの街にも、その魔道列車の発着駅がある。

小夜を迎える頃、ルーティアはアルスと共に車に乗り込み、ホテルを発つた。列車の駅へ向かうためである。レドナの街で済ませるべき仕事の数々が、順調に消化できたのは幸いだった。

なお、国王との話を終えた後には、真っ先に女中のセシルを呼び出し、命令を与えていた。セシルという少女を見るのは、ルーティ

アにとつても初めての事だった。

年若い事もあるだろうが、その振る舞いに、まだ頼りない印象も受けた。それでも術に長けた者が他にいない以上、天使の世話には彼女にしか務まらない。まさかルーティアが四六時中、一緒にいるわけにはいかない。気楽な旅とは云え、公務であることは間違いなく、道中も様々な仕事が無い込んでくるからだ。

アルスは表立った態度こそいつも通りに見えるが、その内心では、なかなか冷めない怒りが、まだ火種のまま燻っているようだった。王女の安全を第一と考える騎士ならば、見ず知らずの部外者をその傍に置くなど、到底受け入れられるものではないだろう。

ルーティア自身、王女の振る舞いとして、馬鹿げていることはわかっている。

天使の保護は、第一発見者が行うことは通例であるが、王族にまで絶対の法として適用されるものではない。もちろん、発見者の責任として、然るべき庇護が与えられるように手配はすべきだろうが、それすらも部下の文官に任せればいい話だ。

本来、王女が係るような案件ではないのだ。

「ねえ、アルス」

車中、他の者には聞こえないように、ルーティアはそつと耳打ちした。

「セシリア・フェイメオールならば、こんな時、どのように振る舞ったと思う？」

質問しながらも、ルーティアの中で答えは出ている。

触れ合ったことのない母だからこそ、ルーティアは彼女に纏わる記録は、あまさず読んできた。セシリアは、自身の身分などに頓着しない。やるべきだと思ったことを、やる人だ。

ルーティアは思う。

自分自身に、偽りを抱きたくない。

王女の仮面を被り続ける生き様だからこそ、余計に、そんな風に考える。

「姫様は……」

アルスは、やや疲れたように云った。

「あの少年を好いたのですか？」

「ええ、だって、まるで迷子の仔犬のようで、放っておけないと思っただわ」

彼がどのように世界から堕ちてきたのか、それはわからない。

ただ、出会ったその時、振り返った彼の瞳に溜まった涙が、寄る辺のない孤独を感じさせた。それと同時に、ルーティアの存在を見て取った瞬間、孤独も不安も、影のように潜ませていた。ひたすら平静を装う姿に、何かを偽る生き方を——そうしなければ生きられない、どうしようもない不器用さを感じた。

「助けてあげたいと、思っただわ」

「それを、お人好しと呼ぶのです」

魔道列車の駅に到着する。

先行していた一団が、既に旅の手配は済ませていた。魔道列車はあらゆる階級の者が使用する、ごく一般的な交通機関であるが、王族が使用するとなれば専用の車両が用意されるのが常だ。

迎えに来ている者達に対して、アルスが短く言葉をかわして、それを確認していた。

「出発時間は、予定通り、一時間後です」

レドナの駅は、さながら小さな城のような外観をしていた。

建物内は、まず一面がホールになっていた。舞踏会すら開催できそうな広々とした石造りの広場に、多数の人々が行きかっている。奥の方から、魔力の発生に伴う独特の重低音が響いてくる。途中に柵が設けてあり、係の者達が列車の客を整列させて、乗車券を確認していた。

「騒然としていますね」

ルーティアは感想を漏らす。

最初から人の数は多く、雑多な気配に満ちていたが、今は別の意味で騒がしくなり始めている。ルーティアは、多数の視線にさらさ

れていることに、やや億劫な気分になる。いつもの事である。いつもの事であるが、だからと云って、気にならないわけではない。

無遠慮に自分を指さす手、興味本位の視線、自分の名が混じった話し声。顔も名も知らぬ者達は、人の形をした影のようなものである。無数の影に囲まれていると、逃げ場のないような圧迫感が付きまとう。

「姫様、あちらに……」

構内に足を踏み入れてすぐに、アルスが一方を指さした。

とある一角に、魔道列車の路線を示した地図が掲げられている。

大陸の大部分を占める三大国を横断する列車であるため、その路線図は当然、大陸全土を描写した大きなものとなる。

その地図の前に、手を繋ぐ少年と少女がいた。

アルスが呼びかけると、少女の方——すなわち、セシルが慌てたように振り返った。手を繋ぐユウは、まだ地図を見上げたまままだ。シースーアの言葉がわからない彼は、呼びかけられた事にも気がつかないのだ。

二人は一足先に、他の家臣団と一緒にあって、この発着駅に向かう手はずになっていた。予定通り、無事に到着したものの、時間を余らせていたのだろう。

ルーティアはアルスを促し、二人の傍へ近づいた。

近づく間に、セシルが語りかけたようで、ユウも振り向いていた。手を離れたセシルの方は、恐れ多いように、一步後ろへ退いていた。彼の方は、こちらの姿を見止めて、かすかに微笑を浮かべていた。片手を挙げて、ひらりと挨拶するように振ったが、途中で思い直したように、その手を引っ込めていた。

どうしたのかと思えば、彼はルーティアの目の前で、うやうやしく膝をついた。よく見れば、伏せた彼の口元が、かすかに笑っている。冗談のつもりなのだろうか。

ならば——。

「姫様、人の目もあります。お戯れは、ほどほどにお願いいたします」

す」

ゆるりと注意を促すアルスに対し、ルーティアは王女の仮面を被ったまま、無垢な笑顔を向けてやる。そして、膝をつくユウに向き直り、さながら騎士の叙勲を与える時のように、手を差し伸べた。

ユウが、面白そうに、その手を取る。

（真面目なように見えて、案外、冗談が好きなのね）

（余裕がない時ほど、道化になってみると、人生の先輩が教えてくれただけだよ）

（あら、余裕がないの？）

（理由もわからず、唐突に異世界に放り込まれて、余裕がある方がおかしいだろ）

周囲のざわめきが、一際、大きくなったようだ。

王女が、どこの誰とも知れない人間と手を取り合えば、当然そうなる。どこか小気味よい気分でもあり、ルーティアは微笑んだ。

「姫様」

今度こそ本気の口調で、アルスにたしなめられる。

（落ち着ける場所に着いたら、もう少し、ゆっくりと話をしましう）

そう告げて、ルーティアは手を離れた。

不思議なことに、目の前の少年は、周りの雑音を気にする様子がない。立ち上がった後、注目を集める群衆に対しては、ちらりと一瞥しただけだ。

彼は再び、地図の方へ視線を向けていた。

シースーアの全景は、神の世界から堕ちてきたばかりの者には、確かに気になる所かもしれない。だが、その視線には、ただの興味本位ではないような光も含まれていた。自分を騙そうとする詐欺師を相手に、まるで険しくにらみ返すような眼差しである。少々、これまでの彼とは異なる気配だった。

どうにも不思議な少年だ。

ルーティアはそう思う。

ルーティアが知る同年代の者と云えば、まずは貴族の子女が圧倒的に多い。次いで、王城に奉公に上がっている年若い女中達である。もちろん、ルーティアが自身をさらけ出して接するようなことはなく、あくまで王女の仮面を被った付き合いになるのだが、同年代の者達に対して抱く想いは、常にシンプル——幼い、という一言に尽きる。

比較してみれば、よくわかる。

彼の顔立ちや体格は、確かに、まだまだ未成熟なそれである。だが、黒髪の下にある表情は、常に少し笑ったようで、大人びた優しさを見せる。生い立ちから漏れ出たものだろうか。ルーティアは違うだろうと考える。彼の表情や態度には、自身はそうあるべきだ——とても云うような、作り物めいた感覚を覚える。

ペテンのように、騙そうという訳ではない。

彼の被るものは、おそらく自分に近いのだろう——ルーティアはそんな風に想像する。

自分が王女の仮面を被って生きるしかないように、彼もまた、何かを背負って生きている。何かがあるからこそ、時に余裕を持ち、時に焦燥する。そうした生き様を選んでいる少年だから、そこの若者が引きずっているような幼さは、既に失っているのだろう。

良くも、悪くも——である。

ルーティアは、色々な人間を見てきたつもりだった。騙し合いや足の引っ張り合いが日常茶飯事な王宮での暮らしは、ルーティアに否応なく人間の本质を見抜く眼を与えた。

信頼を置ける相手か、そうでないか。

その程度の判断であれば、一目でできる自信があった。その直感が、彼は少なくとも悪人ではないと告げている。

だが、どのような人間かと問われれば、答えには窮してしまう。彼が背負っている”何か”については、まるで見当もつかなかった。

「彼のこと、どう思う?」

周りの誰にも聞こえない程度の小声で、ルーティアはアルスに尋ねてみた。

「私には、ただの無害な小僧に見えますよ。つまり、毒にも薬にもならない、至って平凡な少年です。姫様のようなお人が、わざわざ気にかける程の相手ではありません」

言い切った後で、アルスはしばし思案する顔になった。

表情はほとんど変わらないが、付き合いの長いルーティアには、手に取るようにわかる。

「言ってみなさい」

促せば、しぶしぶと云った調子で、アルスが述べる。

「姫様の部屋で初めに目にした時、不審者と思い、反射的に剣を抜きました。あの時、私は本気でした。若輩者とはいえ、これでもアーカスの騎士です。こちらの微塵も隠さない殺気に対して……しかし、奴は、まるで怯まなかった。それどころか、こちらに向けて一歩、踏み込んで来たのです」

それだけのこと——と、ルーティアは笑い飛ばす気にはなれなかった。

アーカスの騎士団と云えば、シースーアでも最高峰の武人の集まりである。その中でも、天才と称される程のアルスである。その気迫を正面から受けたならば、大抵の者は臆してしまう。特に魔法に精通していない者ならば、自然と溢れる魔力の勢いで、腰を抜かしてしまう程だ。

「やっぱり、面白いじゃない」

ルーティアは笑みを浮かべる。

アルスが、これだから言いたくなかったのだ——と、大きく肩を落としていた。

第11話「魔道列車の旅」(3)

一般客の人払いがなされた通路を抜けて、魔道列車の発着場まで赴けば、既に王族専用の車両がその場に停車していた。

車両は、例えるならば、矢のような形をしている。定められた路線を、まるで放たれた矢のような速度で飛ぶことも、その印象を強くする原因だろう。車体は軽金属で作られているが、底面はこうした移動具の常で、石英が装着されている。

魔道列車の特徴は、その石英の使用方法にある。列車は、一般的な移動具である車とは異なり、定められた路線上しか走ることができない。路線——すなわち、大地に埋め込まれた石英の長大なレールの事である。

車は底面に配した石英に、単純に浮力を与える魔法をかける。

魔道列車の原理はそれと異なり、大地に埋め込まれた石英のレールと車両の底面に配された石英が、互いに反発するような魔法をかける。

軽金属とは云え、相当な重量になる車体を持ち上げるとは至難の業であり、魔法の効果や効率が低い方法が採用されているということだが——実際の所、専門家ではないルーティアは、詳細まで知らなかった。

持ち合せているのは、あくまで教養としての知識だ。

むしろ、普段から頻繁に魔道列車を利用してはいる者達でも、魔道列車と普通の車の違いなど、何もわかっていない者の方が多いのではないだろうか。長距離を素早く移動できる便利なもの——その程度の認識であっても、その利益を感受するだけならば何も問題は無いのだ。

この王族専用の特別列車は、併せて五両の編成になっている。ルーティアはアルスと共に、二両目の車両に乗り込もうとしていた。先頭車両は、動力部であり、操作室も兼ねている。三両目と四両目

は家臣団が乗り込み、五両目には積荷が乗せられている。

ちょうど振り返れば、最後尾の車両――五両目に、大量の荷物が運び込まれている所だった。武官であろう屈強な男二人が、大きな木箱を運んでいた。あれだけの大きな荷物となれば、中身は何だろうか。サント地方の有力者に手渡す土産物にしては、少々大きすぎる気もした。

しかし、そんな慌ただしい光景は、遠くのものに過ぎない。今まさに二両目の王族用車両に乗り込もうとしているルーティアの周りには、喧騒とは切り離されている。そもそも王女に直接話しかけるような事は、相当の役職を持つ者にしか許されない行為である。高等文官や女中長を除けば、ほとんどの者はルーティアに近寄ることすらしない。

ただし、今回は例外がいる。

ユウの姿を探して、ルーティアは周囲を見渡した。

ちょうど三両目の目の前で、ユウはセシルと手を繋いで立っていた。セシルが魔道列車の色々な箇所を指差しては、ユウが納得したような顔でうなずいている。二人とも終始無言であるから、それは少し不思議な光景にも見えたが、事情を理解しているルーティアからすれば、微笑ましくもあった。

朝、呼び出したばかりセシルは、ルーティアの方が気の毒になるくらい、緊張した面持ちだった。その強張りが、遠目に見える彼女の表情からは消えている。二人の性格の相性が良かったのか、それとも――。

セシルについては、少なくとも、これまで城内で目にした顔ではなかった。しかし、無数の女中や小間使いを抱える王城にあっては、ルーティアと直接係りになるような者はごく少数であるため、これは当然とも云える。

その人柄について、ルーティア自身が直接確かめたわけではないが、そもそも今回の一団は、国王が選別した者達である。問題を持った人間はいないだろうという安心感が最初からあった。

「上手くいつているようで、良かったわ」

小声でつぶやき、さて——と、ルーティアはアルスに切り出した。
「ソーマもこちらの車両へ来るように、伝えて来てちょうだい」

もはや何を云っても無駄と悟ったのか、アルスは疲れたようにうなずき、手を繋ぐ二人の方へ向かっていった。

一般的な車両は、多くの人間が効率的に乗車できるように、規則的に座席が並んでいるものだ。しかし、王族専用の車両となれば、そこに乗車する者はごく一部に限られる。最初から少数であることがわかっていて、大量の座席を並べる必要もなく、車両内は、むしろホテルの一室と変わらない造りになっている。

ユウが感嘆するように表情を変えたことを、ルーティアは見逃さなかった。歩み寄り、彼の手を取った。

（神様の世界にも、同じように、列車という乗り物があると聞いたわ。それと比べて、シースーアの魔道列車はどうかしら？）

（一言で云えば、興味深い）

ユウは部屋の中を見渡しながら、そう云った。

（こっちの車両に乗る前に、後ろの方も見てきたけれど、普通だと思った。新幹線……ああ、いや、俺達の世界で云うところの列車に比べて、内装はそれほど変わらないと思ったばかりだったのに、この車両は特別だな）

（まあ、王族専用だから、当然ね）

そのまま手を引いて、ルーティアは部屋の中にあるソファへ彼を導いた。すぐ傍らへ、ルーティアも腰掛ける。手は届く距離であるため、会話するにも問題なかった。

アルスに対しても、楽にするように声をかけた。

「ありがたく、そうさせていただきます」

アルスは腰に提げた剣を外すと、それを脇に置きながら、すぐ近くの別の椅子へ腰掛けた。

「到着時間は？」

「少々準備に手間取っているようです。その遅れを見積もっても、

夜までには着くでしょう」

小夜を終えて、既に昼となっている。

途中幾度か停車し、休憩する必要があることを思えば、妥当な時間だろう。魔道列車ではなく、車で旅をしていた時代ならば、もう少し長くかかる。さらに昔、馬などが一般的な移動手段だった時代ならば、数日をかけた旅になっていたはずだ。

（もしかしたら、セシルから聞いたかもしれないけれど、これからこの列車に数時間乗っていることになるわ。普段ならば退屈な時間だけれど、今回は有意義に過ごせそうね。あなたも訊きたいことが沢山あると思うけれど、それは私も同じことよ。さて、ゆつくりとお話しましょうか）

第11話「魔道列車の旅」(4)

窓の外に見える”太陽”の明度が下がり、世界が紅く包まれ始めている。

夕刻の訪れを見て、三両目内にいたセシルは席を立つ。その際、ひらひらと鬱陶しいスカートが気に障り、顔をしかめた。仕事と云い聞かせ、普段は着ないような女中の制服に身を包んでいるセシルである。その心中を察したのか、近くにいた誰かが、くすりと笑い声を漏らすのが聞こえた。思わずにらみつけるが、皆、素知らぬ顔をしていた。

ルーティア王女が乗る車両のすぐ後ろに連結された三両目は、三十名弱の人間で一杯となっている。文官や武官、或いは魔法官であったり小間使いであったり、その格好は様々だ。今は話し声も途絶え、重苦しい沈黙に満ちている。景色を見たり、本を読んだり、あるいは寝たふりをしていたり、各々が好きなように振る舞っている。セシルはそんな座席の間を抜けて、四両目に赴いた。

四両目も同じく人が乗るための車両であるが、今は、ごくわずかな人影しか見えなかった。最も入り口近くにいた上背のある男――武官の格好をして、まだ年若いその男に、セシルは声かけた。

「調子はどうだ？」

気安い言葉づかいである。

振り向いた男は、にやにやとした笑みを浮かべた。

「セシル、似合っているじゃないか。まだまだガキだと思っていたが、スカートのひとつでもはけば、ちゃんと女に見えるぜ。色街に立っていれば、酒臭い親父の一人ぐらいはカモにできるんじゃないか」

からかう物言いに對して、セシルはその向こう脛を思いつき蹴りあげた。男が悲鳴を上げる。セシルはにこりとも笑わず、むしろさらに剣呑な視線になって、男をにらみつけた。「冗談だよ、馬鹿

野郎」と男がうめいている。

「それで、どうなんだ？」

「ああ。まったく。首尾は順調だよ。なんの問題もない……って、云いたい所だが、あれだ」

男は蹴られた部分を撫でさすりながら、車両の奥の方へ顎を向けた。

武官の格好をした男と文官の格好をした男が、それぞれ一人ずつ、大きな木箱を相手に悪戦苦闘していた。服の袖を捲りあげ、たくましい腕を剥き出しにしながら、釘抜きを構えている。しかし、頑丈そうな木箱は、まだ開く気配もなさそうだった。

セシルは頭を抱えた。

「うちの一団が馬鹿なのは、いつものことさ」

そんな風に云って肩をすくめる男を無視し、セシルはさらに奥へ向かった。木箱と格闘している二人の傍へ近寄れば、床に何本か、太い釘が落ちてるのがわかった。虚しさの余り、傍らを通り過ぎる際に、木箱の側面を力いっぱい蹴りつけた。

「お嬢、やめてください」

釘抜きを持つ男の一人が、慌てたように云う。

そんな言葉を背中に受けながら、セシルは一番奥、五両目に繋がる扉を開いた。貨物室であるため、窓もなく、灯りのひとつもない室内は大変薄暗かった。目を凝らしてみれば、ようやく薄ぼんやりと、積まれた荷物などが見える。

その闇の中に、蠢く気配があった。

セシルはその気配の方に向かって足を進め、あらためて、片手の指を折りながら数を確認した。全部で七名である。問題は何もなかった。

仲間の仕事振りを疑うわけではないが、念入りにしておくことは、決して悪いことではない。床に転がされている七名を縛るロープや猿ぐつわについて、一人ずつ確認してみる。ほとんどは年配の高等文官と思しき者達だったが、一人だけ女性がいた。女中長である。

彼女はセシルの姿を見て取ると、猿ぐつわをかまされた口で、何事かうめいた。恐怖で悲鳴をあげているか、悪しざまに罵られているか、どちらかだろう。

「大丈夫だ。殺しはしない」

こんな状況下で優しい声を出しても、意味はないだろう。それでも、無駄と知りつつ、セシルは出来るだけ脅かさないように気をつけて云った。

「俺達の目的は、無駄な殺生じゃない。この後、五両目だけ連結を切り離す予定だ。そうしたら、自然と減速して、そのまま止まるだろうさ。縄はほどいてやれないが、どうせ救助はすぐ来るよ。それまでの辛抱だ」

そんな言葉と共に、縄や猿ぐつわを強く結びなおした。

立ち上がり、拘束されている七名を見渡せば、皆、恐怖に近い色を瞳に浮かべていた。荒事に慣れているとも思えない人間ばかりだ。こうして捕えてしまったならば、手抜きりはほぼ起こらないだろう。セシルはひとつ肩の荷が降りた気分で、再び四両目に戻った。

後ろ手に扉を閉めた所で、歓声があがった。

何事かと見やれば、男達が勝利の雄叫びと共に釘抜きを振り上げていた。

「馬鹿、前まで聞こえるぞ」

長身の若い男が、そんな風にたしなめていた。

セシルはふたつ目の肩の荷が降りたことを知る。木箱まで歩み寄って、最後の釘が抜かれたばかりの蓋を、手で払い除けた。それと同時に、箱の中から煙が浮かび上がるかのように、一人の大男が立ち上がった。

年齢は、四十前後である。セシルの胴回り程もありそうな太い腕をしていて、肌は浅黒く日に焼けている。醜男ではないが、その巨漢と禿頭も相まって、悪鬼のような印象を与える。人ごみの中でも一番に目立つような風貌である。

大男の名は、バージヤム・マクリールと云った。

「よう、糞親父」

「なんだ、馬鹿娘。女の格好なんてしているから、誰かと思ったぜ」
バージャムは、セシルの父である。

木箱から抜け出たバージャムは、半日近く押し込まれていた事もあつてか、凝った肩をほぐすように腕を振った。その豪快な動きを眺めながら、やはりどのようなように変装しても、この大男だけは周囲の目を誤魔化せなかっただろう——と、セシルは思う。

バージャムは四両目にいた男達に向かって云った。

「準備は？」

「終わっています。みんな、前の車両で待ちくたびれていますよ。
お頭が出てくるのを、ずっと待っていたんですからね」

皮肉めいた物言いに、バージャムは「馬鹿野郎」と吠えた。

「時間がかかったのは、俺のせいじゃなくて、釘を打った奴のせい
だろうが」

至極まっとうな物言いだった。

しかし、セシルは常々感じていた疑問をぶつけてみる。

「それはそうだけど、そもそも糞親父まで来なくてよかっただけじゃないのか？」

他の者とは違い、目立つ風貌ゆえに、バージャムは変装もできなかった。そのため、荷物にまぎれて潜入するという手間をかけた訳だが、その手間をかける必要があったのか——と、セシルは問うた。
「念には念を入れた方がいいからな。特に、今回の獲物はこれ以上ない逸品だ。粗野なお前達に任せて、傷つけられたりすると困る。
要は、いつもと一緒だ。俺はお前らの子守役ってわけだ」

そんな風に云い放つと、バージャムは三両目に向かった。

勢いよく扉を開けば、三両目にいた者達が全員、いつせいに振り返った。車両内は不思議な静けさに満ちていたが、それはすなわち、嵐の前の静けさである。良い意味での緊張感が漂っていた。バージャムは満足そうにうなずいた。

それから、声を潜めて、こう宣言した。

「待たせたな、お前ら。さあ、仕事を始めるぞ」

盗賊団『暁の死線』。

その頭目であり、無法者の王とも揶揄されるバージャム・マクリルが、獲物を目前にして笑った。

「お姫様を誘拐するぞ」

第12話「暁の死線」(1)

ルーティアは数時間、ユウとの会話を続けていた。

魔道列車が順調に走行を続けるように、情報の交換もスムーズだった。神の世界については、過去に保護された天使の調査で、多くの事柄がわかっている。既知の情報と照らし合わせながら、彼という個人の詳細も調べる形になった。

名前や生年月日、職業から家族構成と云った基本的な事項はもちろん、シースーアにおいて有用となる技術や知識の有無も含めて、念入りに聞き取りを行っていた。それらの情報は、然るべき書類にまとめた後、三大国連携の研究機関に提出しなければならぬ。

ただ尋ねるばかりでは、尋問と変わらない。

ルーティアは会話をするように努めた。

(やっぱり同い年だったわね)

(誕生日まで同じとは、予想外だけどな)

生年月日を確認した際には、のように笑い合った。両親が健在であり、兄弟がいないことを聞くに及び、ルーティアは自身の境遇も述べた。

(私のお母様……つまり、アーカスの正王妃であるセシリア・フェイメオールは既に故人よ。国王である父に、一般的な父親との関係性は望めなかったから、家族はいないも同然ね)

ただし、国王は側室を三人抱えており、腹違いの弟や妹ならば何人もいた。(王位の継承を巡って、いざこざがありそうだ)と、ユウは云う。王城に関わる者ならば口が裂けても云えないような感想である。

尋ねた事柄について、ルーティアは自身も同じだけの情報を与えるように意識していた。シースーアという世界を理解してもらうためには、そこに住まう人間を知ってもらうことが大切だ。自分という個を通して、シースーアの在りようを見てもらえれば良かった。

（あなたのお父上は、何をされているのかしら？）

ふと何気なく尋ねた質問に、ユウが云いよどむ。後ろめたいところがあれば、特に隠す必要もない事柄だ。ルーティアが不思議に思っている、ため息と共に答えがあつた。

（政治家）

ルーティアは思わず歓声を上げそうになった。神様の世界の政治形態について、常々、踏み込んだ内容を知りたいと願っていた。シリーズにおける王制の仕組みは、統一期から連綿と続いており、確固たるものと評価されて来た。それがジンドの崩壊、群国家バースタイムの誕生に端を発する民主主義の隆盛により、揺るぎ始めている。

新しい風が吹き始めている中、帆を畳んで縮こまっている余裕はない。学べるもの、参考になるものが目の前にあるならば、貪欲に吸収するべきだ——ルーティアは、そう考える。

互いの個人的な話から、それぞれの世界の大局的な話へ、内容が移った。ユウはやや辟易していた様子だが、ルーティアはあえて気づかない振りをして、あれこれ興味を持っていた事柄を聞き出していた。民主主義の利点と欠点、選挙のメカニズム、国民の総意について——等々。

非常に有意義な時間が流れた。

「姫様」

どれくらい経っただろうか。

時間も忘れるほどに話し込んでいた。

「お疲れではありませんか？」

魔法での会話には、それだけ集中力を必要とする。数時間にもなれば、倦怠感を覚えるほどだ。アルスに云われて、ルーティアは自身が予想以上に消耗していることに気づいた。一心不乱に本を読んでいた後のような、軽い眩暈すら感じた。

（ごめんなさい。少し、休憩にしましょう）

手を離れた後、ルーティアは深くソファアにもたれかかった。

頭を休めるため、何気なく窓の外へ目を向ける。高速で進む魔道列車ゆえに、外の風景も、近くに見えるものはあつという間に通り過ぎてしまう。視界を広くすれば、そこは広大な森である。出発してから時間を思えば、ちょうどアーカスとバースタイムの国境沿いに広がるシェイウツドの森だろう。

会話を一旦やめた後、ユウの方はソファから立ち上がった。室内を物珍しそうに見て回る。一番興味を示していたのは、書籍である。室内に備えられた小さな本棚には、暇を空かすためか、有名な作品や近年の話題作が一通り並べられている。

ユウはその一冊一冊を手に取り、中身を確かめていた。

本の内容ではなく、書かれている文字が気になるようだ。その内の一冊を手元へ持って来ると、まるで暗号でも解読するように文字を追いつ始める。どういった観点で眺めているのか、若干気にはなっていたが、疲れもあり、話しかけることはしなかった。

「アルス」

ルーティアは、疲れを隠さず云った。

「お茶を淹れてくれるように、頼んでもらっていいかしら。そうね、ソーマに付けていたセシルがいいと思うわ。彼が望むならば、セシルに話し相手になつてもらえばいいでしょう」

アルスはうなずき、三両目へ向かった。車両内は広い。ルーティアは遠目にその背中を追いかける。連結部の扉で、アルスは手間取っているようだった。しばらく扉越しに問答があり、やや経つてから、向こうから扉が開けられた。

「申し訳ありません。扉に何か、引っかかっていたようで……」顔を见せて言い訳する文官に対し、アルスは手早く用件を告げていた。

それからアルスが席に戻り、「遅いですね」とつぶやく程に時間が経つてから、ようやく給仕道具一式を備えたセシルがあらわれた。その表情をうかがえば、今朝初めて言葉を交わした時と変わらず、極度に緊張しているようだった。

年若い女中であれば、よくある反応だ。

だが、ルーティアはどこか違和感を覚えた。

「姫様」

アルスが常より低い声でつぶやいた。

その声に含まれたものを、ルーティアは敏感に察する。

「そこで止まれ」

主であるルーティアに許可を取る前に、アルスは行動を起こしていた。

低く抑えた声で一喝すると共に、彼は剣を抜き放っていた。ルーティアは顔色ひとつ変えずに、見守ることに決めた。傍らをつかがえば、ユウは眼を丸くしている。

剣を向けられたセシルと云えば、身を堅くして、立ち止まっている。言葉も出ないようで、口を開きかけては、また閉じる——という動きを、何度か繰り返ししていた。茶器を載せた盆を持つ手が、かすかに震えている。

剣を向けられた反応としては、至極まっとうなものだ。ルーティアは眼を離さず、セシルの様子をつかがい続けた。

アルスはなおも警戒した姿勢を崩さず、慎重に一步步、セシルとの距離を詰めていた。剣先は、ぴたりとセシルの身体を射抜いたままである。剣の間合いぎりぎりの所で、アルスは一度足を止めた。どうするつもりだろうか——と、ルーティアが見守っていると、アルスは唐突に一步を踏み込み、剣を横薙ぎに振るった。

茶器や盆が床に散乱し、派手な音を立てた。

息をつめたような静寂を破り、時間が早送りで流れ出す。

セシルは後ろへ飛び退いていた。その動きを見て、まずはルーティアも確信する。アルスの剣を避けられる者が、ただの女中であるはずがない。そして、その違和感は、さらにわかりやすい形となって目の前に示されていた。

アルスが横薙ぎに払った剣で、セシルの着ている制服のスカートが一部、ざっくりと斬り落とされていた。元は膝下まで届く長さで

あつたが、太股まであらわになっている。そして、まさにその太股に、巻きつけるようにして大振りの短刀が隠されていた。

セシルは間髪いれず、その短刀を抜き放つ。手慣れている。身構える様に、戸惑いがない。先程までの緊張した面持ちから豹変し、その瞳が殺気に満ちていた。相手が隙を見せたならば、一足飛びに懷へ潜り込んでやろうという気迫が、ありありと見て取れた。

「姫様、どういたしましょうか？」

アルスは、涼しい声である。

「捕えなさい」

「かしこまりました」

刃物を持ち、殺気を放つ相手と向かい合っても、アルスの表情は何一つ変わらない。敵が短刀で、自分が長剣であるから有利を感じているわけでもないだろう。彼にはただ、戦う覚悟があるだけだ。

殺気がぶつかり、緊張が高まる。

まさに両者が動き出そうとした瞬間だった。

「邪魔するぜ」

それは、気が抜ける程に殺意も敵意もない声だった。

一人の大男が、車両の中へ足を踏み入れてきた。彼に続いて、文官や武官の格好をした男達が、それぞれ手に武器を携えてなだれ込んで来る。

ここで初めて、アルスの顔色が変わった。ルーティア自身、思わず目を見張っていただろう。セシルがただの不埒者であるか、どこかの間者であるか、それはまだわからないことだったが――少なくとも、大勢の仲間がいることは想定していなかった。

王城で雇われること、王族の傍へ仕えることは、それほど簡単ではない。身分の保障は絶対であるし、一定以上の身分を持つ者の推薦も必要だ。邪な目的を持つ者が一人潜り込んでいただけでも、大問題に発展するだろう。

それが、こんなにも大勢となれば――。

「悪いが、この列車は制圧させてもらった。抵抗は無駄だと悟って

もらおう。お前達が部下だと思っていた者はほとんど、こちらの手の者だ。何人かいた真正銘の本物——そんな城の奴らは、最後尾の車両と共に退場してもらった。つまり、この列車内に、お前らの味方は一人もいないってことだ」

大男が、教え諭すように云う。

その言葉の内容も衝撃的だったが、男の存在自体も、同じ程度に衝撃的だった。厳めしい顔つきに、天を突くような巨体。その風貌は、ルーティアも手配書の類で目にしたことがある。犯罪者として、シースーアでは名が知られた男だ。

犯罪者として。

犯罪者の、王として。

「盗賊団『暁の死線』、その頭目であるバージャム・マクリール殿とお見受けします。盗賊王の御高名、アーカスの王城でも聞き及んでおります」

ルーティアは意を決した。

「アーカス第一王女、ルーティア・フェイメオール・ディルム、お初にお目にかかります」

立ち上がった。

名を告げた。

対峙する。

第12話「暁の死線」(2)

かつての大国ジンドが滅び、バースタイムが建国されて安定期を迎えるまでには、ごく短い期間とはいえ、大陸の情勢が不安定になった時期がある。治安が乱れ、犯罪に手を染める者が増える一方で、そんな無法者を束ね、秩序をもたらす集団が生まれた。

盗賊団『暁の死線』。

海賊『黒蜘蛛』。

傭兵ギルド『黄色い部屋』。

とりわけ巨大な勢力を誇った三つの集団、それを率いる三人の首領を、俗に《無法の三王》と称した。もともと後ろ暗い所を持つ者達の集まりである。《無法の三王》がそれぞれ率いる集団は、各国の討伐対象にされることもしばしばだった。

だが、現在では全面的な衝突が起こることは稀である。

彼らが社会の秩序を暗部から守っていることは事実であり、各国も暗黙の内にそれを認めていた。手配書や賞金はそのままだが、事実は野放しと云っても良かった。

そんな《無法の三王》の一人。

盗賊王。

バージャム・マクリール。

その風貌や人柄について、世間一般にも広く知られた男である。

ジンド崩壊後の混乱期に登場した後、盗賊団『暁の死線』を組織し、義賊としてバースタイムの安定に貢献したという話だが、それ以上の出自は謎に包まれている。厳めしい風貌と裏腹に、決して弱者を蹴るような真似をせず、悪党だけを懲らしめる姿勢は、義賊として一部に持てはやされている。

そんな男が、どうしてこの魔道列車にいるのか。

「単純な話です、ルーティア王女」

バージャムは云う。

「俺達の目的は、あなたですよ。現状のアーカスで最高位の王位継承権の持ち主で、国王からの信頼も厚く、国民からの人気も高い——そんなルーティア王女の価値は、どんな金銀財宝よりも高いと云えましょう。警備にはもつと気を使っべきでしたな」

軽口と共に笑いかけるバージャムに、ルーティアは反射的に云い返した。

「噂で聞いていた盗賊王の評価とは異なりますね。『暁の死線』は、刹那的に金銭を求めるような盗賊団ではないと聞いておりました。あなた達が狙うのは、あくまで非道を行う為政者や悪行によって富を蓄えた者達であると……」

「ええ、仰る通りです。別にあなたを誘拐して、アーカスから身代金をせしめようと云うわけじゃありません。俺達は、そうした尻の穴が小さいやり方は好きじゃない」

バージャムの言葉に、仲間達が笑い声を上げる。

「安心してください。俺達は悪い奴らしか狙わない。ルーティア王女、あなたを悪党だなんて思っちゃいません。だから、扱いは丁寧にいたしますよ。王城での暮らし程とはいかんでしょうが、まあ、粗野な盗賊団ながらの最高の持て成しは約束しましょう」

誘拐する——暁の死線の目的は、そういう事らしい。

三大国アーカスの王女を誘拐すれば、世界的な大事件になるだろう。各国と無法の三王の安定していた関係にも、大きな亀裂が入る。少なくとも、アーカスとは全面的に敵対することになるはずだ。

宣戦布告にも等しい行いだ。

盗賊王率いる暁の死線と云えども、ただの犯罪集団であることに変わりはない。一国の王女を誘拐するなど、彼らには何の利益も生み出さない。不要なりスクを背負い込むだけだ。

「あなたの目的は何ですか。私を、どうしようと云うのですか？」

感情的に叫んだわけではない。

ルーティアは、バージャムの真意を知りたかった。

「目的ですか。俺達に——いや、その云い方は、違いますな。今回

『暁の死線』が動いた理由は、俺の個人的な感情による所が大きい。だから、こう云いましょう。――俺に、目的なんてものはありません」

バージャムは、はつきりと述べた。

「あなたを誘拐することは手段ではなく、それ自体が、目的とも云えましょう。身代金や捕らえられている仲間の解放を要求するつもりもあります。あなたに何かしていただくつもりも、今のところありません。大人しく俺達と一緒に来ていただいて、ゆっくりとおくつろぎいただければいい。人気者のルーティア王女は、大変に多忙な生活をされていると聞いております。羽休めとも思ってください」

バージャムは不敵に笑った。

ルーティアは努めて冷静な振りを装っていたが、状況がかんばしくないのは明らかだった。車両を繋ぐ扉は、今は大きく開け放たれており、奥の車両の様子がよく見えた。だが、そこに居並ぶ者達も、バージャムに付き従うように沈黙している。ほとんどの者が彼らの仲間だったという話は、偽りではないのだ。

ルーティアは心の内で歯噛みする。

しかし、事実が残酷にもその通りであったとして、どうしても腑に落ちない部分が残る。

「わかりません。これ程の大規模な企み、いくら無法の三王と云えども、簡単に為せるものではないはずです。特に、王城に潜入し、あまつさえ王女である私のすぐ傍まで……」

言葉にしている内に、ルーティアは唐突に思い当たる。

自らの想像に、ぞっとした。

これ程の計画は、王城の中に手引きをする者がいなくては、とても成り立たないのだ。一人や二人の潜入ではない。ルーティアの供をする一団のほとんどが、盗賊団に取って代わられているのだから。内通者がいたとしても、相当な高位のものでなくては無理だ。

ルーティアは、思わず口を閉ざした。

——震えるな。

自らを叱咤し、冷静さを顔に貼り付けて、バージyamをにらみつけた。

「なかなか、気丈でいらっしやる」

バージyamは、どこか楽しそうに、つぶやいた。

「まさに、セシリアの生き写しですな」

機会をはかっていたのだろう。

唐突にその瞬間、アルスが踏み込んだ。

消えた——と、思わせる程の速さである。常ならば、誰かが気付くよりも早く、相手の心臓を貫いていただろう。虚を突いた必殺の一撃。アルスは、まっすぐバージyamだけを狙っていた。

だが、血飛沫が舞うかわり、響いたのは、剣の打ち合う硬質な音だった。

胸元に迫ったアルスの剣を、バージyamは一瞬で抜き放った長剣で、苦もなく防いでいた。バージyamは笑った。アルスの無表情が、ほんの少し、驚きに染まる。だが、それもまた一瞬の事だ。

両者の間合いは離れず、そのまま打ち合いになった。

「てめえら、退いてろ。巻き込むぞ」

バージyamが仲間に向かって吠える。そのまま広い車両内を動き回っての剣劇になった。その巨体に似合わず、バージyamは素早い身のこなしで、アルスの剣を防いでいく。アルスの方も、倍ほども体格の違う相手が打ち降ろす剣を、真っ向から受け止めていた。

アーカスの騎士団で、若くして才能を見出されたアルスは実戦経験も豊富である。ただの盗賊程度であれば三十人が相手でも斬り伏せてしまっだろう。

しかし、相手は盗賊団『暁の死線』。

盗賊王バージyam。

たかが盗賊、真正面からの戦いには非力と、侮ることはできない。アーカスの騎士団が直接討伐に出向いた記録はないが、近隣の小国が、盗賊王の首を狙って自国の部隊を派遣することは、これまで何

度もあつた話だ。

結果、鍛錬を積んだ武人達は、ほとんどが返り討ちにあっている。卑怯な手を使われたわけではない。名のある猛者であればある程、バージyamは正々堂々の一騎打ちを行い、その上で完膚無く叩きのめしてきたと云う。

「アルス」

結局、ルーティアは途中で戦いを止めた。

アルスは呼び声に反応し、素早くバージyamとの距離を開いた。怪訝な顔で振り返るアルスに対し、ルーティアは心の内で謝った。アーカスの天才騎士と無法の三王、その戦いをもう少し眺めていた気持ちも正直あつたが、ここでアルスが手酷い怪我を負うことになつては困る。

そして、何よりも、ルーティアは確かめなければいけなかった。

「盗賊王バージyam・マクリールよ」

王女らしい振る舞い。

王女らしい声。

王女らしく、ルーティアは呼びかけた。

「この計画を企てた黒幕は……」

ルーティアは思う。

生まれた時から身につけており、生涯、どれだけ忌み嫌つても己の肉体から切り離せなかった——王女の仮面というそれを、ほんのわずかでも、愛しく思う瞬間が来るなど、想像もしていなかった。

ルーティアは、最後まで、王女らしく努めた。

——この計画を企てた黒幕は……。

「我が父、ウィルヘルト・ディルム国王陛下ではありませんか？」
アルスが、制された後もバージyamへ向けていた剣を、ゆつくりと下ろした。部屋の隅へ退避していた盗賊団の男達が、頭目から何も聞かされていなかったのか、眼を丸くしていた。その中にいるセシルなど、思わず何事か大きく叫びかけて、他の者から「馬鹿野郎、黙っている」とたしなめられている。

動じていない者は、バー ज्याムただ一人だけだ。

なにを馬鹿な——と、笑われた方が楽だっただろう。

「ええ、その通りです」

予想通り、望まない答えが返ってきた。

「この計画を持ちかけてきたのは、アーカス国王ウィルヘルト・デイルム——つまり、あなたの父君です。その手引きがなければ、これだけの人数を王城へ潜り込ませることは不可能でした。そして、誘拐するのに都合の良いように、あなたを王城から外へ出すように仕向けたのも国王の発案です。これが全て国王の意思のもとに行われた事ならば、あなたに逃げ道はないこともわかりでしょう」

第12話「暁の死線」(3)

気を強く持つているつもりだったが、呆然となっていた。

「姫様」

アルスの頬を打つような声に、我を取り戻した時には遅かった。傍観者の一人に過ぎなかったセシルが、短刀を片手に詰め寄って来ていた。視界の隅で、アルスがこちらへ駆け寄ろうとして、バージャムに阻まれるのが見えた。せめて剣があれば——と、悔やんでも遅い。首筋にぴたりと吸いついた刃物に、ルーティアは動きを封じられる。

「動くなよ」

すぐ耳元で、セシルが脅しの言葉を吐く。

「おい、糞親父。これでもういいだろ？」

「馬鹿娘。勝手に動きやがって」

バージャムは迷惑そうに顔をしかめていた。そして、剣を収めた後、アルスの方を無言で見やった。

視線の意味を、すぐさま理解したのだろう。アルスは表情を変えないまま、剣を床に放り捨てた。静まった部屋に響いた音が、終わりを告げる鐘の音のようだった。

バージャムが仲間達に合図すると、控えていた数人の男がアルスの周りを取り囲み、その体を押さえつけ、両手を縛りあげていく。

ほぼチェックメイトだった状態が、完璧に詰んでしまった。

どう足掻いても、もう一手も動かすことはできない。

「さて、ルーティア王女」

バージャムは云う。

「これで、ご自慢の騎士殿も無力化しました。あなたに残された最後の武器も失った以上、抵抗は無意味だと悟ってもらえますかな？」

「ええ、わかっています」

そもそも首筋に刃物を押し当てられた状況だ。

ルーティアには、逆転の手立ては残されていなかった。仮に、この場をどうにか切り抜けたとしても、もはや逃げ場はない。国王が本当にルーティアを貶めたのならば、少なくとも、アーカス国内に居場所はないことになる。

王女という仮面。

それを失い、ただ一人の少女となった瞬間、こんなにも自分は無力なのだ、ルーティアは思い知らされた。

「色々と腑に落ちない点もございましょう。難しい話になりますので、それらは落ち着ける場所に着いてからということでもよろしいですか。ルーティア王女、今は、大人しく俺達といっしょに……」

バージャムが云いかけた言葉は、途中で、不自然に途切れた。

瞬間、悲鳴があがった。

痛みを訴える少女の悲鳴——セシルの悲鳴だ。首筋から刃物が離れたことを察し、ルーティアはその場を急いで飛び退いた。

振り返り見た光景は、予想外のものだった。

「ソーマ」

思わず、叫んだ。

これまで部屋の片隅で静観していた黒髪の少年が、背後からセシルの腕を捻りあげていた。悲鳴を上げたセシルは、さらに関節を強く曲げられて、とうとう短刀まで取り落とす。

彼はそこで足払いをかけると、セシルを床に押し倒し、片腕だけでその身柄を拘束してしまった。セシルは足をばたつかせて、悔しそうに叫んでいるが、背中から一人分の体重をかけられては逃げようもない。

ユウは、ため息をついていた。

困惑した視線を向けられて、ルーティアは、今の今まで、彼のことを蚊帳の外にしていたことを恥じた。そして、説明を求めるような視線を見て、これ以上ない感謝も覚えた。彼は、何も状況を理解できないまま、ルーティアを助けてくれたのだ。

天使である彼には、大国の王女である身分など関係なかったはず

だ。

使命感も打算も、彼にはなかったはずだ。

刃物を持った相手に立ち向かう——そんな危険を犯してまで助けてくれた理由が、ルーティアにはわからない。出会ってから、一日足らず。言葉は多く交わしたが、互いに踏み込んだ話をしたわけでもない。

感謝という言葉では足りないだろう。

しかし、何かを伝えなければと思い、ルーティアは無意識に手を伸ばした。

（大丈夫か？）

手を繋ぐなり、彼はそう云った。

ルーティアは言葉に詰まり、結局、溢れだした言葉をそのまま伝える羽目になった。

（馬鹿ね）

盗賊団が踏み込んで来てから、言葉のわからない彼は、どのような想いを抱いて状況を見守っていただろうか。右も左もわからない彼が、突然に目の前で剣の打ち合いが始まったのを見て、不安を覚えなかったはずがない。それなのに、今、ユウは自分のことよりもルーティアのことを心配している。

（無茶をするわね。怪我をしたら、どうするつもりだったの？）

（大丈夫。どうにかなった）

それは結果論だ——などと、無粋な反論はしない。

ユウは短く、こうつぶやいた。

（あいつなら、きつとこうする。『代理』らしく、俺は……）

途中で言葉を切ると、彼は厳しい視線をルーティアへ向けた。
（悠長に話している時間はないよな。どうなっている……いや、どうする？）

迷いの霧が晴れた——と、言い切ることは難しい。

だが、足掻く気力ならば、不思議と湧き出でていた。

自由について、想う。

生まれた時に、自分の意思とは関係なく与えられた王女の仮面を、これまで切り離すことなどできなかった。自分の宿命を受け入れ、その責務を果たすこと——それを為さずして、自由を求めることはおこがましいと思っていた。しかし、一方で、自由というものを夢想した。

今、この瞬間こそ、ルーティアは何にも縛られない。

思うがままの行動を、ルーティアは初めて望む。

（ソーマ）

叫んだ。

（お願い）

心の底から願う。

（私は、ここから逃げたい。助けて）

第13話「代理」(1)

たとえば。

ぶらぶらと歩いていた繁華街で、何気なく見た路地裏に、暴漢に襲われる少女がいたとする。それに気がついていてる者は自分以外になく、助けを呼ぶ暇もなかったとする。

事情はわからない。

少女に危険が及んでいることは明らかである。しかし、わずかな可能性とはいえ、暴漢と思しき男達こそ、正義の側にあるかもしれない。少女が百人以上を殺した殺人鬼であつたり、あるいは少女の皮を被った化物で、暴漢はそれを捕らえたり、退治したりする正義の味方かもしれない。

だから、選べない。

考えれば考えるほど、身動きが取れなくなる。

「君は、馬鹿だ」

伊吹カナは、心底呆れた顔で、そう云った。

「正解は、既にある」

答えは、太陽や月のように、当たり前そこにあり、問いかける必要もないものだ、と、彼女は云った。そんなチープな説明をさせるなんて――などと、彼女は憤ってすらいいた。

「心に従え」

彼女のアドバイスは、明瞭だった。

「先のたとえ話だけれど、僕ならば、少女を助けるよ。有無を云わず、暴漢を叩きのめしてあげる。もしも、その少女が殺人鬼だったならば、僕はその次に少女を叩きのめそう。そして、暴漢と勘違いした男達に謝ろう。それだけのことだ。くだらない、くだらない」

彼女は、ヒーローだった。

伊吹カナならば、どうするか。

ユウは、いつでもそのことを考えていた。

何かを選択しなければいけない時、常に彼女のことを思い出した。その言葉、その意思を心にコピーして、彼女が為すべき事を、彼女が進むべき道を、自分が違えないように必死だった。しかし。

どれだけの犠牲を払っても、能力は足りず、実力は足下にも及ばない。自身が苦心する事も、彼女ならば口笛を吹きながら解決するだろうこと、ユウはとっくの昔にわかっている。

だから、滑稽だった。

間抜けだった。愚かだった。

カナは、一切の勉強なく、全教科で満点を取る。ユウは真面目に授業を受けて、日々の予習と復習を欠かさない。

カナは、一目見ただけで、書類の不備を見抜く。ユウは放課後残って、委員会やクラブの書類とにらめっこする。

カナは、いつでも余裕綽々で、敵を薙ぎ倒す。ユウは呆れるほど無様に、色々なものを失ってしまう。

全て、滑稽だ。

天才の所業を真似するため、凡人が見得を張っている。無駄な足掻きである。馬鹿にされて当然だった。そもそもユウ自身が一番、馬鹿らしいと思っていた。

それでも、考える。

それでも、考えてしまう。

——伊吹カナならば。

彼女は、ヒーローだった。

ユウは、代理である。

だから、結局、答えは最初から決まっている。どれだけ困難な状況でも、立ち上がらなければいけない。どれだけ危険な状況でも、立ち向かわなければいけない。情けなく、無様でも、かまわない。滑稽な程に愚かしくも、泣きたくなる程に間抜けでも——それでも、

ユウはヒーローであることを願う。

たとえば。

一人の少女が、窮地に陥っている。

見た目にも悪鬼のように恐ろしい男が、リーダーなのだろう。手に手に武器を持った男達が、少女を逃がすまいと取り囲んでいる。刃を向けられながらも、少女は毅然として前を向き、凜とした声で敵に立ち向かっていた。

事情など、まるでわからない。

——カナならば、どうするか。

ユウも、その選択肢を選ぶことをためらわなかった。

（わかった）

ルーティアの手を、強く握る。

（お前を、助ける）

——さあ、足掻け。

——考えろ。

——何ができる？

ユウはずっと、状況を静観してきた。

先程は、アルスと大男が派手に争う光景を見たばかりだ。素人のユウが見ても、両者共に剣の扱いに熟達していることがわかった。戦いを生業にする者の熟練した技術——それは、同じ土俵で争っては、万に一つも勝ち目がないことを教えるに十分なものだった。

それでなくとも、この場を取り囲む敵の数は多い。単純な力押しで突破できるものではない。車両から外へ逃げ出すにも、列車は高速で動き続けている。この状態では、隙を見つけて飛び降りることもすらできない。

ユウ一人が暴れて、解決するような甘い状況ではなかった。単純な力押しでは、まず何の成果も上げられないだろう。

正攻法が通用しない。

カナならば真正面から突破するだろう困難に対し、代理たるユウは歯噛みしながら、姑息な手段を考えるしかない。

（ルーティア、奴らの目的は？）

言葉はわからなくとも、場に漂う雰囲気、言い争う表情から、ユウは大体の察しをつけていた。

（お前の誘拐が狙いじゃないのか？）

（ええ、そうよ。その通り。私の身柄が目的みたい）

ユウは、口の端で笑った。

（俺達の会話は、他の奴らには聞こえないな？）

（ええ、もちろん）

（奴らは、お前を何かの取引に使おうとしているのか？）

（わからない。でも、手荒な真似はしたくないみたい）

そこまで聞ければ、十分だった。

もたもたと時間をかければ、手詰まりになる。

覚悟を決めた直後、ユウは行動に打って出た。

片手で掴んだルーティアの手はそのままに、セシルを拘束していた手を解く——その手で、間髪入れず、近くに落ちていた短刀を拾い上げた。

左手は、ルーティア。

右手は、短刀。

その体勢のまま、強引にルーティアの手を引いて、車両の奥側へ後退した。取り囲むように身構える男達から、ちょうど距離を離す格好だ。

ふらふらと立ち上がったセシルが、目だけで射殺するような殺気を見せていたが、今は無視するしかない。捻り上げた関節がまだ痛むのか、彼女は悔しそうな顔で、仲間の方へ身を寄せていた。

敵のリーダーと思しき大男は、三両目の車両と連結する入り口から、わずかに進んだ所に立っている。アルスは拘束された後、既に三両目の方へ連れて行かれてしまった。そのため、この車両内に見えるのは敵ばかりだ。

「動くな」

ユウは叫んだ。

通じるはずのない言葉だが、問題ない。

激しさと語調だけでも伝われば、それで十分だ。

リーダー格の大男を含め、敵の一団全員が、驚いたように息を呑んだ。その反応を伺い、ユウはまず上出来と確信する。表面はマグマのように熱く装い――声を荒げ、目を血走らせる。内心は裏腹に、氷のように冷めた状態に努める。

片手に握った短刀は、ぴたりと、ルーティアの首筋に突きつけていた。刃先は、彼女の白い肌に、軽く押し当てている。ほんの少し角度を変えれば、血が吹き出すだろう。

（ルーティア、悲鳴を……）

後ろ手に彼女の動きを封じるような格好だった。すぐ間近にある深緑の瞳が、驚きに見開かれていた。その身体が、緊張して強張るのが感じられる。

張り詰めた静寂が満ちた。

ユウは短刀を持つ手に力を込め、再度、呼びかける。

（悲鳴をあげる。あいつらに……）

（いいえ）

返ってきた声は、予想外に冷静だった。

（ここで叫ぶのは、私らしくないわ。先程セシルに捕まった時も、悲鳴なんてあげなかったでしょう。だから、ここは、少しだけ驚いたような顔で、息を呑んで黙っているのが正解よ）

事前に打ち合わせたわけではない。

演技をするよりも、むしろ本気で悲鳴をあげてくれた方が、敵を騙すには良いだろうと考えていた。そんな浅はかな計画を、ルーティアは見事に飛び越えてみせた。

ユウは驚きつつも、嬉しくなった。

（お前、本当にただの王女様？）

（そちらこそ、見事なはったりよ）

敵の目がなければ、互いに笑い合っていただろう。

（説明は、特にいらないか？）

（ええ。上手くやりましょう）

出会ってから一日足らず。

実際の所、ルーティアという少女については、何も知らないのに等しい。その気質や能力は、まったくの未知だった。それが今、ユウの持つそれらと、歯車がカチリと噛み合わさるように、見事に合致したように思えた。

それ以上の言葉は必要なかった。自分がやるべきことをやれば、ルーティアも最善の動きを見せるだろう。窮地の場面において、それは不意に生まれた信頼感だった。極限の中で得られた、最後の武器だった。

ユウは再び、勢いよく叫んだ。

「離れる。近づくな。そのまま武器を捨てろ」

何を叫んでも良かったが、演技に熱が入るように、ユウはこの場に併せた台詞を吐いた。もちろん、何を云われたかわからない者達は、戸惑ったように沈黙するだけだ。

（ルーティア）

（任せて）

そこで、今度はルーティアの番だ。

彼女は必死の様相で敵方へ語りかけ始める。それは、ユウには理解できない言語である。果たして、どのように状況を動かすつもりなのか——ユウが見守っていると、その場にいる者達が明らかに狼狽した様子になった。

（何か叫んで）

と、ルーティア。

「黙れ」

ユウは声を荒げて、彼女の腕を締め上げるようにした。

実際はほとんど力を入れていないが、ルーティアは痛みに耐えるように、顔を歪ませる。

（それで？）

ルーティアの役目がひとまず終わったと判断し、ユウは問いかけ

る。頭の中、彼女の楽しげな笑い声が聞こえた。

ユウは内心で舌を巻く。その内心と裏腹に、ルーティアの表情は、毅然としながらも恐怖に耐えるように青ざめている。あまりに見事な役者ぶりだった。

（ごめんなさい。あなたには、悪者役になってもらうわ）

（問題ない。最初から、そのつもり）

肝心なのは、敵にどのように説明したか。

そして、どのように要求を出したか。

（まず、あなたが随分と混乱していることにしたわ。墮界したばかりの天使が、いきなり争い事に巻き込まれれば、それは戸惑って当然の話よ。激しい剣の打ち合いを見て、自分にも剣が向けられるかもしれないと恐れた。そこで、身を守るために人質を取った）

ストーリーとして、ひとまず破綻はないだろう。ユウ自身、想定していた流れはそのようなものだ。

（あなたの言葉は通じない。だから、私が、あなたの言葉を代弁する——という建前ね。あなたの要求は単純で、ここから逃げたいというもの。敵から十分に逃げられたら、私を解放すると云っている。だから、私はバージャム……盗賊団の首領ね、あの大きな男よ。バージャムへ、ひとまず列車を止めることを提案したわ。列車を止めて、まずは要求に従う様子を見せて、この天使を落ち着かせるべき——そんな風に、提案してみた）

（なるほど、悪くない）

むしろ、現状を少しでも改善するために、ユウが狙っていた通りの展開だ。

（それで、反応は？）

（悩んでいるみたいね）

大男——バージャムは、渋面のまま、こちらをにらんでいる。禿頭の巨漢にそんな風に射抜かれ、あまり良い心地はしなかったが、今は我慢するしかない。せいぜい危険人物を装って、話の信憑性を上げてやるぐらいだ。

果たして、どう出るか。

列車が止まってくれば、少なくとも、外へ逃げ出す事が可能になる。それだけでは解決にはならないが、八方塞がりの現状よりは、まだ幾らかの可能性が出てくる。

ユウはただの演技というだけでなく、息を呑んだ。相手の出方次第では、さらに荒っぽいやり方も必要になってくるからだ。

第13話「代理」(2)

結局、列車は止まった。

空調の効いた車内だったが、気がつけば、額に汗が浮いていた――それくらいの時間、敵側は熟考していた事になる。

バージャムが仲間へ一声かければ、そこからの展開は早かった。やがてわずかな振動と共に、列車の速度が落ち始めた。窓から見える風景の流れが、徐々にゆっくりとなる。列車が完全に止まりきるまで、誰も一声も発さなかった。

(ルーティア、窓を破れると思うか?)

(無理でしょうね)

(やっぱり、ちゃんと出口から出るしかないか)

アクション映画のように、窓を破って、飛び出す方法が取れば楽だった。

相手の人数は多く、こちらが使える武器と云えば、はったりぐら이다。圧倒的に不利な状況下である。ぎりぎりの交渉が何度も成功するとは思えなかったが、まだもう少し、胃の痛くなるような駆け引きを続けなければいけない。

(とりあえず、外に出よう)

(ええ、まずそれからね)

ユウは「退がれ」と一喝した。すぐさま、ルーティアが翻訳に加えて、懇願を始める。先程とは違い、今度はバージャムの反応は早かった。すぐさま部下を三両目の方へ退がらせて、車両の出口を解放した。

(罠と思うか?)

(でも、行かない訳にはいかないわ)

警戒しながらも、ユウはルーティアを連れて、車外へ出た。発着駅でもないレール上で停止した列車の外は、ただの平原だった。走行中から見えていた広大な森が、すぐそこに広がっている。

だが、森へ逃げ込むことを妨げるように、盗賊団の面々が外を取り囲んでいた。

（三両目から先に降りていたのね。これでは、簡単に逃げられない）
ルーティアが云うと同時に、今出たばかりの列車の扉が閉まった。逃げ道をひとつ、封じられた事になる。背面は列車に塞がれ、目の前に見える森へ逃げ込むためには、ぐるりと取り囲む盗賊団を突破しなければいけない。

（バージャムが来たわ）

別の出入り口から降り立った大男が、ゆっくりとした動きで、こちらへ向かってきた。「止まれ、来るな」と叫んだユウに対して、バージャムはぎょろりと目を向ける。

歩みを止めない彼に対して、ユウは慌てて、短刀をルーティアの喉元へ近づけた。意図を察したルーティアが小さな悲鳴を漏らし、そこでようやく、バージャムも足を止めた。

（厄介ね）

ルーティアがつぶやく。

（おそらく、バージャムは疑っているわ。あなたの行動が本当に錯乱したものか、演技によるものか。今の一瞬も、それを確かめるために、あんなにも大胆に近づいて来たみたい）

（だけど、今の動きの止め方で、連中がお前を無事に捕らえたいことも確信できた。多少の怪我をしてもいいなら、こんな面倒はせずに、数に物を云わせて、襲いかかって来ればいいだけだ）

ユウは考えていた。考え続けていた。

読み違えれば、それがそのままゲームオーバーに繋がってしまう。（仮に、俺とお前がこの場から逃げるために、共謀していると見抜かれた場合、連中はどう出てくるかな？）

（それこそ、強引に打って出るでしょうね。その場合、あなたは私を傷つけないとばれてしまう訳だから）

（そうになると、やっぱり、俺は混乱した馬鹿の役目を続けられないといけない。ルーティア、次の一手は、むしろお前が……）

（大丈夫。云わなくても、大丈夫。あなたの考えている事は、予想がつくもの。本当に、驚いてしまうわ。こんなにも自分と似通った事を考える……悪知恵を働かせる人間がいるなんて）

（つまり、似たもの同士ということかな）

（そのようね。ご愁傷様）

方針が定まった。危険な綱渡りの再開だった。膠着してにらみ合う場に、朗々とルーティアの声が響き渡る。

ユウは追いつめられた鼠のように、きよろきよろと周囲を見渡してやる。想定している悪役像は、かなりの小物だ。さながら、灰道ツカサである。感情の赴くままに行動に出てみたが、それが悪手と気づき、袋小路に至ってから狼狽するという、滑稽な役所だ。

そして、聡明なルーティア王女と云えば、巻き込まれたこの状況に対し、自ら逃げる算段を立てるというわけだ。状況は先程から一転して、ユウの駆け引きから、ルーティアの駆け引きへ移行する。

ルーティアは敵に語り終えた後、その内容をそのまま繰り返してみせた。

（バージャム・マクリール。あなたもこの状況に混乱している事でしょう。幸いなことに、天使に我らの言葉は理解できません。私は、あなたへ天使の言葉を伝えるふりをして、協力を持ちかけます。このような危険な状況は、私も望む所ではありません。命すら失いかねない今の状況に比べれば、まだあなた方に大人しく捕まっている方が良いでしょう。しかし、このように刃物を持って人質を取られていては、そちらとしても手が出せないと思います。そこで、提案いたします。私は安全を手に入れるため。あなたは私の身柄を手に入れるため。協力して、この天使を騙そうではありませんか）

第13話「代理」(3)

それから、一時間程が経過した。

ユウとルーティアは、森の中にいた。

木々が鬱蒼と生い茂る。目指す場所もなく、木々の間を思つままに進んでいた。追つ手を振り切るために、わざと蛇行するように歩いていたが、おそらく焼け石に水だろう。森の中特有の湿った地面は、足音を殺してしまう。果たして、敵がどの位置で見張っているのか、想像もつかなかった。

(最初から、足で振り切れるとは思っていないわ)

ルーティアが云った。

(本気で逃げるそぶりを見せれば、バージャムに感づかれる恐れもある。今は、根比べの時間ね。我慢するしかないわ)

ルーティアとバージャムが交わした取引は、ごく単純なものだ。

刃物を持った天使——ユウを、まずは森の中へ逃がし、泳がせる。歩き回つて疲れ果て、隙を見せた所で、盗賊団が不意打ちする。もしくは夜を待ち、寝静まつた所で、ルーティアが盗賊団へ合図する。それならば、危険を犯すことなく、盗賊団はルーティアの身柄を確保することができるというわけだ。

もちろん、それは見せかけの計画だ。

ユウとルーティアは、まず何よりも、先ほどの包囲網を抜ける必要があつた。見渡す限り遮る物のない平原にいては、どこへ逃げても無駄である。遮蔽物の多い森の中ならば、まだ可能性が出てくる。バージャムが、ルーティアの意見に異論を唱えることなく、あっさりと包囲網を解いたのは幸いだった。

盗賊団は姿こそ見せないが、隠れて様子を伺っているのは間違いない。彼らが痺れを切らす前に、状況を打開する次の一手を打たなければいけなかった。

(しかし、難しいな)

歩きながら、ユウは唸った。

この一時間で、ユウはルーティアから魔導列車内での詳細な顛末を聞かされていた。そして、大ざっぱであるが、盗賊団『暁の死線』についても説明を受けた。

敵が、世界に名だたる程の犯罪集団であり、その噂に違わない実力を持つならば、ただ単純に逃げきるだけでも簡単ではない。加えて、列車内でバージャムが告げた内容も気にかかる。この騒動そのものが、国王の発案であるならば、この場を切り抜けて終わりという事もないだろう。

最悪、この国の中では助けを求められないのだ。

隣国まで落ち延びる事は、さすがに現実的ではない。それはルーティアも認めていた。ならば、他に何かしらの逃げ場があるかと問えば、ルーティアは悔しそうに目を伏せるだけだった。

彼女には、もやは寄るべき場所も手段も、存在しない。

（私の手に、最後に残されたものは、あなただけよ）

文字通りね——手を繋ぎながら、ルーティアは冗談めかして云った。

（天使のあなたを、私が助けるつもりだったのに、立場が逆になってしまったわね。何もわからないあなたを、こんな事に巻き込んでしまつて申し訳ないと思うわ。今さら、どれだけ謝っても足りないでしょう。もしも、この窮地を切り抜けることができたならば、私は一生を賭けて、あなたにこの恩義を返すわ）

（いいよ。そんな大げさな……）

心底そう思つて、ユウは笑った。

ルーティアも微笑んだが、さすがに力がなかった。父である国王の意図で、盗賊団に狙われることになったのだから、気落ちして当然だ。むしろ、それをほとんど気取らせないルーティアの気丈さが、痛々しいほどだった。

（ねえ、どうして？）

不意の問いかけに、ユウは質問の意味を掴めなかった。

（どうして、あなたは、私を助けてくれたの？）

真剣な眼差しが、軽口ではぐらかすことを許してくれなかった。ユウはそれでも視線をそらしてみたが、手を繋いだままでは、どうやっても逃げ場などない。

困ったことに、彼女の問いは、簡単なようで、難しかった。美しい彼女に一目惚れしたのだ——などと云えれば、筋書きは単純で、説明もし易かっただろう。

ユウの想いは、一言で説明できるようなものではなかった。ルーティアを咄嗟に助けた理由を語ることは、自身の生き様を——とある一人の少女の生き様を——理解してもらおうことと同じである。そして、伊吹カナを知らない者に、彼女を知ることが、不可能である。（自分のため）

最初に思いついた言葉は、それだった。

そうして、ユウは少しだけ付け足した。

（まあ、強くなるためだよ。強くなりたい）

（それがどうして、私を助ける理由になるの？）

——伊吹カナは、悪漢から少女を助けるからだ。

——そこに理由はなく、その想いこそが重要だからだ。

——ユウはただ、ルーティアを、助けたいと思ったからだ。

だが、伊吹カナという少女を知らないルーティアに、自分の想いをそっくりそのまま伝えられる自信はなく、ユウは適当な言葉で誤魔化すことにした。

（まあ、別に、無茶がしたいだけだよ）

ルーティアは、嘘つきを見るような目になった。

ユウは、それ以上の言葉を思いつかなかった。曖昧な笑みを返すしかなかった。嘘についているわけではない。騙そうとしているわけではない。ただ単に、本当のことを伝えられる気がしない。

嘘つき。

とある少女ならば、そんな風に云うだろう。

とある万能で無敵で最高で最強な少女の、ただの妹に過ぎなかつ

た少女ならば、嘘をついている自覚もなく、煙に巻くようにして周囲を――自身までも、偽り、謀り、欺いているユウに向かって、嘘つき――と、云ってくれるだろう。

ユウは、わからない――と、答えるだろう。

わかっているが、わからない、と。

わかってしまえば、終わる。

ユウは、代理である。

――代理でなければ、いけない。

――伊吹カナならば、どうするか。

一瞬、とある少女の幻影を見たように思い、目を伏せた。

（疲れないか。少しぐらい、休憩は？）

（いえ、ゆつくりでも進みましょう。立ち止まれば、好機と見て襲撃されるかもしれない。何か良い手を思いつくまでは、歩き続けるしかないわ）

問いかけながら、ユウは足下を見ていた。

ユウが履いているものは、この異世界へ落ちてきた時のまま、スニーカーである。ルーティアの方は、ヒールの高いサンダルだ。休憩もなく歩き続ける状況が辛いのは、むしろ彼女の方だろう。

焦りを覚えていた。

疲れは少しずつ、だが着実に、積み重なっている。隙を見せれば、いつ背後から盗賊団が襲いかかって来るか、わからない状況である。精神的にも磨耗していた。

だから、不用意になっていたかもしれない。

畏の類には気を払っていた。気がつけなかったのは、それがユウにとって、まるで馴染みのないものだったからだ。どれだけ注意をしていたとしても、避けることは難しかっただろう。

何かを、ユウは踏みつけた。

（ソーマ）

ルーティアが、先に気がついた。

光が見えた。落ち葉と草に覆われた地面の上、最初は紐でも落ちているように思えた。だが、それには実体がなかった。ただ光で描かれた紋様が、ユウとルーティアを囲うように広がっていった。

（魔法陣よ、この記述式は……）

ルーティアが叫ぶ。

（罨よ。逃げないと……）

だが、そこで意識は途切れた。

第14話「少年と少女の話」(1)

伊吹レナについて、語ろう。

そう思い立つて言葉を探してみた所で、ユウには見つかるものがない。レナが死という答えを導き出すまで、十四年の間、深い付き合いを続けてきた。レナは親友であり、盟友だった。彼女の事ならば何でもわかるという自信があったし、彼女になれば、何もかも、ばれてしまうだろうという危機感もあった。

伊吹カナは、誰にとっても等しく、遠い人だった。

伊吹レナは、ユウにとって誰よりも、近い人間だった。

それなのに、彼女が死んでから一年が経った今、ユウは語る言葉を持たない。見つけれられない。なぜならば、伊吹レナという個人は、徹頭徹尾、肉から骨まで丸々全て、個性や性質、魂ごと朽ちてしまったからだ。そもそもレナに思いを馳せることすら、侮辱だろう。死体をあさるようなものだ。

ユウは、そう思う。

そう思ってきたから、目を閉ざしてきた。

目を開ければ、そこは真っ白な世界だった。

何もない。見渡す限りに、白の一角が広がっていた。地平線に続く空すらも白く、さながら瞳が光を吸い込みすぎて、ちかちかと網膜を痛めてしまった時のようだ。

印刷前のコピー用紙のような世界に、異物は二人。

ユウの目の前には、彼女がいた。

目を凝らせば、彼女はレナだと知れた。

「やつほー。ユウちゃん、おひさ」

彼女は気安く片手を上げて、一年のブランクなど感じさせないフレンドリーな笑顔を浮かべた。ユウが反応に困っていると、まずいものでも飲み込んだように舌を出した。

——暗いよ。

——明るく行こうよ。明るく。

言葉にしなくても、長年の付き合いから、彼女の云いたい事が推測できた。だから、強がりと後悔がない交ぜになった笑みを、ユウも浮かべた。

「よつとつと」

ホップ、ステップ、ジャンプ。

そんな風に助走をつけて、レナは目の前へ跳ねてくる。片手を大きく振り上げる様に、ユウも気だるく、片手を挙げてやる。ハイタッチ。鼻先がこすれ合うような距離で立ち止まり、レナは屈託無く笑う。

頭を撫でてほしい——そんな風に甘える子犬のようだ。

ユウは反射的に、いつものように——かつてのように、言葉を吐いた。

「よお、馬鹿」

出会い頭に頬をぶたれたような、泣きそうな表情になりながら、レナが大きく仰け反った。

「うわー、なに、ひどくない？ 久しぶりの出会いに対して、その素っ気なさ。クール気取ってればいいなんて、脳のとろけた中学生じゃないんだから。いやいや、ユウちゃんも私も中学生じゃん。じゃあ、私もクールキャラか。無口のため息ついて、ニヒルに笑っちゃう？ そんなもって、右腕に秘められた闇の力が……とか、云っちゃう？」

「ああ、レナだ。こんな阿呆の子は、お前しかない」

「私の存在を認めてくれるのはありがたいんだけど、一言目が馬鹿で、二言目が阿呆って、これは怒ってもいいレベルかな？」

笑って、怒って、悲しんで——百面相のごとく転々と表情を変える様子に、ユウはため息をつく。立っていることすら馬鹿らしく——実際は、足の力が抜けてしまっって、ユウはその場に腰を降ろした。「お前も座れよ」

「え、なんで？ いいよ、このままで。ユウちゃんを見下ろすのは

気分がいい。さあさあ、ひざまづけ。頭を垂れる。我を崇め、たてまつれ」

「いいから、座れ。おすわり」

レナが素直に座る。

「お手」

「はい」

綺麗な右ストレートを、頬に受けた。

本気で殴られた。少しからかい過ぎたようだ。一年間のブランクは確かにある。限度を見極める感が鈍っていた。目の覚めるような痛みに、ユウは多少、現実を取り戻す。

「それで？」

「なにかな、ユウちゃん？」

「お前はなんだ、ここはどこだ？」

ユウは真面目に訊いた。

「ルーティアはどうした？」

「逆順に答えようか。まず最初に、王女様は無事だよ。無事と云っていいんじゃないかな。たとえば、ユウちゃんが自分の現状を、無事の範疇と考えているならば、王女様も無事だよ。だって、王女様もユウちゃんと同じ状況にあるんだから」

レナは暢気に続ける。

「云ってしまえば、ユウちゃん達は罠に引っかかったんだよ。この罠は魔法の一種で、獲物を捕らえるために使う。どうやって捕らえるかと云えば、意識を奪う。昏倒させる。それだけならば、よくある仕掛けだ。だけど、この魔法はここからが、ちよつと特殊で面白い。意識を失った対象に、魔法はさらに作用する。意識が簡単には覚醒しないように、対象に最も手放したくない夢を見させるんだ」

「なに？」

「つまり、この場合、ユウちゃんにとっては私だね。質問の答えは以上だよ。王女様は無事、ここは夢の中、私は罠そのもの。さて、どうする？」

レナは――既に死んでしまったはずの少女は、懐かしい笑顔で問いかけてくる。それは、ユウにとって最も残酷な問いだった。罪を問いかけるような、言葉だった。

「私を殺して、ここから逃げる？」

首に、手をかけていた。

嫌な感触だった。

最後の瞬間、彼女は泣いていた。

泣き終わると、彼女はへらへらと笑顔を浮かべた。

一年前の記憶である。

相馬ユウが、伊吹レナを殺したという、些細な出来事。

「ごめんね、ユウちゃん」

ユウは吐き気を覚えて、うずくまっていた。

所詮は、幻影である。ユウの頭が作り上げた幻に過ぎない。だが、あまりにも鮮明なレナの姿に、その首筋に触れることすら、できなかった。

「どうして、仕組みを教えた？」

「この罨自体が、そういう構造なんだよ。所詮は夢だから、これが罨と気づかなければ、些細な事で覚めることもある。だけど、これを罨と意識して、そこに心が囚われてしまえば、自然と覚めることはなくなる。罨そのものを——私自身を消してしまわなければ、抜け出せなくなる。だから、先に説明するんだよ。私の言葉に耳を傾けることで、どんどんと深みにはまっていくことになる」

レナは、自身も困ったような調子で、つぶやく。

「ユウちゃんが困っているのは、私も嫌な感じになるからね。どうしようか。なんだったら……」

「やめろ。しゃべるな」

罨である。

その本質を忘れず、的確に言葉を封じてくる。ユウは頭を抱えた。レナが心配そうに顔をのぞき込んで来る。それを邪険にすることが、どうしてもできない。

「レナ」

「なに、ユウちゃん？」

「お前は、俺が生み出したものだよね？」

「そうだよ。魔法がユウちゃんの記憶に作用して、勝手に作り出した幻だよ。だから、ユウちゃんの記憶の通り、本物よりも本物らしく、伊吹レナは伊吹レナであるはずだよ。どうかな、私は、君が望んだ通り、私らしくあるかな？」

その伊吹レナは、一年前の姿である。

ユウは、最初それが信じられなかった。自分の望んだものが、力ナではなく、レナだったことが信じられなかった。

——レナを、助けに行こう。

その言葉が、頭の中で繰り返される。

どうして、彼女はそのような事を云ったのだろうか。

ユウには、やはりわからない。

——どうして、殺した？

彼女に向けた問いかけを、少し、正しい言葉に訂正しよう。

あの時、こう尋ねるべきだった

——どうして、お前が、殺したことにした？

第14話「少年と少女の話」(2)

レナがストレッチしている。

「ほら、ユウちゃんもやりなよ。そんな風に、うだうだ頭抱えてないでさ。頭を働かせるためには、身体を動かす方がいいって、カナちゃんも云ってたじゃん」

足を伸ばしていたレナは、兎のように跳ね起きる。「ほらほら」と云いながら、強引にユウの手を引こうとする。さながら綱引きのように、引いたり、引かれたり——しながら、ユウは結局、ため息をついた。

「お前、元気だな」

皮肉のつもりで云ったものの、彼女には通じなかったようだ。

「理想的な私の姿を、ユウちゃんが思い描いてくれたおかげだよ。まあ、病に伏せている時の私の方が、儚げでかわいいと云うならば、それはそれでやぶさかではない」

「年柄年中、寝込んでるのがデフォルトで、暇だ暇だとうるさかったお前のどこが儚げだ。調子が良い時に走り回って、いきなり血を吐いた時でさえ、『なんじゃこりゃ』とか叫んで、ギャグにしかしなかった癖に」

「いやいや、むしろ、無駄に重苦しい空気にしないように、気をつかって生きていた私を褒めるところだよ。生まれた時から、いつ死んでも不思議ではないと云われる程に内蔵がぼろぼろだった薄幸の美少女——その境遇にも負けず、いつでも周囲の人々に笑顔を与えていたやさしい私……ああ、なんてすばらしい」

「お前の場合、周囲に与えていたのは笑顔ではなくて、失笑だけだな。それから、どさくさに紛れて美少女を自称したけれど、聞き捨てならない」

「カナちゃんとそっくりの私を、美少女ではないと云うのか」

「お前には、オーラが皆無だ。カナを美少女とするならば、お前は

「がっかり美少女だ」

「差別だ」

顔を蹴られた。

大きく吹き飛ばされながら、ユウは真つ白な大地の上で、大の字に倒れた。常識的に考えれば、鼻が折れていても不思議ではない一撃だ。それなのに痛みも少ないのは、ここがやはり夢の中だからなのだろう。

伊吹レナと伊吹カナ。

世界で最も強い姉を持った、脆弱な少女。

世界で最も強い少女が全てを捨てて、救おうとした妹。

今、ユウが言葉を交わして、戯れている少女の姿は、ひとつの可能性だ。こうした可能性も確かに存在したという、罪の証だ。ユウは虚空に向けて、手を伸ばした。

あの時、可能性を摘み取った——自らの手を眺めた。

レナを殺すことで、カナを生かした——自らの手を眺めた。

「ああ」

この気持ちは、何だろうか。

ユウは、思わず零した。

「畜生」

胸中に溜まった汚泥のような黒色も、傷口から流れ出す血のような赤色も、目の前に広がる高い空には、存在しなかった。ただ一色の白色は、生まれたその時のように、何もなかった。罪も罰も存在せず——だから、吸い込まれそうだった。

影が差した。

のぞき込まれていた。

レナだった。

「ユウちゃん」

自分が殺したはずの少女が、語りかけてくる。

ユウちゃんは、酷い人だよね。

だって、私を殺しちゃったわけだし。

事故だったのかな。わざとじゃなかった。間違いだったら、よかったね。ユウちゃん本人が、一番よくわかってるんでしょう。ユウちゃんは、明確に、自分の意思で、これ以上どうしようもなく残酷に、私に消えてほしかったんだよね。

いいよ、認めて。

私よりも、カナちゃんを選んだ。

いいよ、認めて。

私よりも、カナちゃんが大事だった。

認めてよ。認めればいいじゃん。だって、私だってそうする。カナちゃんと誰かを天秤にかけられて、迷う必要があるの。迷う必要なんてないじゃん。私だったら、絶対に迷わない。誰に何を云われたって、私は間違えない。

私なんて、ちっぽけだ。

カナちゃんは、私の神様だ。

ユウちゃん、ありがとう。

私を殺してくれて、ありがとう。

私を見捨ててくれて、ありがとう。

カナちゃんを選んでくれて、ありがとう。

だから、云ってあげる。

だから、罵ってあげる。

だから、蔑んであげる。

だから、侮蔑してあげる。

だから、悔やんであげる。

だから、呪ってあげる。

だから、だから、だから――。

少しは、楽になったらいいじゃん。

私は、満足だよ。

私は、幸せだよ。

ユウちゃんも、幸せになればいい。私と同じように、なればいいじゃん。どうして自分のせいにするかな。どうして自分ばかり悪いと思うかな。ユウちゃんは確かにこうなる事を望んだけど、私だって、こうなる事を望んでいた。

一緒だよ。

私はカナちゃんが必要だった。

ユウちゃんもカナちゃんが必要だった。

ユウちゃん一人だけじゃないよ。私だって、そうだった。だから、私は死ぬしかなかった。そうして、変わらない日常を続けるしかなかった。私とユウちゃんの世界を続けるしかなかった。

私もユウちゃんも、同じ選択肢を選んだ。

罪を背負うのは、お互いにいっしょだよ。私も罰を受けているし、ユウちゃんも罰を受けている。ユウちゃん、どれだけ悩んだのかな。どれだけ苦しんだのかな。どれだけ自分のせいにしたのかな。

だから、云っていいんだよ。

だから、罵っていいんだよ。

だから、蔑んでいいんだよ。

だから、侮蔑していいんだよ。

だから、悔やんでいいんだよ。

だから、呪っていいんだよ。

だから、だから、だから――。

少しは、楽になったらいいじゃん。

お互い様なんだよ。

全部。

ね。

ユウは尋ねた。

「お前は、ただの幻なんだよな？」

「そうだよ」

レナは応える。

「ここは、ユウちゃんの頭の中だ。夢でしかないよ」

頭の中。

夢。

ただの幻想ならば――。

「ごめん」

どうしても口にすることができなかった言葉を告げて、ユウはレナの両手を握りしめた。その熱っぽい体温を感じて、顔を伏せた。我慢する必要はなかった。所詮は幻である。夢である。彼女も拒まなかった。

「ああ、やっぱり、嘘だな」

「なにが？」

「お前にこんなことしたら、絶対にうるさく怒られる」
抱きしめられたまま、レナは笑った。

その笑顔で、十分だった。

目が覚めた。

第15話「恐るべき子供達」(1)

夢は泡のように形も残さず消えた。

覚醒した瞬間、ユウは危険を察知した。

即座に、身を起こした。油断なく周囲を見渡せば、四方を取り囲まれていることに気がついた。敵はもはや隠れることもせず、その姿を堂々とさらしていた。

まず、ユウは違和感を覚えた。

敵は、想定した相手ではなかった。盗賊団ではなかった。周囲を取り囲む者達は、子供だった。年長の者でも、ユウよりいくらか年上なだけだろう。中には、十を超えているかどうか怪しい者までいる。

困惑した。

だが、子供達は、その年齢に似つかわしくない冷徹な表情で――例えるならば、機械のような瞳で、感情の一切を削ぎ落とした顔に、殺意だけを浮かべていた。その手にそれぞれ刃物を握りしめている事からも、ユウは瞬時に気持ち切り替えた。

相手が何であろうと、罨を張っていた時点で、敵である。悩む暇があるならば、その分だけ頭を動かし、現状を切り抜ける方策を考えなければいけない。

呼吸をひとつ。

ユウは、冷静になる。

「ルーティア」

呼びかけるが、返事はない。

傍らを振り返れば、彼女もまた、先程までのユウと同じく倒れていた。意識はないようだった。ユウはどうにか魔法の罨を切り抜けたが、彼女はまだ囚われたままのようだ。

声を大きくして幾度か呼びかけるが、何の反応も示さない。

武器を構える相手に囲まれた状態から、意識のない者を背負って

逃げることは不可能だ。ならば、先と同じようにルーティアを盾に取り、敵を退けるべきだろう。しかし、ユウの言葉はシースーアの人間には届かない。

細かな交渉をどのように行うべきか——打つ手を考えていたユウは、唐突に、現実に取り戻された。そして、最初から交渉の余地などなかったことを思い知らされた。

正面に立つ子供が、身を低くして、詰め寄って来た。

両手にナイフを握っている。一声も発さない。矢のような速さで駆けながらも、不気味な程に足音を響かせない。ざんばら髪に表情は隠されており、果たして何を想っているのか、読み取れない。

ユウは、慣れない短刀を構えた。

子供と云えども、その身のこなしから、危険な相手であることは簡単にわかった。油断などすれば、あっさりと命を落とすことになるだろう。集中した。そうして意識を高めたことが幸いした。間合いが詰まるまであと一歩という所で、ユウは不意に察知したのだ。構えていた短刀を、勢いよく目の前の子供に投げつけた。

さすがに予想外だったようで、身をかわす動きで足が止まった。不意打ちをあっさりと避けた様子からも、ただ者でないことが知れる。怪我のひとつでもしてくれれば幸いだったが、それは虫が良すぎるだろう。時間稼ぎができれば十分だ。

得られた刹那のタイミング。

ユウは振り返った。

まさに、すぐ目の前に、背後から別の子供が忍び寄っていた。

正面からの敵がおとりであることに気付けたのは、ただの直感によるものだ。気付いていなければ、負けていただろう。結果として敵の虚を突いた形になる。迫っていた敵も突然の反応に対応できなかったようで、ユウが繰り出した蹴りを、側頭部にまともに受けて吹き飛んだ。

ほとんど年齢の変わらない相手だ。

確かな手ごたえに、しばらく起き上がることはないだろうと確信

する。

「やれやれ」

ため息をついた。

「どうということだ？」

疑問だらけだった。

敵は、どう見ても盗賊団とは違う、物騒な子供達。盗賊団はルーティアを無傷で捕えようとしていたが、この子供達は違うようだ。先程、背後から不意打ちしてきた敵は、ユウではなく、まっすぐにルーティアを狙っていた。その手に持つ刃物を、彼女へ突き立てようとしていた。狂言でも何でもなく、虫でも始末するように、あっさりと殺そうとしていた。

——別の敵？

王に裏切られて、盗賊団に誘拐されかけて、今、謎の刺客に命を狙われている。

「本当に、味方は、俺だけか」

気を失っているルーティアを見やり、ユウは深く息を吐く。

気を引き締めた。実際、油断している暇などなかった。

強敵とでも判断してくれたのか、残る三人の子供達は、息を揃えて動き始めた。短刀を投げてしまったユウは、素手である。心もとない状態だったが、慣れない刃物など振り回すよりは、むしろ身ひとつに任せた方が無難かもしれない。

——さて。

ユウは、ルーティアを庇うように身を屈めながら、内心で冷や汗を流す。

——困った。

一対一ならば、まだ戦える。だが、三人同時に襲い掛かれて、なおかつルーティアを守ることは、果たして可能だろうか。ユウは必至に考えを巡らせるが、この場を切り抜けるためには、少なくとも腕の一本ぐらいは犠牲にしなければいけないように思えた。

——冗談にもならない。

命を落とすかもしれない状況だ。

異世界などという訳のわからない場所で、消え去るわけにはいかない。

子供達は、三人同時に間合いを詰めてくる。ユウは舌打ちする。

三方向からの攻撃を、同時に防ぐ方法はない。ルーティアを守らなければいけない以上、逃げることはもちろん、動くことすらできない。

覚悟を、決めなければいけない。

「約束だ」

誰にも聞こえないように、小声で、吐き捨てた瞬間だった。

「ドーマ、オルフ」

大音声が響いた。

そして、今まさに飛び掛かろうとしていた子供達の足元に、矢が射かけられる。子供達は野生の獣のような警戒心で、ユウへ向けていた意識を、瞬間的に周囲へ切り替えたようだ。彼らに少し遅れて、ユウも周りを見渡した。

またもや、囲まれていた。

今度こそ真正正銘の盗賊団『暁の死線』だった。

まっさきに目に付いたのは、やはり頭目である大男、バージャムだ。響き渡った号令も、彼が発したものだろう。結果として窮地を救われた格好だが、彼らもまた、ユウにとっては敵である。

二重のピンチだ。

そして、ルーティアは未だ目覚めない。

ユウが岩のように身を堅くして、状況を見守っている間、一方的に言葉を吐いているのはバージャムの方だった。子供達は、声を発するどころか、一切の反応を示さなかった。無表情のまま、胡乱な瞳を盗賊団へ向けている。

そこで初めて、ユウは気がついた。

子供達は皆、左右の瞳の色が違っていた。

バージャムは演説でもするように、長々と話し続ける。周囲を取

り囲む彼の仲間達は、頭目の言葉に何事か驚いているようだったが、子供達はやはり表情を変えない。バージヤムは最後、宣言するように大声を発すると、腰元に提げていた長剣を威勢よく抜き放ち、子供達へ突き付けた。

どうやら両者は敵対関係にあるようだ。

彼らが潰し合ってくれば、自分にも勝ちの目が出てくるかもしれない。

都合よくそんな想像を巡らしていると、子供達が互いに目配せするのに気がついた。遠目であるが、バージヤムもそれに気がついたようだ。彼が仲間達へ注意を呼びかけたのと、子供達が小さくつぶやくのは同時だった。

瞬間、森は炎に包まれた。

第15話「恐るべき子供達」(2)

熱せられた空気が、肺を焼く。

辺り一面が火の海になった状況では、身に降りかかる火の粉よりも、息苦しさの方が問題だった。煙にいぶされて涙目になりながら、ユウはできるだけ、身を低くした。周囲に油でも撒かれていたのだろうか。それとも、これも魔法の為せる技だろうか。

巨大な渦を巻く炎の向こう側から、盗賊団の怒号が聞こえる。

子供達は何処だろうか——ユウは警戒するが、この状況下では落ち着いて気配を探るなど無理だった。悠長に身を潜めていれば、彼らの刃物よりも先に、身を焼かれることで死んでしまうだろう。

「ルーティア」

是が非でも、彼女には起きてもらわなければいけない。だが、揺すつても瞼のひとつ動かない様子に業を煮やし、ユウは結局、彼女を肩に担ぎあげた。自然と立ち上がる格好になり、煙に苦しさが増す。この一時はどうか耐えて、安全な場所まで逃げなければいけない。

「ルヴァーテ——バウ——、セシル」

火の向こう側から、盗賊団の誰かの叫び声。

悲鳴にも似た声だった。

顔を上げたユウは、目の前で起こった予想外の光景にぎょっとした。急いでいたはずの歩みも、思わず止めてしまう程だ。すぐそこにあつた火の壁を掻きわけて、少女が一人、ユウの足元に転がって来たのだ。

炎の中に飛び込んで、全力で駆け抜けて来たのだろう。マントのように一枚布を頭から被っていたが、裾から火がつき、燃え始めている。ユウは急いでその布を取り払ってやった。煙を吸い込んだのか、盛大に咳をしながらあらわれたのは、やはりセシルだった。

彼女は眼を真っ赤にしており、一本に三つ編みした髪も、ちりち

りと焦げていた。

布を被っていたとしても、燃え盛る中を駆け抜けるなど、無茶もいい所である。思わず敵味方である立場も忘れて、ユウが手を差し伸べようとした所、セシルはにやりと笑って、右手を繰り出してきた。完全に予想外だった。ユウは避けることもできず、思いつきり頬を殴りつけられる事になった。

ルーティアを肩に支えているため、倒れる訳にはいかない。どうか身体を支える。

ぐらりとよるめいていた所を、今度は乱暴に胸倉を掴まれた。強引に引き寄せられる。剣呑な光を浮かべたセシルの瞳が、目の前に迫った。さながら頭突きのような勢いで、互いの額がぶつかった。

（さっきのお返しだ、この馬鹿）

頭に、言葉が流れ込んで来た。

（セシル？）

（さんざん腕を捻りやがって。おまけに背中から押さえつけるとか、いい根性してやがる。めちゃくちゃ痛かったし、仲間達からは馬鹿にされるし、最悪の気分だ。本当ならあと十発は殴ってやらないと気が済まないが……）

セシルは、そこで力を緩めた。

（友達だから許してやる。それに、先に手を出したのは俺達の方だ。お前が身を守るために反撃するのは当然のことだ。だから、腹は立つけれど、これでおあいこだ）

ユウが言葉を返せずにいると、セシルは決まり悪そうに頭を掻いた後、今度は手を握りしめてきた。その際、鳥肌を立てて震えたのは、ご愛嬌だろう。

（騙して悪かったな。最初から、俺達はルーティア王女を誘拐するつもりで、城に潜り込んでいた。俺達にとっても、お前の登場はまるで予想外のことだ、対処できなかった。結果として、こんな風に巻き込んだのは、謝るしかない。悪いな）

ユウはまだ混乱していたが、短くこれだけは返した。

（いや、大丈夫。お前は最初から盗賊だった。それだけのことだろ？）

（ああ、そうだ。『暁の死線』であることは、俺の誇りだ。だから、悪事を働くことに今さら後悔もしないし、謝ることもしない。糞親父……団長の命令なら、俺達は一致団結して目的を果たすだけだ。だから、お前がルーティア王女を守るならば、やっぱり俺達は敵同士だ）

だけど——と、セシルは続ける。

（この状況で、敵味方も云ってられないだろ？）

（ああ、そうだな）

（あれやこれやの決着を付けるにも、ここを抜けてからだ）

（悪い。助かる）

（謝るな。謝るのは、俺の方だ）

セシルは本気で怒った様子だ。

ルーティアをそれぞれ両側から支えるような格好で、その後は互いに死に物狂いで、燃え盛る森の中を進んだ。呼吸をすれば、それだけ煙を吸い込んでしまう。灼熱の海の底にいるようだった。ほとんど息を止めた状態で、一人を背負って進むのだ。セシルの助力がなければ、途中で力尽きていただろう。

迷路のように火の中を巡り、風上に出られた時は、さすがに歓声をあげた。

熱気から十分に離れた場所へ辿り着き、ルーティアを静かに横たわらせた後、ユウとセシルは同時に地面へ倒れ込んだ。疲れ切った身体で、力なく手を上げれば、セシルは楽しそうに笑みを浮かべた。ハイタッチして、そのまま手を握った。

（炎の中に飛び込むなんて、どうしてあんな無茶をした？）

（俺達の目的は誘拐だ。ルーティア王女を怪我させるわけにはいかないし、ましてや死んでもらっちゃ困る。それに、お前は友達だ。すぐそこで友達が危機に陥っているのに、見捨てるなんて真似しないさ）

（お前、馬鹿だな）

（なんだと）

怒声を上げて身を起こしたセシルを、ユウは笑って見上げた。だが、笑みはすぐに消し去ることになった。セシルの視線は、ユウの肩越しに彼方を捉えていた。腰元から短刀を抜き放つ彼女を見て、ユウもすぐさま身を起こし、後ろを振り返った。

そこに、四人の子供達が立っていた。

第15話「恐るべき子供達」(3)

(セシル、あいつらは?)

(暗殺者だよ。俺も、実物は初めて見た)

物騒な子供達と思っていたが、その肩書も相当なものだった。

(暗殺者?)

(反吐が出る噂だ。裏社会では、よく耳にする。『恐るべき子供達』と云えば、暗殺を生業にするギルドの中でも、最も成功率が高い集団だよ。だが、まさか、本当に名前の通り子供だとは思わなかった) セシルは心底、腹が立ったようにつぶやいた。

(しかも、禁忌の子供ばかりだ)

禁忌——その意味を、尋ねる暇はなかった。

(本気で来るつもりだ。ソーマ、覚悟しろよ)

セシルの言葉に、ユウが意を決すると同時、子供達も動き始めた。結局、『禁忌』の意味を訊く暇はなかったが、その意味する所は、これ以上なくわかりやすい形で示された。先程と違い、子供達はいきなり襲いかかってくるような事はしなかった。

最初、何が起きているのか、ユウにはわからなかった。彼ら子供達に起こっている変化をしばらく眺めて、ようやく理解する。盛大に舌打ちすることになった。

——デミ・ヒューマン。

日本語に訳すれば、亜人である。世間一般にはデミという略称が用いられることも多いが、より端的に、ハーフという呼ばれ方もする。古めかしい言葉では、半人半妖なども表現する。

妖怪——あるいは、幽霊や八百万の神様。世界的に見れば、怪物や精霊——最もポピュラーなもので云えば、吸血鬼である。それら理の外側にいる者達と人間の間に生まれた子供を総称して、デミ・ヒューマンと呼んだ。

デミは、親の特徴を色濃く受け継ぐ場合が多い。

目の前にいる子供達は、そのわかりやすい例だろう。

「よりにもよって……」

——人狼か。

子供達の変化は、それぞれで差があった。血の濃さが違うのだろう。全身が体毛で覆われて、顔まで狼のように変化する者がいる一方で、手先が爪に変わるだけの者もいた。

この姿を見せる時こそが、彼らの本気なのだろう。

デミの恐ろしさを知っているユウは、ため息をつく。

もちろん、悠長に憂いている暇はなかった。

襲いかかって来た。

四人の子供達は、取り囲むような動きで駆けて来る。ユウとセシルの背後には、まだ目覚めないルーティアが横たわっている。一人でも取り逃せば、そこでゲームオーバーだ。

守るだけでは、勝てない。

即座に判断して、ユウは敵に向かって突進した。

身体を変化させた子供達は、先程よりも速さが増しているようだ。間近の一人に対して間合いを詰めれば、予想外のスピードで巨大な爪が振り下ろされた。途中で足を止めなければ、顔面を抉り取られていただろう。

「残念」

そんな場合でもないのに、少し、笑う。

「サヨコさんの方が、百倍速い」

巨大な爪は一撃必殺だろうが、その分、大振りだった。

好機と見て、懐へ潜り込んだ。密着した体勢では、巨大な爪はむしろ邪魔になる——その見込みは間違っていないかったが、やや甘かった。目の前で、獣の顔をした敵が大口を開いた。爪に負けず劣らず凶悪そうな、大きな牙が見えた。

——噛みつかれる？

ひやりとしながら、左の掌底で、敵の顎を打ち上げた。

寸分の差である。喉を食い千切られなかった事に感謝しつつ、の

けぞった相手の胴体を思いつき蹴り込んだ。常識的に考えれば、胃の中のものを全て吐き出してしまうような一撃である。それ程の手ごたえだったが、相手は怯まず、むしろ軽快な動きを見せた。

敵は一瞬、ユウの視界から消えた。

左右を見渡した後、すぐさま違うと気づく。

――上。

獣の跳躍力である。周囲の木々の頂点まで届きそうな勢いで、敵は頭上へ舞い上がっていた。そして、高々と両手を振りかぶっている。落下の勢いに併せて、その両腕が振り下ろされた。ユウは間一髪でその場を飛び退くが、その身体能力の差は、劣勢を感じるに十分なものだった。

地面に身を投げ出すように避けた為、体勢は崩れていた。

すぐさま飛び起きようとしたが、真横から、別の敵が迫るのが見えた。

「冗談……」

もちろん、冗談にもならなかった。

起き上がる暇はないと見て、ユウは無理矢理に足払いをかけた。だが、苦し紛れの一撃は通用せず、敵は小さく飛び上がると、そのままユウの上に押し掛かってきた。馬乗りの体勢で、押さえつけられる。

幸いだったのは、その敵は獣へ変化している部分が少なく、人間のままの部分が多く残していた事だろう。顔は子供のままで、牙もない。片腕すら人間のままだ。もう片方の手は巨大な爪に変じているが、目に見えて危険な凶器は、そこだけだ。

そのため、ユウは集中して、振り下ろされた一撃を避けた。

巨大な爪が、首筋のすぐ横の地面を、大きく抉り取る。

この体勢が不利であることは明白だ。ユウは地面の砂を掴み取ると、馬乗りになる相手の顔面へ投げつけてやった。眼つぶしである小細工だ。この状況下で、なりふり構っていらなかった。

効果はあった。力が緩んだその一瞬で、ユウは敵を押し返す。今

度こそ、素早く起き上がるものの、すかさず別の敵が詰め寄って来る。息つく暇もない。繰り出される連撃を紙一重で避けながら、ユウは後退を余儀なくされる。

間合いが開く。

セシルの方に視線を向ければ、彼女は別の二人と同時に切り結んでいた。短刀を器用に扱って、狼の爪の猛撃を防いでいる。だが、苦戦は明らかだ。敵の実力を思えば、そもそも一対一でも勝敗が怪しい相手である。それを二人も同時に相手して、余裕があるはずがなかった。

窮地である。

それを自覚した時、事態が少し好転した。
ルーティアが目覚めたのである。

第15話「恐るべき子供達」(4)

彼女が身を起こした瞬間、そのわずかな身じろぎの音に、ユウは敏感に反応して振り向いていた。

「パル——スーラム、ロマ——」

ルーティアが周囲を見渡し、驚いたように何事か語りかけてくる。こんな時、離れたままでは会話もできないのがもどかった。「逃げる」

反射的に叫んだ言葉も、意味は届かない。

ルーティアが起き上がるのを見て、敵の攻撃が苛烈さを増した。ルーティアに駆け寄る暇もなく、すぐさま戦いになった。正面から迫りくる二人の敵に対し、ユウは行く手を阻むように立ち塞がる。だが、両方を足止めし続けることはできなかった。

やがて、一人が脇をすり抜けた。

「ルーティア」

追いつがろうとするも、別の敵の攻撃を避けるので精一杯だった。セシルの方を見ても、彼女も必死である。ルーティアの援護に回る余裕などなさそうだ。

ルーティアは一瞬、迷うような顔色になった。目覚めた瞬間、森が火に包まれ、四人の恐るべき暗殺者の魔手が迫っていたのだ。困惑しないわけがない。感謝すべきは、彼女の切り替えの早さだろう。迷いがもう少し長引いていれば、人狼の爪に、身体をずたずたにされていたはずだ。

彼女は意を決したように、背を向けた。

そして、わき目も振らずに駆け始めた。業火から離れるように、森の奥へ——闇の中へ消えて行く。彼女に迫っていた人狼も、その後を追いかける。

最悪の状況は回避できたが、時間稼ぎに過ぎない。すぐさまルーティアを追いかけるなければ、手遅れになるだろう。

（ソーマ、大丈夫か？）

状況が変わった瞬間、残り三人の暗殺者は一旦、体勢を立て直すように距離を取っていた。こちらの出方を伺うように、息を潜めている。これ幸いとばかりに、ユウとセシルは互いに身を寄せた。

（セシル、頼みがある）

迷っている暇はなかった。

（ルーティアを追いかけてくれ）

（馬鹿。あいつらが、そう簡単に逃がして……）

（俺がやる）

ユウは、既にセシルの方を見ていなかった。

（無茶だ、馬鹿）

怒りと憤りを多分に含んだセシルの罵声が、頭の中に響いた。無茶は承知の上である。無謀も理解の上だ。

ユウには違えられないものがある。

それだけの話だった。

（任せた）

そう云いきって、手を離す。

一步、前へ踏み出した。

傍らで、セシルがまだ躊躇している。そんな迷いの時間すら惜しかった。突き飛ばすように彼女を追いやると、敵意のこもった目でにらまれる。お返しとばかりに、頭を思いつきり叩かれた。

（死ぬな）

殴られた瞬間、そんな声が聞こえた——気がした。

セシルは、ルーティアを追いかけて走っていく。そもそも彼女の目的は、王女の誘拐なのだ。ここでユウと共に敵と戦い続けるなど、本来の目的を忘れているに等しい。

それを云うならば、自身もそうだろう。

ユウは自嘲的にため息をつく。

暗殺者に殺されるぐらいならば、盗賊団に捕まる方が、まだましだろう——そんな言い訳めいた思いを胸に、森の奥へ駆けていくセ

シルの後ろ姿を見送った。

「さて」

ユウはようやく、我が身を振り返る。

「どうしようか？」

特に、考えはなかった。

残された手段は、どうやら、ひとつしかないようだった。

第16話「あるいは、ひとつの可能性」(1)

二対一の状況でも防戦一方だった。それが三対一になれば、結果はどうなるか——考えるまでもないだろう。ユウはため息をついた後、うなり声をあげる敵を見つめた。

死が間近に迫ると、思い出す。

死にゆく彼女が云った。

それに応えた。

——約束だ。

ユウには、どうしても裏切ることのできないものがある。

死ぬことはできない。

死ぬことだけは、できない。

死んでしまいたいと思った瞬間も、死んでいるに等しい一年間も、その言葉に縛られて、その言葉に生かされて——踏み止まった。

くだらない彼女の真似事。

代理として。

誰が。

誰が——許すだろうか。

ユウは、許さない。誰が許したとしても、許さない。こんなにも馬鹿げた茶番の果てに、ただ死んで終わる結末など、神様が許したとしても、ユウだけは許さない。

かつて腕の中で冷えていった少女は、最期の瞬間にそれでも笑いながら、残される者のことばかり考えて、自分の見られない未来を楽しそうに想像しながら、満足そうな言葉を残し——ユウは泣いて泣いて、泣いて——云えよ、罵れよ、蔑めよ、侮蔑しろよ、悔やめよ、呪えよ——と、叫んで——彼女は、ようやく——ようやく最後に、ユウに向けて悲しそうな顔をした。

——約束だ。

少女は云った。

自分が死ぬことで、彼女は生きられるということ。それなのに、自分が欠けることで、彼女は自らの価値を失うだろうこと。道を失うだろうこと。生きる意味を失うだろうこと。

——姉妹だったから。

——嘘みたい、大切にだったから。

だから、ユウが彼女のために生きること。いつまでも死なず、生き続けること。

それが、少女の最後の願いだ。

「約束だ」

だから、ユウは右手を掲げる。

死の危険を感じることは、何度もあった。窮地に陥ることも、多々あった。自暴自棄のような一年間だった。無茶苦茶な進み方だった。それでも運良く、紙一重で生きてきた。最後の一線だけは、踏みとどまって来た。

「違う」

ユウは自嘲的に、ため息をつく。

最後の一線を、超える勇気がなかった。

それだけの話だ。

「ごめん」

ようやくその一語を、口に出すことができた。

胃の奥に押し込まれていた鉄塊を、吐き出したような気分だ。身体が、驚くように軽い。たった一步——だが、その一步を踏み出すために、とても大きな壁が立ちはだかっている。今ならば、その壁すら飛び越えられそうだった。

道を踏み外す、覚悟ができた。

掲げた右手の先に、夜の闇。

口を開きかけた瞬間。

闇の果てに、いた。

一人の少女。

第16話「あるいは、ひとつの可能性」(2)

ユウは一目見て、それが彼女とわかった。

彼女は全身を黒いマントで覆っていた。フードを目深に被っており、顔には影が差して、男女の区別もつかない程だ。その体格もすっぽり隠されているので、大人か子供か、見た目では判断がつかない。

それなのに、わかった。

ユウが掲げた右手の先、三人の人狼が立ちふさがる向こう側、炎に燃える森を背景にして、夜空に満月を背負いながら、漆黒の闇よりも濃い姿に、腹の底から震え上がるような感覚を覚えて——そんな空気を漂わせる存在は、彼女以外にありえない。

「カナ」

思わず漏れた声は、あまりに小さく、誰の耳にも入らなかった。人狼達は尋常ではない気配に気づいたのか、毛を逆立てて、彼女の方に振り向いた。

ユウは右手を降ろしていた。

一步、後ろへ退いた。

黒いマントを羽織ったカナは、その顔を見せることなく、一声も発することなく——揺らめく炎の前で、動かずに立っていた。

人狼達も、正体不明の人物に戸惑っているのか、身構えたまま、牽制するように吠え声をあげるだけだ。

その時。

ゆらり、と。

森を包む炎が揺れた。

彼女の背後から、巨漢の男があらわれる。

炎の渦をかき分けて、盗賊王と呼ばれるバージャムが、既に抜きはなった剣を大上段に振りかぶり、悪鬼のような顔をさらに歪ませ、カナの背後に押し迫る。

大男は、頭から血を流していた。

彼が口を開くことはなかった。

その瞳は、既に対話などを求めるものではなく——さながら、彼の仲間が全て目の前の少女に打ち倒されてしまったとでも云うような、その復讐に燃えるような、それでいて恐れるような、理解を越えた存在に震えるような——狂気の光を、浮かべていた。

バージャムは、カナの背後から、斬りかかる。

問答無用の一閃を、頭上から振り降ろした。

黒マントに身を包んだカナは、動くことはおろか、身じろぎすることもない。真後ろに危険が迫っていることに、気づいているかも知れない様子だった。

いや、違う。

彼女にとつては、盗賊王の存在など、危険にすらなりえなかったのだ。振り返るにも値しない、動くことにも値しない、気を向けるにも値しない——結局、伊吹カナの強さとは、そういうものだ。

剣が、砕けた。

バージャムが放った一撃は、カナの体に触れることもできなかった。届くよりも早く、剣の刃は塵のように分解されていた。幾億年が一瞬で過ぎ去ったかのような有様で、刃はまるで風化したように、塵となった。

バージャムは目を見開き、悔しそうに歯噛みした。空になった己の手を握りしめ、意を決したように雄叫びをあげた。

殴りかかる。

瞬間、彼は消失した。

バージャムがそこにいたこと、斬りかかったこと、捨て身に打って出るように雄叫びをあげたこと——全ては夢か幻か、そもそもそんな出来事は起こらなかったとでも云うような自然さ、あっけなさで、消え去った。

少女は、そこにいる。

動かない。

その場に登場した瞬間から、彼女は指の一本動かしていない。それなのに、伊吹カナはこの場の運命を掌握したように、超然として見えた。

「カナ」

先程より、しっかりとした声が出た。

だが、焼けつく空気に枯れた声は、離れた少女に届く程のものではない。少女が呼び声に気づいた様子はなく、反応はなかった。彼女はやはり、動くことすらしない。

動いたのは、人狼だった。

正体不明の乱入者を敵と見定めたのか——あるいは、ただ本能的な危機感に背中を押されたのか。どちらにしろ、三人の暗殺者達は甲高い吠え声をあげながら、一斉に少女へ詰め寄った。

凶悪な爪や牙を剥き出しにして、人外の素早さで駆ける彼らの姿は恐ろしいが、少女に対した時の彼らは、獅子に吠える子犬のようにすら感じられて、哀れだった。

実際、彼らの爪や牙が、少女に届くことはなかった。

三人は、バージャムと同じように消失した。

風が吹く。

風向きが変わっていた。

森を包み込む、炎が揺れる。火の手が、徐々にこちら側にも伸びて来ていた。危険であることはわかっていた。だが、ユウはとも逃げる気分にはなれず、まだ声を発することも、動くこともしていない少女を見つめた。

彼女は、気だるい動きで、片手を挙げた。

指揮者のように、ゆっくりと降ろす。

森を包んでいた炎が、消えていく。

黒焦げて、灰になったはずの木々が、炎が消えていくのに併せて再生する。青々とした葉を茂らせている。火の手が上がったことすら嘘のように、悠然とたたずむ森が、静けさと共に姿を見せた。

まるで時間が巻き戻ったようだ——そう思わせるほどに、大火に

見舞われたはずの森は、以前の姿を取り戻していた。

そして、少女と云えば、自身がやって見せた奇跡の結果に振り返ることもせず、ぼんやりと立ちつくしたままだ。その様子は、飽いているようでもあった。だが、ユウには、どこか楽しんでいるようにも思えた。

まるで試しているような――。

自らの力を実験でもしているような――。

もちろん、それはユウの勝手な想像だった。根拠の何もなかったため、推測とも呼べない。カナの性格を思えば、むしろ外れている可能性の方が高いだろう。

カナが、その埒外の力を振るうことは少ない。

多くの場合、それは誰かの為に行われる。

黙したままの彼女が、今、果たして何を思っているのか、わからない。その顔、その表情すら隠したままの彼女が、今、何を見ているのか、わからない。

漠然とした不安を抱えたまま、ユウは口を開く。

二人きりとなった今、ようやく声が届く。

彼女の名前を、あらためて、呼んだ。

第16話「あるいは、ひとつの可能性」(3)

ユウは、言葉を失った。

まばたきすら、していない。気をそらすこともなかった。それなのに、彼女が目の前にいる。足を動かした様子もなく、マントがなびいた気配もない。

それなのに、手を伸ばせば届く程の距離に、彼女は立っている。そして、彼女は動きを見せた。

目深に被っていたフードを、無造作に取り払ったのだ。

あらわになった顔に、衝撃的な驚きも、ドラマスティックな展開もなかった。真紅の髪、大きく空虚な黒目、整った顔立ち、ユウよりも低い背丈、飄々とした空気——全て、正しく、伊吹カナだった。「やあ」

彼女は、そんな風に気安く片手をあげた。

黒いマントは、彼女の体格よりもサイズが大きいのか、指先だけがわずかに見える。ずるりと垂れた袖口が、どうにも不格好だ。

拍子抜けの感すらあった。

彼女はしばらくじっと見つめてきたが、その内に何が面白いのか——くすくすと笑い声を漏らした。その様子では、彼女が自ら、何かを説明するつもりはないようだ。

ため息をついた。

——何から訊くべきか。

ユウは一度、空を見上げた。

遙かに遠い星々を眺めるつもりで——しかし、この異世界シースーアには、空が存在しないことを忘れていた。暗闇の雲と呼ばれる、虚無のような黒色が天井を覆っているばかりで、気持ちは憂鬱になる一方だった。

「お前は、どうしてここにいる？」

結局、そんな風に尋ねた。

どうしてこんな場所にいるのか——異世界などという場所に、自分と彼女がいるのか。わからないことは無数にあったが、ひとまず真っ先に頭に浮かんだ問いは、それだった。

しかし、彼女は見当はずれの答えを述べた。

「お姫様を誘拐するためさ」

さらりと述べられた一言は、あまりにもユウには予想外のもので、しばらくその意味を飲み込むのに時間がかかった。意味を理解した後も、その真意を理解することはできず、「なに？」と間抜けな声を漏らす羽目になった。

「それは、どういう……？」

問い正そうと、声を荒げた瞬間である。

「でも、気が変わった」

と、カナ。

その手が、ユウへ伸びた。

十本の指が、撫でるように首筋に触れた。愛でるように、力がこめられる。小さな動物を包み込むような優しさで、首を絞められた。「僕は、お姫様をさらうためにここへ来た。そのついでに、お姫様を狙う悪い奴らを、やつつけてやろうと思った。盗賊団も暗殺者も懲らしめてやって、ほとんど仕事も終わりと同然になってから、こんな風に心変わりさせるなんて、君はとても罪作りだ」

ユウは声が出せなかった。

「君は、僕が怖くないの？」

神様はいるの——そんな風に尋ねる子供のように、純粋な問いかけを、カナは口にした。

首を絞められているユウは、答えを返せなかった。

口を開いても、喘ぎ声のようなかすれた音しか出なかった。

それでも。

ユウは、云ってやる。

腕を斬られた後でも平然としているぐらいに不気味で、斬られた腕をあっさり元に戻してしまう程におぞましく、魔法使いを倒して

しまつような常識外で、人間を消失させてしまふ理不尽さ。
そして。

身体にあらゆる欠陥を抱えながら、それでも必死に生きていた世界でただ一人の妹のために、自らの全てを——命を、心臓と血肉を——あつさり捧げようとしてしまふ程に、強い。

そして。

そうすることが、伊吹カナを世界で一番大切なものと信じ、その重荷となることを何よりも嫌った彼女に——自分自身を無価値とまで断じた伊吹レナに——どれだけの責め苦と後悔を与えるかも理解しない程に、愚か。

だから。

だから。

だから。

幼なじみの少年に、そんな妹を殺させるほどに——。

ユウは、云つてやる。

不気味で、おぞましく、常識外の理不尽を抱え、世界中の誰よりも強いはずなのに、平凡な幼なじみと、脆弱な妹よりも、遙かに愚かな彼女へ。

たった一言。

大好きだった、と。

「君は……」

カナは、手を離れた。

ユウは呼吸しようとして、むせた。盛大に咳き込みながら、地面に膝をつく。視線の先に、彼女の足下。もう既に遠い過去のように思える——誕生日のデートの日、その時に履いていた靴が見えた。

その足が、反対に向く。

一步、二歩と、彼女は離れていく。

ユウはまだ立ち上がることもできず、どうにか顔だけを上げて、その後ろ姿を追った。もはや彼女は振り返ることをせず、その瞳は、空へ向いていた。

空には、何も無い。

「僕は、伊吹力ナ」

虚無を見つめて、彼女はつぶやいた。

その肩が震えていることに、ユウは気づいてしまった。

語りかける言葉を見つけられず、沈黙は痛く、静寂は長かった。

やがて気がついた時、彼女はあらわれた時と同様に、唐突に消え去っていた。

その刹那に、謎めいたつぶやきを残しながら――。

「君は、誰？」

ユウには、まるで理解できなかった。

彼女に向けて伸ばしかけたその手を、無様に見つめた。

その手は、もちろん――。

――真っ赤な血で汚れている。

第16話「あるいは、ひとつの可能性」(4)

——真っ赤な血で汚れている。

一年前。

最後の時。

見下ろした両手が、真っ赤に染まっていた。

喘いでいた。苦しかった。痛みはなかった。自分の怪我ではない。自分の血ではない。それでも、喘いでいた。苦しかった。これ以上の痛みを、知らなかった。焦燥感と共に、吠えていた。叫んでいた。悲鳴をあげていた。

誰か、誰か、誰か。

誰でもいい、誰でもいいから——。

世界で一番信じられるその名を呼ぶことは、できなかった。
ユウは、知らなかった。

自分の無力さ。力がないということの残酷さ。誰も助けることができない。誰も救うことができない。壊れていく。終わっていく物語を、眺めているだけしかできない。

自分の手の中で、物語が終わっていく。

冷えていく身体を、抱きしめた。

そうして、ユウも赤々と染まっていく。底の割れた花瓶を抱くようだ。血が流れ落ちる。片腕がない。その途切れた部分から、血が流れる。片足がない。その途切れた部分から、血が流れる。片目がない。その真っ黒な眼孔から、血が流れる。

グロテスクでおぞましい姿だ。

少女をそんな目にあわせた彼女は、そう吐き捨てた。

暗転。

「やあ、ユウ君」

少女は、そしらぬ顔をして、あらわれた。

まるで何事もなく、悲しみも後悔も何もない顔で、笑った。

伊吹カナとそうして再会した時、ユウは結局、何も云えなかった。彼女を責めることができず、自分を否定することができず、彼女を受け入れて、自分を蔑んだ。

——ほっとした？

いつも通りの笑顔を浮かべる彼女が、無言で、そう問いかけているようだった。

——僕が、僕のままではよかった？

少女の死は、全てを変えるはずだった。

変わらない日常を望んだのは、ユウ自身だ。

そうして、彼女は、伊吹カナで在り続ける。存在していたはずの別の道を、ユウが選ばせなかった。あの瞬間、彼女に普通の女の子として生きる道を与えなかった。

だから、彼女は——。

云えばいい。

罵ればいい。

蔑めばいい。

侮蔑すればいい。

悔やめばいい。

呪えばいい。

大切な者を失って、一人ぼっちになってしまった少女が、孤独の中でも強く在り続ける必要なんてないだろう。世界の平和などという形のないものに、人生を捧げる必要なんてないだろう。最強と呼ばれる必要もなければ、無敵と謳われる必要もないだろう。

頂点に立つ人間は、一人だけだ。

そんな寂しい存在に、なる必要なんてないだろう。

それなのに、一年という長い時間、彼女は彼女として生きた。

だから、彼女は――。

泣けばいい。

一年間。

時間が傷を癒してくれる――そんな言葉は嘘だった。大切な者を失った自分と彼女は、深く刻まれた傷を舐めあいながら、止めどない血を流すばかりで、涙の一滴、流そうとしなかった。

べったりと身体を汚したまま、涙で拭うこともできない血塗られた手で、それぞれの手を掴んでいる。いい加減、それに気がつくべきなのだ。失ったもの、失ってないもの。そんな当たり前のことに、目を向ける時が来た。

――真っ赤な血で汚れている。

ユウはため息をつく。

二人の手は、もちろん――。

――真っ赤な嘘で汚れている。

第16話「あるいは、ひとつの可能性」(5)

一人になった。

ユウは立ち上がる。

カナは消え去り、周囲には彼女の気配どころか、虫の鳴き声ひとつなく、静寂が満ちている。人狼と格闘した際の土汚れを手で払いながら、少しばかり、闇の彼方に目をやった。

カナは行ってしまった。

最後の言葉には、心臓を撃ち抜かれたような衝撃すら覚えた。

彼女が今、どんな状態であるのか――気にならないと云えば、嘘になる。いつもならば、追いつけないとわかっていても、足掻くように探し回っただろう。

思えば、十四年間の人生で、世界の中心にはいつでも伊吹カナがいた。ユウはその周囲をぐるぐると回る衛星に過ぎず、他のことなど、何も考える必要がなかった。

盲目的な生き様に、ため息。

その全てを否定するわけではない。

伊吹カナがいたから、今の自分があることを、ユウはわかっている。無様で、情けない愚か者でも、幸せであったことだけは間違いないのだから。

感謝をする。

そして、背を向けた。

今は、他にやるべきことがあった。

気持ちの悪いぐらいに冷静な自分に気がついて、ユウは首を傾げる。だが、迷う時間が惜しいことにも、すぐさま気づく。心配な相手は、カナだけではない。自分が守ると約束した少女が、もう一人いるのだから。

セシルは間に合っただろうか。

人狼を相手に、勝てるだろうか。

確かめるためには、追いつくしかない。伊吹カナの予想外の登場で、ユウ自身の危機は去ったものの、時間は随分と経ってしまった。急ぐ必要があった。

歩み始めた一歩目——ふと、立ち止まる。

些細なことを、思い出した。

嘘にまみれた右手を、ユウは目の前に掲げた。

「そうだった」

伊吹カナという横やりが入ったせいで、後一步を邪魔された。

決心は済ませたつもりだ。人狼達と対峙していたあの瞬間、彼女が唐突にあらわれなければ、取るべき手段はひとつしか残されていなかった。

もっとも、それ以前に、心は決まっていたようにも思える。

——ごめん。

その一言を口に出すことができた時に、道は定まったのではない。逃げ続けてきた可能性に、賭けてみる心を持てた。

だから、この場で口にする。

彼女と結んだキーワード。

ヒーローの器でないことを、ユウは知っている。カナのように格好良く振る舞うなんて、無理な話だ。お姫様のピンチに颯爽と駆けつけて、秘められた力を解放する主人公みたいな演出は、考えただけで鳥肌が立つ。

だから、ユウはこの場で云ってやる。

一人きり。

カナが去り、ルーティアを追いかける——わずかな隙間の時間。何でもない瞬間、何でもない場所、敵に追い詰められたわけでもなく、命の危険が迫ったわけでもなく、愛する人が死ぬのを目撃したわけでもなく——ただの気まぐれで、ユウは一步を踏み出す。

平凡で、ぬるま湯に浸かるような日常に、さようなら。

異常で、地獄の底に沈むような非日常に、はじめまして。

苦笑と共に、ため息。

主人公らしさはいない。

どこまでも自分らしく、覚醒する。

「カラドボルグ」

第17話「覚醒」(1)

ユウ君。

僕と君が見つけたこの剣——カラドボルグは、二人の宝物だ。それなのに、僕だけが独り占めしていることを、大変に申し訳なく思うよ。

なに？

気にしない？

そうだね。君ならば、そう云うだろうね。むしろ、こんなにも過ぎた力を持たされたならば、逆に面倒と感じるかもしれない。君は子供らしくないね。野心を持たないし、一番になりたがらない。平凡であることを望み、変化を嫌う。

その理由がわかるから、僕も強制はしない。

だけど、この剣の力が必要になる時が来るかもしれない。だから、そうなってもいいように、僕はできるだけ、この子に言い聞かせておくことにしよう——いやいや、独り言さ。君が気にすることはないよ、こつちの話だ。

さて。

君は無意識に優しい子だから、あえて言葉にすれば否定するだろうけれど、君の生き方は、レナに捧げられていると云ってもいいね。こら、笑わない。

照れ隠しだよ、それ。

レナは、脆い子だ。身体の事ばかりではなく、心についてもね。あの子は一人では生きられない。孤独に耐えられない。レナは他人と繋がることで、ようやく生きる意味を見出せる子だ。

僕は、最強だ。

ユウ君は、普通だ。

レナは、脆弱だ。

だから、とてもバランスがいい。僕達三人が、僕達のままで在り

続ければ、夕風の訪れた海のように、いつまでも平穏な時が続くだろう。

だけど、忠告しておこう。

この世界に、変わらないものなんてない。

残酷な事実だ。この僕ですら、変わらないなんてことはないんだよ。君だって、そうだ。君だって、いつか変わる。僕にはわかる。予言しておこうか。君はいつしか力を望む。

君が、僕になりかわろうとする日が、必ず来るよ。

うん？

笑ったね？

馬鹿らしいと思ったみたいだね。いいよ、ならば賭けをしよう。

まあ、絶対に僕が勝つ勝負だ。君からお金を巻き上げるのは酷だろう。大げさなものを賭けると、君が可哀そうだ。

そうだね、将来でも賭けようか。

君が勝ったら、僕がいつまでも君を養ってあげよう。

僕が勝ったら、君はいつまでもレナを助けてあげなさい。

え？

なんだい、その珍妙な表情は？

まあ、いいや。

賭けの内容は簡単だ。僕は、今から君に魔法をかける……ここらこら、逃げない。恐がらなくていいよ。大した魔法じゃない。別に、君を黒こげにしたりはしないよ。この前のアレは、ちよつとした手違いさ。

そもそも、君には必要な処置だ。

実を云えば、切り出すタイミングに迷っただけなんだ。

どういうことか？

わからない？

嘘だね。

最近、気づき始めていたと思うよ。君は、わからない振りをしているだけさ。僕やサヨコ達を見て、違和感を覚えているだろう。身

体の中を、血ではない何かが巡っているのを、感じるだろう。こちらの石ころや草花にも、力の流れを感じるだろう。

うん。

それが、魔力だ。

おめでとう、君は魔法使いだ。

もちろん、魔法使いという称号は、ただ力に目覚めたから得られるものではない。魔力が見える者、魔力に触れられる者——その程度ならば、この世界にも少なからずの可能性を秘めた者がいる。

だから、君はまだ魔法使いではない。

ただし、魔法使いになる素質は、十分すぎる程に持っている。それは、この僕が保証しよう。君を物心ついた頃から見てきた僕が、胸を張って云うのだから、まず間違いはないよ。

でも、そうだね。

わかつている。

だから、そんな顔をしなくてもいい。

君は、魔法使いになる道なんて、望んでいない。

だから、僕が魔法をかけてあげると云っているんだ。この魔法を受ければ、君の力は封じられる。僕のかけた魔法を解かない限り、君が魔法使いになることはない。

解除のキーワードは、教えておいてあげる。

そうだね、この言葉がいいだろう。

僕と君の合言葉だから。

カラドボルグ。

その時が来れば、堂々と、右手を掲げて叫べばいい。

魔法使いになるということは、受け入れるということだ。変化を、未来を、自分自身を——肯定するということだ。その道を選び、最初の一步を踏み出す君には、ヒーローみたいなポーズが似合うだろう。

前を向くといい。

目の前にあるのは、君の物語だ。

第17話「覚醒」(2)

ルーティアは恥じていた。

盗賊団の襲撃に遭ってから今まで、何度も失策を打っている。魔法陣の中で魔法陣に気づけなかったり——そして、暗殺者に急襲されながら、逃げることしかできなかったり。

あらゆる点で迂闊だった。

最善の方策、最適な行動——そうした選択肢は、確かに存在していたはずだ。可能性が最初からなかったなどという言い訳を、ルーティアはしたくない。病んだ大国を滅ぼし、救国の英雄となった母が歩んだ道を思えば、自分の置かれた現状など、ぬるま湯に過ぎない——ルーティアは、そう思う。

そう思うから、恥じる。

歯噛みした。へらへらと笑っていられるほど、安い自尊心は持ち合わせていなかった。己の失態から目をそらすような無様はしたくない。間違いは間違いとして受け入れる強さを、ルーティアは望む。——強くなりたい。

祈りのような言葉を胸に、前を見つめる。

火は、彼方。

朝焼けのように、向こうの空が赤く燃えている。

喧騒から離れた森の奥、深い闇。張り出した木の根があちこちに伸びた足場の悪さを気にせず、ここまで全力で駆けてきた。荒い息。大きく息を吸い込みながら、乱れた金の髪を、ルーティアは一本にまとめ上げる。深緑の瞳で、闇の中で切り結ぶ二者の影を追っていた。

セシルと人狼。

先程、人狼に追いつかれそうになった瞬間、窮地を救ってくれたのは盗賊団の少女だった。思わず「どうして？」と問いかけたルー

ティアに対し、人狼の爪を短刀で弾き返しながら、セシルは「ソーマが……」と叫んだ。

しかし、その言葉を全て聞き終える前に、人狼の苛烈な攻撃が始まり、ルーティアは後ろへ退がることを余儀なくされた。セシルは最初からそのつもりだったのか、迷うことなく人狼と斬り結びはじめた。

実力は、伯仲していた。

両者の刃は、相手を捉えるぎりぎりの所でぶつかり合っている。

人狼は、獣の性質を色濃く受け継ぐため、並の人間よりは身体能力で秀でている。力も速さも、本来ならばセシルが及ぶものではない。しかし、彼女はその年齢に似つかわしくないほど、魔力の扱いに長けているようだった。

攻防は、それほど長く続かなかった。

実力が拮抗しているため、決着がつかないと判断したのか——人狼の方が、間合いをあげた。その動きを見て、セシルは得意げな顔で短刀を構えなおす。挑発的な言葉が投げかけられるも、人狼は無言のままだった。

感情の削ぎ落とされたような、そのたたずまいを見て、ルーティアは一筋縄ではいかないと感じた。まだ子供の幼さすら残している人狼に、追いつめられた様子は皆無だ。呼吸のひとつ、乱れていないのだから。

そして、悪い予感的中する。

敵が本気を見せた。

これまで表情を変えず、一声も発しなかった人狼が、小さな呻き声を漏らした。途端、その身体が爆発的に膨れ上がる。その身を包んでいた衣服がはじけ飛び、背丈は子供の状態から遥かに大きく——それこそ、大人でも見上げる程に大きくなった。

その姿に、人間らしさは残っていなかった。遠吠えのような叫び声をあげて、完全に狼と変じた敵は、前足を大きく薙いだ。巨木が一本、へし折られる。

そもそも子供の体躯に、不釣り合いな獣の腕が生えていたのも異様だった。獣としての血が薄いと考えていたルーティアだが、それは大きな間違いだった。

見た目が凶暴になっただけならば良かった。

だが、当然ながら、その力も凶悪に変じていた。

先程までは子供の遊びだったと云わんばかりに、遠く離れていたはずの間合いすら、一步跳躍しただけで零になる。遠目に見守っていたルーティアですら、追うのがやっとの動きだった。正面で対峙していたセシルからすれば、敵の姿が消えたように錯覚しただろう。それでも一撃を防いでみせた。

しかし、巨爪に引き裂かれることだけは避けたものの、短刀は弾き飛ばされていた。

人狼が吠える。

セシルは咄嗟に飛び退こうとしたようだ。

だが、速さが根本的に違う。武器を失った彼女は、あっさりと地に叩き伏せられていた。人狼の片腕が、もかく動きを封じるようにセシルを押さえつける。さらに片手が振り被られ、鋭利な刃物同然の爪が剥き出しになる。

決着。

セシルの方が死ぬ。

悟った瞬間、ルーティアは前に踏み出していた。

――なぜ？

ここで危険を犯す必要など、ルーティアにはない。

だが、それでも――。

「ルーティア・フェイメオール・ディルム」

自分にだけ聞こえるように、名を告げる。

覚悟の証、戦うための理由。

自らに刻んだ名前。

敵を見た。

人狼。

子供であるが、それが暗殺者であることは、最初に一目見てわかった。

暗殺ギルドの存在は、ルーティアもひそかに聞き及んできた。王宮で生きるということは、清濁併せ呑むだけの心構えが必要だ。悪しきものもまた、政治の一部であることは間違いないのだから。

暗殺という所業は、王宮が抱える闇にあつても、その最奥と云えた。

賢王と讃えられるウィルヘルト・ディルムの治世においては、そうした後ろ暗い単語を聞くことはない。だが、前王の時代——ジンドが滅びを迎えるまでの混乱期には、暗殺はひとつの切り札として、政争に利用されていたらしい。

もちろん、非合法な手段に打って出るからには、それをを用いる者も相応のリスクを背負うことになる。

暗殺は、あくまで最後の手段であり、安易に使用できる武器ではない。成否は当然ながら、証拠を残さないことも重要になる。それを為し得る高ランクの暗殺ギルドとなれば、数は限られた。

禁忌の子供、狼、そして何より暗殺対象に堂々と姿をさらすやり口——それらの特徴が、ルーティアに『恐るべき子供達』と呼ばれる暗殺ギルドの存在を思い起こさせていた。ほぼ間違いないという確信を抱きながらも、幾つかの懸念が残った。

——なぜ、私が狙われるのか？

——誰が、暗殺者を雇ったのか？

前者について、明確に思い当たる節はないが、そもそもアーカスの第一王女という肩書きだけで、目に見えない敵は無数にいるようなものだ。

問題は、後者である。

暗殺者の雇い主——暗殺者を雇えるだけの力を持つ者、暗殺ギルド『恐るべき子供達』と繋がりのある者。そこに思いを巡らした時、ルーティアはどうにも嫌な予感を覚える。なぜならば、『恐るべき子供達』は、三大国のひとつ、ソレイアと強い繋がりを持つ。

かつてソレイアにおいて血で血を洗うような政争が起こった際、とある陣営の敵対者達が数多く不審な死を遂げた。その裏側で暗躍していたのが『恐るべき子供達』であり、働きを認められた忌むべきギルドは、今現在もソレイアの有力者達と密接な関係にあると噂される。

もちろん、噂を根拠に、裏側にソレイアが潜んでいるなどとは結論付けられない。

ギルドの看板を掲げる以上、彼らは一定の信頼と金さえあれば、誰からでも依頼を受けるだろう。彼らの依頼主が誰であるか、推測材料は現状、何もない。『恐るべき子供達』だからソレイアが関係しているなど考えるのは、早計に過ぎる。

結局の所、ルーティアは何のカードも持っていないに等しい。

相手の手を看破したり、勝負に打って出る以前に、まずゲームの舞台に立つてすらいらない。嵐の大海でゆらゆらと翻弄される小舟のようなものだ。ルーティアにできることは、抗うことだ。戦う意志を見せることだけだ。

大声をあげた。

剣の打ち合いの際に、自然と発せられるような気合のかけ声。

セシルへ向けて、爪を振り下ろそうとしていた人狼が、こちらに視線を向ける。まっすぐ距離を詰めながら、ルーティアは乱れた呼吸を整えて、一息に詠唱した。媒体を持たない今の状況では、大量の魔力を用いる高位の魔法は使用できない。加えて、式を補助するような道具も持っていない。魔法陣を悠長に組む暇などない以上――詠唱と印が、頼みだ。

魔法。

魔力を変換して発動させる、理外の力。

神様の言葉によれば、それは《世界を変化させる力》と定義される。世界がその形を保つために定めている法則――理を、歪ませる。魔力は、そのための通貨だ。しかし、万物が等しく備える魔力は、それだけでは力の塊に過ぎず、世界に繋がることできない。だから

ら、人間は《式》を編み出した。それは、長い時をかけた研究の成果であり、人間の叡智だ。人は、《式》の法則性に従い、世界に触れて、理に触れる。

膨大な規則言語を口述する——詠唱。

手の動き、指の動きで、魔力を編み込む——印。

《式》には様々な形態が存在しているが、詠唱と印は最も代表的なものだ。とはいえ、補助具のひとつなく、魔力媒体すら使用せず、純粋な《式》だけで魔法を扱うことなど普通はありえない。

それを為すためには、辞典以上の分厚さを持つ式教本を全て暗記するだけの努力と、自身の身体を用いて魔力を溜め込む集中力や技量が要求される。王立大学で専門的な研究に従事した者や宮廷魔法官という要職にある者でなければ、まず辿りつけない領域だ。

だから。

ルーティアが、詠唱と印だけで、その手に炎の刃を生み出して見せた瞬間——人狼でさえも、驚いたような低い唸り声をあげていた。赤く燃える刃を、ルーティアは威勢良く吠えて、解放した。

普通の剣ならば遥かに間合いの外——だが、魔法で生み出した剣ならば、刀身の長さすら自在である。振り下ろす動きに併せて、ルーティアは追加詠唱する。さながら鞭のように伸びた刃が、人狼の身体へ迫る。

セシルを狙った一撃をあきらめて、人狼は跳躍した。

右手の刃を消す。

両の手を使つて、ルーティアは印を結んだ。

四方に向けて、感知の網を張る。ただでさえ敵は人外の動きをする所、夜の闇が深い。目で追うのが難しいならば、魔法を利用するしかない。張り詰めた糸に何者かが触れたならば、ルーティアは一瞬で感じ取ることができる。

後方。

左斜め上。

右の掌に残しておいた火種に、魔力を注ぐ。肥大化した炎に、詠

唱式で形を整える。炎の刃を再び右手に構えながら、背後に迫る敵との距離を測り続ける。

今——と、振り返る。

左手でひそかに結んでいた、盾の印を突きつけた。同時に、間に合う限りの詠唱を続ける。分厚く、堅く、大きく、曲がらず、折れず、止まり、防ぎ、守れ——無茶な詠唱式を続けるだけ、身体中の魔力が減っていく。

だが、全力でやらなければ、盾は保てない。

眼前に迫っていた人狼の牙が、硬質な音を立てて止まった。

その衝撃で、盾の魔法——虚空に浮いた障壁に、無数の亀裂が走る。

一度で充分。

ルーティアはそう思う。

武器も道具もない状況で、魔法を長時間使用し続けるのは、今のルーティアでは不可能だ。一撃で倒せなければ、どちらにしろ負けなのだ。

予想外の障壁の出現に、人狼はのけぞっていた。

好機。

ルーティアは盾の魔法を解く。

残っていた魔力を全て注ぎ込み、炎の刃をさらに鋭くした。

一閃。

しかし。

浅い——と、直感。

皮一枚を斬っただけだ。血が噴き出す代わりに、焦げ跡が一字に走っている。発火させることもできなかった——ルーティアは苦々しく思うが、後悔の暇もない。

魔力は尽きた。

炎の刃を保つこともできない。

苦し紛れに詠唱を続けるが、魔力も空っぽになった身体は、甲冑でも着込んだように重く、集中力も散漫になっていた。赤々と輝く

獣の瞳が、獲物の弱り具合を確かめるように、じっと見据えてくる。思わぬ痛手を受けたことで、人狼は警戒するように、ルーティアの周囲をぐるりと回り続ける。冷徹な狩猟者に、どれだけ言葉を向けてみても、見逃してくれるということはないだろう。

策もない。

力もない。

ならば、自分の名を汚さず、誇り高く死すべきだ——ルーティアはそんな選択しかできない己の弱さに、本当に絶望しそうになった。足掻け、足掻け、足掻け——と、心の奥底で、王女の仮面を失った自分が、泣き喚いている。

——強くなりたい。

母のように、強さを望む。

ルーティアは、すぐ近くで気を失っているセシルを見た。ほんの一時とはいえ、彼女に窮地を救われた。盗賊団『暁の死線』もまた、自分を誘拐しようとする敵には違いないが、それでも恩があることは事実だ。

ただ失うだけの命ならば——。

誰かを救うために、失いたい。

国を救った母に比べれば——それは、比べるまでもないけれど。

——強くなりたい。

——だから、最後まで戦う。

そんな風に覚悟を決めて、まさに死ぬための逃走を始めようとした瞬間だった。一步後ろへ足を動かし、その砂を踏む音に、人狼が逃がすまいと身を屈めた瞬間だった。ざわり——と、風が吹いた瞬間だった。

人狼が、彼方を見た。

ルーティアも、彼方へ誘われた。

「マ——アツ——。ダイ——」

聞き慣れない、異世界の言葉が響く。

世界が、頭を垂れている——そんな風に、ルーティアには見えた。

あまりにも濃密な魔力が、その周囲に渦巻いていた。さながら災厄だった。大気、大地、草木——彼を囲む万物から、魔力があふれ出している。精霊と契約したわけでも、魔法陣を敷いたわけでもないだろう。それなのに、万物が——世界が、彼に従っている。

魔法は《世界を変化させる力》だ。

しかし。

魔法の使用者——人間と、世界との関係は対等ではない。人は魔力を用いて、頼み込むように——あるいは、なだめるように、脅すように、取引するように、世界を変化させる。世界は、一人の人間を氣にかけない。ちつぽけなそんな存在を、わざわざ意識しない。だから、魔法を使う時は、必死に世界に干渉するしかない。

シースーアの人間は、世界に従って、魔法を使う。

世界を畏怖しながら、敬意を持って、変化を願う。

神様は云った。

——世界が従う、人間がいる。

神様の世界から落ちてきた天使は、シースーアに住まう人々を見て、誰もが同じ勘違いをすると云う。シースーアでは魔法を扱うことは当然だったが、天使にとっては異様であるらしい。

天使にとって、魔法を扱う人間は、特別なのだ。

しかし、彼らが魔法を扱う人々につける呼称は、実は、シースーアにおいても特別な意味を持つ。それは、神様が特別に定義した存在を指し示す。

世界を従える人間。

真の意味で、魔法を《使う》存在。

相馬ユウを見て、ルーティアは呆然とつぶやいた。

「魔法使い」

第17話「覚醒」(3)

ユウは、ため息をついていた。

右腕から光を伴って剣があらわれる——そんな劇的な変化は、もちろん起こらなかった。合言葉を唱えてみた瞬間、あまりの呆気なさに、ユウは恥ずかしさすら覚えたほどだ。

右手を高く掲げていた。

伊吹カナならば、ヒーローみたいに様になっただろう。

虚空を掴むばかりの腕を、思わず引つ込めようとした時、ようやく変化に気がついた。指先に灯った、わずかな光。蛍でも止まっているのだろうか——と、首を傾げて、ようやく気がついた。

そうなのだ。

気がついた。

ユウは、それを知っていた。

——魔力。

知識は、学んだはずでもないのに、最初から頭の中にあった。

心臓の動かし方を、動物は学ばない。呼吸の仕方を、動物は学ばない。生きる上での、ごく当然の営みが最初から身体に刻まれているように——ユウは唐突に《理解》を押しつけられた。

さながら、合言葉が鍵。

心の奥で閉ざされていた箱が開き、中身が溢れだしたような感覚だった。

指先に見えた魔力の欠片を、一度、消した。試みるように、両の掌で水をすくうような形を作ってみる。頭の中で念じる必要もなかった。すぐさま、湧き出でるように魔力が零れた。

それを宙に舞わせる。

飛沫のように散った魔力の粒は、重力に逆らい、ユウを中心に浮かぶ。意識するとおり——イメージのままに力が動くことを知って、ようやく高揚感を覚えた。

——戻れ。

魔力が還る。

両手一杯ほどの魔力は、身体中に感じる力のごく一部に過ぎない。それでも、魔力を無駄にすることは、いたずらに体力を消耗することになる——誰に教わったわけでもないが、ユウはそれを既に知っていた。

周囲を見る。

あらゆるものに、力が宿っていることに気づく。自身の内側に流れる力に比べれば、どれも微々たる光に見えた。だが、大気と大地は果てなく広がり、それは高所から夜の繁華街を見下ろした時のように、どこまでも無限に続くように思えた。

世界は、魔力に満ちている。

そして、世界が手を差し伸べている。

ユウは悟り、命じた。

——力を。

願いは、当然のように、結果を生んだ。

世界は、当然のように、ユウに従った。

常人では聴くことができないだろう音を——遙かな遠方で刃が打ち合うその音を、ユウはあっさりと拾う。普通に走れば数分はかかる距離だ。音だけで距離まで察した。そんな異常な感覚に戸惑いを覚える一方、願うままに得られた力に、不謹慎な笑みが漏れた。

走れば、数分の距離。

——常人ならば。

ユウは半ば冗談のつもりで、跳躍した。半分は冗談のつもり——だが、半分では確信もしていた。跳べることはわかっていて。知りたかったのは、どれだけ跳べるかということだ。

冗談のように、飛んだ。

森を見下ろした。

彼方に、魔道列車のレールが見えた。ルーティアと二人、森の中を随分とさまよったものだ。上空から眺めれば、自分達の歩いた距

離がよくわかった。森はかなり広大なもので、このまま奥深く進んでいけば、迷子になっていたかもしれない。

今となつては、どうでもいいことだ。

背の高い木々よりも空に近づいたユウは、力の加減を間違えて、ほぼ垂直に飛び上がってしまったことに気づいた。ほんの数秒、滞空した後で、青ざめた。

落ちる。

悲鳴をあげそうになって——やはり、悟る。

骨折では済まないだろう勢いで、地面が近づく。ユウは体勢だけ立て直した。ごく普通に、足から地面へ向かう。わかつていた。魔力で満ちた身体が、既に異質なもののへ変わっていること。

着地する。

踏みつけた木の根が、トマトのように潰れた。

それだけの勢いだったが、怪我どころか、足が痺れることもない。無事だった。安心すると同時に、自分がどれだけ馬鹿馬鹿しい存在になってしまったのか——それを実感して、ユウはため息をついた。身体のおちこちに触れてみるものの、見た目や感触には違和感などない。それでも、今ならば銃弾を正面から受けても無事に済みそうな予感すらあった。

魔法使いの定義。

——魔法が使えるから、魔法使いではない。

ユウはそうした話を過去に聞いたことがあった。魔法使いは、魔法をえるから強いというわけではない。彼らは、魔法を使わずとも、兵器のように強いと云う。

その意味を、理解した。

ユウはまだ魔法を使っていない。

ユウはただ、魔力の流れをコントロールしているに過ぎない。初めての感覚に戸惑って、出力の上げ方がわからないだけなのだ。それなのに、人の領域をあつさり踏み越えたような動きをしてしまう。力の使い方を覚えて。

魔法を自在に扱えるようになったならば。

——勝てないはずだ。

幼少時から、遊び相手になってもらっていた数々の魔法使いの顔を思い浮かべ、ため息をつく。例えば、三千字サヨコと戯れに剣の打ち合いをしてきたことも、今になってみれば気恥ずかしい。彼女がどれだけの手加減をしていたのか、それに対して自分の方はどれだけ必死だったか——ユウは想いを巡らした後、思考を打ち切る。

今度は慎重に、一步を踏み出した。

歩き立ての子供のように、ゆっくりと進む。徐々に小走りになって、やがて普通に走り出す。何もない平原ならば、試みるように全力で走ってみてもいいだろうが、ここは森の中である。予想外の速さが出て、大木に激突しては堪らない。

息を止めるような心地で、魔力を調節した。

それでも、速い。

地を蹴った一歩が、これまでの人生で経験したこともない加速を生む。木々を避けて、突き抜けるように進んだ。時折、魔力を込め過ぎて木に体を打ちつけることもあったが、痛みはなく、むしろ木の表皮が剥がれ落ちる結果となった。

結局、一分も走らなかつた。

呼吸すら乱れない。

目の前に、ルーティアとセシル、人狼の姿が見えた。

セシルは倒れている。目立った傷はないが、意識を失っているようだ。倒れたセシルからやや離れた場所に、ルーティアと人狼が相対していた。その人狼は、暗殺者四人の中でも一番人間の名残を持つていたはずだが、今は、完全に獣のそれと化していた。

ルーティアは、戦っていた。

戦いの果ての姿。

肩を落として、立っているのも精一杯というような有様だ。喘ぐように呼吸をしている。豊かな金の髪は動きやすいように一本に束ねられており、凜とした横顔が、はっきり見て取れた。力も尽きて、

逃げる方策もなく、凶悪な敵を目の前にして、それでも誇りを失わず、戦う彼女の姿に――ユウは、見惚れた。

どん底で足掻き続ける姿に、強さを見た。

感謝すら覚えるほどに、それは美しい姿だった。

彼女を救う理由が必要と云うならば、それで十分だ。

「ルーティア」

そして。

その瞬間。

一人の少年が、ヒーローになる。

お姫様のピンチに、颯爽と駆けつける救世主――それはきつと、古めかしいストーリー。何処かで誰かが、形を変えて、幾千年も語り続けるような物語。笑ってしまうように陳腐で、悲しくなるほどにありきたり。世界を上から眺める神様がいたならば、ああ、またか――と、ため息をつくだろう。

しかし、それでいい。

どこかで見たようなストーリーでも、かまわない。誰かがやり尽した物語でも、かまわない。陳腐と笑われたとしても、くだらないと見捨てられても、気にすることはない。

伊吹カナは、ヒーローだった。

相馬ユウは、代理だった。

代理として、一年間、物語を続けてきた。終わるはずの物語を――存在するはずのない日常を、取り繕った。そうして、自分を失った。主人公のいない物語の中で、脇役ごときが、意味を為すはずがないのだから。

空虚で意味のない、終わった物語に、結末を。

陳腐でくだらない、はじまる物語に、祝福を。

ユウはそう思う。

単純だ。

——これは、相馬ユウの物語。

主人公らしく、戦う。

第18話「黄金の竜」(1)

恥ずかしい。

シンプルな感情一色で、心が染まっていた。

すぐ真横に、ルーティアがいる。彼女は目を丸くしながら、穴の空くほどの勢いで見つめてくる。その視線から逃れるように、ユウは顔を伏せていた。頭に血が昇っていることを自覚する。

顔を隠すように、ルーティアの前に手を掲げてみた。

彼女は無言のまま、その手を払い除けた。

沈黙は数秒。

だが、永遠にも思えた。

伊吹カナの偉大さを、あらためて噛みしめる。

誰よりも過ぎた力を持ちながら、彼女はそれをありのまま受け入れて、自分らしく、いつでも堂々としていた。人を助けること、窮地を救うこと――ヒーローみたいに、格好つけること。そうした当たり前を、彼女は、あくまで彼女らしく行っていた。

それがどれだけ凄いか、ユウは実感していた。

ルーティアをピンチから救った。

結果だけ記せば、そうなる。

命をかけて、死に物狂いで行ったことならば、問題なかった。そうであったならば、「大丈夫か？」と自然に問いかけて、彼女が無事であったことを喜んだだろう。場合によっては、感情の昂ぶりの余り、「よかった」と抱きしめるぐらいしたかもしれない。

残念ながら、そうはならなかった。

ユウの心は白けていた。

たとえるならば、ユウのした事は、道端で子犬にきゃんきゃん吠えられている女の子を助けたようなものだ。いや、それでは助けたと表現するのも馬鹿らしい。ほんの少し、他人事に手を出したようなものだ。お節介とすら云える。

使命感に燃えて、全力で駆けつけた自分が滑稽だ。
そうなのだ。

全力を出した人狼すら、今のユウにとっては、子犬と呼んでも差し支えないレベルだった。目の前には、やりすぎてしまった成果が、とても無惨な形で示されている。

殺してはいない。

それが救いだ。

それでも、尋常ではない怯え方をする子供を目の前にして、飄々と振る舞えるほど、ユウは魔法使いとしての在り方に馴染んでいなかった。

回想。

人狼が、ルーティアを追い詰めていた。

セシルは倒れ、ルーティアも意を決したような表情で、まさに一目で絶体絶命とわかる状況だった。そんな渦中に飛び込んだユウに対し、人狼もルーティアも、最初、呆けたような視線を向けてきた。「間に合って良かった。大丈夫か？」

ルーティアへ呼びかけたユウだったが、言葉は通じない。

どちらにしろ悠長に話し込んでいる場合ではない。ユウはそう断じて、まずは敵を排除することが優先と定めた。敵意を隠さずに、人狼をにらみつけた。そうすれば、ようやく人狼の方も状況を思い出したようで、低いうなり声と共に、獣じみた殺気を見せつけた。そして、獣の動きで、飛びかかってきた。

瞬間、ユウは思わず叫んだ。

「遅い」

驚きのあまり、絶叫。

冗談かと思った。

だが、戦いの気構えを整え、五感を研ぎ澄ました身体は、世界をさながらスローモーションのように見せてしまっている。

このまま普通に避けていいのだろうか——そんな風に考え込む時間すら持ててしまうほど、ユウには余裕があった。とりあえず、様

子見と考えて、一撃をかわした。

人狼は、その大きな体に似合わず、柔軟に身をならせて、二撃、三撃と猛追してきた。ほんの一時間前までの自分だったならば、冷や汗を浮かべて、死を肌の表面に感じながら逃げ回っただろう。そんな必死さを懐かしむほど、余裕だった。

攻撃を避ける際は、人狼の背後に回り込むように動いた。

それが何度も続く内に、人狼の様子に焦燥の色が強くなった。

可哀想に——などと、この時点で、既に哀れみすら覚え始めていたユウである。そうした感情には覚えがあった。伊吹カナに喧嘩を売ってしまった人々を見るたび、彼らが感じるようになる恐怖を想って、ユウはいつも「ご愁傷様」と祈ってきた。それに似ていた。せめて一撃で——。

それが慈悲と思い、ユウは拳に力を込めた。

結果、込めすぎた。

右ストレート。

まず、敵の懷に飛び込むため、地を蹴った力が強すぎた。敵のすぐ傍を、ミサイルのように突き抜けた。そうして放った右拳は、幾百年かけて成長しただろう大木を数十本も薙ぎ倒し、森の中に謎の広場を生み出すことになった。

「反省」

この時点で、ユウは完全に投げやりになった。

攻撃はできない。

力の加減が思うようにできない今の状態では、目一杯に手加減したつもりでも、下手をすれば、敵の身体を真つ二つにへし折る可能性がある。

——仕方ない。

人狼の方が疲れ果てるまで、攻撃を防ぎ続けよう。賢い手段とは思えなかったが、ふざけた力には、ふざけた使い方がお似合いだ——などと、ユウは半ば自棄になって考える。

ちよつとした環境破壊の跡地を飛び越えて、ユウは素早く人狼の

間合いに戻った。さあ、来い——と、視線を送ってみるも、人狼の方がどうにも戦意を失いかけているようで、躊躇して見えた。

それでも、暗殺者としての最後の矜持を思い出したのか、人狼は片腕を大きく振りかぶり、今までよりも勢いのある一撃を放った。

ユウは敢えて、避けることをしなかった。

身体能力が規格外に向上していることは、既に理解した。ならば、そんな身体で小技を用いればどうなるのか——ユウは試みる。迫る一撃に対して、手の甲を使い、受け流す。同時に、足払いを仕掛けて、相手の体勢を崩そうとした。

結果。

人狼は、地響きが立つ程の凄まじい勢いで、大地に叩きつけられた。

「ご、ごめん。そんなつもりでは……」

己の為したあまりの所行に、ユウは狼狽える。

内蔵でも痛めてしまったのか、人狼は咳き込んで多少の血を吐きながら、起き上がるうとして震えている。重傷を負いながら、それでも動き回ろうとする野生の獣を見るようで、ユウは心が痛んだ。

もはや敵ではない。

力の差がありすぎて、戦いにならない。

ユウはため息をついて、戦闘態勢を解いた。立ち上がるうとする人狼を助けるつもりで、手を差し伸べる。当然ながら、人狼はその手を掴もうとしない。かすれた声で吠えながら、暴れようとするばかりだ。

意に介さず、ユウは近寄って、その巨体を引っ張り起こそうと——力を込めた。

やりすぎた。

「ああ……」

重い荷物を持ち上げる時のように、ぐっと力を込めた——それが、まずかった。

中身が詰まっていると思ったスニーカーが、実は空っぽだった時など、思わずバランスを崩し、ケースを放り出してしまったりすることがある。

常識外の力を備えた今の身体に、人狼の巨体は軽すぎた。

ユウは誤って、人狼を宙に投げ飛ばしてしまった。

空に向かって、星のように小さくなる人狼の姿を見送る。

やがて垂直に飛んでいった彼は、まっすぐ落ちてきた。

落ちてきたその身体を受け止めると、彼は狼の姿から、子供の姿へ戻っていた。狼の巨体に変じた際に、衣服は大部分が破れてしまっていた。ぼろ布をわずかに身にまとった十歳ぐらいの痩せた子供が、ユウの腕の中、ありえないものを見るように、その瞳に恐怖の色を浮かべ、がたがた震えていた。

そして、現在。

——恥ずかしい。

ユウは、そんなシンプルな感情に身悶えている。

呆けたままのルーティアは何も云わず、遠くの方で腰を抜かした子供は、相も変わらず震え続けている。彼は子供であるが、暗殺者である。『恐るべき子供達』という名で、シースーアでは相当に有名な組織の一員のようだ。

想像してみる。

痩せた子供が、実戦に駆り出されるまでの経緯。彼が歩んだであろう過酷な日々。ルーティアを狙って登場してから今まで、戦いの最中でも、彼は殺意以外の感情を見せず、さながら冷えた刃のような、ぞくりとさせる薄気味悪さを伴っていた。そんな風になるまで——感情を削ぎ落とすように生きてきた子供に、恐怖すら思い出させたということ。

ユウが視線を向ければ、子供は首でも絞められたように蒼白な顔になり、逃げだそうと必死になるが——痛めた身体が思うように動かないのか、打ち上げられた魚のようにもがくばかりだ。

ユウはため息をつく。

格好をつけるなんて、とんでもない。

ヒーローではなく、喜劇の主役になった気分だ。

「ルーティア」

これ以上の沈黙は耐えられないと思い、ユウはようやく意を決する。恥ずかしさで頬が上気していた。手ではたと顔を扇ぎながら、ゼンマイの切れた人形のように立ちつくすルーティアを見る。

父である国王に裏切られ、盗賊団の罠に陥り、唯一の武器である騎士からも離れ、暗殺者に追いつめられ――間違はなく、死を間近に感じただろう彼女は、まだ目の前で起こった出来事が信じられないと云うように、虚脱している。

宝玉のような深緑の瞳に、コメディ映画のような戦闘シーンはどのように映ったのだろうか。

感想を聞くのも恐ろしく、できれば無言のまま、全てを忘れてくれればありがたい。ユウはそんな風に思ってみるが、当然、これまで幾度も芯の強さを見せてきたルーティアが、永遠に呆けているはずがない。

唐突に、ユウは顔をつかまれた。

ルーティアの両手が、頬を撫でる。引っ張られる。髪をかき乱すように、頭も撫でられた。肩を叩かれ、腕を掴まれる。彼女は首を傾げながら、ユウの胸元に手を這わせて、抱きつくように背中にも触れてくる。空港でボディチェックでも受けるように、しばらくされるがままだったユウも、さすがに服を脱がされそうになつては、黙っていられなかった。

（なんだよ？）

手を払い除けながら、掴み取る。

これまで会話してきた時のように、握手する。

（あら？）

驚いたように、ルーティア。

（私の魔力は尽きているから、会話はできないと思っていたのに……でも、そうね。お互いの意思是繋いでいるから、あなたの方が魔

力を制御できれば、術は効果を発揮するのも当然だったわ。迂闊だった）

（魔力が尽きてるって、随分と疲れてるみたいだな？）

（ええ。あなたが駆けつけて来るまでに、人狼との戦いで、全ての力を使いきってしまったから）

（ああ。それは悪かった。遅くなった。大丈夫だったか？）

（ええ、怪我もないわ。ありがとう。彼女の方も、おそらく大丈夫よ）

視線を向けたのは、倒れているセシルだ。まだ気を失っているらしい。彼女の容態も気になる所だ。この後どうするか決めたならば、少なくとも介抱してやる必要があるだろう。

しかし、ひとまずルーティアの方だ。

（それで？）

（なにかしら？）

（べたべたと体を触って、何のつもりだ？）

（ごめんなさい。興味があつたから、思わず）

特に悪びれた様子もなく、ルーティアはあっさり云う。そして、まだまだ興味は失ってないとも云うように、顔を間近にして、じつと瞳の奥をのぞき込もうとしてくる。

（だから、やめろ）

（いいでしょう。自慢ではないけれど、三大国随一と云われるぐらいの容姿だから、あなたも近くで見ても嫌な気分にはならないと思うのだけれど。お望みならば、こちらの身体も触っていいわよ）

（凄まじい交換条件を提示してくれるのはありがたいけれど、そうした安売りの仕方は、品位とか価値を下げるぞ）

（ご忠告ありがたく頂戴するわ。でも、私自身がどうでもよくなるぐらい、今のあなたの価値は途方もないわ。目の前に、伝説と云われる存在がいるのに、それを無視することなんてできない）

伝説、と。

ルーティアは、そう云った。

（魔法使い）

歌声のように、ルーティアは声をはずませた。

（あなたのことは面白いと思っていたし、何かを為すような予感も覚えていたけれど、まさか、こんな風に何もかもを覆すような可能性を見せてくれるなんて、予想もできなかった）

ルーティアは、初めて、十四歳という年齢相応の表情を見せたようだ。それは、ユウの同級生達が他愛なく浮かべる笑顔と同じものだった。彼女が、打算も駆け引きもなく、感情をありのままにしていることが、少しだけ面白かった。

思わず、笑った。

聡い彼女は、そんなわずかな表情の変化を見て、自身の振る舞いに気づいたらしい。そこで恥ずかしそうに頬を赤らめるなどすれば、年相応の少女なのだろうが、あっさりと冷静に目を細めるあたり、ルーティアらしい。

そんな彼女らしさに、もう一度、笑う。

——さて、どうするか？

父である大国の王に裏切られた。盗賊団に罠にかけられた。暗殺者に命を狙われた。そして、彼女自身もまだ知らないことだが——伊吹力ナにまで、標的にされていたのだ。

四面楚歌。

敵ばかりの状態。

残された唯一の武器である相馬ユウが、隠していた刃を鞘から抜き放って見せたものの、これから先のことについては、まるで見通しもつかない。

それでも、ひとまず。

この長い一日に、仮初めの平穏が訪れたのではないか。夜になつてから久しい森は、暗闇と静寂に包まれて、これ以上の喧噪を望んでいないように思える。ユウ自身は力に満ちていたが、目まぐるしい展開の数々に、そろそろ頭を休めたいのも事実だった。

ため息をつこうとした。

そうして、ひとつのエピソードが終わると思った。

だが、結局、危機という山場を乗り越えたことは、気持ちの上で何かが終わったように錯覚させるだけで――物語としては、なにひとつの解決も決着も、見せていなかったのだ。

物語は、まだ途中。

解決や決着どころか、敵すら出揃っていないかった。

（ルーティア）

ユウは気がついてしまった。

空へ目を向けながら、皮肉な声色になった。彼女に憤りの感情を押しつけても仕方のない事だ。それを理解しながらも、馬鹿馬鹿しさを隠せなかった。

（お前を狙う敵の多さだけで、コメディになる）

行き過ぎた力を持ったユウの戦いが、冗談のようになってしまうように、数々の敵に理由もわからないまま狙われ続けたルーティアに、これ以上の敵があらわれたならば、それはもう笑うしかない。そして、最後に登場したその敵は、存在自体、冗談の塊だった。

頭上。

空を覆うように、飛んでいた。

（勝てる？）

ルーティアが珍しく笑えない冗談を云った。

（王女様のご命令とあれば……）

ユウも笑えない冗談で返した。

二人で表情をなくしたまま、見つめ合った。

悪夢を見るような気持ちで、もう一度、空を見た。

竜。

第18話「黄金の竜」(2)

竜は、神話の生物である。

それが実在したという物理的な証拠は見つかっていない。ただし、実在した《らしい》という伝承は数多く残っており、そのミステリアスな存在は創作物のモチーフとして非常に人気がある。

とある研究機関が、竜の遺物を発見し、それを解析して神話を現実のものにしようとした——すなわち、竜の複製を造り上げようとしたというオカルト話が、その昔流行したこともある。

日本は、世界の中でも、竜にまつわる話が特に多い国だった。一説によれば、竜は文明を発達させる前の人類を支配しており、日本列島をまさに根城にしていたという。日本人の祖先は、そうした竜を打ち倒し、そのまま土地に住み着いた勇敢な人種であったと——そうした都合のよい伝承は、さすがに誰かが脚色したものだろうが、そもそも神話に事実を求めても仕方ない。

結局の所、神話であれ、創作物であれ、竜は悪の側で語られることが多い。同時に、人が容易に倒すことのできない上位の存在として描かれる。

残虐であるが、知性は高く。

生物であるが、神に近く。

現実世界における竜とは、そうした存在だ。

少なくとも、現代には実在しない。

自分が竜を目撃した生き証人になるなど、ユウは想像したこともなかった。この感動を、どんな風に友達へ伝えようか——などと、現実逃避気味に考えてみた。

(黄金の竜)

ルーティアがつぶやく。

月のないシースーアの夜にあっても、空に浮かぶ黄金色の竜は、光沢のある鱗を盛大に輝かせていた。羽ばたきに併せて、その巨体

から濃密な魔力が燐粉のように舞い散り、それが暗闇の雲を背景に、星のように煌めいていた。

上空の相当に高い場所を旋回している。

大きな二枚翼、四肢に見える鋭利な爪、硬質な輝きを持った鱗、トカゲと形容するには神々しい優美な動き——そして、その眼光はまっすぐ自分達のいる場所を射抜いていた。

その意思など想像することもできないが——意思を持つほどの知性があるかもわからなかったが、狙われていることは間違いなかった。

そして、戦える相手でないことも、ユウは早々に理解した。

力を得た今だから、わかることもある。桁が違う。万に一つも勝ち目がない。そんな場合でないことはわかっていたが、笑える状況だと思った。

世界は広い。

上には、上がいる。

一步を踏み出してみただけで、決心した程度で、何もかも思い通りになるような強大な力を得るなんて、甘い幻想だ。滑稽と云うならば、今こそ滑稽だ。

ユウは己の立ち位置を理解する。

スタートラインを見つけたばかりの未熟者。世界という舞台を、袖から眺める新参者。だから、それを自覚して、慎重に進むしかない。

（ルーティア）

呼びかければ、彼女は振り向き、自身の感情をどう伝えていいかわからないとでも云うように、狂おしく頭を振った。そうして、吐き出すように叫んだ。

（ありえない）

言葉は、洪水のように流れ込んできた。

シースーアにおける竜がどのような存在なのか——ユウも情報を確認したい所だったが、話し込んでいる余裕があるとも思えなかった。

た。それでも、矢継ぎ早に流れた単語を拾い上げた。

（《七本》の竜の中でも、あれは……）

シースーアに存在する竜は、永遠の寿命を持って、創世の頃から生き続けている。七兄弟の彼らは、神に従い、人に従わない。北の地は彼らの住まう不可侵の領域。竜は、災厄。災厄で滅んだ国は、歴史上数知れない。

黄金は、最大の禍い。

黄金は、神様の過ち。

黄金は、七つの原初。

黄金の竜、神様の与えたその名前は――。

（エクスカリバー）

ルーティアはつぶやき、その単語にユウが反応しかけたのにも構わず、独り言のように続けた。

（黄金の竜と争って、無事で済む国はないわ。三大国でも勝てない。アーカスが、失ったから。大賢人が――青の天使が、十四年前、奪ってしまった。彼女を――七兄弟の中でも、人に最も優しかった《一本》を……）

（ルーティア）

ユウは彼女の肩を揺さぶり、独り語りをやめさせた。空に舞う黄金の竜が、どれだけ恐ろしい存在か、彼女の様子を見れば、それだけで十分にわかった。だから、それほどに凶悪な竜が自分達を見つけているならば、生き残ることを何よりも優先して考えなければいけない。

ユウは、それでも。

それでも、ひとつだけ尋ねる。

（その名前は？）

ルーティアが呆然と語った独り言。

シースーアの歴史を――彼女の国アーカスのことなど何も知らず、そもそも竜の存在すら正確には理解していないユウは、それでも確信に似た思いで、彼女の答えを待った。

胸の内に、黒く濁った霧が立ち込めるようだ。吐き気にも似た疑惑。意味などわからない。それでも、確かめなければ、とても前に進めない。

ルーティアは、ゆっくりと口にした。

十四年前、現実から墜ち、現実へ還った——《大賢人》や《青の天使》と呼ばれる一人の男が、三大国アーカスから持ち去った《一本》の彼女の名を。

竜が眠る際の化身——その《一本》の剣の名を。

（カラドボルグ）

第18話「黄金の竜」(3)

彼女の剣。

青鳥町の誰も訪れないような山の奥、ぽつかりと空いた洞窟の最奥、闇の溜まり場——幼なじみの男の子と女の子が、偶然、見つけてしまった。

一本の剣。

闇を斬り裂いて、剣は光を放っていた。光は、柄の装飾部から漏れていた。装飾は、竜をかたどっていた。竜の瞳には不可思議な宝石がはめ込まれ、光を零していた。

彼女は、剣を抜いた。

そして、その名を口にした。

カラドボルグ。

竜。

異世界に実在した黄金の竜を見上げながら、ユウはまだ実感を得られていない。空を覆い尽くすような巨躯が、子供でも抜ける程度の剣に化身する——常識的ではないが、ルーティアは竜をそうした存在として当然のように語った。

剣が仮初めの姿だとすれば、カナはその右腕に、竜を飼っていたことになる。彼女は、剣について多くを語らなかった。そもそも剣を抜き放つこと自体が少なく、ユウは時折、その存在をうっかり忘れてしまう程だった。

それでも、思い返せば、それらしい物言いは確かにあった。カナは、カラドボルグをそれ自体が意思を持つかのように扱っていた。

あのような化け物を——人間など一息で薙ぎ倒してしまいそうな神話の生物を、伊吹カナは平然と——当然のように、その身に宿していたのだ。

驚くべきことだろうか。

否。

伊吹カナならば、竜すら従えるだろう。竜が暴れた所で、飼い犬を叱りつけるように、抑えてしまおうだろう。むしろ、彼女のペットを務めるならば、竜ぐらいではなければ不可能だ。

洞窟の最奥。

宇宙のように、剣の光が舞った、あの時。

竜に向かつて、彼女は堂々と云った――さあ、おいで。右手を高々と掲げながら、おそらく剣が何者であるか理解しながら、それでも喜々として、嬉しそうに受け入れた。

ユウは、右手を掲げる。

空に舞う黄金色の竜に向けて。

――さあ、おいで。

そんな台詞を、吐けるはずがない。あんなものを従える余裕は、ユウにはない。あんなものを身に宿して、自分を失わない自信はない。

まだ、彼女の高みには届かない。

まだまだ、ヒーローの器には足りない。

それでも、人狼に囲まれていた時ほどに追い込まれた意識はない。竜と正面から争って、勝つことはできないだろう。ただし、この場をどうにか切り抜けられる《予感》はあった。

確信はない。

だが、ユウは唱えた。

「ソーマ」

ルーティアが叫ぶ。

闇。

掲げた右手。

身体を巡っていた膨大な魔力が、掌の先へ、吸われていく。

ユウは、知っていた。魔力の扱いが自在にできた時と同じだ。この《魔法》が、《自分の魔法》であることを、最初から理解していた。

黄金の竜が、見つめている。

遙か上空の彼方にいる彼と、視線が合った。探るような目つきだった。彼は、器を知りたがっている。お前は何者だ、お前は何ができる、お前は何になれる——無遠慮な問いかけの数々に、ユウは心の中で舌打ちして、無言のままに云い返してやる。

——知るものか。

知りたければ、勝手に見ていればいい。

——だから、黙っている。

黄金の竜が、笑ったように見えた。

小さな者が足掻く様を嘲笑するように、自らの存在が圧倒的に上であることを疑わず、やれるものならばやってみると気まぐれな慈悲をかけるようで——ユウは反射的に罵りの言葉を叫びかけたが、そこまでだった。

目の前の全てを覆い尽くすように。

闇が、広がった。

第18話「黄金の竜」(4)

闇に吞まれた。

虚空へ向けて伸ばしていた右腕の先から、闇は風船のように膨らんでいき、魔力を吸い込みながら勢いを増して、やがて破裂した。闇は湧き水のように流れ落ち、そのまま全身を包み込んだ。ヴェールのような感触、不快感はなく、懐かしさを覚えた。

気がついた時には、上下の区別もない空間へ、ユウは放り出されていた。

同じだ。

落ちていく。浮き上がっていく。回っているようで、止まっている。ぐるぐるとかき回される思考の中で、ユウはこの体験が二度目であることを強く意識した。

長いようで、一瞬。

落下。

「おっと……」

短く、驚きの声。

だが、無意識に予想していたためか、冷静に着地することができた。地面に両足で立つも、力が抜けて、がっくりと膝が折れた。

マラソンでもした後のように、全身が汗に濡れていた。身体が気だるい。意識も散漫となっており、起こった出来事の不可思議さに比べて、動揺も少なかった。しばらく気分を落ち着けるように目を閉ざしていた。

数十秒。

目を開けて、立ち上がる。

夜風。

森の匂いは、ない。

そこには、見慣れた風景が広がっていた。冗談のように思えて、ユウはしばらく呆然とする。ため息と共に、天を仰げば——仰ぐに

足る空が、ちゃんとそこにあつた。夜空が、月と星の輝きと共に広がり、恐ろしい黄金の竜の姿など、どこにも見当たらなかった。

——現実。

心の内でつぶやくも、夢の中のように、実感がない。

——異世界ではない。

七守学園のグラウンド。

見慣れた風景、灯りの消えた校舎、夜の青鳥町。

帰ってきた——そんな感慨を覚えるよりも、狐に騙されたような馬鹿にされたような感覚の方が強い。騙されてジェットコースターに乗せられて、ぐるりぐると猛スピードで回転した結果、何が起こったのかもわからないまま終わったような——拍子抜けの気持ち。長い夢。

幻覚を見ていた。

そんな都合の良い結末すら思い描いてしまう程に、目の前に広がる現実世界は、平素のままで、落ち着いていた。このまま日常に戻り、何でもない一日がまた訪れるのではないか——しかし、そんな妄想は、あっさりと、これ以上なくわかりやすい形で、崩壊する。

「ルートウフ——ラファン——、ソーマ」

声色すら、美しい。

背後から響いた呼びかけの声に、ユウは硬直して、じわじわと冷や汗を流した。やがて悪寒すら感じて、膝が震え始めた。

頭痛がした。

（ねえ、聞こえている？）

手を握られて、遂に、観念する。

振り返る。

夜の薄闇すら、その身ひとつで真昼のように輝かせてしまいそうな、非現実には美しい少女が一人、立っていた。燃え盛る森の中を抜けたため、頬は灰で黒ずんでいる。人狼から逃れるために走ったせいで、足下も泥で汚れている。だが、金の髪はおそらく真の金銀よりも光沢を持って滑らかで、深緑の瞳は異世界という不思議の前に

宝石よりも綺麗に輝いている。

物語は、途中。

どうやら休憩の暇はなく、一步を踏み出したからには、走り続けることが必然らしい。ユウは自分の選んでしまった運命を呪わしく思いながら、そこに無関係の彼女まで巻き込んでしまったことを申し訳なく思う。

——ごめん。

そんな風に、口を開きかけた瞬間。

「ソーマ」

歓声と共に、抱きつかれた。

突然の出来事に戸惑いながら、ユウは（なんだ？）と訊いてやる。これまで窮地の連続であった彼女は、子供のような笑顔で、空を指さしていた。

（あれが、太陽？）

その指さす方向を見やれば、白く輝く月。

（ここが、神様の世界？）

その呼び方はとても違和感のあるものだったが、シースーアに住まう人間からすれば、そうした認識になるのだろう。だから、ユウは苦笑と共にうなずいた。

冗談を云うならば、こういう時だろう。

ユウはため息と共に、云ってやる。

ようこそ、お姫様。

未知なる世界へ。

新たな物語へ。

第18話「黄金の竜」(4)(後書き)

第2部「異世界にて、代理として」了

ここまでご覧いただき、ありがとうございます。

物語は途中——というよりも、序盤もまだいい所ですが、区切りとしての第2部はここで終了です。引き続き、第3部「二十番目の魔法使い」をお楽しみいただければ幸いです。

また、ここに至るまでに100名を超えるお気に入り登録をいただきました。ポイント評価を頂いている方も含めて、この場を借りてお礼申し上げます。ありがとうございました。

第19話「魔法使いの夜」(1)

真紅の髪をした少女は、闇の中でまどろんでいた。

どれくらいの間、そうしていただろうか。

――伊吹力ナ。

その名を、少女は噛みしめていた。

今、彼女の胸中にあるのは、長く閉じ込められていた日々である。それは、一片の光すら感じられず、何も与えられない無為な日々だった。しかし、永遠すら覚悟していた日々は、意外にもあっけなく終わりを迎えた。

そして。

彼女は、自身の主を見つけた。

だから。

彼女は、約束を果たす。

――誤解される事が多かった。

そんな風に、彼女はこれまでの年月を振り返る。自分は与える存在ではなかった。自分は求められる存在だった。傲慢だった。時折、自分が神にでもなったように錯覚していたのだから。

結局の所、彼女は何物でもなかった。自身の存在は、誰かにその運命をゆだねること、初めて意味を持つ。そんな風に自分の生き方を悟った時、これから為すべきことが定まった。

――約束だ。

涙が出ることを、彼女は知らなかった。

戦うだけの身体が、涙を流す必要などないだろう。世界を平らにするための装置に、感情など不要だろう。それとも、神様は、人間でも作ろうとしていたのだろうか。

今となつては、尋ねることもできない。

真紅の髪。

偽りめいた髪を、少女は指先でつまんだ。

幾日経っただろうか——時間の感覚も曖昧になるほど、少女は呆けていた。長い時間に飽いていたわけではない。どちらかと云えば、少女は動けなかったのだ。ただ単純に、彼女は消耗していた。

——残った力も、あとわずか。

そして、闇を抜け出た。

夜の町を歩んだ。

青鳥町。

そこは表向き、平穩を保った場所だ。しかし、紙一枚をめくるような裏側には、いつでも肌をざわつかせる何かが潜んでいる。少女の力を持つてすれば、特に気にかける必要もないほどの異常性——だが、今日この夜ばかりは、違った。

——何か、いる。

予感は、確信に変わる。

それは、特に劇的な演出もなく、あっさりと登場した。旧知の友の家を尋ねるような気安さで、ふらり——と、道の向こう側にあらわれた。どんな化け物よりも、はつきりとわかる異常性を振りまいていた。

仮面の男。

彼は、どうやら、敵だった。

少女は跳躍した。

場所は、七守学園のグラウンドである。

夜の時間帯であれば、人が訪れることもまず少ない。それでいて、広い場所である。どのように事態が転んだとしても——すなわち、暴力に打って出るような展開になったとしても、周囲の被害が最小限で済むと考えた。

男は、追って来た。

もしかすれば、ただ偶然、道で出会ってしまっただけ——そんな淡い期待はあっさり崩れ、彼の目的が自分であったことを知る。少女は笑顔のまま、心を痛めた。

「やあ」

内心と裏腹に、余裕のあるポーズで挨拶する。

もちろん、相手がそんな生易しい存在ではないこと、少女は理解していた。だが、自身を形作るポーズは、どうしても必要だ。伊吹カナとして存在するために、その《らしさ》を失ってはいけない。

夜のグラウンド。

蒸し暑さだけが、両者の間に溜まる。

「久しぶりというべきかな？ それとも、はじめまして？」

少女は語りかけるが、男は応えない。

その表情は、仮面に隠されている。

真っ白な仮面だった。目も口も塞がれており、わずかに輪郭こそ形に沿っているものの、ただの白い板と呼んでも差し支えない。体格もまた、中肉中背で特徴がなかった。ありふれたスーツを着ている。

「僕だからいいけれど、その見た目では、変質者もいいところだ。夜道で出会ったならば、普通の女子中学生は悲鳴をあげて逃げちゃうよ」

少女はいつもの調子で言葉を吐く。

男は黙っている。表情が隠されているため、何を考えているのか——想像することも難しい。少女は気楽に待った。相手が何も話すつもりがないならば、それでいい。

語り合う言葉など、少女は持っていなかった。

沈黙が永遠に続く方が、僕とあなたには似合うだろう——少女はひそかに思うが、希望は儚く、男は遂に無機質な声を漏らす。

「赤い髪の少女が、三散斬の一人を倒したと聞いた。お前の仕業か？」

感情のない声色だった。

「そうだよ。ああ、ちなみに、サヨコの名誉のために云っておくけれど、倒したというのは云い過ぎだ。彼女は混乱していただろうし、本気でもなかった。彼女が魔法を使っていれば、僕はひとたまりもなかっただろう」

謙遜ではなかった。

男も理解を示し、それについて何も云わない。

「逆に、僕から質問だ。元気だった？」

男は無言だった。

しばらくして、静かに、首を縦に振った。

「相変わらず、極悪人みたいだね。もう若くないだろうし、身体には気をつけた方がいい。ところで、あなたのことは、ゼロと呼んだ方がいいのかな？」

少女は、知っていた。

男は、ゼロと呼ばれている。

「《青》という組織があることを、僕は聞いている。それは世界の悪を標榜する組織で、正義を掲げる伊吹家とは真っ向から対立する組織だとか。このご時世に、世界征服なんて馬鹿らしい目標を掲げて、悪の組織を率いる世界の敵対者——ゼロ、あなたは大馬鹿者だから、愛おいしい」

笑う——それは、遙かに年上の者が、未熟な子供を慈しむような笑い方だった。少女のそんな表情を見て、男が初めて、感情を見せた。

泥のような夏の熱気が、ぞつとする冷たさに変わる。

「気に食わない」

不意に、男が云った。

「お前の顔が、気に食わない」

「おや、世界一の悪を看板に掲げる男が、そんな理由で女の子へ絡むのかい？」

「もちろんだ。当然だ。私が、お前と敵対する理由は、十分にある

——ありすぎる。私が悪になったのは、まさにその顔の持ち主が原因なのだから。私の人生をどこまでも狂わせて、遊ばせたのは、お前なのだから」

男は、少女を指差す。

少女は、黙り込む。

「お前は、私が愛した女の——神の、偶像だ。その顔、その声、その身体で存在すること、その全てが罪だ。消えろ」

本名不明。

通称、ゼロ。

悪の秘密結社《青》のリーダー。

アジアを中心とした支配基盤を持つ伊吹家に対して、真っ向から宣戦布告し、あらゆる犯罪活動や破壊活動に手を染める、国際的テロリスト。世界の敵として名高いが、その反面、熱狂的な狂信者も数多い。仮面の男。口数少なく、国籍も不明である。

魔法使い。

ただし、IMUにも、その身元が判別するような情報は残されていない。IMUの調査や接触を全て拒んだため、十年以上前に、称号とナンバーは剥奪されている。

元【No.1】。

かつての肩書は、正義の魔法使い。

第19話「魔法使いの夜」(2)

男は、瓦礫の山に立っていた。

仮面越しに、その瞳は空に向けられている。逃げ去ったものを追いかけるべきか——男は、ほんの少し迷ったようだが、結局、それを無駄と悟ったらしい。

半壊した建物の中に、壁掛け時計が落ちている。

八月九日に、日付が変わる。

男は黙り込んだまま、しばらく動かなかった。その胸中を察することのできる者は、もはや存在しない。男自身もそれをわかっており、虚しさを噛みしめながら、夜空を見上げ続けた。

「結局、あの人は……」

力なくつぶやき、一度、空へ向けて手を伸ばした。

しかし、思い直したように、その手を引く。

瞬間。

男の背後に、一刀の輝き。

その胴体を、真一文字に薙ぐ一閃だった。寸前の所で、男はそれを避けていた。瓦礫の中、数少ない安定した足場を選び、二度、三度と跳んで距離を開く。億劫な動きで振り返った男は、仮面越しに、日本刀を構えた女性を眺める。

刺客である。

魔法使いだった。

男の敵対組織——伊吹家が放つ最高峰の手駒である。

「三散斬か」

三千字サヨコ。

男は相手を認識した瞬間、再び跳んでいた。薄暗い闇の中、別の殺気が走っていた。飛び退く場所が次々と、バターのようには斬られていく。板張りの床、コンクリート片、鉄骨——紙でも裂くような容易さで、あらゆるものが両断されていく。

サヨコの仕業ではない。

もう一人、いた。

「三散斬が二人とは、豪勢な……」

暗がりの何処から、冷たく笑うような声が響いた。

「《青》の頭が、たった一人の丸腰でやって来たこんな夜に、無傷で返したとなれば、それこそ伊吹家の面子に関わるよ。正義と悪の決着をつけようなんて云わないけれど、痛い目にあうのが当然だろう。何回ぐらい死にたい？」

するり——と、闇を払って、暗がりから躍り出る長身の女性。

サヨコと同じく漆黒のメイド服に身を包んでいるが、その背丈とスレンダーな体型が相まって、印象は随分と異なる。黒髪のショートカットの下に、切れ長の瞳。口元に冷たい笑みを浮かべる様は、見た目以上の妖しさを含む。

【No.7】、氷の魔法使い。

伊吹家の番人、三千字三姉妹の次女——三千字ナナメ。

「悪いが、大事な身体だ。腕の一本でも、くれてやるには惜しい」

男は云って、逃げることをやめた。

「それと、一人で来たというのは誤解だ。私にも付き合ってくれる仲間がいる」

指を鳴らした。

すると、男の背後の壁が砕けた。大きな穴が空く。だが、そんな変化には構わず、サヨコが男の正面へ詰め寄っていた。再び、刀の一閃。男の首を撥ね飛ばす軌道だったが、その一撃を、穴から伸びてきた巨大な刃が受け止めた。

巨大な刃——処刑器具、ギロチン。

「嫌な人を連れていますね」

サヨコが距離を開けながら、顔をしかめる。

魔法使いの称号を持つ人間は、世界に十九名存在する。その中には特徴的な武器を用いる者も大勢いるが、とりわけ、巨大なギロチンの刃を獲物にする彼女は有名だった。西洋人形のような小柄な女

性が、片手でギロチンを振り回す様は、それだけインパクトを持つ。《青》の幹部の一人であり、高名な魔法使いでもある彼女、エレーナ。

【No.6】、断頭台の魔法使い。

「ボス」

巨大なギロチンを片手で支える様とは対照的な、蚊の鳴くように細い声。

「首、撥ねていいかな。あの娘達、殺していい？」

「悪いが、エレーナ。ここで争うつもりはない。逃げることを優先する」

男の言葉に対し、逃がしはしない——と云わんばかりに、サヨコの放つ殺気が強まった。

一種即発の空気。

「騒がしいと思えば……」

唐突に響いた、別の声。

「旧知の人間がこれだけ揃っているとは、珍しいな」

若い男の声である。

ごく自然に、そこに立っていた。

いるはずのないものが、いた——幽霊でもあらわれたように、その場の空気が強張る。伊吹家の本陣とも呼ぶべき青鳥町に、《青》の人間が足を踏み入れるだけでも異常事態である。加えて登場したその男は、本来、青鳥町を訪れることはもちろん、自国を出ることすら不可能なはずだった。

だから、三千字姉妹は、ため息と共に天を仰いでいた。

だから、《青》のボスと幹部は、むせたような笑いを漏らしていた。

「魔法使いの同窓会だね」

茶化したように、エレーナがつぶやいた。

ナナメが冷笑と共に、こう云った。

「イギリス国王のご登場だ」

イギリス——正確にはブリテン諸島が、鎖国という特殊な政策を取った背景には、幾つかの理由がある。

歴史をつぶさに紐解いてみれば、イギリスが国家として独立を認められ、鎖国という形態に落ち着くまで、世界の列強にどのような思惑があり、駆け引きが行われたのか、その断片ぐらいは伺い知ることができる。

しかし、そのような裏事情まで考慮に入れずとも、鎖国の理由は簡単に云い表わすことができた。

鎖国直前のイギリスを来訪した某国の首脳が、有名な言葉を残している。

——イギリスには、もはや、人間はいない。

【No.2】血の魔法使い、ヴィクター・ヴァレンタイン。

イギリスという国家を語る時に、その名を外すことはできない。魔法使いの中でも、そのナンバーに相応しいだけの実力を兼ね備えた男である。戦略兵器を遥かに超えた価値を持つと云われる彼の存在が、イギリスの存亡に影響を与え続けていることは否めない。

ヴィクター・ヴァレンタイン。

魔法使いにして国王——そして、吸血鬼である。

第19話「魔法使いの夜」(3)

空気が緩んだ。

大きく膨れ上がったシャボン玉が、重みに耐えきれずはじけてしまうように、その場の空気も極限を超えて破裂した。サヨコですら「馬鹿らしい」とつぶやき、刀を納める。唯一、ギロチンを持つエレーナだけが「つまらない」とふて腐れ、周囲の瓦礫を叩き割っていた。

先程まで命のやりとりをしていたのが嘘のように、敵意も殺気も霧散していた。それぞれの間合いこそ離れているものの、互いに手を出すようなそぶりもない。暗黙の内に、一時的な休戦が認められていた。

「奥様にどのように報告すればいいのかな、これは？」

前髪を掻き上げながら、ふざけたようにナナメが零した。

「仕方ありません。ありのままを告げるしかないでしょう」

「しかし、姉さん、《青》の二人に加えて、イギリス国王の侵入まで許したとあっては、私達がお叱りを受ける所の話では済まないよ。この町の防衛ラインを再構築するレベルの話になるだろうさ。これはもう、しばらく休みがないね」

「別に、あなたはいいでしょ。どうせ大学も夏休みですし、時間も空いているのですから、しっかり働きなさい」

姉らしく、ぴしゃりと云い放ったサヨコである。

随分と気の抜けた会話だったが、さらに毒気を抜くような声が割って入った。

「なんだよ、ナナメちゃんはもう大学生か。最後に会った時はまだ高校生だったのに……これはやっぱり、俺も歳を取るわけだ」

そんな風に云って笑うイギリス国王——吸血鬼の王ヴィクター・ヴァレンティンに、全員の白けた視線が向けられた。不死者とも揶揄される彼の風貌は、数年来、まるで変化が見られない。肌に皺が

増えることもなければ、髪も黒々としている。その見た目は、若々しい青年のそれである。

「ふざけた男である事は前々からわかつているが、この場、三竦みの状態とは云え、お前が一番危険な状態であることはわかっているだろう。もし仮に、この四人を同時に敵に回したならば、お前でも死ぬぞ」

感情のこもらない声で、ゼロが告げた。

その言葉に、彼の隣へ立つエレーナが、嬉々とした表情を浮かべた。

「殺していい？ 国王の首、撥ねていい？ 撥ねまくり？」

「やめなさい、《青》の断頭台。この町で、吸血鬼の王を仕留めるなんて大立ち回りを演じたならば、世界中が泥沼の戦争になりますよ。ゼロ、あなたも統率者ならば、自分の部下をしっかりと管理しなさい」

ギロチンを振り上げるエレーナを、サヨコが叱りつけていた。ゼロはしばらく無言だったが、やがて独り言のように零した。

「《青》は、基本的に放任主義を信条としている」

「それは、ただの無責任というやつだね」
ナナメが冷たく笑った。

「悪党にはお似合いとも云えるかな」

彼女の特徴的な笑みを注視していたヴィクターが、不意に尋ねる。
「一番下はどうした？ あのうるさいチビツ子は？」

親戚の姪子でも気にするような云い方である。その問いかけに、サヨコとナナメが目を見合わせた。結局、ひらひらと小馬鹿にするように片手を振りながら、ナナメの方が応える。

「教えてやる義理はない——と、云いたい所だけど、気分がいいから教えてあげよう。私達の妹は……タテカナは、奥様の護衛だよ。世界がこんな不安定なのに、まさか伊吹家当主を一人で放っておくわけにはいかないだろう？」

その言葉に、ヴィクターが酷い冗談とばかりに顔を歪ませた。

「あの女に護衛が必要か。俺でも、あの女を襲おうと思ったことはないぞ」

「世の中には、伊吹家当主の怖さを知らない馬鹿も多いからね。そんな馬鹿共が、万一にも当主の逆鱗に触れないように、速やかに排除するのが護衛の役目だよ」

そのナナメの言葉に、ヴィクターは大笑いした。

「おい、不死者」

ゼロが、尖った声で横やりを入れる。

「それで、貴様、どうしてここに来た。世間話をしに来た訳でもないだろう。お前もどうせ、三散斬の【皆殺し】が、真紅の髪に負けたと聞き及んで、何もかも投げ捨ててここへ来た大馬鹿者だ。私達の戯れ合いに首を突っ込んでいる場合か？」

「その言葉、そっくりそのままお返しする」

ゼロとヴィクターが、互いに不遜な態度でにらみ合った。

片や、世界最悪の犯罪者。

片や、人類の天敵を統べる王。

サヨコが頬に手を当てながら、「ここで二人が殴り合って死んでくれば、世界は明日から平和になるのですが……」と、憂鬱な面持ちでつぶやいた。「そんな簡単に死んでくれるような男達なら、私達が、とつくの昔に片をつけているさ」と、ナナメが笑う。

エレーナは一人、「難しい話、わかんない。つまらない」と、不満そうな顔だ。

そんな女性陣の話の腰を折るような発言の数々に、ゼロは沈黙し、ヴィクターは降参のポーズを取った。男達はそれぞれが数歩ずつ歩み寄ると、やや声をひそめて、密談のように会話した。

「それで、ヴィクター……」

「ああ、なんだ。結城？」

「やめろ。本名で呼ぶな」

「悪い。昔の癖だ」

その言葉と裏腹に、悪びれた様子もなく笑うヴィクターに対して、

ゼロは仮面の下から剣呑な視線を向けていた。その視線から逃れるためでもないだろうが、ヴィクターが話の続きを促した。

「お前は、もう接触したのだろう？」

「ああ」

ゼロは苦い声で応えた。

それから言葉を選ぶように沈黙があった。

「あれは、まがい物だ。彼女ではない」

「そうだろう。それは、そうだ」

当たり前の事を確認するように、ヴィクターはうなずいた。

「彼女ではない事など、わかっている。問題は、誰が——あるいは、何が、彼女を模しているかだ。それを知るために、俺はわざわざ危険を犯してやって来た。そんなこと、お前もわかっているだろう」

ゼロは、応えなかった。

ヴィクターは続けた。

「それで、不埒な馬鹿野郎の正体は、わかったのか？」

ヴィクターの言葉には、ゼロという男に対する信頼があった。

世界の情勢を思えば、時に味方に、時に敵にもなりうる。杯を飲み交わす間柄でもあれば、血で血を洗うような関係でもある男達だった。しかし、だからこそ、下手な身内よりも実力をわかり合っている。

だから、ゼロが無言で首を横に振った時、ヴィクターは目を見開いた。

「どういうことだ？」

「私に、話せる事はない」

ゼロは、毅然とした声で云った。

「エレーナ」

唐突に叫んだゼロは、力強く地面を蹴った。舌打ちしたヴィクターが手を伸ばすも、一瞬の内に、間合いは遠く離れていた。崩れた建物の間を抜けるようにして、ゼロとエレーナは闇夜へまぎれていく。

「三散斬」

闇の彼方から、男の声が響く。

「取引だ。私達を自由にさせる」

取引——その発言自体に、ナナメは冷たい笑みを浮かべていた。サヨコの方は、そもそも話にならないと云わんばかりに、首を横に振っていた。

「この町で悪さをする程、私も愚かではない。確かめたい事があるだけだ。その分の代償は、もちろん払おう。そうだな、ヨーロッパ連合の禁止技術法案の撤回というのは、どうだ？」

その意外な申し出に、三千字姉妹の目の色が変わる。

その反応を伺ってか——ゼロは最後に告げた。

「伊吹セツナの事は、私が誰よりも知っている。こんな上手い取引に、あの女狐が乗らない訳がないよ。お前達は、ただ私の言葉を告げるだけでいい。そして、私達の存在を無視していればいい。それだけだ」

三千字姉妹が肯定も否定もする前に、闇夜の暗がりから《青》の二人の気配は消えてしまっていた。姉妹は顔を見合わせて、「困りましたね」「面倒だね」と、それぞれに感想を漏らす。

「それで？」

気を取り直したように、ナナメが、もう一人の男へ向き直った。

「王様は、どうするのかな？」

「俺は、自由にさせてもらうさ」

吸血鬼は、ごく当然のように云った。

「ゼロと違って、俺は犯罪者でも何でもない。むしろ、一国の盟主だぜ。ほら、パスポートだって持って来ている。まあ、安心しろよ。俺も昔と違って、大人になったさ。無差別に人を襲うことなんかしないぜ」

「その云い方では、無差別でなければ、人を襲うようにも取れますが？」

「拳げ足を取るなよ、【皆殺し】。この町で怖いのは、お前達だけ

じゃない。俺よりも強い【No.1】がいるだろう。あいつとはいずれ決着をつける必要があるけど、それは今じゃない。あいつが見張っているこの町で、下手なことはいないさ」

にやにやとした笑みを浮かべているため、その言葉に信憑性はない。

だが、実際の所、三千字姉妹では立場上、イギリス国王へ厳しい事は云えなかった。

ヴィクターがこの場へやって来た理由は、そもそもゼロがいたからだ。彼が消えた今となつては、この場に留まっている意味などなかった。遊び終わった友人と別れるように、気安く手を振りながら、彼もまた、闇夜へ消えて行く。

その後ろ姿を見送りながら、残された姉妹が二人、さて——と、笑う。

「血生臭くなってきました」

「つまり、楽しいね」

満月の夜が、明ける。

第20話「八月九日」(1)

シースーアという異世界で過ごした激動の一日が過ぎ去り、現実へ戻って早三日。平穩無事でゆったりとした日常——などと形容するには頭の痛い時間が過ぎ去り、問題はなにひとつ解決する気配を見せないまま、現在に至る。

八月九日、朝。

伊吹カナは、依然として行方不明。

その行方を追う伊吹家は、八月四日の夜以降は彼女に接触できていない。八月四日の夜——すなわち、七守学園のグラウンドで三千字サヨコ、灰道ツカサの魔法使い二人と対峙したあの時である。

伊吹家ほどの力を持つ組織が、青鳥町という限られた範囲内で一人の少女を見つけることができない——それは本来、ありえないことだった。既に青鳥町を抜け出ている可能性も考えられたが、町の境界線を見張る絶対の監視システムが、これについては否定の結論を出している。

——境界線を突破した人間はいない。

その証言を、基本的に疑う者はいない。

もちろん、ユウ自身も疑っていない。

システムとしての彼(あるいは、彼女)が語る内容に、一切の矛盾がないことを知っているからだ。

伊吹カナは青鳥町にはいない。ただし、彼女は青鳥町の境界線を越えたわけではない。本来ならば矛盾するこの真実を、ユウ以外は誰も知らない。だから、彼女は捕まらない。

異世界シースーア。

その存在、その意味を黙っている限り、彼女の行方は誰にも知らない。そして、ユウの《目的》からすれば、彼女はまだ伊吹家に戻るべきではなかった。

伊吹カナが異世界でどのように過ごしているのか——気にならな

いと云えば、嘘になる。だが、右も左もわからない異世界と云えども、彼女ならばどうにかするだろうという信頼もあった。

だから、ユウは沈黙している。

伊吹家からの追求は厳しかった。ユウ自身、カナと同じく姿を消していたことは事実なのだ。その間、随分と大がかりな搜索がされていたらしい。鼠一匹逃がさないような網の目にも引つかからず、丸一日の間、ユウが何処で何をしていたのか——カナに繋がる手がかりとして、伊吹家が答えを欲するのは当然だった。

正直に白状するわけにはいかない。

しかし、黙秘や生半可な言い訳が通用する相手ではない。

結論として——力業になった。

ユウは、サヨコとツカサが気絶している間に、とある知り合いの家に匿われた。そして、あまりの出来事にショックを受けて、次の日もその家から出ることなく、寝込んでいた——そんな風に、言い訳としての筋書きを描いた時、ユウは思わずため息をついたものだ。無茶な理由である。本来であれば通らない。伊吹家ならば、その知り合いの家に聞き込みをしたり、目撃証言を集めるなどして、あっさり嘘であることを看破するだろう。

しかし、今回、それをねじ伏せた。

——頼れる人がいることは、それ自体も実力である。

そう云ったのは、ユウが《師匠》と呼ぶ人物である。彼女は、信頼を武器と云った。「助けて」の一言で動いてくれる人がいるならば、それは懷に銃を忍ばせている状態と何も変わらない。

——だから、お前は「ありがとう」と云って、胸を張っていい。自分が頼みにできる人の後ろ姿を見て、その力強さに見惚れていればいい。自分に向けられた助力を、そのまま自分の力として誇ればいい。

最初から、伊吹家のような世界の半分を掌握している組織に、後ろ盾の何もない中学生が一人で対抗しようとしても無駄である。助力は、どうしても必要だ。

それも、伊吹家に対抗できるレベルの実力者。

とある知り合いの家に嘘を頼んだ——それは、世界の半分を掌握して正義を体言する伊吹家を相手にして、真っ正面から《暴力》で反抗できる希有な一家だ。

繁華街や商店の防犯カメラの記録やユウが持つ携帯電話のGPSデータの改竄を頼んだ——青鳥町の防犯システムとしても有名な彼（あるいは、彼女）は、ネットワークが繋がる場所になれば神出鬼没であり、電子の海における神を自称したりもする。

そんな風に、《魔法使い》を二人も巻き込むことで、ユウは伊吹家の追求を逃れた。純粋な力の強さで文句を云わさず、卑怯な小細工で証拠まででっち上げた形だ。

このような横暴に対して、サヨコはとても困った顔をした。ユウの交友関係にも明るい彼女は、裏工作を見抜いていただろう。今回は見逃してくれた形だが、悲しそうにうなずくサヨコを見て、その好意まで利用したようで心が痛んだ。

表情には出さず、内心で謝罪した。

誰を利用し、誰の好意を踏みにじっても、ユウにはたどり着かなければいけない《目的》がある。約束という言葉を、今さらながら胸の内で繰り返していた。

第20話「八月九日」(2)

電話が鳴った。

夏休みであつても、ユウは基本的に規則正しい生活を心がけている。だが、ここ数日は肉体的に無理がたり、いつもの起床時間を過ぎててもベッドの中にいることが多かった。夢も見ない深い眠りの中、電話の着信を告げるアラーム音に手探りで携帯電話を探す。

電話をかけてきた相手の名前を確認すれば――そこには『楽園ミツカ』の名前があつた。ため息をつけば、少しだけ眠気が晴れる。電話に出る前に、先にベッドの上で身を起こした。

『朝一番から友達のために連絡を入れてあげた楽園さんに対して、ため息で返すなんて失礼千万ね』

「電話に出る前に話し始めないでください」

『あら、楽園さんうつかり。ごめんなさい』

そして、鳴り続けるアラーム音。

もう一度ため息をついて、ユウは形式として通話ボタンを押した。

『おはよう、相馬君。君の友人である楽園様だ』

先ほどは四十代程度の女性の声だったが、今は枯れた声で話す初老の男性を想像させる。

「おはようございます」

『嫌だ。敬語なんてやめようよ。楽園くんは友達だよ、相馬のお兄ちゃん』

「はあ」

寝起きに辛い相手だった。

「前から思っていましたけど……実際、もう何度も聞いたことがありますけれど、楽園さんは男なんですか、女なんですか。そして、何歳なんですか？」

『あはは、ユウちゃん野暮だな。女性に年齢を尋ねるなんて、マナ――違反だぞ』

「じゃあ、女性なんですか？」

『相馬君、君はこの声を聞いて、女性と思うのかね？』

野太い男性の声だった。

「もういいです」

『あきれないで。あきらめないで』

電話の向こう側で、複数の笑い声がした。だが、相手が複数人という事ではない。楽園ミツ力は、正真正銘、一人の人間——だった存在である。

『ああ、相馬君。物は相談なんだけれど、電話で話すよりも、面と向かって話したい。楽園さんは人見知りだけど、話し嫌いではないんだよ。こうしてたまに誰かと話す時は、ちゃんと顔を見て話したいと思う人なんだよ』

「いいですけど、俺、寝起きですよ。顔も洗っていません」

『気にするな、少年。楽園はそんなの気にしない。だから、君のカメラ付ノートパソコンをお借りするぜ。大丈夫、変な画像ファイルや動画ファイルがないかどうか、探したりしないぜ。男の約束だ』

「最初からそんなもの入ってないから、大丈夫です」

『え、健全な中学生なのに、そんなの楽園のお姉さん心配しちゃう。気遣いのあまり、ハードディスク一杯に楽園のお姉さんオススメのあれこれをダウンロードしておいてあげちゃう』

「怒りますよ」

『大丈夫。ちゃんと赤い髪にカラーージュするから』

「ぶち殺しますよ」

そんな他愛ないやりとりの間に、机の上に置いてあったノートパソコンが勝手に起動する。画面を開く作業は自動ではできないため、ユウが自分の手でやってやる。

『こうしたアナログな所、楽園ちゃんの弱点だよ』

「いいじゃないですか。万能な存在なんて、怖いですよ」

『あの娘の相棒であった君の台詞とは思えないね』

パソコンが完全に立ち上がる。

それと同時に、ユウは携帯電話を切った。

本来ならばデスクトップ画面が表示される所に、金髪で妙齡の小麦色に日焼けした全裸の女性が身をくねらせながら登場して、ユウはそつとため息をついてパソコンを閉ざした。

『相馬くん、冗談。冗談だよ』

「笑えない冗談は嫌いなんです」

『わかった。笑える冗談にする』

「冗談をやめてもらえませんか？」

パソコンから響く謝罪の声に、ユウはディスプレイを持ち上げる。土下座をする小学生女子の姿があった。その姿が冗談と云うならば、楽園ミツカの趣味はかなり悪い。

『だって、相馬のお兄ちゃん、世の中の男性でどれだけの人がリアル小学生に土下座してもらえるでしょうか。お兄ちゃんは今とても貴重な経験をしているのです』

「今の俺は、性別も年齢も不詳の怪人物が、小学生の着ぐるみを着て土下座してきた心境ですよ」

『えがたい経験じゃん』

「えたくない経験です」

土下座から顔をあげた小学生は、いつの間にか、今風の女子高生に変わっている。こちらに向けて化粧を始めたかと思えば、口紅を引いた瞬間に筋骨隆々とした黒人に変化した。

『びつくりしたかい、ははは』

笑い方が、映画のオモシロ黒人だった。

「そろそろ朝食に行ってきたいいですか？」

『楽園は、まだ何も本題を話してないぜ』

「だったら、そろそろ本題に入ってください」

黒人が咳払いをひとつ——途端、姿が変わって、アニメ調の少女になる。声色もまた、それに準じたものになる。栗色の髪にそばかす、飾り気も毒気もない服装、子供向けの無垢な空気——楽園ミツカが好んで使用する外装だ。

『楽園です。ちょっと調子に乗りました。反省です。ユウは他人を嫌いになれない子だから、つつい遊んでしまいます。こんな調子で、楽園といつまでも友達でいてくれると嬉しいな』

本題に入る前の前置きである。

ユウは黙ったまま、先を促すようにうなずいた。

『いつもの通り、バランスメーカーとしての役割を果たし、君に情報を与えます。昨晚、八月八日の夜十一時頃に、境界線を越えて青鳥町へ進入してきた者達があります。三名……正確に云うならば、二名と一鬼。悪の秘密結社《青》の首領ゼロおよび同組織の四天王【No.6】断頭台の魔法使いエレナ。そして、先の二名からやや遅れて、魔界国家イギリスの国王【No.2】血の魔法使いヴィクター・ヴァレンタイン。境界線を越えてから約一時間後、伊吹家が会敵していますが、大きな衝突はなかった模様です。侵入者達は全員、現在も青鳥町に留まっていますので、ご注意をお願いします』

ユウは聞き終えて、しばらく考え込んだ。

考え抜いてみたが、どうにも外的な情報に思えた。

「《青》のボスやイギリス国王なんて、俺みたいな中学生には無関係ですよ。話の規模が全然違う。確かに、そんな人達が青鳥町に侵入したのは大事件だと思いますが、そんなのテレビのニュースで見る殺人事件みたいなものです。わざわざ楽園さんが伝える意味があるとは思えない」

『たぶん世界で一番の情報通である楽園が、無関係で意味のない情報を、わざわざ伝えると思うのですか。ユウ、よく考えて。楽園はバランスメーカーです。情報を伝えるということは、それは必要な処置ということです。何も知らなければ、君が圧倒的に不利ということ。楽園が知っているから、バランスを取るために教えるのです。無関係に思うのなら、それはユウの錯覚です。ご注意をお願いします——と、楽園は云ったのです』

そこまで云われて、さらに反論するほど、ユウも馬鹿ではない。ミツカがどこまで答えてくれるかわからないが、質問を試してみる。

「さっきの三人は、俺を狙ってる？」

「いいえ。相馬ユウは現状、そこまで重要なファクターではありません」

「今後、俺と関わる可能性がある？」

「はい。大いにあります」

「じゃあ、現状は無関係？」

「いいえ。関係性という意味では、相馬ユウは世界の要人ほぼ全てと非常に強い結びつきを持っています。伊吹家は当然ながら、『青』やイギリス——国際魔法連合はもちろん、魔王や名探偵などの接点まで鑑みると、本当、とばけた顔して末恐ろしい中学生です」

褒められているというよりも、あきれていると云った方が正しいだろう。

「『青』みたいな物騒な組織との関係性なんて、持っていませんよ」
「ユウがそう思っているだけかもしれませんよ。たとえば、薄い接点ですが、こんなこともありました。【No.19】人形の魔法使い、灰道ツカサに誘拐されたことがありますね？」

「警察沙汰にもなっていない事件を、よくご存じで……」

「ネットワークが普及した時代以降で、楽園の知らない情報は皆無です——なんて、ちよつと誇張して自慢しておきます。さて、その誘拐事件の黒幕ですが、人形使いに依頼を出した人物こそ『青』の首領、ゼロです」

「それはまた、大物ですね」

「意外に薄い反応ですね。もつと驚いてくれるかと思っていました」
「自分一人が『青』のゼロに狙われたのなら、もつと驚いていました。あの誘拐の目的は、カナでしたから。あいつなら、世界中のどんな大物に標的にされても納得できる」

「その理屈は理解できますが、ユウの場合、あの娘を理由に思考を放棄する癖がありますので、その点は注意しておくことにします。確かに、ゼロの狙いはあの娘でした。しかし、事件に巻き込まれた時点で、薄いものとはいえ、相馬ユウとゼロの間に結びつきが生ま

れたのは事実です。ユウが気づいていないだけで、そうした接点があれば他にもあるかもしれませんよ」

「その云い方は、絶対にあるわけですね。俺と《青》のボスにどんな結びつきがあるんですか？」

『その質問は、バランスを崩します。ノーコメントです』

パソコンの画面の中で、アニメ調の少女が無邪気にほほえむ。

ユウはこれ以上、ミツカが教えてくれる事はないだろうと悟る。

バランスメーカーを自称し、世界のシステムの一部であると語る彼（あるいは、彼女）は、ユウにとって、これまでアラートのような存在だった。望む、望まないに関わらず、唐突に出現して、情報を落としていく。その情報はまさに喉から手が出るほどに欲していたものであることもあれば、占いや予言のような的を射ないものであることも多い。

今回は、後者に近い。

だが、楽園ミツカが意味のない情報を流してきたことはない。混乱させようとしたり、騙そうとしたこともない。ミツカは少なくとも、これまで常に味方だった。

楽園ミツカほどの高名な魔法使いが、ただの中学生に接触し、助けてくれる理由はなんなのか——尋ねてみたことも過去にあるが、「バランスメーカーだから」の一言で片付けられてしまい、真意は不明のままだ。

楽園ミツカ。

性別不明、年齢不明——本体の居場所は、ミツカ自身も忘れたという話である。どうやら、自分の本当の姿すら思い出せないようで、気分に合わせて好き勝手な見た目を使用する。

引きこもりの魔法使い、【No.3】。

肉体を捨てたミツカに、戦闘能力は皆無である。しかし、電腦の海に無限大に拡散して、ウィルスのように潜んでいる《楽園ミツカ》という意識は、本気になれば世界中の電子機器を瞬間的に乗っ取ることができる、と云われている。

携帯電話を勝手に通話状態にしたり、パソコンに住み着いたりする程度、かわいい悪戯にすぎない。ミツカが飽いたならば、気まぐれで世界を壊滅させることも容易い。ネットワークとシステムで構築された今の社会は、ミツカに対してあまりに脆弱だった。

「ミツカさん」

質問タイムは終わったとしても云うように、あくびをしているミツカに対し、オマケをねだる子供の声色で、ユウは訊く。

「《青》のボスとイギリス国王の目的は、伊吹カナですか？」

意を決した問いかけに対し、ミツカはあっさり答える。

『はい、当然です』

——当然。

確かに、そうだ。

伊吹家の本陣がある町へ、世界の敵と人類の敵がわざわざやって来る理由など、普通はない。それは獅子の住処へ、丸腰で挑むようなものだ。ただの中学生であるユウでも、その程度の世界情勢はわかる。

本来ならばあり得ない出来事が起こっている。そして、異常や不思議が起こったならば、原因として疑う相手は決まっている。いつでも騒動の中心には、彼女がいた。

『ああ、そうでした』

ミツカは悪びれた様子もなく、とても重要で、ぞっとする情報を追加した。

『彼女は、既に《青》のゼロと接触しています』

「え？」

『《青》が境界線を越えて、伊吹家が迎撃に出るまでのわずかな時間ですが、二人は確かに顔を合わせています。残念ながら、楽園は怖くて、とても近づけませんでした。二人に何があったのか——それは、ユウ自身で調べてくださいね』

突き放すような物云いで、にっこりと笑顔を向けられる。

ユウは反射的に云い返そうとして——結局、絶句するしかなかった

た。三日間、悠長な時間の使い方をしている間に、状況はとも悪い方向に流れてしまっていた。

悪の化身などと評される、世界の敵《青》の首領ゼロ。非公式の情報として、ユウは彼が元魔法使いであることを知っている。元「NO・1」正義の魔法使い。三千字三姉妹や《師匠》ですら、彼については『戦いたくない相手』と評する。

加えて、魔界に堕ちたイギリスを統べる王、人類の捕食者である吸血鬼ヴィクター・ヴァレンタイン。吸血鬼はそれだけで驚異であるが、彼は吸血鬼にして魔法使い。【No・2】、血の魔法使い。単純な個としての戦闘能力では、現在の生物中で頂点に位置すると噂されている。

おそらく、この世界における最悪が二人。

伊吹カナに対して、彼らがどんな風に出すつもりなのか——ユウは考えようとして、すぐさま答えが出ないことを悟る。考え方をあらためて、伊吹カナならば、世界の敵と人類の敵に出会った時にどうするか想像した。

考えれば考えるほど、最悪だ。

伊吹カナが、悪の秘密結社《青》と魔界国家イギリスを相手に全面戦争を開始する光景が、これ以上なく鮮明に思い浮かぶ。それはもちろん最悪の想像である。だが、組織は抜きにしても、個人レベルでカナとゼロ、ヴィクターが争い合う可能性は高いと思った。

そして、彼女とゼロが既に接触したならば、状況はこれ以上なく悪い。ユウにできる最善手と云えば——彼女が敵と出会わないようにして、トラブル自体を発生させない事だった。

伊吹カナが動く所、事件が起こらないはずがない。そして、その後始末ほど厄介な事はない。

最善手は既に望めず、後手に回るしかない状況に、ため息。

「ミツカさん」

見栄を張っている場合ではなかった。

助力もまた、実力の内である。

「助けてください」

『バランスメーカーとしての楽園は、誰にも荷担しません』

まるで機械のように、無表情、無機質な声色でそう告げたミツカは、しばらく沈黙した。ユウは頭を下げた。「お願いします」と云って、数秒。パソコンの画面がブラックアウトする。

顔をあげたユウは、伊吹レナと見つめ合う羽目になった。

彼女は、七守学園の制服を着ていた。ショートカット、大きな瞳、常にふざけたような口元——正しく、一年前に死んだ少女だった。パソコン画面の中で、へらへらと笑っている。

「悪い冗談……」

ユウは叫ぼうとして、そこにレナの声が被さる。

『ユウちゃんは、悪い冗談でも突きつけられないと、目が覚めないでしょう？』

伊吹レナは——否、楽園ミツカはそう云った。

『馬鹿、阿呆』

罵倒される。

『一年前に、ユウちゃんが間違えなければ……。ユウちゃん達が道を踏み外さなければ……。こんな馬鹿げた騒動、起こらなかったはずだよ。何度でも云ってあげる。馬鹿、阿呆、間抜け、トンチンカン、無愛想、甲斐性なし——全部ぜんぶ、ユウちゃんのせいだ。こんな間抜けな結末、誰が喜ぶと思うの。こんな歪んだ世界、誰が望むと思うの。死んでも死にきれない。だって……』

「ミツカさん」

ユウは、楽園ミツカを黙らせる。

これ以上なく正しい方法で、黙らせる。

パソコン画面に向けて、手を差し出した。そして、隠している力を明らかにした。掌の上に、小さな太陽のように、魔力の丸い塊を浮かべた。誰にも悟られないように、隠している力。すぐさま遮断して、何事もなかったように掻き消した。

パソコン画面の中、レナが目を丸くしている。

世界一の情報通である楽園ミツカが、絶句していた。

「すいません。目なら覚めてます」

ユウは、そう云った。

「ミツカさん、長い間ご迷惑をおかけしました。謝ります。俺は、自分の間違いを認めます。ごめんなさい。レナを殺したことが、間違いだった。何度でも、何度でも……云います。レナを殺しちゃいけなかった」

だから、するべき事もわかってる。

『二十番目の魔法使い』

ミツカは、吐息のような声で、そう云った。

顔を伏せて、肩を抱いて、寒さに凍える子供のように身を震わせていた。『ああ、そうか……』と、吐くように。『君も、こちら側へ来るのか……』と、泣くように。

ようやく顔を上げた時、ミツカは笑っていた。

『この数日、ユウちゃんが神社へ入り浸っていた理由がわかった。てつきり宿題の手伝いでもしているのかと思っていたよ。そうか、そういうことだね』

ミツカは、伊吹レナであることをやめた。

幼い少女の姿に戻り、全てを納得したような表情で、真っ正面から向き合った。『身体を持たない楽園は、握手することもできません。死を忘れ、失うものがない楽園は、何にも縛られません。データーの塊でしかない楽園は、果たして人間でしょうか？』

楽園が尋ねる。

『そんな楽園と本当に仲良くできますか？』

「もちろん」

パソコン画面に、ユウは指先を向けた。ミツカも同じように、その指先に、彼（あるいは、彼女）の指先を触れさせた。「信頼しています」と云えば、『そんな風にお坊ちゃんな君は、いつか裏切られるでしょう』と、ミツカが茶化した。

『まあ、でも……』

ミツカは笑う。

『後ろから刺されそうになった時ぐらい、樂園が教えてあげましょ
う』

最後の悪ふざけとばかり、ミツカは伊吹レナに変化する。

いたずらな笑顔を浮かべ、抱きしめるように腕を広げながら――
もはやユウが答える必要もない当たり前の問いかけを、口にしてみ
せた。

『私を助けてくれる?』

第20話「八月九日」(3)

パソコンを閉じた。

ゼロとヴィクター、世界と人類の敵を相手取る方法について、ミツカと簡単に打ち合わせを行った。とはいえ、バランスメーカーを自称するミツカは、基本的に特定のものに肩入れすることを好まない。助力を得ると云っても、あくまで背中を押す程度だ。

肝心の部分は、ユウ自身がやらなければいけない。

「さて、困った」

整理する。

伊吹カナの現在地について、ユウは異世界シースーアであると思いい、ある程度の安心感を持っていた。それが青鳥町にいるとなれば、状況は随分と変わってくる。

その足取りに関して、ミツカはさらに情報を開示してくれた。だが、ミツカですら八月一日の失踪以降、彼女の居場所は正確に掴めていないということだ。

『彼女は神出鬼没です。昨晚の出来事についても、七守学園の警備システムをのぞき見て、どうにか情報を繋ぎ合わせたというような状況です。その前後、彼女が何処にいたか、何をしていたか、楽園でもわかりません。これは、はつきりと云って、異常です』

仮定。

魔法——もしくは、その他の手段で、カナが現実世界と異世界シースーアを自由に行き来できたとする。それならば、彼女が神出鬼没である事に説明がつく。また、ミツカが行方を追えない理由もわかる。

もしも、仮定が正しいならば、焦る必要はなかった。

ゼロとヴィクターという脅威に対し、彼女はいつでも逃げる手段を持つことから、ユウが無闇に手を出し、場を混乱させる方が危うくなってしまう。

世界の敵と人類の敵が身近に潜んでいる状況は、あまり歓迎できないが、それも時間の問題だった。ミツカ曰く、彼ら程の影響力ある人物が、青鳥町に自由に滞在できるはずもなく、数日——最悪でも一週間も経てば、引き上げるだろうという事だ。

『楽園は、こう思います』

勘である——ミツカは、そう前置きした。データの推測ではなく、楽園ミツカに残っているわずかに人間的な部分が、何の根拠もなく告げた。

『彼女は、魔法使いになったのではないのでしょうか？』

ミツカは『内緒ですよ』と云って、一般的な評価程、自身が万能ではないことを教えた。少なくとも、魔法使いのような常識外を相手にした場合、その行方を完璧に追跡する自信はないらしい。

『ユウが魔法使いになっていた事に、楽園が気づかなかったように、彼女が魔法使いになっている事に、楽園は気づけていないのかもしれない』

ミツカの示した可能性も、ユウは考慮に入れた。

結局の所、答えは出ない。楽園ミツカという情報源を味方にして、わからない事が多かった。もちろん、ユウが異世界シースーアの事をミツカに黙っているように、バランスメーカーの役目に自負を持つミツカが、明かしていない情報も多々あるだろう。

『最終手段として、名探偵を呼ぶのも一興です』

ミツカは最後、投げやりな案を出した。

「却下します」

残念ながら、名探偵に全ての謎を暴かれることは、ユウの《目的》にそぐわない。【No.4】解体の魔法使いは、それほどまでに暴力的で、容赦を知らず、面白みも味気もなかった。彼が通過した物語は、もれなく焼け野原になるという噂だ。

『それでは、どうします？』

問いかけを残して、ミツカは去った。

どうするか——答えは、出ているも同然だ。

最悪を想定して、どんな風に転んでも、ユウは《目的》を達成できるようにしなければいけない。すなわち、ゼロとヴィクターを手取ることは避けられない。彼らのような存在に、世界の秘密を知られるわけにはいかないのだから。

どんな風に相手をするか——できるならば、穏便に済むことを願う。

ユウは、椅子に深くもたれかかった。

今後の動き方に、頭を悩ませる。

その一方で、頭の片隅に、ルーティアの言葉が浮かんた。

彼女が何気なく教えてくれた《神の遺物》と、それが可能とさせる蠱惑的な可能性に、気がつけば意識の全てが向いていた。ユウはため息をつく。三日間、その可能性を「くだらない」と切り捨てようとして、失敗し続けた。

——レナを助けに行こう。

その言葉の意味は、何処にあるのか。

彼女がどんな気持ちで、その台詞を吐いたのか、わからない。

シースーアには、神がいた。神はシースーアで最も永く生きる存在であり、最も魔法に長けた存在だった。偶像ではなく、信仰の対象ではなく——ルーティアの説明を何度も、呆れるほど何度も聞き直すことで、ユウはようやく察した。

シースーアには、神と呼ばれる生き物が、ただ当たり前のように、実在したということ。

そして、そんな神が十四年前に突如としてシースーアから消え去り、残していった《神の遺物》。それは、金銀細工のような宝物でもなければ、未知なる知恵や技術と云ったものでもない。

それは、力である。

神の力、その欠片。

ユウは、想像する。

取り返しのつかない間違いを犯してしまった時、時間を巻き戻せるならば——そんな都合のいい夢物語を、繰り返し、繰り返し、愚かしくも想像する。

時間は平等だ。

神様がおまじないでもしてくれない限り、時間は進み続けて、止まらない。そう思っていた。しかし、神は異世界に実在しており、その力は時間すら歪ませる。時を加速させて、時を停止させて、時を逆行させる——そんなことすら可能にする《神の遺物》の存在を、ユウは知ってしまった。

たとえば、一年前のあの日に戻ることができるならば。

たとえば、あの日の選択をやり直すことができるならば。

それは、どれだけ甘美で、どれだけ残酷な可能性だろうか。

胸の内に溜まる暗い想いから、目を背けなくなる。だが、気がつけば考えている。三日前を思い返した。ルーティアが何気なく語った一瞬を、今さらながらに振り返っていた。

第21話「はじまりが終わり」(1)

『八月五日、午後八時七分四十秒をお知らせします』

時報を聞いた後、ユウはため息と共に携帯電話を閉ざした。

伊吹カナがカラドボルグを構え、サヨコとツカサを打ち倒したのは、ちょうど八月四日から五日へ切り替わろうとする真夜中だった。それから十九時間——シースーアで過ごした時間と一致する分だけ、現実世界の時間も経過していた。

ユウは、夜空を見上げてみる。

常闇の世界、シースーア。

太陽も空も存在しない異世界は、魔法で成り立っていた。たった一日と云い切るには、あまりにも鮮烈な体験である。そこで過ごした一分一秒を噛みしめるように思い返しながら、ユウは、自分の仮説がひとつ外れたことにも考えを巡らせていた。

——外れて幸いだったかもしれない。

未知なる場所から、紆余曲折を経て帰還する物語の、ありきたりな結末を想像する。たとえば、無事に元の場所へ帰り着いたと安心した瞬間、故郷が減んでいたり、幾千年の時間が過ぎ去っていたり——ユウは今回、自分が浦島太郎になることも危惧していた。

しかし、杞憂に終わった問題に対して、何度も首を傾げる。

——どうして？

答えは出ない。

結局、すぐにあきらめた。

異世界シースーアを取り巻く不思議を考えることも重要だったが、現状、目の前に大きな問題があった。それを可及的速やかに解決する事こそ、重要だ。

(ルーティア)

ユウは意を決して、彼女に語りかけた。

七守学園のグラウンド。夏休み最中であり、夜の八時という遅い時間でもあることから人影はない。外灯の光はあるが、校舎は真っ暗で、グラウンドの真ん中となればいつそう闇が濃い。

夏にしては珍しく、空気の澄んだ夜だった。

風が吹き、薄闇の中で金の髪が舞う。

深緑の瞳は、まるで大きな宝石のように輝いて、その中に夜空を映し込んでいた。雲のない夜だった。バケツ一杯のガラス片を散りばめたように、無数の星が見えた。赤子のような動きで、ルーティアは手を伸ばし、星の一粒を指で引つ掻こうとする。

奇跡を見るように、その瞳が大きくなる。

星の海の中には、満月も浮いていた。

月を指差し、ルーティアが問う。

（あれが、月？ 絹のような輝きが、星というもの？）

ユウがうなずいてやれば、ルーティアは吐息をつく。波のように感動が寄せては返すようで、そのまましばらく、寝静まった子猫のような沈黙が続いた。

結局、夜空に飽きることもないルーティアの手を、やや強引に引っ張る事になった。ユウは慣れ親しんだ校舎を進み、落ち着ける場所を探した。彼女は黙ってついて来るが、時折、夜空へ視線を奪われる。

（ほら、段差になってるから、気をつける）

学生食堂近く、自動販売機が立ち並ぶコーナーで、ようやく足を止めた。横長のベンチにルーティアを座らせて、適当な缶ジュースを二人分買ってやる。そうして腰を下ろした時、疲れが重い塊となつて、背後からのしかかってきた。

（これ、どうすればいいの？）

（ここを、こうやって空ける）

飲み物を片手に、もう片方の手は繋いだまま、しばらく沈黙。

（落ち着いた？）

ため息と共に、そう尋ねた。

ルーティアは何が面白いのか、小さく笑う。

（同じ質問をするわ。あなたの方は、落ち着いている？）

答えるまでもない問いかけだ。

たった一日の間に、異世界に赴き、魔法使いとなって帰ってきた。言葉にすれば、とても呆気ない。しかし、あらゆる物事が不明のままであり、混沌としている。現状は、さながら殺人事件に巻き込まれた脇役のようなもの。全てを解明してくれる名探偵がいるならば、さっさと登場してほしいものだった。

もちろん、現実是非情である。

ページを進めれば、答えが書いてある物語とは違う。何が起っているのか、何が起こるのか——知りたければ、自分で考えるしかない。混沌を解決するためには、自分で動くしかなかった。

（あなた、魔法使いだったのね）

万感を込めたような物云いに、ユウは首を傾げた。

そうしたならば、ルーティアはシースーアにおける《魔法使い》の意味を教えてくれた。シースーアに住まう人々は、皆等しく魔力を扱い、魔法の技術を習得しているが、《魔法使い》という称号を持つ人間はごく僅かで、それは《世界を従える人》なのだ云う。

（魔法使いは、伝説として扱われるような人ばかりよ）

（そんな特別な人間になったつもりはなかったけど……）

今度は、ユウが説明する番だった。

森の中でルーティアと共に罠にかかり、彼女が昏睡状態にある中で暗殺者達に襲撃されたこと。さらなる罠で、森に火が放たれたこと。危機が迫る中で、盗賊団の一員であるはずのセシルに助けられたこと。

そして――。

（ああ、そういえば、俺の知り合いも登場したけど、これは説明が難しいから、とりあえず後回しだ）

ユウが魔法使いになる事を決意した心情について、全てを語ることなどできない。だから、ユウはルーティアに対して、自分が最初

から魔法使いだったわけではなく、昨晚の争いの中でその意識が芽生えただけという説明に留めた。

（では、あなたは魔法使いになったばかりなのに、シースーアから神様の世界へ渡る——そんな奇跡のような魔法を使いこなしたというわけね）

ルーティアの口調には、賞賛の響きと、皮肉の笑いが、半々に混じり合っていた。ユウはどうにも返答に困り、しばらく沈黙した。

（冗談よ）

（わかつている）

（魔女にも匹敵する魔法を使える事が、少し羨ましく思えたから、意地悪な云い方をしてみたわ。だって、魔女の力を借りず、世界を渡るなんて事、想像もできなかったもの）

（魔女？）

聞きなれない単語に、ユウは尋ね返した。

ルーティアは（あら？）と間抜けな声を漏らす。

（そうね。天使のあなたに説明するべき、大切な事が抜け落ちていたわ）

魔女。

正確には、封印の魔女アニス。

彼女は、シースーアで最高の力を持つ魔法使い。どこの国や組織にも属さず、封じられた土地で、神の言葉にだけ従って生きている。世俗と関わる事はほとんどなく、その存在はむしろ、災厄である竜に近い。

現在、シースーアで唯一人、世界の扉を開けられる人物としても知られている。シースーアに落ちてきた天使を神様の世界へ還す事は、魔女の役割のひとつであるらしく、保護された天使は漏れなく、最終的には魔女へ預けられる。

（なるほど）

ユウは魔女に関する説明を聞いて、自身の起こした《奇跡》について、やや拍子抜けする思いだった。

（世界を渡る魔法にも先例があるなら、別に奇跡でも何でもなかったわけだ）

現実からシースーアへ堕ちたことも、頻繁ではないが、観測されてきた事象なのだ。現実世界で認知されていないだけで——否、もしかすれば《神隠し》などと世に云われるものが、それに当たるのかもしれない——世界には、そうした自然現象が存在しているという事になる。

そしてまた、魔女によって、シースーアから現実へ還る手段も確立されている。そのための魔法は、遙かに昔から、しっかりと存在していたわけだ。

冷静に考えれば、むしろ不思議な事は何もない。

これまでも前例のある事象に、《偶然》、ユウも巻き込まれた。そして、魔女が使える魔法を、《偶然》、魔法使いとなったユウも使うことができた。

それだけの話ではないだろうか。

しかし、ルーティアは呆れた顔をして、首を横に振る。

（魔女の魔法を、私達が普段の生活で使用する日常魔法と一緒にしないで。あなたがそれを使ったという事が、どれだけ異常な事か、自覚してちょうだい。世界を渡る魔法は、魔女でも扱いの難しい——神様の領域に踏み込んだ魔法と云われているわ）

神。

その言葉を、ルーティアはしばしば口にする。思い返せば、セシルも当たり前のように口にしていた。どこか違和感——ユウが思う《神》のイメージと乖離を感じて、それを口にしかけた時である。

ルーティアが小さく、ため息をついた。

視線を向けていなければ、気づかないような、ほんの一瞬の出来事だ。わずかに伏せられた深緑の瞳に、揺らぎが見えた。それがどんな感情の発露か、見過ごすほど、ユウは幼くなかった。

初めて見る月と星の輝きに感動したり、世界を渡る魔法について冷静に考えたり——思えば、そうして普通に振る舞っている事の方

がおかしい。

彼女の状況は、ユウ以上に悪い。盗賊団に誘拐されかけて、暗殺者に命を狙われて、その果てに世界を渡る魔法に巻き込まれた。そして、そもその元凶は、父である国王の計画にあるのだから。

（ルーティア）

呼びかけた瞬間、我を取り戻したように、表情を取り繕う。そこには悲しみや迷いの色はなかった。ルーティアは至って平静に（なに？）と問い返してくる。

ほんの一瞬だけ迷い、言葉を飲み込む。

出会ってからわずか一日——生死を賭けた修羅場を共にしたとは云え、隠し立てする心の奥にまで、土足で踏み込む気安さはまだないはずだ——ユウは、そう思った。

（それで……）

ため息をつきながら、気分を変える。

（これから、どうする？）

尋ねながら、その答えを想像した。

シースーアに堕ちた瞬間、ユウがまず考えた事は、どのように元の世界へ帰るかという事だった。当然、ルーティアもそれに類することを云うと想像したが、返ってきた言葉は真逆のものだった。

（私は、神様の世界を見てみたい）

（ルーティア？）

彼女の口調は、決して気楽なものではなかった。

未知の世界を探検したい、遊びたい——わくわくと胸はずませるような響きは微塵もなく、その声は深く、一種の覚悟すら感じさせた。

ルーティア自身、吐き出した言葉の重さに戸惑ったようだ。しかし、すぐさま晴れやかな笑顔になると、わざとらしく、明るい口調で続けた。

（だって、今すぐシースーアへ還るわけにもいかない。もう少し、混乱が収まるのを待って、何らかの策や計画を思いついてからでな

いと、危険すぎるもの)

やや早口で云いながら、冗談めかして、さらに続ける。

(それに、魔法には失敗がつきものよ。世界を渡るなんて高度で難しい魔法、覚え立てのあなたが、そう易々と使えるかしら。最初こそ幸運にも成功したけれど、本来はしっかり訓練をした後でなければ、とても危なくて任せられないわ)

そこで、ほんの少し考える顔になる。

今度は言葉をひとつひとつ確かめるように、ゆっくりと宣言した。
(私は、神の世界へやって来た。シースーアの長い歴史を紐解いても、これは前例のないことよ。あなたが起こしてくれたこの奇跡を、シースーアに暮らす一人の人間として、無駄にするわけにはいかない。神様の世界をしっかりと見て、学ぶことが、私に課せられた義務で、責任と思うわ)

ルーティアは立ち上がり、片手で大きく夜空を仰ぐ。

輝く月を吸い込んだ瞳は、まるで夜風の吹く、澄んだ湖のようだった。ユウは気づかない振りをして、ため息と共に苦笑する。

(大事件に巻き込まれた後なのに、気楽だな)

(ええ、そうよ。こんな時だから、楽しまないといけない)

ユウも立ち上がった。

背伸びしながら、空を見上げた。

会話するために繋いだ手から、言葉と共に、彼女の強さを感じていた。それは、伊吹カナの持つ絶対的な力強さとは、やや異なるものだ。まるで背中を押すような、柔い力に、こっそりと感謝を覚えた。

(それでは、お姫様)

「冗談のように。」

ユウはお辞儀して、云ってみた。

(神様の世界という夢や幻想を打ち砕く、圧倒的に現実的で、馬鹿馬鹿しく賑やかな、とある庶民の暮らしというものをお見せしまし
よう)

第21話「はじまりが終わり」(2)

そもそも、選択肢は幾つかあった。

まず第一に、ユウの自宅である。決して豪邸ではないが、家族三人で暮らすには、十分に広い家だ。部屋も余っているため、一人が増えた所で問題はない。両親も一般的な親のイメージや感覚からは遠く、素性の知れない少女を拾って帰っても、多少の小言ぐらいで澄むことは容易に想像がついた。

しかし、実際の所、両親が問題にしくとも、世間の方は黙っていない。無用なトラブルを家に持ち込むことは、予想もしない結果を引き起こす恐れがあった。そのため、割合に早い段階で、ユウはルーティアを自宅へ招くことは無理だと結論付けていた。

次点の候補は、伊吹家。

広大で豪華な屋敷は、王女という大層な身分を持つルーティアを留めるには、まさに打ってつけだろう。ユウが頼めば、屋敷の一部屋を貸し与えてくれることは勿論だろうし、日々の生活の世話も、至れり尽くせり完璧に手配してくれるはずだ。

ただし、伊吹家では自由が得られない。今後の動きが取り難くなるという一点で、残念ながら却下するしかなかった。

結局、ユウが選んだのは、三番目の候補である。

『もしもし』

一応の礼儀と心得て、携帯電話から先に連絡を入れた。

『はい、式町です』

抑揚のない声が、通話口に出た。

『その声は、ナツちゃん』

『その声は、ユウ兄さん』

『元気？』

『いえ、夏バテてます』

『他は？』

『お姉ちゃんは肝試しと称して妖怪達と喧嘩に明け暮れ、妹は神隠しの振りして宿題から逃げだし、お父さんは「謎が呼んでいる」という謎の理由で旅に出ました』

『おじさんいないのか』

それ幸い——と、思ったことは黙っておく。

『師匠は？』

『お母さんは、いつも通りです』

『そうか。それなら、今から遊びに行く』

『前後の文脈の繋がりがよくわかりませんし、未成年でありながら日も暮れた時間にぶらぶらする豪気さに戸惑いつつ、ユウ兄さんならば仕方のないことと割り切り、こう答えましょう。どうぞどうぞ』

『ありがとう。愛してる』

『愛はいらないので、夏休みの宿題を手伝ってください』

ユウは気安く笑った後、何でもないことのように、ひとつ、付け加える。

『あと、おまけを連れていく』

電話の向こうで、しばらく沈黙があった。

『今度は、何を拾ったんですか？』

『人聞きの悪い言い方だ』

『ユウ兄さんは毎度のことですからね。時には、私からも小言を云わせてもらいます。うちの家は、駆け込み寺ではありませんよ。時折、ユウ兄さんは勘違いをしているのではないかと疑いたくなりますが、うちは神社です』

『知ってる知ってる』

『気楽な物言いに、逆に危機感を覚えます。神社で生まれ育った私ですら、信仰心など実際は皆無ですが、ユウ兄さんのアナーキーな振る舞いには、実は心ひそやかに肝を冷やしている今日この頃です』
『通話を終えれば、待ちかねていたように、ルーティアから手を取られる。携帯電話——そもそも、電話という概念がシースーアには存在しないようで、興味深く尋ねられる事になった。』

七守学園から目的地へ向かう道中も、目に入るもの全てが新鮮なようで、ユウは質問責めにあつた。まるで物心ついた子供のお守りをしているような気分になる。

（なるほど。セシルにも面倒をかけた）

今さらながら、自戒した。

横断歩道で信号待ちをする間、行き来する車やバイクに目を奪われていたルーティアが、物珍しそうに声をあげる。

（魔法を使わずに車が動いているわよ、ソーマ）

（シースーアも十分に発達していると思ったけど……。そんなに色々と珍しいか？）

（もちろんよ。これまでの天使の証言で、少しは知られていたけれど、神様の世界は《禁止技術》の宝庫ね）

予想外の言葉が飛び出し、ユウは思わずルーティアの顔を見る。

（禁止技術？）

（ええ。神様により封印されて、研究すら禁じられている技術——つまり、科学のことね）

科学が《禁止技術》。

思わず考え込んだユウに対して、今度はルーティアが怪訝な顔になった。

（ソーマ？）

（ああ、悪い）

今度は、ユウから説明する番だった。シースーアとは異なり、こちらの世界では魔法こそが《禁止技術》と呼ばれるように——まさに今、社会の情勢として、そうなりかけていることを説明した。

（不思議ね）

ルーティアも少し、考え込むような表情になる。

（神様の世界とシースーアには、決定的に違う部分がある。言語であつたり、魔法と科学の取り扱いの違いであつたり……。だけど、それ以外、大勢の部分については偶然の一致にしては出来すぎている程に、よく似ているわ）

その言葉に、ユウもうなずいた。

（俺も幾つか思う所がある。似ている理由も、もしかしたら……だけれど、まだ思いつきもいい所だ。考えがまとまったら、その内に話すよ）

（勿体ぶるのね。まあ、期待しているわ）

シースーアにおいても、人の暮らしや営みの形は、奇異に見えるものではなかった。実際、ユウが街を歩いていても、注目されるような事もなかった。簡単に溶けて込めてしまう程に、ふたつの世界は、とてもよく似ている。

そのため、ルーティアがそのままの服装で青鳥町を歩いてても、違和感はほとんどなかった。さすがに目立つため、豪華な宝石によるアクセサリは外している。

それでも道行く人々が驚いたように振り返るのは、ただ単純に、ルーティアの美しさが原因だろう。

（先程から、無遠慮に視線を向けられているけれど……）

繁華街を抜ける際には、周囲の全ての視線が集まってしまった。可愛く、綺麗と評される知り合いならば、ユウも幾人か思い当たるだが、ルーティアの容姿は次元が違った。

美醜をはかる尺度があるとして、普通のメータは百までだ。百の極地に至る人物として、伊吹力ナもそうだろうし、三千字姉妹も当てはまる。

これがルーティアの場合、そもそも尺度を振り切る。

零から百の間で美醜を計測していた所に、万の桁を持つ人間が登場したならば、もはや呆れるしかない。冗談の世界である。

繁華街を抜け出た所で、人の数が減り、やや落ち着けるようになった。携帯電話で写真を撮ってくる者達までいたのには辟易したが、数が多すぎて、対処している余裕はなかった。

（興味本位で訊くけれど……）

ユウは尋ねてみる。

（それだけ綺麗だと、色々と便利だったりする？）

（あら、よかった）

ルーティアが笑ったため、ユウは何事かと振り返る。

（あなたも一応、私のことを綺麗と思ってくれていたのね）

そんな風に返される。

（それだけの容姿だったら、俺が褒めなくても、さんざん云われ慣れていると思ったけど……）

（ええ、もちろん。シースーアで一番の美姫と云われ、十を数える頃からは、殿方から出会った瞬間に見初められることも多々あったわ。賛辞の言葉は聞き飽きているし、むしろ、まだ私が聞いていない褒め言葉があるならば、是非とも知りたい所ね）

凄まじい自信を見せつけられた。

しかし、反論はできず、ユウは沈黙する。

（だけど、あなたは私に対して、まるで動じなかった。天使の世界では、美しさの価値基準が違うのかと疑った程よ。それとも、あなたの女性に対する趣味が悪いが、私以上に魅力的な女性を知っているか、それとも、男色なのか……）

（ちょっと待て）

（ちなみに……）

ルーティアは云う。

（私は、私自身の容姿について、その美醜はどうでもいいと思っている。大切なのは、私が母によく似ているということよ）

それまでの軽口から一転して、母——と、その一語を口にした瞬間のルーティアには、これまでにない鬼気迫るような迫力があつた。その話題に踏み込むべきか——ユウは躊躇した。

結局、迷っている間に、目的地にたどり着いた。

（大きな山）

ルーティアが、素直な感想を漏らした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7132u/>

ワールドアウトサイダー

2011年12月2日19時53分発行